眉山全集
第二巻

博文館發行

眉山全集

第二巻

（明治三十二年撮影）

眉山全集

第二巻

目次

眉山全集

第二卷

梅紅葉

（一）

梅の間と、紅葉の間といふのがある。七折澤の松の溪間を西へ蜿つて、岩から岩を逆落しに幾里の碧瑠璃を鎔かして行く北隈川の流れに臨んで、二間續いて南向左は八疊梅盡しの一間は、東を廻緣に南へ取つた角座敷、床に寄つた丸窓の此方から、山と山との切目を下に、田野村落、遙か彼方の海原の白帆の影までを悉く目に入れる。右は十疊、北から南へ吹通しの一間で、川を隔

てゝ前は山、水に突出して居る座敷であるから、背後も同じ流れを繞らして、時は青葉の楓林を抱込むやうにして、ぬいと高い千丈が嶽の翠嵐が目近かに目覺めるやう。

座敷は翠錦樓といふ旅館の奥、名高い溫泉場で、都の人の遊び處である。既夏を言ふほどになつて、土地は待構へたやうに景氣立つて、一汽車毎に客足の繁くなる時であつた。今朝まで隔ての繪襖を取拂つて、一行七人、藝人交りの物騷がしかつたのが、駕籠を揃へて八時頃に上の山の溫泉へと立つて行つた。女中が跡片付けに來て間もなく出て行つたあとは、もとの青葉に溪河の水、岩を打つて日を碎いて、雪を亂して流下る水の光は、晝に迫つてまともに照らす日影に反射して、座敷の軒裏にちら〳〵目まぐるしいやうな波紋を映じて居る。向の岸から、水の上を三尺ばかり、高く低くひら〳〵飛んで來た蝶が、河を越して暫く前の柱に纏れて、軈て座敷を通拔けて、裏の青葉の中へ隱れて行つた。

此日の一時頃、宿の前に車が四臺、一臺は荷物ばかりで、先に乘つて來たのは、焦

茶の中山高、四十恰好の、見た處氣まじめらしい、色は惡い、が肥えた人で、扮裝は微塵の壁市樂に薄鼠の同じ羽織、白の扱帶に黄金鎖、次は三十五六のしッとりした、色白の、品の好い、然るべき內室に見えた。次の車は、十七八の孃樣作、高髷に、透彫の平打、絽縮緬に繻珍の帶、土佐繪の上﨟のやうな顏を、深張の紋緞子の傘で隱して居た。

此地に初めての客で、娘は殊に、生れて初めての旅、袖と袂と、家と家とで目を突くやうな東京の中から、一足飛に勿論汽車の窓からではあるが、海を見る、山を見る、野を見る、川を見る、肩に掛けた鍬の先に、蜻蛉を止まらせて、あけらかんと汽車の通るのを眺めて居る百姓を見る、箱庭物の模型を大きくしたやうな茅葺の家根を見る、其家の棟の紫羅傘の花を見る、瑠璃のやうな其眼に殆んど應接の遑がないほど、何も彼も、假令へば路傍の古草鞋までが、狹い見聞の其眼を少からず引付けてすべてが、物珍らしいものばかりで、汽車を降りると、其先三里の山路を、これも初めての電鐵で二里、あとの一里を、田舍式の車の上で、晝も及ばぬ山岨水涯に目の休まる時もなかつた。着いて見ると、山の中、雲の近く

に、又も目を迎へる數の旅館の建振、車が止まると共に愛らしげなる其胸は、得ならず時めいたのであつた。

土手三番町に、師岡文平といふ、中處の紳士、妻の直枝、娘の妙子の一行、思寄らぬ儲物の半月ばかりの閑暇が出來て、何處へか湯治といふ思付の、折しも勸める人があつて此處へ來たといふ、茶代の挨拶に出た亭主へ文平の物語。

通されたのは、如上の紅葉の間。

妙子の物珍らしさは、片時も坐つては居ぬ。文平の落付顏に亭主と談話して居る間も、既緣に出て、欄に倚つて、下の溪川、川に重なる石のいろ〳〵、石に躍る波の目の綾、釣橋、岩燕、山百合の花、花の中の東屋、況して對岸の青山と白雲といづれも、東京には見る事も出來ぬ光景を、手に取るやうに我物にしての一時、眼は全くの事殆んど我を忘れて居た。

いつの間にか亭主は去つた。それも知らず、彼方此方と跡から目を移して居ると、母の直枝が、いつか傍に來て居て、不意に、

「妙、お前何を那樣に夢中になつて見て居るの。」

言はれて氣が付いて振返つた。
「あら阿母樣、いつの間に入らしつたの。」
「まア私の來たのをさへ知らないのかえ。」
「でも種々なものについ氣を取られて居たのですもの。」
「種々なものツて甚麼もの。」
妙子は其おツとりした顏に言はれぬ笑みを見せて、
「甚麼ものツて矢張種々なものよ。」
「おほゝゝゝ、可笑な人だ事、それぢや譯が解らないぢやないかね。」
「でも私には解つて居てよ。」
と年よりはあどけない。それも母の身には愛らしい一つで、笑つて同じく欄に倚つて、押並んで前の景致に對ふと、妙子は直ちに、其處から此處と忙がはしゝ指點して、思ふ處、言ふ處、さも樂しさうな顏色を打付けに、
「まア阿母樣、あの釣橋の處から、向ふの山の方の景色と言つたら、本當に何と言ふのでしやう。全でパノラマを見て居るやうね。」

「ほんに何とも言へない景色だね。おや〳〵松の蔭に瀧があるね。」

「瀧は彼方にもあつてよ。それ彼處に、段々になつて細い徑が付いて居ましやう。あの途中の崖の處に、それ見えましやう。」

「おう眞個にまア奇麗だね。」

「あの傍へ行つて見たら甚麼に可いでしやう。阿母樣、此家の庭から彼方へ行かれるのですねえ。」

「然そうのやうだね。」

「行つて見たいぢやありませんか。」

「此處へ來て居れば何時でも行かれるはね。」

「ぢやア今ツから。」

直枝は笑出した。

「今ツからつて、お前まアお茶も飲まずに騷いで居る、少し落付くが可いではないかね。」

「あれお茶なんぞは何うでも可くつてよ。」

其時座敷の中から、

「これ湯に入らんか。」

と文平の聲に、急がはしく振返ると、父は立ちかけて、女中が案内顔に浴衣を持つて待構へて居る。湯と言はれると、妙子は又今更のやうに、

「おゝ私すッかり忘れて居てよ。阿父樣あの直に來るのですか。」

「然うさ。」

と文平は微笑みながら見返つた。

「お湯は那方、遠いの。」

と妙子は女中に聞く。

「いえ直ぐ下でございます。御案内を。」

と浴衣を抱へ上げて先に立つ。同時に文平は、「さア、」と再び妙子の方へ促すやうにして立つ跡に續いて母と諸共、妙子の上草履の足取りは、三年前の學校の運動會よりも若かつた。

（二）

小松の下、百合の此方に、今日は薄鼠の縞御召、段織の絽縮珍の帯が日に輝いて、白の絹足袋、緋の蹴出三枚裏の雪駄の鼻緒の、鳩羽の色がさも鮮やかに見えた。流れを隔てゝ振返ると、山を負ひ、水に倚つた翠錦樓の建振は今更に打仰がれるやう。自分の紅葉の間は殊に勝れた方を占めて、父と母との今しも對座して居る其影さへも一風情であつた。

妙子は一人、此方の岸に、青葉を渡る朝風に鬢のほつれを戰がせて、ぢッと目を上げた時、不意に上の松の彼方で、

「兄様。」

未だ若い、恐ろしい美しい聲。

「兄様。」

再び呼ぶ。　妙子は振仰いで目を遣つたが、樹々に遮ぎられて人は見えぬ。　間を置いて、

「兄様。」

と又も呼ぶ。返事がないので、

「兄様、居ないの。」

何かは知らず起直つたやう。

「あれ、兄様ッてのに、まア、餘りだわ。」

輕く飛下りる音がして、忽ち駈けて行く氣勢であつた。只見ると、崖の上の、青葉隱東へ寄つて、今迄氣が付かなんだ東屋の端が見えた。昨日母と共に橋を渡つて此方へ來た時は、瀧の傍の、下の東屋を指して行つたので其方に又、行く處見る處があらうとは氣も付かなかつた。何樣、山の裾の小笹を開いて、段を付けた細い徑が松の彼方へ入つて居る。妙子は心ともなく其處を登つて行つた。

去年浴客の爲に新らしく切開いたといふ。背後の崖を削つて下を平らした百坪ばかりの地、其處から海を見るに最も好い向にある。前を隔てゝ居た樹蔭を離れると、南に三里、それから先は際涯もない青海原を不意に目に入れて、

ぱッと日の光を横顔に浴びて思はず瞬きして立止つた妙子は、右手の緑の蔭下に掛渡したハンモックの中には空氣枕と、半ば編掛けたまゝの毛絲の編物があつて、主は居ないのに、不圖目を掛けると曩に見掛けた東屋の中に二人。

一人は多分、曩の聲の主であらう。十六ばかりの、すらりとした、飜れるやうな愛嬌のある面貌、御納戸地に蔭蔦の中形物に、帶は海老茶に金銀通しの波、片手を中の卓子の上に置いて、身を寄せ掛けやるやうにして立つて居た。

一人は見た處二十七八の、體格の好い美事な男振、兄妹と見えて、何處となく面差は似通つて居るが、落付いた重みのある、妹とは少からず變つて何となく打沈んで見えた。

人の足音に、二人は齊しく振向いて、同時に妹は逸早く、

「あらお隣室の方。」

とばかり妙子を見てにこ〳〵と笑み掛けた。

妙子は男の姿を見て少し鼻白んだが、それと聞いて、笑顔を挨拶代りに一寸頭を下げて、其儘歩出して彼方の見晴らしの好い方へと逸れて、此方を脊にして

崖の端に彳立んだ。

「なに隣室の方。それは丁度可い。行つてお談話でもして來るが可い。少しの間だ。邪魔をしてくれるな。」

と言つた切り、卓子の上に讀みさしの、ハウプトマンのハンチレヱの昇天を引寄せて又讀出した。

「でも知らない方だもの。」

竊と妙子を見返つて言つたが、兄は顔も上げず。

「兄様、兄様ツてば。」

と甘えるやうな調子、

「五月蠅いな。用もないのに何だな。」

「だツて。」

と笑顔にじぐねて見せる。兄は不意に、

「可し。俺が行つて頼んで遣らう。」

「あれ、」

と言ふ間もなかつた。ずんと立て、つか〳〵と妙子の方へ近寄つた。物に馴れぬ妙子の思はずはッとして急に振向くと、此方は何の見得もなく、輕く會釋して其儘衝と傍へ寄つて、

「貴孃お隣室に居らつしやるお方ださうで、つい存ぜんので失禮をして居りました。實は今承まはつたので、お隣室づからの好誼に甘えて御厄介な事を願ひに來ましたが。」

と彼方に立つて居る妹の方を見返つて、

「あれに居ます妹がな、此方へ參つてからお談話相手がないので、甚く淋しがつて困つて居るのですが、何うでしやう甚だ自由がましいやうですが一つお近附になつて遣つて下さいませんか。」

妙子は少からずどきまぎしたが、漸くの事に場を繕つて、羞かしげに、

「お言葉で恐入ります。私こそ、あの、お願ひ申したいのでございます。」

「や、それは早速に難有い。美津、早く來い。」

とばかり振返つて目顔に招寄せた。美津子は立つたまゝ、未だ面羞げの妙子

を見て氣の毒さうに、

「兄樣は亂暴だから………。」

獨語くやうに言つて漸くに近づいた。兄は更に心を置かぬさまに、

「はゝゝゝ、や、何分願ひます。」

向直つて妙子に挨拶して、二人を置いて前の東屋へ引返すと、既何も忘れたやうに再び讀耽けるのであつた。

「まア兄樣の勝手な事。」

と振返つて見て居た美津子は、妙子に打詫びるやうに、

「貴孃御免なさいましよ。兄は彼の通りのぞんざいな人で、何も構ひませんものですから。」

と莞爾やかに、曩の兄に向つての口吻にかへて頗るませて居た。

「いえ何う致しまして。全體私の方から御懇意を願はなけりやならないのですが、何だかきまりが惡いものですから、昨日もお目に掛りながらつい失禮を致しました。」

妙子と美津子とは昨日浴室で逢つたのであつた。美津子も同じやうに、

「あれ私こそですわ。」

と稍親しげに、

「あの貴嬢は何日此地へ入らして。」

「昨日參りましたの。貴嬢方のお出になる二時間ばかり前でした。」

「おや然うでございますの。矢張東京から。」

「はい。何ですか最う初めて參つたものですから、何も彼も珍らしくつて這麼好い處はないやうに思ひますの。貴嬢は最う度々此方へお出のやうでございますね。」

「はい。兄が旅好だものですから、よく方々へ連れられて參ります。」

「あの、お兄樣は何と仰有いますの。」

「兄ですか、兄は高村幹夫と申します。」

「えッそれでは、彼の、たしか油繪をなさいます？」

「よく御存じね。然うでございますの。」

「まア些少も存じませんで。彼の方があのお兄様でございましたか。」

知つて居る筈、父の居間に、現に其人の手に成つた製作か掛つて居るので、妙子は父から幾度か其書に付いて、所謂良工苦心のあとを仔細に聞かされて居るのである。

我にもあらず振返ると、青葉の中の東屋の中に、飽まで輪廓の正しい、言はれぬ品位を持つた其面差は、今更のやうに目に付いた。

何かは知らず胸の轟々のを覺えた。此お方がかねぐ\父様の、あれほどに譽めちぎツて居た名手でおッたか。思設けず同じ宿の、隣座敷の襖一重、何とい ふ緣であらう。

折節登つて來る客もなかつた。海と空と、山と雲と綠に動く日の光の、此處は暫く三人の世界で、妙子と美津子の談話は漸く興に入つて、二人共に底のない心を交はして親しく打解けた。妙子が幹夫に向つての好奇の心は尚止まず、それとはなしに多く美津子に問出す言葉を、美津子は何も包まず其上にも兄の事をさまぐ\に語つた。妙子は我にもあらず熱心に耳を傾けて居た。

暫くして幹夫も書を伏せて軈て此方へ來る。妙子は始終伏目になつて居たが耳と其眼とは、人知れず驚かるゝほど鋭かつた。

（三）

其日を過ぎず、梅の間と紅葉の間の隔ての襖は取放されて、師岡夫婦も思はぬ知己を得たのを喜んだ。端居の月に水のやうな空の宵には幹夫と文平の素謠の聲、後座には水鷄に妙子の薄茶手前、軒端の松の影もいつか縁を外れて、別れて枕に就いた頃は、瀬々の河音のみの高い既夜更であつた。

翌けの日は誘合つて、近くの勝地に袂を連ねて行く。女三人、男二人前後に笑ひさゞめいて、美津子と妙子とは其中にも、二つ離れぬ蝶を其儘搦合つて子供のやうに浮れ廻つて、先へ着いて一休みした頃は、山路に馴れぬ都女の揃つて綿のやうに疲れて、途々折つて來た野の花の束、木の葉石挽物細工、名物の栗羊羹などを脇に、直枝も同じ仲間入して駕籠に釣られて歸つて來た。

次の日の文平と幹夫とは局に對して圍碁の半日、直枝は脇に周旋して、妙子と美津子とは女中を案内に、麓の村祭を見物に行つた。夜は打寄つて、今宵も隈のない月の下に、多く世を見た文平の昔話、續いて幹夫が洋行中の物語などに

いつものやうに更けた。

此やうにして六七日は夢のやうに過ぎた。夢、寔に夢のやうであつた。妙子は是迄此時の如く言ふやうもなく浮き〳〵して、我を覺えぬ日を送つた事はなかつた。時の間に美津子とは、幾年越の馴染のやうにもなる幹夫には更に、初めて來て初めて見た山水のそれよりも尚、日に新らしい心を重ねて日に其胸にさま〲の綾を織る、譯は知らず現ともない時は飛ぶやうに流れた。けれども今、突然其夢から覺めたのであつた。覺めると共に、急に我身を振返つて見る。振返つて見て妙子は殆んど言ふ事を知らなかつた。

妙子の身は疾くに定まつて居るのである。去年十一月、事の成るまで妙子は何も知らなかつたが、遠い親戚の名古屋の遠藤といふ方へ、早く結婚の約束が出來て、一月後には先へ迎取られる事になつて居る。議が熟してから妙子は初めて始終を聞かされたが、其やうな事を充分に解釋するには未だ心が餘りには若過ぎた。

寔の事、妙子は此地へ來た時も、未來の其人の事一月後の大禮の事などは、殆ん

ど念頭に置いては居なかつた。極めて無邪氣な、極めて不用意の間に、妙子は今迄についぞ覺えぬ心地を覺えた。覺えながらも、それが何といふもので、何のやうな事を望むものか、それをすらも知らぬのである。

幹夫は又、其の身の藝術の上から、多少の觀察をした外には妙子に就いて餘り重きを置いて居なかつたので、何の心構へもなく、胸を打開いて語りもすれば、妹と同じやうに愛らしいものに思ふほどの淡泊な男であつたから、一擧一動無心に脣を洩れた其一言をさへも、妙子は竊かに何れほど深く味つて居たらうとは夢にも知らなかつた。

すると今朝になつて、名古屋から文平へ宛てゝ一通の封書が届いた。いよいよ來月、某々の日、妙子を迎取るに付いて、豫め打合せの書面であつた。妙子はそれと聞いて、自分ながらも怪しまれるやうに、俄に胸が塞がつたのであつた。耳に入れると共に辣然として、思はず色を失ふばかりになつて、初めて自分は外に心を何れほど深く運んで居たかといふ事を知つた。妙子の初戀は此やうにして胸に燃初めて、それと自身に心付いた時は、出口に向つて何處までも

垣を結ふ其人が、嚴として既居るのであつた。

席にも堪へられず、父と母との其事に付いて語らう間を一人走出して外へ出た。母に問はれたらば其場に泣倒れもしたらう。足のふみども知ず、何も夢中に人目のない裏の楓林の中へ入つた。何としやう。妙子は如何なる事情の下にも、飽まで其意志を貫くほどの力量のある婦人には生れて來なかつた。其初め双親に、此縁談の事を言はれた時にも顏を紅のやうにしたのみで、何も言ふ事が出來ず、又言ふほどの考をさへ持たなかつた。何の考もない中に、事は決つて、既結納も取交されて、何くれとの支度さへいつの間にか出來上つた。父の命をば殆んど絶對に拒む事の出來ぬ妙子、まして今になつて何と仕樣があらう。

林を拔けて、河原に優しげな撫子の中に、臥牛のやうに横はつて居る巨石の前へ來ると、それなり其上へ突伏して了つた。身を知るほどの涙は一時に堤を切つたやうに後から後から衝上げて來る。双の袂に顏を掩うて、聲にさへ出して泣くのであつた。

（四）

一人庭傳ひに、湯上りの袖を捲り上げて、葉卷を口に當もなく裏山の方へ出て行つた幹夫の跡を追うて、妙子は今、心ばかりは精一杯に思定めて同じく山の麓へ來た。最早包まず何も彼も打明けて、成るならば幹夫の力を藉りて免がれぬ羈絆を解いて貰はうと、人も聞かぬ唯二人の今此時を得難い機會に、兎もあれ心を決して來たのであつた。

胸は合祁む、目もあやなく、其處にも臨まぬ身は既慄はれるやうに、人や見ると後を振返つて、路を横に、態と幹夫とは離れた方の松の彼方へ出た。松に隱れて、ちらと見ると、幹夫は後向に、未だ濡髮の艶々しい色を見せて廣い肩幅に華美な宿の浴衣を夕日に染めて立つて居た。それと見たばかり、胸は轟いて、聲さへ掛けられず、素知らぬ振に、ときめく心を押へて前へ出て、其處等を眺めて居る態に佇立んで居た。

「おツ、妙子さん。」

不圖目を移した幹夫はゆくりなく其姿を目に入れて直ちに近寄つて來た。
妙子は振向いて初めて氣が付いたやうに、顏を見合せて、
「おや。」
とばかり、幹夫は近づきさまに、
「お一人。」
「はい。」
其間につか〳〵と傍へ來た。我にもあらず妙子は俯向かれて、譯もなく足元の草の上に眼を逸らした。
「何時入らしつた。」
「あの只つた今參りましたの。」
と未だ耻羞を含んで居る。幹夫は心にも止めず、
「然うでしたか。些少も知らなかつた。貴孃、最う此處等も少しも珍らしくなくなつたでしやう。」
「いえ私は未だなか〳〵飽きは致しませんわ。」

「ふむ、よく／＼お氣に入つたと見える。同じ此處へ來るなら貴孃のやうにありたいものだ。私なぞは最う歸風が起つて、今も明日あたり發たうかと思つた處。」
「えッ。」
と妙子は不意を打たれて、急に振仰いで思はず顏を見詰めて、
「あのお歸りなさるのでございますか。」
幹夫は微笑んだ。
「はア、實は種々用もありますし、長く遊んでは居られんので、間がよかつたらば明日の一番で歸らうかと思つて居ます。」
「あの本當に。」
と度を失つたやう。
「尤も天氣都合もあるけれど、外に障りがなくば明日にしやうと思つて居ます。折角お馴染になりましたが、いづれ又東京でお目に掛かる事にしましやう。」

別離、別離といふ事を妙子はそれ迄少しも思つて居なかつた。結んで解けぬ身の悶えさへあるに、其人は既歸るといふ。跡は何となる事か。これほど思ふせめて十分一でも知つて下さつたら、みす〳〵振棄てゝ歸つて了ふやうな事はして下さるまいに、と心はあせつても口には出ず、怨めしげに、

「まア、餘りではございませんか。未だお知己になつたばかりですのに、何で那樣に早く歸つてお了ひなさるのでしやう。貴郎方が歸つてお了ひなされば、私も何だか最う居る氣はございませんわ。」

思に餘つて漸く言つた。それとも知らず、幹夫は輕く聞流して、

「然しいつまでも御一所に居る譯には行かんから。」

と言つたが、流石に常ならぬ妙子の氣色を見て、

「貴孃方もいづれ東京へお歸りなさるでしやう。歸つた上で何のやうにも御交際が出來るではありませんか。」

妙子はそれ處ではない。あゝ、少しも察しては下さらないのだ。とばかり言葉もなく、悲しげに差俯向いた。

「まア室へ行つて茶でも入れましやう。實は未だ歸る事は誰にも話してないのです。美津も屹度貴孃のやうに、那樣に早くと言つて未だ〳〵此方に居たがるでしやう。」
と座敷の方へ引返さうとした。
「貴孃、入らつしやらんか。」
妙子ははツと思つた。今此時を外したら、最早再び此やうな機會はし、我を忘れて慌たゞしく、
「あ、もし、貴郎。」
と口を銜いて不意に迫つた聲。
「え。」
と一足踏出した幹夫は何事と振返る。其眼に出遇ふと、口は敢なくも又噤まれて、颯と顏を赧らめておど〳〵した。
幹夫はぢツと見て、訝かしげに、
「何ですね。」

と流石に聲を優しくして言つた。妙子は殆んど自分にも意外に、
「いえ、なに、あの美津子さんに伺ひましやう。」
幹夫は尙、不審らしい眼を注いで、
「何ですか。私に解る事なら。」
傍へ差寄つた。こゝで言はなければと、妙子の胸には、我と我に烈しく責寄せるものがあるやうに覺えた。それにも拘はらず言葉は餘所に、
「いゝえ、矢張、後に美津子さんに。」
泣かぬばかりであつた。
「然うですか。それでは後に。まア參りましやう。」
踵を返して幹夫は先に立つた。妙子は又もはツとしたが、追うて出るほどの聲は出なかつた。
其時忽ち、
「あら妙子さん、此處に居らしつたの。私先刻から甚麼にか探してよ。」
松を外れて聲と共に美津子の影。あゝ、機は早く去つて了つた。妙子の胸の

苦しさは更に言ふばかりもない。

（五）

豫期した通り高村の兄妹は翌日東京へ歸つて行つた。主人を先に宿の女中共の聲々に送出されて、車に乘つて行く姿の見えずなるまで、同じく上り端まで送つて來た兩親の陰に、座敷へ歸るのも忘れて瞬きもせず妙子は見送つて居た。車は矢のやうに既影もなく、路には跡に輕い塵の、空しく立舞つて居るのが只目に入つた。東京へ歸つたら、屹度入らしつてよと美津子も言ひ、遊びにお出でなさいと幹夫も言殘して行つたが、それが何にならう、自分が東京へ歸つた後は、數へるほどの日數の中に、自分は最早師岡の娘ではないのだ。前後合せて八日ばかりの間、妙子は其間に、物の始と終とを見た。夢のやうに來て夢のやうに去つて、胸から胸へ人知れず深く葬られた。胸の其墳墓の、未だ餘りに眞新らしい。人事の變轉の豫め期する事は出來ぬけれど、妙子は何時此夢から忘れやう。

父と母とに促されて、心付いて漸くに座敷へ立戻つた。こゝも昨日の家とは

思はれぬやう。山の姿、水のたゞずまゐ、何が面白くて這麼ものに目を喜ばせたのだらう。七時二十五分、二人は最早電氣鐵道の上に居ると思つた。隣りの梅の間へ入つて、絶えず其人の居馴れた席へ、せめての心ゆかしに坐つて見た。耳に其聲、目には其影、去つて歸らぬのは昨日の其一時、と思ふと身の置處もない。

床を見ると、昨日幹夫が下の河原で手折つて來て、未だ朝露の置いたまゝに、籠に投入にした撫子が其儘挿けてあつた。妙子は其中の一二本を拔いて取つて、疊紙に入れて大事に納つて置いた。

晝になつても、食事さへ進まなかつた。直枝は氣遣はしげに、

「妙や何うしたのだね。先刻から鬱いでばかり居るぢやないか。」

「え。」

と妙子は、思はず母の眼色を見上げたが、

「でも美津子さんが行つて了つたら、何だか最う詰らなくなつて了つたんですもの。」

「それで那樣に鬱いで居るのかえ。僅かの間に大變仲好しになつたものだね。まア可いはね、こゝに居る中にはね、又いろ〳〵のお知己が出來るはね。」

何も御存じないから、と妙子は母をぢッと見た。何れほど知己が出來やうとも、あゝ最早何にならう。

「阿母樣、いつ東京へ歸りますの。」

それには答へず不意に聞いた。母は笑つて、

「あれ最う歸りをいふやうになつたの。未だ暫くと父樣も言つてお出なさるよ。お前も今度は歸るといろ〳〵用があるのだから、此方に居る中に出來るだけ樂をして置くが可いよ。」

「然う」

とばかり力のない返事であつた。風が起つて、松に揉まれて、颯と座敷へ吹入れた。滮々として行く溪河の水、汽車は今頃何處を過ぎたらう。

左巻

(一)

角の錺屋の金さんといふのは、聞けば此頃の女房持、暮れて小庭の軒に、いつもの岐阜提燈が點くと、縁に花筵どかりと大胡座で湯上りの浴衣の袖を捲上げて、しツとり打水をした庭先をさも心持よさゝうに眺めながら、一服喫つた煙管の吹殼をとんと灰吹に拂いた。途端に能代の膳の上へ、彼此置並べた晩酌の用意のものを、ずいとそれへ持出したのは、此家の世話女房の、お幾といふ頃合此處等向の頗る見よげなのである。

「今日はね、お前さんの好きな黄肌鮪の佳いのが見えたからね、少し餘計に作らして置きましたよ」

言ひながら前に据ゑる。待つて居た金公は、只見るより煙草盆を片寄せて膝を組直して、

「然うか。其奴ァ豪氣だ。」
と斜めならず悦喜の體で、一通り膳の上を見渡して、
「鯵か此方のは。うむ蓼酢たァ氣を利かしたな。」
其儘猪口を出す。酌をする。なみ〳〵受けてきうと引掛ける。
「お燗は？」
「上燗だ。何うだお前も一つ飲らねえか。」
お幾は笑つた。笑つて眉を顰めて、
「お酒は眞ッ平。」
「はゝゝまァ可いやな。飲まねえでも可いから受けねえな。氣は心だ。」
「ぢやァお盃だけ。」
と愛想に受けると、金は直に德利を取つて、
「さァ出しねえ。」
「お前さん眞實に注いぢやァ厭だよ。」
「注ぐものか。ほんの眞似をするんだ。」

「そいぢやア。」

と出すと、案の如くぐいと注がれて、

「あら厭だ。言はない事ぢやない。」

「はゝゝ可いやな一杯位。多けりやア助けて遣らアな。」

とのろくなつて居る折柄、敷居越、葭戸を楯に、年季の留吉といふ、色の小白い、十四ばかりなのが、

「親方、只今。」

と不意を喰はせる。

「おゝ留、歸つて來たか。何か忠さんは居たか。」

「然、丁度在宅でした。あの承知しましたッて親方に然う言つてくれッて。それから內儀さんも、何うぞ親方に宜しくッて。」

「然うか。御苦勞だつたな。暑かつたらう。彼方へ行つて涼みねえ。」

「へい。」

と立ちかける。お幾は振返つて、

「あゝ留や。彼方にお膳立がしてあるからね、お飯を喫べてお了ひ。」
「へい。」
と留は引退る。あとは又差對ひ、稍盃が重なると、金公はいつか片肌脱、胸へ斜向ひに掛護符の銀鎖が見えて、淺黑い顏がほんのりと染まつて來る。
銚子の替りを片脇に、酌の合間をお幾は思出したやうに、
「あのお前さん、先刻は忙がしさうだつたからつい聞かなんだがね、今日晝過ぎに女中と二人連で、金簪の直し物を賴みに入らしつたお孃さんね、私彼の方の事で少し聞きたい事があるんだよ。」
金公は異な事とを言つたやうな顏付で、箸を休めて一寸お幾の顏を見たが、
「ありやアお前向横町の、」
「あゝ乳屋の隣りの、矢野さんといふ家のお孃さんだらう。」
「知つてるのか。うむそれで何うしたんだ。」
「あの方は一體甚麼方だえ。」と言つたばかりぢやア唐突でお解りもないだらうが、今朝兄さん處へ行つた時にね、丁度歸路だもんだから御得意先の用を

頼まれてね、歸りに一寸道寄りをしたとお思ひな。」

「うむ。」

と金公は又猪口を取上げる。お幾は稍乗調子に、

「其お得意ッてのは、私が丁度三年ばかり御奉公して居たお屋敷なんだよ。今度此方へ嫁付く時なんぞも、種々お祝物を戴いたりなんかして、全體私の生家は代々のお出入で、前から甚麽に御恩になつて居るか知れないのさ。」

女のつい口數が多くなつて談話の更に進まぬのに、金公は少し小面倒な面持で、

「そりやア可いが矢野のお孃さんの方は何うしたんだ。」

「あれさ急しない。これから話す處なんぢやないか。まアお聞きよ。そこでお屋敷へ上るとね、丁度奥様がお出でね、まアよく來たッてな事でそれから種々お談話が出たんだがね、其時に彼の矢野さんのお孃様の事を、大層詳しくお聞きなさるのさ。」

「ふむ、嫁にでも欲しいッてのか。」

「それさ。何でもね、若樣が何處かでお見染めなすつたんだッてさ。」
「何だ見染めたの・厭に時代だな。へん、惡くむづ痒いぜ。」
「お冷かしでないよ。先は眞面目だわね。それでね、何しろ近所だからと言ふので、私を捉まへて種々とお聞きなすつたけれど、私も未だ此方へ來て一月ばかりにしかならないんで那樣に能くは知らないから、つい御返事の出來ない事が多くつてね、何うか成りたけ能く聞合せてくれッてお賴みを受けて歸つて來たんだがね、それで今お前さんに聞いたやうな譯さ。」
「然うか。俺だつても彼の矢野さんの家ア、此方輩とは些少段取りが違ふんだから、然う立入つた事ア知らねえが、彼のお孃さんならまア言分はねえな。先刻家へ來た時なんぞも、其まア挨拶ッ振ッてなアなかつたぜ。俺ア何の掛り合もねえが全體最負だ。處で其若樣ッてなア代物は何うなんだい。」
「あれ何だねえ代物なんぞッて。」
とお幾は流石に尖り聲、金公は耳にも留めず、笑つて、
「可いぢやねえか。はゝゝ。代物は矢張代物だ。聞きねえ。何しろ此方ア

俺の最負ッてえもんだ。可いか、相手が鼻ッ垂しちやア、第一俺が不承知だ。」

と面白づくに力み出す。お幾も爲う事なしに苦笑して、

「まア此人は何を言ふんだねえ。おほゝゝゝ。お前さんが不承知だッて何うなるもんかね。」

「べらぼうめ、俺が合點しねえで神輿が渡るんなら渡して見ろ。戲けやがるなえ。惡く出しやばると手前から先へ片付けるぞ。」

「厭だよお前さん氣が違つたね。」

「へむ、喉け水を飲んでるからな。」

「あれさア、冗談ぢやないよ。最う少し身に染みて談話をしておくれな。」

金公は團扇遣ひ、胸のあたりの蚊を拂つて、胡坐を解いて片膝を立てゝ、とろりとした眼に未だ調戲ひづら、

「だつてお前、何も見染めたッて指を啞へて居る事アねえやな。何うだの恁うだのッて人騷がせな、餘り腕がなさ過ぎらア、早え談話がお前氣に入つたんなら直に打付かるが可いぢやアねえか。」

「那麼事を言つたつてお前さん、貴方がたの御婚禮だもの、大事を取るのは當然だわね。」
「なに大事を取るッたつて、高が賣殘りのお雛樣のやうな面をして二人並んで居りやアそれで可いんだらう。」
「最うお止しよ那樣事ばかり言つて。お前さん今夜は何うかして居るね。」
「はゝゝ。なにお前がそれほど氣を揉むんなら、俺もまア精々聞合せて遣らう。まア注ぎねえ。」
と飮干した猪口を出す。お幾は銚子を振つて、
「おや、最うおつもりだよ。」
「ぢやア最う一本。」
「今夜はお仕着せぢやア濟まないんだね。最う可いぢやないか。お前さんいゝ加減に醉つて居るよ。」
「まアさ、たまにやア景物が出ても可いやな。おい、付けねえ。」
「仕樣がないねえ。」

と笑つて立たうとする。途端に門口の簾を反ねて仕事場から、

「お睦ましいね。」

其儘ずつと上り込んで來た、五十恰好、少禿頭、片手に團扇、浴衣掛、日に燒けて澁紙色に光つた顏に、微笑みながら、遠慮もない仲で、直に二人の傍。

（二）

見るより金公は、

「よう。」

と手輕く會釋する。

「おや寅さん。」

とお幾も座を開く。寅さんは南向、直に胡座で、腰を探つて兩提を取出して、

「何うだい今日も暑かつたぢやねえか。」

「うむ、隨分答へたな。」

挨拶しながらお幾に目顔で、

「おい、早くしねえ。」

お幾は言ふまでもなく銚子を持つて立つ。寅さんは見て取つて、

「おい、俺なら止しねえよ。今家で飮つて來たんだ。」

「なアに今足りねえんで嬶アをせびつてた處なんだ。」

「然うか。俺なら本當に構つてくれちやア可けねえせ。かう、時に何も厭事を言ふぢやアねえが、今入つて來ると二人向合つて居た處は馬鹿に似合つたせ。」

「何だなア、珍らしくもねえ、嬶アを取捉めえて。」

「然うでねえよ。當座は情婦も同然だ。」

「馬鹿ア言つちや可けねえ。何うして、から最う世帯染みちやつて仕樣がねえや。おゝお幾、先刻の談話ア寅さんに聞くが可いせ。つい目と鼻の間だから、俺なんぞよりやア屹度詳しいせ。」

「あゝ然うだねえ。」

と次の間で燗を見ながらお幾の合槌、寅さんは聞咎めて、

「何だ〳〵。」

「なアにね。」

とお幾は手短かに、今の筋道を話出す。煙草を相手に寅さんは耳を貸して、談話が濟むと共に一つ首肯いて、

「うむ、彼家の事なら俺ん處たア向ふ前だし、つい此間も庭の手入を賴まれて、四五日仕事に行つてたから、金さんよりア些少ア詳しいや。」

「そりやア丁度可かつたね、何しろ然ういふ譯で賴まれたんだからね、お前さん知つてるだけ話して聞かせておくれな。」

燗が出來たので、談話の中に手早く拵へた有合せの肴を添へて其まゝ寅さんの前へ置くと、替り目の銚子を取つて、

「まアお一つ」

寅さんは痛し、痒しで、

「あれ、これだから斷つたんだ。困るぢやねえか。」

と頭を搔きのめす。金公は挨拶ぶりに、

「なアにお前、那樣に言つてくれるほどの事は爲やしねえ。まア可いやな。一つ行きねえ。」

「然うか。ぢやア折角何だから何だけれども、本當に飲つた跡だからほんの猪口だけにしてくんねえ。」

と受けて下に置く。お幾は其儘金公の方へ注いで廻つて、

「寅さん、そこで彼の矢野さんの方の談話は、」

「うむ、處で何から話さう。」

「全體彼家ぢやア何をして居るの。」

「何ッて別に何もして居ねえんだ。家は旦那と彼の妹のお孃さんと、女中が二人、それだけだが、屋臺骨の割にやア甚く無人だアな。だからいつ行つても靜かな家よ。まア遊んで喰つてるんだな。」

「それぢやアお金でもお有んなさるんだね。」

「然うさ。まア彼處の屋敷も自分のもんだし、何の道可なりな身體でなくッちやア、如彼して只は居られねえ譯だ、だがね、然う言つちやア何だけれど彼の旦那は餘程變人だぜ。」

「變人？」

と金公は意を得たやうに、

「うむ、俺も然うだらうと思つた。まア一體の容態からして變だが、何よりか

彼の薄ッ氣味の惡い眼付が厭だ。俺ア初めて彼の眼で見られた時は竦然としたぜ。此奴刑狀持ぢやアねえかと思つた。」

「まア酷い事を、」

とお幾は女だけに氣の毒顏、寅は了解んだやうに、

「いや全く質の良くねえ眼付だよ。そればッかりぢやねえ。いつ行つたつてお前むつり、として、俺なんぞにやア碌すッぽう口も利きやアしねえ。たまたま此方から何か言やア二言目にやア喧嘩面だから堪らねえ。」

「氣違へか。」

「まさかに氣違へでもねえんだが、まア那麽なア餘り類が無えな。未だ時たまなら何處か虫の居處でも惡かつたんだらう位には思ふけれど、始終それだから遣切れねえ。此間も係うだ。垣根の事で聞く事があつたから、此處を何う致しましやうッて聞いたと思ひねえ。するとお前、好きにしろッとぶッきらぼうに言つたッきりで、ぷいと行つて了ひなさらうとするんだ。それぢやア何うして可いか解りません、何とかお指圖をして戴かなくつちやア困りま

すツてまア言ふとね、お前出來なきやア歸つて了へと係うだ。那樣挨拶があつたもんかい。總てがそれだから全で談話にならねえや。有りやうの處越して來てから三月ばかりにしかならねえから、未だ能く外でも知らねえんだが、那麼人ア俺ア本當に初めて見たぜ。」

「おや〳〵那樣方の妹ぢやア彼のお孃さんも思遣られるねえ。」

とお幾は眉を顰めて、俄かに氣のない色、寅さんは談話の繫ぎの煙草を拂いて、

「處がね、」

と聲に力を入れて、

「お孃さんの方は全で行方が違ふんだ。お前も知つてる通り顏からして毛頭似てやしねえが、同じ兄妹で居ながら如彼も心持が違ふもんかと思ふのよ。何しろ彼の位よく出來てる孃は何處を探したつてまア無えな。物は出來るしよ、愛想は好しか、何から何まで氣が付くから、俺のやうなものに迄感心するほど能く行渡るんだア。彼處へ出入りのもので、彼の孃を譽めねえものアありやアしねえ。一人でお前、家中の何も彼も取りしきつて、いつ甚麼時に行つ

たつて整然として、そりやアお前屆いたもんだぜ、俺なんぞも初めは家のこきうを知らねえもんだから、つい旦那の方へ行つて話したんだが、樣子が見えてからッてものは彼のお孃さんに一言聞くと解りがいゝから直と埒が明いて、ぐん／＼小氣味よく事が運ぶんだア。彼處の家ア彼のお孃さんで持つてるんだ。旦那は那麼だが彼のお孃さんで剩錢が來らア。全くよ。何も傍腹ア揉んで人の事を譽めるぢやねえが、懸直のねえ處本當によく出來た孃よ。」

「へえ、那樣にまア好いお孃さんかねえ。彼の御縹緻でそれぢやア鬼に鐵棒だね。あれでお幾歳だね。」

「たしか一だとか言つたよ。那方かと言やア遲い方だが。彼の孃を貰やア何處へ出したつてひけは取らねえな。」

「でも其兄樣ぢやアね、」

「まアそこだな。」

默つて飲みながら聞いて居た金公は、其時猪口を下に、顏を振向けて、

「だつて兄貴を貰ふんぢやなからう。」

「あれお前さん又始めたね。然う一概に言つて了つたつて仕様がないやね。」

「仕様がねえッたつてお前、那様事で此奴を貰損つて見ねえ。そりやア目鼻の着いてるものは外にいくらでも有るだらうがなア寅さん。」

「うむ、それも大きに然うだ。」

「構ふ事アねえ、お屋敷へ行つたら奥様に、寅さんの言つた通り唆けて来ねえ。」

「おい／＼俺ア何も唆けやしねえぜ。」

「まア可いやな。」

「なに可い事があるものか。」

「はゝゝゝまア可いやな。」

と夏の夜の一くさり、小庭はいつか月の晝、風は近くの南天の葉に動いて、何處か遠くで籠の中の轡虫の聲が聞えた。お幾の眞皓な齒と金公の猿のやうに紅く染つた顔と、寅さんの照返しのいゝ前額と、三人一座、星のよく飛んだ晩の事であつた。

（三）

明けて朝靄が霽れかゝつて、地は未だ濡色に、見る眼を吹渡る風の姿も、さながら涼しげな一しきりを、車で來た三十前後の色の健やかな、醜からぬ男振、パナマを深めにして白の帷子に、紗の羽織、薫りの頗る高い葉卷を、稍右に寄せて口にして居た。昨夜の錺屋の前へ出ると、車夫は梶を止めて、既店の細工場へ出て居た主人の金五郎に、

「えゝ一寸伺ひますが、此處等に矢野さんてえ家はありませんかね。矢野銑一郎さんと仰有るんで、」

昨夜の今朝といふので、主人の金五郎は、矢野と聞くより思はず車の上を見上げたが、然らぬ顏で車夫に、

「矢野さんは向ふの八百屋の角を入つてね、少し行くと左ッ側に乳屋がある、其隣りの冠木門の家がそれさ。」

「へえ乳屋の隣りの、何うも有難う、」

言ふなり一禮して直に梶を向けて飛ばして行つた。

教へられた横へ入ると多くは門構、板塀、土塀、杉垣、枳殼垣、好みに應じた家居の中程に、尋ねる矢野の家は、東隣に乳屋の牧塲、西にさる砲兵中佐の私邸を控へて、門の片脇に目印のやうな、半ば朽ちた椎の古木が立つて、奥へ可成り深い、彼是五百坪ばかりの一構、南に廣く庭を取つて、裏に菓實の植込を繞らした極めて物靜かな住居である。

丁度茶の間には、昨夜寅さんの噂の妹の鈴子といふのが、いつもの心盡しに、兄の居間の花をと思つて、裏の花畑の夏水仙を剪つて來て挿けて居る最中であつた。車が門の前に止つて、誰やら音訪れて來たやうな氣勢なので、鋏の手を休めて顏を振向けたが、それと聞取ると暫し不審らしい面持をした。

來たのは男の足音であるから、鈴子の妙に思つたのも無理はないので、此處へ引移つてからといふもの、鈴子を訪ねて來る二三の女客の外に、殆んど來客といふものは無いのであるから、誰、と思はずも色に出たのである。

「頼む。」

と既玄關先の聲音、それさへも聞慣れぬやう。

女中の一人は使に、一人は二階に拭掃除の折からで、鈴子は取敢へず應接に出た。

當面の其客は、手土産らしい一包を車夫に持たせて後に從へて、鈴子の顏を見るより會釋其まゝ。

「おゝ、鈴子さんですか。全で見違へるやうにおなりなすつた。」

と馴々しく、快よげな笑顏であつた。

言はれて鈴子も相手を振仰いだが、

「おや、まア吉倉さん。お髭をお生しなすつたので何だかお顏違ひをなすつたやうで、おほゝゝゝ、まア本當にお久振でございましたねえ。」

「はア、丁度五年振で又東京へ歸つて來ました、何は、兄樣はお在宅でございますか。」

「はい丁度在宅でございます。さア何うぞまアお上り遊ばして。」

吉倉廉三といふ、銑一郎の唯一の親友で、互ひに少年の其昔から、殆んど兄弟も

同樣の交情、五年以前吉倉が地方のさる中學校に聘せられて行つた時迄、兎角に圭角の多かつた銑一郎が、不思議に此吉倉のみは、ついに一度面を赤め合つた事もなく、舊に依つて何時も麗はしく交つて來た。其人が再び東京へ歸つて、直に訪ねて來てくれたのであるから、其久々の珍らしさより、鈴子の一方ならず喜んだのは、兄の此頃の餘所目にも傷はしいほどの鬱結の態も、或は此人の力で、と思ふと心も勇まれるやうで、いそ〱先に立つて座敷へ請じ入れて、引返して奥の兄のもとへと知らせに立つた。

奥に最も隔たつて、殊に不便な一室を好んで居間にして鈴子の外は猥りに人をも入れぬ銑一郎は、何を爲るともなく石のやうに默して座つて居た。鈴子は足音も常に似ず忩がはしげに室へ入ると共に溢れるやうな笑顔で、

「兄樣、あの吉倉さんが入らつしやいましたよ。」

銑一郎は振向きもしなかつた。鈴子は疊みかけて、

「今度又此方へお歸りなすつたのですつて。御樣子なども、前とは全でお變りなすつてよ。」

と氣乘りの其聲も、兄は只一言、

「ふむ。」

と鼻の先の挨拶、何處を風が吹くとばかりの態であつた。まさかに吉倉はと深く信じて居た鈴子は、流石に意外の面持で、思はず兄の顏を打目戍つたが、重ねて言葉を添へて、

「あの、いろ〳〵お土產物を戴きましたよ。」

返事が無いので又、

「兄樣。」

と促すやうにして氣色を窺つた。銑一郎は漸くに、此方を振返つてぢろりと鈴子の顏を見たが、切つて離したやうに、

「歸して了へ。」

「えッ。」

「歸して了へ。何で又座敷へ通したのだ。」

「それでも吉倉さんですもの。」

「吉倉。」
と言つたが、流石に其聲は稍鈍つたやう、暫く躊躇つて、忽ち烈しく、
「吉倉が何だ。用はない。歸つて貰へ。二度と來てくれるには及ばんと確り言へ。」
「まア、何うかなすつたの。」
「何うもしはせん。逢ふ必要がないから言ふのだ。馬鹿な、わざ〱訪ねて來るとは何の事だ。」
といつよりは更に機嫌が惡い。鈴子は呆れたやうに、
「貴郎、まア吉倉さんにまでも那樣事を仰有るの。」
「五月蠅い。俺の勝手だ。」
「まア、それぢや餘りでしやう。」
「默れ。餘計な口をきくには及ばん。歸す事が出來んければ貴樣の好いやうにしろ。俺は逢はん。今後の交際は更に望まんと屹度言へ。」
鈴子は言ふ事を知らなかつた。恁う言出してから、邪が非でも人の言に聽く

兄ではないので、押返して説く事の全く徒勞である事を豫てよく知つて居る。
其儘差俯向いて、暫く口を噤んで居たが、再び振仰いで、
「貴郎は何うしてもお逢ひなさいませんの。」
「知れた事だ。」
「然う。」
と勢がなかつた。銑一郎は舌打ち一つ。
「えゝ何を愚圖々々して居るのだ。」
鈴子は屹と思定めたやうに、
「はい、それぢや兄樣の仰有つた通りに申しましやう、けれども折角お出なすつたのですから私は暫くお談話を致します。それだけはお許しなすつて下さい。」
顏を見上げた。銑一郎は何か言はうとしたが、口には出さずむづかしい顏で、
「好きにしろッ。」
そつけなく言捨てると、其儘背を向けて机へ凭つて手許の書を繙いて讀出し

た。

鈴子は悲しげな顔で、ぢッと銑一郎を見詰めて居たが、立つて室を出て流石に吉倉の方の首尾が思はれるので、目近の袖垣のもと、朝日を受けて鐵線の花が咲亂れて居る此方の縁に、物思はしげに其美しい眉を寄せて、行きもやらず稍々暫く佇立んで居た。

（四）

「兄様は。」
と談話の切目を機に、廉三は不意に問出した。鈴子が引返して來てから暫くして未だ銑一郎の姿が見えぬのに、稍訝かしげに眼を向けて、それかあらぬか、鈴子は再び座敷へ入つて來てからの、頗る心得ぬ樣子も思合はされるやうに、何とも知らず打目戍つたのである。
言はれて鈴子は、少し周章てた態に、
「はい。」
とばかり、素より期しては居たものゝ流石に言淀んで暫く口籠つて居たが、
「私は何と申して可いか存じませんが、貴郎は兄の親友で居らつしやいますから何もお隱し申さないでお話申しますが、兄は貴郎に逢はんと申します。」
「え。」
「さア私も餘りの事で、本當に何と申し上げやうもございません。恁うして久

久で、然も外ならん貴郎が折角訪ねて來て下すつたものを、お氣の毒とも何とも全く御挨拶も出來ませんやうな事でございますが、それに付いては貴郎にお話申したい事もございますし、折入つて又私からもお願申したい事もございますからまお腹立もございましやうが、これまでの好誼を思召して、一通りお聞きなすつて下さいませんか」

口を切つて後は、胸も定まつていつものすら〳〵とした言葉付、誠實は色に見えて宛もわりなげの聲音であつた。廉三は首肯きさま、急に手にして居た葉卷を前の灰皿の上へ差置いて、

「いや全體先頃から更に合點の行かん事が多かつたのですが、何か私が兄様の感情を害したやうな事があつたのですか。」

「いゝえ私にも、兄の此頃の了簡は全く解りかねるのでございます。御存じの通り以前から一克の方ではございましたが、昨今の仕打といふものは、兎ても本氣の沙汰とは思はれません。尤も兄の身になつて見ますと、口にこそ出しませんが種々鬱憤もございますので、妹の身で然う申しては何でございま

すが、全體兄の心が狹過ぎますから、それやこれやで那樣風になつたのではないかと思ひます」

「はゝア、いや實は私も兄樣の事で面白からん噂を聞きましたが、兄樣は一體何うして醫者を止めて了つたのですか。」

「それでございます。其事からお話を致さうと存じますが、まア何處から申したら」

と暫く伏目に軈て顏を上げると、

「兄が開業してから半歳ばかり經つて、私に嫂が出來ました事は、兄からも未だ彼の頃は始終お便りを致して居りましたから、多分御承知の事だらうと思ひますが。」

「知つて居ますとも、兄樣は其頃の手紙の度に、可笑しいやうに妻君の事を言つて遣しましたから、隨分詳しい事迄知つて居ますよ。何でも甚く氣に入つて居たやうでしたが、」

「はい、それは最う大層な氣に入り方で、其時分私は未だ學校の寄宿舍に居り

ましたが、時々家へ歸つて參りますと、彼の氣むづかしい兄が、いつも好い機嫌で、全で人が變つたやうになりました位でございました。

お話申すのは、これからの事でございますが、久し振でお出なすつた貴郎に、不意に一家の餘所へは餘り申されませんやうな事を、お聞かせ申すものとは思ひますものゝ、貴郎を何處までも兄の爲に心配をして下さいますお方と思込んで居りますので、身勝手ではございますが、聞いて戴いた上でお心添をも願はうと存じますから。」

と何やら言ひかねるやうに見えた。薄々ながら廉三は聞いて居た事もあるので、鈴子の猶豫ふ色を見て或はと膝を進めて、

「いや若しお話悪い事なら承まはらんでもなに兄樣の爲には、及ばずながら何のやうな御相談相手にもなりましやうから、差當つて兄樣の昨今の事を伺ひましやう。」

「はい有難う存じます。まアざつと一通りだけ申しましやう、丁度其嫂が參つた時分でございました。家の薬局生に土川要之助といふものが參つて居

りました。道樂者で、人にも見離されて、何うにも恁うにもならないやうにな
つて了つた男でしたのを、兄が拾上げられて、いろ〳〵丹精されましてね、まア
其間の細々しい事は、別に要もありませんから省いて了ひますが、其中に代診
も出來るやうになり、後期の免狀も取るまでにして貰つたのでございます。
兄と逢つて調子の好い、なか〳〵如才のない方でしたから、病家の氣受けは大
層よくつて、何處へ行つても評判で、私などは全で幇間のやうなと思つて居り
ましたが、誰方も那樣事は夢にも思ひませんで、中には此人でなくてはならな
いやうに、褒めちぎつて居たお方もあつたのでございます。
其頃は最う、開業してから四年ばかり、兄は職業には熱心で、御承知の通り親讓
りの財產で家は樂でしたから、全で施療のやうな事ばかりして、次第に繁昌を
して參つたのでございましたが、不意に誰の口から出ましたのか兄に向つて
種々の惡い噂が立つたのでございます。それが又大層早く弘がりましてね、
兄は癖の多い人だけに、那樣根もない事が仕舞には眞實の事のやうに言囃さ
れて、家は思も寄らん事で俄かに寂びれて來たのでございます。

土川は其年の、後期の試驗に及第して、漸く人に爲られたのでございますが、不圖した事から、いつもに似合はず兄と甚い口論をして、それなり家を出て了ひましたが、暫くするとつい鼻の先の處へ新規に開業して、僅かの中にめき／＼と賣出しましてね、申すまでもなく家へ掛り付けのものは其初めから皆向ふへ參つて了ふといふ姿で、然う恁うして居る中に兄の身の上に又一つ事が起りました。

それは嫂が急に無理暇を取つて故家へ歸つて行つたのでございます。兄は實に意外であつたやうに見えましたが、いろ／＼揉めた末に遂う／＼離縁になつて了つて、それも未だ可うございますが、それから一月と經たない中に、まア何うでございましやう、土川の家へ嫁入りして來たのでございます。

お談話するのも厭でございますから立入つた事は申しませんが、一人は兄が救上げて、何から何まで世話をして兎も角人並にして遣つた土川なり、一人は彼れほどの氣に入りだけに、目にも餘るほど秘藏のやうにして居た嫂といふので御存じの兄の氣質でございますから其當時の兄の心の中はお察しなす

つて下さる事が出來るだらうと思ひます。未だ其上に餘りなのは界隈の噂で、彼の土川が何う言ひくろめたものでございましたか、口を揃へたやうに土川の味方をして、誰一人として兄の方を善く言ふものはありませんでした。其中にも彼方は日に増し流行つて參ります、此方は只寂れるばかり。惡い噂はいつまでも取れず、それでも未だ職業の方では兄も自分で信じて居ました事があるやうで、寂れながらも從前のやうに續けて居りましたが、兄の様子は其頃から次第に變つて、烈しい言葉は毎日のやうに、何事にも焦燥々々するのが一倍強くなつて參つた處へ、此事は私も能くは存じませんが、何でも或る患者の手術の事で、何か見込違ひでもしたやうで、其爲に恐ろしく心を苦めたやうでしたが、それからでございます。斷然醫者を止めて了ふと申しましてね、人の言葉も全で聞入れず。とう〳〵今日のやうな事になつたのでございます。」

談話を妨げまいとして、廉三は式ばかりの受言葉に、多く耳を傾けて居たが、かねて銑一郎の人と爲りは充分に知つて居るので、談話の中の鈴子の嫂、松江と

いふ其人に對しての銑一郎の心事も、其折からに屢く見えた書信に比べて思遣られるばかり。土川といふ其男の關係から、銑一郎の人知れぬ胸の中の苦痛も流石に讀んで行かれるやうで、鈴子の言葉の切れると共に口を開いて、

「解りました。兎も角私は無理にも兄樣に逢ひましやう。兄樣の今のやうな態度は甚だ宜しくないと思ひます。友人として充分慰めると同時に大に又忠告もせんければなりません、後は私が引受けますから、直に兄樣の居間へ案内をして下さい。」

と促すやうにして立つた。鈴子は未だ言殘して、中途で一息した處であつたが、

「はい、では然うなすつて、何うぞ兄へよく仰有つて下さいまし。貴郎の事でございますから、御承知ではございましやうが、兄は又片意地から、心にもない甚麽事を申すかも知れませんが、其處は何うぞ能くお含み下さいまして。」

「いや、其御心配には及びません。何うぞ私に任せて下さい。」

「はい、それでは。」

と同じく立上つた。導かれて緣傳ひに、幾室を離れて東端れの、奥に隱れた居室の前へ出ると、鈴子は不意に、

「おや。」

と明放してある葭戸の此方で、中を差窺いて立止つた。

銑一郎は居らなかつた。

其處等探したが何處にも見えぬ。間近に居合せた婢に聞くと、先程裏口から、那邊へかお出ましになりましたのと專。鈴子は廉三と、顏を見合はすばかりであつた。

（五）

何處からともなく、葭戸越しに吹入れて來た夜風が、蚊帳に緩く波を打たせて、枕に通ふまでとも見えなかつた途端、夢から不意に覺めて、鈴子は思はず目を開いた。夜明には未だ程があるやうで、何處も寂りとして、外は月に、秋も間近の虫の聲、折を置いて、葉末を露の碎けて落ちる音、室數が割に人少なの家の中は殊に閴として、寢息すらも聞えぬ。

首を擡げて、枕に近い有明の小洋燈に、蚊帳を隔てゝ前の置時計を見ると、三時に少し前、今から起きるのもと、再び枕に就かうとすると、思寄らず兄の居室に咳拂ひの聲がした。

更けて寢室へ入つた兄、いつの間に、と怪しまれるまゝ耳を欹てたが、それなり音もせぬ。

「兄樣。」

と半ば身を起して鈴子は聲を掛けた。

「何だ。」
居室から直ちに銑一郎の例の角のある聲が聞えた。
「起きて居らつしやるの。」
「おう。」
「何うなすつたの。お寢られないんですか。」
「ちよッ、何うでも可いわ。默つて寢て了へ。」
鈴子は起きて來た。何やら氣懸りのやうに、寢卷姿を搔繕つて、入つて見ると、銑一郎はいつもの座に、いつもの苦虫を嚙潰した面持で、洋燈を睨んで只夜を守つて居るかのやう。振返ると險しい目で、
「何だ。呼びもせんに。何で起きて來たのだ。」
鈴子は笑顔に輕く受流して、
「私も今目が覺めてね、何だか寢られませんから、」
言ひながら、それとなく兄の樣子を打目成る。

「それで此處へ邪魔に來たのか。」
「でも何も爲すつて居らつしやらないのでしやう。」
「えゝ那樣事は貴樣の知つた事ではないわ。」
鈴子は慣れて、別に心持を惡くもせず、寢起のそれながら顏は晴やかに、
「貴郎まあいつの間に起きて入らしつたの。私すつかり寢込んだと見えて些少も知りませんでしたよ。」
「知つた處で何になる。馬鹿な。」
「あれ、又那樣事を。餘り酷いわ。これでも甚麼にか兄樣の身體を案じて居るぢありませんか。」
銑一郎は冷笑した。
「ふむ、お前に案じて貰つたとて何になる。俺の身體なぞを俺は誰にも案じて貰ひたくはない。」
「兄樣。」
と流石に俯向かれて鈴子は心から溢れ出したやうに、

「些少は妹の身になつて下すつたら何うでしやう。」

銑一郎の色は更に解けぬ。

「ちよツ、構ふな。俺の勝手だ。餘計な事をされると腹が立つわ。」

鈴子は押返して又言はうとしたが、這麼時分に、いつもの不興を募らせるのも、と其儘氣を直して、

「兄様は最うお寢らないの。」

「眠くなれば寢るわ。」

「でも未だ直にお寢らなければ、あの、お茶でも入れましやうか。」

「欲しくない。」

「兄様、本當にあの何うも爲さりはしないのですか」

「五月蠅いな。餘計な事を聞くなといふに。」

「でもそれだけの事なら仰有つて下すつても可いではありませんか。」

「よし、俺は何うも爲はせん。寢られんから起きて居るまでの事だ。」

「然う。」

と鈴子は未だ物足らぬやうではあつたが、
「ではお氣任せですけれど、なるたけなら早くお休みなさいまし。」
爲う事なしに坐を立つて進まぬ顏色で寢室へ歸つて行かうとした。銑一郎は見向きもやらず、耳にも掛けぬ態で居たが、不意に向直つて、
「鈴一寸待て。」
何やら改まつた言ひやうであつた。鈴子は直ちに坐に返つて、
「何ぞ御用。」
「いや用ではないが、お前に少し言つて置く事がある。」
と調子の物々しいのに、鈴子は何事かと今更のやうに顏を見上げると、
「今もお前は、俺の事を兎や角う聞いたやうであつたが、俺は全體自分の爲る事に假令何であらうとも他人の喙を容れる事を好まんのだ。何も今夜に限つた事ではないが、序だから屹度お前に言渡して置く。可いか。すべて俺の身に關つた事で、俺の遣つた事は素より、今後又何のやうな事を爲やうとも、決して口出しをしてはならんぞ。可いか。忘れんで二度と最う俺の身に付い

て何も言つてくれるな。」

鈴子は再び兄の顔を見て、眞意のある處を疑ふやうな眼差をしたが、暫くして、

「兄樣は私を甚麼にお考へなすつて居らつしやるの。」

「那樣事を今此處で言ふ必要はない。お前は兎も角今俺の言つた事を聞いたらう。」

「はい。それは承はりましたけれども……。」

「聞いたら最うそれで可いのだ。俺の心に背くと背かんのはお前の勝手だが、背くと言ふなら其時限り傍へは寄せ付けんから其つもりで居れ。」

「兄樣。」

「知らん。最う可いから彼方へ行け。」

「兄樣まア私の……。」

「默れ。行けといふのに何故行かんのだ。立て。ちよツ、立たんかこらッ。」

忽ち例の烈しい辭色に、否みもしたらば飛掛かるばかりの勢、鈴子は其上言つて甲斐のないのを知つて、又機もあらうとばかり、柔順しく場を外して嚴しく

兄の眼に見送られて、すご〳〵と寢間へ歸つて來た。
後の高聲に婢部屋でも目を覺ましたと見えて、何かひそ〳〵と囁合つて居た。
寢もやらず蚊帳の外に、鈴子はしよんぼりと座つて居たが、詮もないので再び枕に就くと、既彼方此方に雞の聲、隣りの乳屋の門を配達車の一しきり、銑一郎は未だ寢やうともしなかつた。

（六）

「まア本當によいお住居でございますこと。」

鈴子は明石に絽繻珍の帶、持つて生れた品位の態とならぬのに、束髮姿のさながら似つかはしく、正座に薦められた革蒲團を避けて、丸窓近く、繪に入る風采。對つて前の座に、浴衣掛けの寛いだ風で居るのは、今少し前、出勤先の會社から歸つて來た吉倉である。

「はゝゝ私のものだと少しは自慢するですがな、實は歸つて來早々適當な家も見付からんので、叔父の留守中まア當分の中厄介になつて居るのです。いや何うも未だ田舍者で、何處へ行つても前とは全で樣子が變つて居るので驚くばかりです。變つたと言へば私も教師から急に今のやうな身に變つたので、友人などにも嘘のやうに不思議がられたですよ。」

と氣輕い、打解けた物の言ひやう。軈て少し身を進めて、

「時に兄樣は何うなすつた。」

「はい、實は其事で參つたのでございます。貴郎も今の程未だ中々お忙しくつて居らつしやるのに、又御心配を願ふのも誠に何でございますが、何うにも私の手に餘りますので、つい恁うして參りましたやうな譯で。」

言葉の終るをも俟たず廉三は頻りに首肯いた。

「いやお察申して居るです。忙しいと言つて、なに其は其、那樣御遠慮は要らん事です。何しろ御存知の通り兄樣が逢つてくれんので、私も實は手の付けやうがないのです。其後二度ばかり私の考だけでは充分兄樣の肚に入るだらうと思ふ事を書込んで、今の態度の間違つて居る事を懇々言盡した手紙を出したのですが、それなり未だ返事を遣してくれない。貴孃がお出なさらんまでも、兎もあれ何うにかしなくてはと種々心配をして居るのです。」

鈴子は更に思入つた體で、

「貴郎にも本當に濟みません。私も差當り何とかして兄の氣を開かせるやうにと種々に申しても見たり仕向けても見たりしたのでございますが、何を申しても全で聞入れてくれませんばかりか、却つて其度に不機嫌を增させる

やうで、折角爲を思つてする事も皆仇になつて了ふのでございます。それにしても此儘で押して行つたら、兄は本當に何うかなつて了ひはしないかと思ひます。貴郎、兄は此四五日全で寐ないのでございます。」

「えッ、何うして。」

「それも何の爲にといふ事は全でないのでございます。何もせず、只ちッと考込んで居るばかりで、初の中こそ未だ那樣でもございませんでしたが、今朝方から最う私を傍へも寄せ付けないのでございます。」

廉三は目を瞬つて、何と思つたか、颯と面の色を變へたが、せき心に、

「それは可かん。那樣事をして居て堪つたものではない。そして外に異狀はないのですか。」

「えッ、異狀。」

鈴子は聞咎めて見上げると、廉三の面持の變つて居るのに驚かれたが、それと心付いて、

「兄は正氣かと仰有るのですか。」

「いや全く氣遣はれるのです。」
鈴子は流石、兄の傍に居るだけ見る處もあつてか、未だ其疑ひは無いものにして、
「いえ今の處では氣分は何處までも確かでございますが、これが高じたらと思つて案じて在るのでございます。申すまでもなく兄の考へは偏り切つて居りますから、時に依ると何うかしたのではないかと思ふやうな事もございますが、狂つて居るやうな事は今日迄はございませんでした。」
「然し場合が場合ですから、何の道其儘にして置く事は出來ません。私は直に行きましやう。今日こそ何のやうな手段をしても是非に兄樣に逢つて、猶其上で私の盡せるだけの事を盡して見ます。」
「然う願はれゝば何よりでございますが。」
「兎もあれ參りましやう。私も此間中考へて居た事もありますから、逢つた上では必ず銑一郎君の氣を損じずに充分手際よく遣つて見ます。何うでも銑一郎君を元へ引戻して見せましやう。心強く思つて居て下さい。」

程もあらせず此家の門を、二臺の車が勢ひよく駈出して行つた。　鈴子は吉倉の昔から情に厚いのを知つて居るし、兄と吉倉との仲の、一通りでなかつた事も、兄の今も吉倉に對する心の、表は兎に角、如何なる人よりも深く思はれて居る事をも知つて居るので、幾分の心は憑まれながらも、不安の念は自身の實驗から直に沸上つて假令吉倉樣でも、と思ふと又胸は曇り初める。　車から見る後姿の吉倉の凛々しげな容態、五年の間、兎もあれ浮世に戰つた人で、自分の思ふより外の、いゝ考を別に持つて居るかも知れぬ、何卒事の首尾よく行くやうにと、竊かに念じながら、綾に結ぶ千々の胸。

其町、此町、一時間の程に、車は押續いて早我家の門を乘入れた。

（七）

今まで五六人床几に膝を並べて、團扇に風を呼んだ門涼みの一連も、いつの間にか家へ引込んで了つて、見えつ隱れつ柳の下を駈けて行く車の影も、川下さして、風に吹かれて行く涼船の絲の音も、軈て間遠になつた西河岸の裏路を、紺縮の中形に鶉茶の帶を締めた十七ばかりの娘が買物歸りの小風呂敷を提げて小刻みに月を踏んで行く向ふから、突掛草履の急がしさうに打水の間を飛び／＼來た男とばつたり行合つて顏を見合せて、

「おやッ。」

と立止つて、

「まア。」

といふ聲の下からひた／＼と寄添つて懷かしさうに相手の顏をしげ／＼と見込んだ。

「いつ歸つたの。」

情一杯の眼は月の下に有餘るほどの心を見せた。其目元と口元と額際から眉のかゝりまで、他人の空似といふ、矢野の鈴子と見違へるばかり似て居た。

「なに最少し前に歸つたばかりよ。未だ親方の處へも行かねえのだ、今一寸顏出しをしやうと思つて遣つて來た處さ。こゝでお前に遇はうとは思掛けねえ、實ア歸りがけにお前の方へ寄つて、久し振で顏も見てえと思つて居たんだ。嘘ぢやアねえ話してえ事ア山ほどある。言つちやア可笑しいが俺ア彼地に居ても忘れる日はなかつたぜ。」

「お止しよ。那樣氣休めは見て居ない事だもの、何うだか知れたもんぢやアありやしない。然うでしやうよ私の處なんざア何うせ歸りがけの捌序でなくつちやアお寄りぢやないんだらうよ。」

「何を言ふんだな、遇ひ早々嫌味でもなからうぢやねえか、外の處へ行くんぢやなし、親方ん處へ行くんだぜ。」

「だから親方を大事になさいよ。私なんざアいつでも跡廻しさ。」

と少しつんとして、

「眞箇に人の氣も知らないで。」

「何方が人の氣も知らねえんだ。落付いてゆつくり談話もしやうと思ふから後で行くと言ふんだ、お前でもねえ、未だ俺の腹を知つてくれねえのか。」

「だつてお前が餘り思遣りがないもの。」

「何が。」

「お前留守の間に私が甚麼に思つて待つて居たかお知りぢやあるまい。」

「そりやアお前の事だから、俺のやうなものでも心待ちに待つて居てくれるだらうとまア自惚れねえ事もなかつた。」

「そんなら、お前歸つて來たら直に顏を見せて遣らう位な氣が出たつて罰も當るまいぢやないか。」

「愚痴ッぽいなア、俺ア懐手で遊んでる身體ぢやアねえや。家もあり親方もありやア、それ／＼用もあらアな」

「そんなら、お前用のある中は生涯私にや逢はないのかえ。」

「何も那樣に言つて人を困らせる事はねえぢやねえか。知らねえ何うとも

しねえ。」

「あれ、最う直にそれだもの、餘りだわ、まア、誰が好きこのんで人を困らせるもんかね。お前が私の思ふ十分一私を思つておくれでないからさ。」

「ちやアまア何うすりや可いんだ。」

「私ん處へお出でな。」

「だが一寸でも彼方へ行かなくつちや濟まねえ。」

「そんならお前の勝手におし。」

「だつてお前、」

「可いわ。私ア、」

「何だなア、」

「知らないよ。」

と顏を背ける途端に背後から割れるやうな聲で、

「此奴等ア、何を戯けてやがるんでえ。」

二人は吃驚して飛退いた。

「あッはゝゝゝ。」
蹌踉として行過ぎたのは半纏着の生酔だ。
「それ見ねえ。餘りだゞを捏ねるから詰らねえ威嚇に遇ふんだ。いくら夜でも人目があらアな。温順しく言ふ事を聞いて早く歸つて待つて居ねえよ。」
「お前親方の處で餘程手間が取れるの。」
「なに那樣に長かア居ねえ。直ぐに引返して行かア。」
「そんなら可いぢやないか。」
と莞爾笑つて又直と寄つた。
「だから早く歸んねえ。」
「なに歸りやしないよ。」
「何うするんだ。」
「一緒に行かう。」
「え、親方の處へか。」
「私ア用の濟む間表で待つて居るよ。え可けないの、そんなに私を邪魔にし

なくつても可いぢやないか」と優しくなつて、「けれどもお前は私なんぞと一處に歩くのを外聞が惡いと思つてお出だらうねえ。」

「那樣事はねえけれど。」

と困つたやうに頭を搔きながら、

「お前は些少もきまりが惡いとは思はねえのか。」

「なに知れやしないやね。そして二人つ切なら種んな話も出來るぢやないか。それともお前は五月蠅かえ。」

「けれども誰に遇ふめえもんでもねえ。」

「お前男の癖に。」

「男でも此奴ア押が利かねえや。」

「だつて私ア一緒に歩いて見たいもの。」

「なにしろ鹽梅しきが剛氣に見つともねえからなア。のろまな顏して手を引かれて、態アねえや。俺ア厭だ。」

「いへよ。たんと那樣事をお言ひよ。お前根が私とぢやア厭だから何の彼

のつてお逃げなんだらう。いゝよ私ア歸るよ。一人で歸つて犬に喰付かれて死んで了ふよ。」

「はゝゝ、詰らねえ。那樣事を言つたつて仕樣がねえ。兎に角早く歸つて居ねえよ。」

「私ア勝手に歸るから構はないでさつさとお出なっ。親方だつて何處の親方だか知れやしない。大方お化粧をした島田か何かに結つた親方さんだらうさ。ゆつくり行つてたんとまアお話でもしてお出なさいよ。私ん處なんざア來ても來なくつても何うでも可いよ。」

「ちよッ仕末に可けねえなア。ぢやアまア負けて一緒に行つて遣らう。」

「なにも那樣に恩に着せて行つて貰はなくつても可いよ。」

「最う止しねえ、言ふ通りにすりやア可いぢやアねえか、俺も內々厭どころぢやねえけれど、何にしても氣が咎めるからなア。」

「なアにお前、私等二人つ切で類がないといふんぢやあるまいし。」

「だつてお前の標緻ぢやア目に立たアな。」

「何だねえ。そんな…………。」

照優る月は半空にいよ〳〵冴返つて、柳を渡る河風は折ふしに螢を吹上げて來て、水は音もせず流れて船は其まゝ眠つて、石垣近く地虫の途絶えては鳴く靜かな道筋を、聽て二人はなまめいた影を長く地に曳いて話しながら歩出した。年の若さと姿の若さと、夏の一夜は這麼事が或時流行つた事もあつた。あとは又一しほの靜かさで、月と、水と、町を隔てゝ聞える犬の鳴聲とより外には、折ふしに默つて、行過ぎる人の足音のみが際立つて高かつた。やゝあつて再び此路筋に一双の影を添へたのは以前の二人、まともに照らす月影に、折々さも嬉しさうに男の顏を見上げて、笑ひつ興じつ女は殆んど二人の外に何をも忘れて居た。

「あれまアお待ちな。そんなに急がなくつても可いぢやないか。」

後れがちの跡から追縋つて人もないまゝに手を把つて、

「靜かにお出いでな。」

とばかり笑顏を振向けて美しい目を見せた。男は一寸足を止めて其まゝ見

下して、
「お前は又何をぐづ〳〵して居るんだなア、早く歸らねえと家でも案じるぢやねえか、さつさと歩きねえ。宛で子供のおもりだぜ。」
「そんなに急いで歸つちやア身にも皮にもなりやアしないよ。」
「身も皮もありやアしねえ。歸らなくつちや可けねえぢやねえか、お前夏の夜は短けえぜ。最ういゝ加減に道草も喰つたアな、お前歩けなけりやア負つて遣らうか。」
「え、負つておくれだえ。」
と笑つて聲を上げて、
「そんな事をお言ひだと私ア急に歩けなくなつてあげるよ。」
「えゝ好い氣せんな。眞面目に負つて堪るものか。」
「厭だよ。最う歩けないよ。」
「仕樣がねえなア、餘りわやくを言つてると、俺ア最う打捨らかして一人で先へ行つて了ふぜ。」

「なに遣るものか。」
「お前まアいつ家へ歸る氣だ。」
「私ア寧そ家へ歸らないで夜が明けるまで、恁うして一處に歩いて居て見たいよ。」
「那樣自儘な事が出來るもんかな。お互えに離れて居る間ア勝手に好な眞似ばかりしちや居られねえ。」
「お聞きよお前眞實の事を言ふがね、家へ歸つちまへば阿母さんも居れば與ちやんも居るぢやないか。其前でいくら私が厚顏しくつたつて思つてる事を其儘に言ふ事も出來ないやね。だからお前恁うして居る中が私達の世界ぢやないか。」
「だつてお前今夜つきりで最う逢はれねえといふんぢやなしよ。お前の家でも承知づくの仲だア。」
「それでもお前顏を見りやア然うは行かないやね。」
「お前はいつでも跡も先も見ねえから困るよ。」

「そんな暇があるもんかね、私アお前を思つてるだけで澤山だもの。」

「おい最う通りだぜ。人込みの中を餘り引付いて歩くのは止さう。お前又國樣なんて大きな聲で怒鳴つてくれちやア困るぜ。」

「彼處の酒屋の角を曲がつて行かう。」

と淋しい横町を指した。

「馬鹿に廻り路ちやアねえか。」

「まア行つておくれよ。」

「遲くならアな。」

「いゝからさア。」

道には限りがあつて、時にも限りがあつて、思は何處までも切がない。美しい目は遂に勝ちおほせて、やがて其横町の片蔭に、二人の後姿は紛れて入つた。

（八）

合せて二千何百坪、過半は物好きに楓樹の數を盡して、歳々の秋を誇つて來た澁谷の某素封家の別業に、今日滿庭の錦の花に園遊會の一日。

盛會、好天氣、既幾番の餘興も終つて、沸立つばかりの談笑の聲の其處に彼處に入亂れた折柄、其人々の群を離れて裏手の築山越しに一處、三方紅葉に圍まれた中に腰掛に凭つたフロックコートの三人の客があつた。

いづれも舊交の暖かゝつたのが、今日期せずして此處に落合つたといふ。一人は政客鎌田康夫、一人は判官白石直記、一人は彼の吉倉である。

遇へば互ひに懷かしい顏の、いつか往時の心に返つて、時も場所も暫くは留守にして了つたが、中にも鎌田は其便々たる太腹、其二分刈の大頭達磨を其儘の面を笑崩して、談話を一人で持切つて來た其時、左右の二人を見返つて、

「何うぢや、書生時代の昔仲間を集めて、其中に一つ會合を遣つては。」

「おう、儂も先刻から其事を考へて居つた。恁うして三人珍らしく遇つたの

を機に、我々發起人になつて、早速遣らうではないか。吉倉君にも無論不贊成はなからう。」
と白石は未だ三鞭酒の醉を殘した面を吉倉の方へ振向けた。
「無論。」と吉倉は言下に首肯いて、
「大いに妙だ。いつも思つて居ながら、つい機會を得んで居つた、勿論遣らう」
「期日其他の事は追つて又相談をしやうが、何でも往時の丸卓會の意氣に返つて、一つ破天荒に遣つて見たいな。」
と愉快げな鎌田の言葉。
「皆變つて居るので、嘸驚く事だらう。おゝ、變つて居ると言へば、彼の矢野は何うしたな。此間も他所で彼の男の噂が出たが、今何うして居るか誰も知らんのだ。吉倉君は彼の男とは頗る親密だつたから多分知つて居るだらう。」
矢野、と聞いて吉倉は安からぬ色に、何心なく問出した白石にも異樣に思はせるやう、頗る張のない調子で、
「矢野は今東京に居らんよ。」

「居らん？　ふむ、何處へ行つた。」

「行つた先は解らんのだ。」

「えツ、」

と二人は齊しく吉倉を打目戍つた。

「然う彼是最う三月ばかりになるが、突然家を出たきり未だ歸つて來んのだ。」

「いよ〳〵不思議だ。何うしたといふのだ。尤も矢野の事では、甚だ氣の毒な談話を聞いては居つたが、」

「いや其談話なら我輩も知つて居る。其後何處へか移つて了つたといふ事で、薩張樣子が知れんで居つたが、其突然出たといふのは何ういふのぢや。」

と鎌田は更に訝かしげの顏。葉卷を片手に吉倉は稍向をかへて、

「いや、僕も其少し前に此地へ歸つて來て、直接矢野には逢はんかつたから深くは解らんが、君等も知つて居る通りの變り者だからな、」

と少し言葉を濁した。白石は猶受取れぬ色に、

「然し何故出たのだ。」

「それがさ、何しろ突然だつたから僕も出拔かれたやうな形さ。尤も置手紙に、當分旅行する、歸つて來るまで、留守を頼む。とはあつたが、其外には何も書いてないのだ。僕の處へは、それまで便りもなかつたのが、不意に留守中の事を書面で別に頼んで遣した。それは可いが、何處へ行くとも、何の位の間とも其後も亦何處に居るとも家の者へも全で音信がないのだ、それに付いては僕も少からず心配をして居るのだが、全體矢野が少し變つて居るのに、自分の事は自分で處置して誰にも相談をせんといふ風だから、恁ういふ時に甚だ弱らせられる。」

「兎も角本人が居らんでは仕様がないな、家の者は何うして居る。」

「言ふまでもなく心配して居る。隨分手を盡して行先を尋ねたが、皆くれ當りが付かんので、今の處歸つて來るといふそれを只待つて居るばかりだ。」

鎌田も白石も、互ひに何か思ふ處のあるやうに、其まゝ吉倉も深く立入つた事も言はず、三人言合はしたやうに口を禁んで、吉倉が例の葉卷の烟が盛んに捲上がるのみであつたが、暫くして白石は氣をかへた態に、

「何しろ昔馴染の我々が、恁うして離れ〴〵になつて居るのは甚だ可くないな。矢野の旅行の始末も略察しられるやうだが、離れて居るので詳しく事情も解らんやうな事で、それに付けても今度の會合は必要だな。」

鎌田も首肯くばかり、

「全くぢや。いや吉倉、矢野の事で若し又我輩等を要するやうな事があつたら、必ず何のやうにもして盡さうから、」

「うむ、其やうな時があつたら何分にも賴む。」

白石は想起したやうに、

「何は何うしたな、彼の矢野の妹は？　美人だつた。何とか言つたつい名を忘れたが。」

鎌田は笑みを含んで直ちに口を入れた。

「鈴子さ。記憶の悪い男ぢや。尤も我輩は君と違つて。一時大いに目を付けて居つたからな。はゝゝゝ、なア吉倉、當時内々君と競爭して居つたんぢや、白石、君は知らんかつたのか、あれは吉倉の意中の人ぢや。」

吉倉は慌たゞしく、
「おい、馬鹿な事を言つては可かん。相變らず君は若いな。」
言ひつゝ急に又葉卷を燻らした。白石は誘はれたやうに打笑みながら、
「然うか、那樣事があつたのか、儂は少しも知らんかつた。いや油斷のならん男だ。」
「困るな全然無根の事だ。那樣事を信じられては矢野の家と今の關係上大いに迷惑する。」
「餘り迷惑もしなからう。」と鎌田は更に、「先刻の談話に依ると君は未だ獨身ぢやといふではないか。」
「それが何うしたといふのだ。」
「待つた。」と白石は中に支へて、「處で彼の妹は未だ何處へも嫁かんのか。」
「うむ、未だ家に居る。それだから猶更だ。」
鎌田は直ちに尾に付いて、
「其猶更は此方で言ふ事ぢや。まア精々盡して遣りたまへ。はゝゝゝ、」

「はゝゝゝ、兎角に那様事を言ひたがる男だ。」

笑に紛らして、吉倉は其儘、立上つて、何か用ありげに時計を抽出して見た。二時十五分、日は未だ南に、見上げる空の澄切つた色を受けて、上を遮ぎる大盃の一枚は燃えるかのやう。

（九）

吉倉が會場を辭し去つたのはそれから僅かの後、門を出てから途中に一軒匆匆に用を達して、直に矢野の家へと車夫に命じた。

心がゝりの銑一郎の、いつとも知れぬ留守の間、鈴子は前からの二人の女中を相手に、驚かれるほどよく家を取締つて居た。折節に吉倉が來て、いつも感服して行くばかり、銑一郎の居つた頃には、それまでには知れなかつた家政は末の末まで洩らす處もなく行屆いて、鈴子は又其やうな事に何の考へを要する迄もなく傍から處理して行くので、別に留守中の事を賴まれて居る吉倉は何の爲る事もないのである。

松の下、椎の古木の蔭に折れて、花崗の敷石の玄關先へと通じた門内の、いつもの塵一つ止めず掃淸めた方を今しも吉倉の入つた來た時、鈴子は珍らしく奥の室で琴を調べて居た。居室は六疊、南を庭に、窓へ寄せて唐机、床に盧雁の軸が掛つて、花器には梅嫌、野菊が三四輪添へてあつた。軒端に近く、此處にも紅

葉の一盛、颯と音して渡鳥の群が、上を過ぎて、ばつと散つて、東の銀杏の枝に落返つた。

喜はしげに立迎へて、鈴子はいつもの愛想のいゝ執成。吉倉の改まつた扮裝を見ると、

「今日は那邊へ。」

「はア、今日は園遊會からの歸途御近所まで用達しに來ましたので、一寸お寄申しました。」

と曩に鎌田や何かと話したとは全で變つた調子。鈴子は會釋のやうに、

「毎度お心に掛けてよくお訪ねなすつて下さいます。今も何ですか餘りくさくさするものですから、塵埃だらけの琴を引張出したり何ぞしましてね、氣を晴らさうとして居つた處なんです。さア、何うぞお平に。それでは私も氣が詰りますから。」

「はア、失敬します。」と膝を崩して、「おゝ今日會で珍らしい人に遇ひましたよ覺えてお出でしやう、貴孃が未だ十六七の時分、よく兄樣の處へ來た白石と鎌

田を、」

「おゝ白石さん、鎌田さん、存じて居りますとも。何年振といふのでございますね、皆さん嘸お變りなすつたでしやう。」

「樣子は變りましたが遇つて見ると矢張前の通りですよ、兄樣の噂が出ましてな、樣子を聞いて二人も氣遣つて、何か盡力する事があるなら充分骨を折らうと言つて居ました。」

「然うでございますか、本當に兄も、何彼と御心配を掛けて……最う軈て三月にもなりますのに、何うして居るのでございましやう。」

心に離れぬだけ、流石に其事となると、言葉の中にも浮かぬ色。聲にも見えて

「私も氣は張つて居りますけれど、時によりますとね、兄は此儘歸つて來ないのではないかと、つい思つたりして何うもならないのでございます。」

「なに歸られんといふ事は必ずありません。私の處へも殊に留守を賴んで遣された位ですから。」

「私も然うは存じますけれど、以前の樣子が彼の通りでございましたから、取

止めもない心配などをつい爲るのでございます。然うかと思ふと自分の餘り子供のやうなのを笑て見たりなんぞしますが、いつまで恁うだらうと思ふと全くほッと致しますよ。」

「然し兄樣もいつまで恁うして置くものではありません。最う程なく歸つて來られるでしやう。私恁う思つて居るのです、今度歸つて來れば、兄樣は乾度私共にも安心させるやうな事を遣るだらうと思つて居ます。」

「はい其事は、兄もいつか、此方へ移つて參つてからも、此儘では居らんやうに申した事もございましたから、少しは私にも心憑みはあるのではございますが……。」

「私も兄樣とは長く交際もして居りましたから、人よりは多く兄樣を知つて居るつもりです。何にしても餘りにお案じなさらん方が可い。」

「何方に致せ此上手の盡しやうはございませんから、私の爲るだけの事をして待つて居るより外はございません。」

と言つて氣が付いたやうに、急にもとの笑顏に返つて、

「おゝつい又這麼事を言出して、いつも愚痴ばッかり、お顔を見ると定つて兄の事で、貴郎も嘸お聞飽きなすつたでしやう。然う申せば吉倉さん、私は此間脇から思ひも付かない事を申込まれて驚きましたよ。」

強ひて浮立たせるやうな調子に、態と談話をかへて來た。吉倉も其儘に輕く、

「何ですな。」

「縁談ですの。」

「えッ。」

と吉倉は稍色めいた。鈴子は打笑つて、

「此中で縁談でもないではございませんか。尤も今が今といふのではなく兄の事も充分知つて居る樣子で、内々私の了簡を聞いて置きたい事があるから、と言つて親戚の御存じでございましやう、此間お逢ひなすつた山本の叔母を中に立てゝ參つたのでございます。」

吉倉は暫時、ぢッと、鈴子が更に赤かしがるやうな色もなく、微笑みながら、すらすら言續けて行く美しげの面を打目戍つた儘で居たが、言葉の切れると共に

稍口早に、

「そして何うなすつた。」

「種々込入つて談話もありましたが、私は先を少しも知りませんし、兄も居りません事ですから、何とも私からは御返事が出來ませんと申して歸しました。」

吉倉は人知れず息をついたやう。物思はしげに、うつゝのやうな挨拶をして稍あつて顔を上げると、

「然し貴孃も最う身をお定めなすつて可い年頃だし、貴孃の事ですから定めて其邊の事は充分の考を持てお出でしやう。」

「いゝえ那樣事は未だ何にも考へては居りません。」

「然し兎に角お望みはありましやう。」

「いゝえ、それとても全く取りしめもない事ばかりで、これぞと申すほどの事は何もありません。」

「鈴子さん。」

と吉倉は意を決したやうに、

「貴孃、私の談話を聞いて下さらんか。」
「えッお談話とは。」
と鈴子は眼を上げた。其眼が遇ふと、吉倉は退避いで見えたが、膝を進め一口を切出した。

（十）

言ふべき時でないのも知つて居るが餘りに久しくて堪へられんので、と吉倉は其處に何年越の胸の秘密を打明けた。

今日白石の前で無根と言消した事は却つて事實で、吉倉は其時分から、一人密かに心を苦しめて居たのである。

今の叔父が、事業に失敗して海外へ行つて居た間、長く其扶助を受けて居た吉倉は家族を引受けて世話をせねばならぬ場合となつて、止むを得ず學業を中止して地方へ教師となつて行つた。其間にも一縷の望は絶えず此處に繋がれて居たので、有るべき他の縁は悉く斥けて居つた。

吉倉は其初めからの心の跡を追つて、一つ洩らさず鈴子の前に何も彼も打明けた。

それとは少しも思設けなかつたので、鈴子は初めは驚かれて、中頃は吉倉の熱心な言葉に、少からず動かされたやうではあつたが、いつか其脣は固く結ばれ

て、目も瞬がず、面の色も稍變つて來た。
語終つて、答如何にと竊かに固唾を飲むばかりの吉倉の、只見て危まれたのは鈴子の態度の、期して居たとは全く違つて居たので、鈴子も流石に、常とは變つて、言知らず何かたゆたふやうに、向け苦しい眼を向けたが、面も赧らめず、いつもの優しみも、思做しか消えたやうに見えて、
「それほどまでに、這麼私のやうなものを思召して下すつたとは全く存じませんでした、今のお言葉を甚麼にか有難くも思ひますし、今後とも決して忘れは致しませんが、私は其事には何とも御返事が致しかねるのでございます。」
「えッ、それでは、御不承知なのですか。」
と颯と色が變つた。
「いゝえ不承知にも何にも、私には未だ自分が本當に解りませんから。」
「何と仰有る。」
鈴子は屹度面を正して、眞顏の言葉さへ改まつて、
「貴郎には此間の緣談のやうに、それとなくお斷りも出來ませんから、一通り

私の思ふ事をも聞いて戴きます。つい近頃まで、別に心附きもしませんでしが、私の今迄の身の持方も、心の持方も、何ですか全で間違つて居たやうに思はれて參つたのです。私は今迄といふもの、自分の心は餘所にして外の事、外の人の所思ばかりで動いて居つたやうで、自分の本性といふのは、決して今迄のやうなものではないと思ひました。それから此方へ掛けて何事も不安心になつて參りましてね、況して今のやうな大切な事に、假令此處で何のやうなよい御挨拶を致しましやうとも、若し内心が然うでなかつたら、後には何のやうな事にならうかと思ひますと、正直の處何とも御返事が出來ないのでございます。」

素より口實に言ふやうな言葉ではなかつたが、那樣挨拶が、と吉倉は激して居るだけに、全で受取れぬ顏色で、

「然し其やうな御返事で、私が何のやうに思ふだらうかといふ事は、貴孃も御承知でない事はありますまい。」

鈴子は差俯向いたが、はきとした聲音で、

「それは致方もない事でございます。」

吉倉は屹とした眼に、一方を見詰めたまゝ暫くして向直ると、

「私の心の中は、最う充分申した上ですから、此上何も申しますまいが、最う一つ伺がつて置きたいのは、若し兄様が私に許してくれましたら、貴嬢は御承知をなすつて下さるでしやうか。」

「いゝえ此後私の事は、兄の心ばかりでは決めまいかと思ひます。」

「よく言つて下すつた。然し貴嬢、同じお断りなさるなら何故きつぱりとお断りなすつて下さらない。」

「あれ、貴郎は私の申した事を取違へてお出になります。」

「いや結果は同じ事です。」

「然う仰有ればそれも據ございませんが、貴郎が先程、私に仰有つて下すつた事が眞實でございますなら、最う少し私の事を考へて下すつても可からうと思ひます。」

「それも最う承まはりますまい。いや詰らん事をお聞きに入れて思はず長

座をしました、甚だ勝手ですが、私はこれでお暇にします。」
會釋其儘に衝と立つ。鈴子は止めやうとしたが、直ちに思止つて、共に立つて送出しながら、何と思つたか又、
「貴郎は此儘最う入らしつては下さらないでしやうか。」
振返つた吉倉の眼は言ふやうもなく鋭かつた、
「其やうな事を聞いて下さるな。私の身にもなつて下さい、餘りに酷過ぎましやう。」
流石に幾年越、末を豫期して居た中にも、一日も此やうな終りを見やうとは思つて居なかつた。あとをも見ずに吉倉は歸つたが、鈴子も今まで、此やうな振舞をした事は初めてゞあつた。

（十二）

海は晴れて、水の色は心ゆくばかり、南最寄の海岸の一朝、浪除の堤の上、見事に紅葉した姫蔦の、菱と絡付いて居る礒馴松の方へ寄つて、沖を眺めて立つ二人の影が見えた。

一人は銑一郎である。

家を出てから此方、此處へ來る迄は、一つ處へ三日と足も止めず、變化から變化を追うて、家に在つた時とは全で行き方を變へて、出來るだけ多くの人に遇ひ出來るだけ多くの事に遇ひ、慰藉といふ慰籍を求め盡した結果、假初の滿足も日を重ね、月を經て、さしもに深かつた胸の創も殆んど癒えかゝつて、心は漸くに平かになつた。

それと同時に、新らしい勇氣と新らしい覺悟は、直ちに新生活を呼起して兎もあれ曲りなりにも人に藉らず自分で其處まで到着したのを譯もなく喜んで手初めに先づ、此地に自分の職業と關連した或事業を思立つて、暫く其爲に滯

在して居るのである。鈴子の許、吉倉の許へも、此處へ着くと共に殆んど別人から來たやうな書面を送つた。

一人はお絹といふ。彼の夏の夜の、若い姿の其娘であつた。不意に赤痢で、頼りの一人の親と弟とに同時に別れて叔父に當る此地の旅館の主人に、近く引取られて來て居るといふ銑一郎は其家を宿に泊つて居るのだ。

お絹は今しも、寄せて返して行く浪の姿をぢつと見詰めて、

「本當に何うして那麼氣になつたのでしやう。貴方が入らつしやらないと最うそれなりになつて了ふのでした。あの浪を見ても何だか踈然としますよ。」

「危ない處だつたよ。」

「今から思ふと氣が知れないのですが、彼の時までは一圖に捨てられた事ばかりを思詰めて、それに思掛けない一人ぼつちになつて了ひますし、那樣這麼で逆上せて了つてたのですねえ。其後貴方の御深切な御異見は、未だに身に

しみて居ります。御恩は決して忘れません。」

銑一郎は其活々した顔に、笑つて打消して、

「何だな、那樣恩に着られるほどの事ぢやない。お前が捨てられた身といふので一倍不便に思つたのだ。お前も最う那麼馬鹿な氣は決して出すまいな。」

「出す處ですか、私は屹度見返すやうな事をして見せます。」

「何うだお前、俺が一人見込んだ男を取持つて遣らうか。」

「まア何ですねえ、那樣御冗談を仰有るもんぢやありませんよ。」

「でも俺は、お前の叔父さんからも賴まれて居るから、種々探出してとう〳〵一人見付けたのだ。」

「知りませんよ。那樣出鱈目を誰が本當にするものですか。」

「いや嘘でない。これでも俺は本氣で探したのだ。」

「まア。」

と見上げて顏を打目成ると直ぐ、

「嘘、嘘々、鼻の心で笑つて居らつしやるわ。いゝ加減にお弄りなさいまし。」

私は最う此頃はそれ處ぢやありません。」
「ふむ、何ういふのだ。」
「本當に先の事を考へてこれでも、一生懸命になつて居るのです。」
「それだから一人世話しやうといふのだ。俺の見立だと言つていつでも屹度自慢が出來るものだ。」
「お止しなさいよ最う、貴方もなか〳〵お人が悪いのねえ。」
「何故。」
「何故つて那樣根も葉もない事を言つて、あとで笑はうと思つて居らつしやるんだもの。」
「お前、仕舞まで聞かないで那樣事を言つても仕樣がない。」
「聞くには及びませんわ。嘘は知れ切つて居ますもの。よしんば又本當の事であつたつて……。」
「うむ、本當だつたら。」
「本當だつて何うするものですか。私は今這麼罅の入つた身體で、這麼身分

で居る間は最う那樣事は決して思ひません。」
「お前は出世をしやうと思ふのだな。」
出世と言つたつて、私のやうなものですもの、碌な事の出來ないのは初めから知れて居ります。けれども一心は一心ですからねえ。出來る出來ないは二の次に、まア根限りに働かうと思つて居ます。」
「それではいよ〳〵俺の言つた事に從いてくれるのだな。うむ、それならば又外に一つ口がある。」
「あれ又お初めなすつた。私最う知りませんよ。」
「まア聞くが可いぢやないか。」
「貴方本當に人の氣も知らないやうに、餘りぢやありませんか。」
「那樣に聞きたがらない所を見ると、矢張先のに未練が殘つて居るのだな。」
と又も笑み掛ける。お絹は聞くと齊しく、
「何です貴方は。大概にして下さいまし。仰有るにも事を缺いて、今のお言葉は何の事ですよ。」

「然うむきにならんでも可いではないか。只一寸言つて見たばかりだに。」
「でも貴方が餘りですもの。」
「ぢや謝罪るさ。」
「存じませんよ。貴方のやうな勝手な方はありやしない。」
「はゝゝゝ、然う怒つてくれないが可い。今度は本當の事を言ふのだからよく聞いてくれ。」
「貴方の本當は當になりません。」
「いや今度こそ正銘だ。」
「それぢやまア仰有つて御覽なさい。」
「いゝか本當に聞いてくれんでは困る。」
「それなら何故初めつから本當の事を仰有らないんです。何だか今度も亦御冗談だらうと思つて居ますわ。」
「まアさ、聞くが可い。」
と制して、それとなく顔を打目戍つて、

「俺はお前を貰受けやうと思つて居る。」
「何ですとえ。」
「實は家へ直さうと思ふのだ。」
「おほゝゝゝ、それ、それ、那樣事を。最う可うございますよ。私は何も聞きませんから。」
「冗談ぢやない。眞の談話だ。これ、何故那樣に脇を向いて了ふのだ。」
「貴方は本當に仕樣がない方ですねえ。私は二度と最う御一所に出ないから可うございます。」
「何だ未だ本當にしないのだな。俺は昨夜最うお前の叔父さんへ申込んだのだ。」
「いゝやうな事を仰有る事。まア考へても御覽なさい。私のやうなものが貴方がたの處へ參られると思つてお出なさるのですか。」
「來られるも來られないもあるものか。俺が貰ふのだ。俺が好いたものを貰ふに不思議はあるまい。」

「御醉興にも程がありますわね。」
「那樣事は俺の方の事だ。お前は自分の事を言つてくれゝば、それで可いのだ。」
お絹は猶も取合はず、笑顔の獨言に、
「然う。屹度然うだわ。何とか言はせて置いて、後で思ふさま調戲はうと思つて。」
「いつまで那樣、調戲つてばかり居るものか。お前は未だ疑つて居るのか。」
「假令甚麼に仰有つたつて、那樣木に竹を接いだやうなお談話を、何うして本當にする事が出來ましやう。」
と直に輕く早口に、
「初めから知れて居ますわ。」
銑一郎は調子をかへて、
「お絹、全くだ。俺は最う少しも嘘は言つて居ない。」
「貴方、那樣に私をお欺しなさりたいのですか。」

「はゝゝ、恁うなると又本氣にしてくれないにも困るな。お絹、俺がこれほど諄く言つたら最う解つて居るだらう。お前の返事も未だ何とも知れない中に、恁う骨が折れては實に堪らんな。」

「それぢや貴方、全く御冗談ぢやないと仰有るんですか。」

と今更のやうにつく〴〵と打目戍つたが、忽ち又もとに返つて、

「いくら那樣事を仰有つたつて、何ぼ何でも私なんぞを……。」

「それも先刻言つたぢやないか。只お前の心持を聞かせてくれ、確かりした挨拶は、歸つて又よく考へてくれた上で聞かう。お前、最うまさかに嘘と思つてはくれまい。」

「あの貴方が、本當に……。」

とお絹は目を睜つて、我にもあらず再び見上げた。

「お絹、お前の返事次第で、俺は又よくお前に話す事がある今思つて居るだけの事で可い。それだけを此處で言つてくれ。」

お絹は急に目を避けて、初めて顔を紅のやうにした。返事はなかつたが、目色

は明らかにそれと答へて、轟く胸に身内もいつか慄はれるやうに見えた。
銑一郎は勝誇つた色に、顏は言ふまでもなく冴え〴〵しく、
「お前、彼方へ行つて見やうぢやないか、少し立疲れた氣味だ。」
「はい。」
とばかり、お絹は俄かに羞かしげに、前とは離れて連立つたが、
「貴方は私の身の上を可愛想だとお思ひなさるのが先で、那樣にまでもして引上げて遣らうと仰有るのでしやう。」
「なにそれとこれとは別の事だ。歸つて詳しく俺の心も、又これからの事もよく談話をしやう。實は叔父さんの方も大略は承知をしてくれたのだ。」
「私は全で夢のやうですよ。」
「お前も俺もこれから生れ變るのだ。昔が夢で、今が覺めたのさ。」
「ほんに然う言へば然うですけれど、只私の足らはないのが……。」
「なに足らはないものを無理に貰ふものか。お前は俺が、お前の望むだけのものに何うでもして見せる。」

「屹度？‥」

「屹度！」

二人は目を見合はせた。朝日、朝潮、朝の風、さも爽やかな其朝の事。

野人

（一）

なにがし聯隊所在地の停車場へ、今！けたゝましい滊笛を合圖に、下りの二番列車が到着た。鐵路は此處で分岐れて、一方はまだ幾十哩を轢り、他は三度停車して、其れで止まるのである。

此驛で乘換る長距離の乘客が、一時に下車した雜沓は比肩接踵も只ならぬさまで、どや／＼と橋を渡つて、向ふのプラットホームへ移る跫音、滊笛の響、辨當の賣聲は、此方にはげしく、荷物を運ぶ赤帽子は向ふを馳せちがふ。途端に黑煙を吐き立てゝ、今來た列車は乘換の客を後にして去つた。

列車の聯接をまつ乘換の客は、さしもに廣いプラットホームに充ちて歩くもの止まるもの、人さま／＼の態をして、浮世のあらゆる階級を此處に集めて參差相合ふ其間を、頸からとつた眞田の紐に、黑塗の箱を胸にうけて、印袢天に白

の胸當と云ふ、かひ〴〵しい扮裝の中賣が巧に縫ふて聲を張つて、麵麭にお煎餅はよろし。お辨にお鮨でござい。

夏まだ淺く、九時を過ぎて間もない日光は、春の名殘の長閑に煙ぶる灝氣を通し、風は輕く渡つて、甍を併べた市街の家居は、停車場を越えて遠く引き續き見上るばかりの大建物に、三宜樓と目印の旗が飜る。俥のかけ聲、空を濁らす往來の砂塵は、見るからどよめく繁昌のさまを思はせる。廣い車輛停車域に幾條となく網の目のやうに軌路を置れ、向ふに煙の見えぬ機關車が一つ、五輛の貨車が聯接されずに併んで、信號器や、轉轍器は、用に應じ處を異へて据ゑられてある。趣味のない單調な赤煉化の建物が、煤ぼけて幾棟となく相接して堆く積まれた石炭の上に、丸い竹のぼてが二つ三つ抛り出されてあつた。二度三度、滊笛を響かし地盤を動かして、十幾輛を聯接した一條の列車は、やがて徐徐として入つて來た。先を爭つて乘込む群集の人浪をうつて、吾勝ちに乘る混雜にはぐれてまご〳〵連を呼ぶ老婆を、窓から半身を出して呼立てる連。兩に靷を下げて客を追ふ赤帽子は元氣よく、雜沓を極めたも一しきり。中

い小倉の帶をしめた父爺と、仔細らしい高襟の小會社員と秩父銘仙の羽織を着て、色の褪めた黑の山高帽子に、色眼鏡をかけた四十五六、村會で一議論と云ひたげなの〻五人で、空て居る方だ。高襟も黑眼鏡も互に煙草を吹かして、まだ談話の火蓋をきらず、兵士二人は默々として、思ふ處あるが如くうつとりとして居る。

丘や小山や、賤が伏家を見る目の眺に、汽車が之を捨るのとは思はれない。只だ渦を捲いて四邊の風物が、丁度何物にか引かれるやうに、あとへ〳〵と遠ざかり行いて、左は斷崖、右は長く渡つた山毛欅の林に、眼界頓に狹まつて、殆んど小暗いばかりの處へかゝつた。暫くして此處も行き拔けて目を遮ぎるものは、空の末に隱見する黛の色と、なだれに上る丘の根を包んだ、帶のやうに搖曳する薄靄とで、丘に續いて青葉に埋れて、五六十軒の村家がまばらに散つて、村の脇かけて幾百頃の田の面、田の面に菅笠、吹き流の手拭、紅の襷の乙女の一群は、甲斐々々しく鍬を擧げて居る。兵士が顏は急に寂しく、

「大塲、此れも見納めかな。」

「仕方がないさ。然し歸つて二度、これが見たいなア。」

大場と呼ばれた上等兵は、皮膚の密い中高の顏で、細く稍や短い地藏眉、眼付は敏捷らしいが、口に聊か締の緩んだ、何處となく浮ついた男である。他は穩かさうな男で、大場に比べて老けた、鼻梁の通らない、頰骨の張つた、左の眉根に黑子の目立つた顏で、一體に沈着いて見える。上等兵は帽子を脫いで中天狗の包を出して一本抽いた。

「おい野口、火はないか。」

「待てよ、」

とポッケットを搜つて、

「無。あんまり急いだんで落したかな、煙草はあるが、マッチはないわ。」

「仕樣がないな。や、失敬ですがマッチをお持ちでしやうか。」

と黑眼鏡に鋒を向けた。

「サアおつけなさい。………君達はどちらまで……、」

と待搆へたやうに、黑眼鏡はくるりと體を向けた。

「鳥渡國まで。」
「失禮ですが、どうしてお歸りですか。」
「其なんです……」
と野口を顧みて目を見合はせて、
「其明後日營所を出發して、淸國へ向ふんで……、明日の午後八時まで、約四十時間の外出が許されたです。其れで國へ歸るのです。」
淸國行、此言葉は一室の注意をひいた。
「お國と云ふと……」
「宮原の停車場で降りて、約一里半、川沿に行くと、其處が坪川と云ふ僕の村です。野口の村はまだづゝと先です」
「ハ、ハア宮原。イヤまだ大分ありますな。」
大塲は銀の無双の時計を出してしきりに見詰めて居る。野口は腕組のまゝ此も目を其時計にくれて言葉はない。
「國家の干城！ 羨しいですな。何程ばかりの人數が渡淸するですか。や、然

し、これは軍機の秘密ですな。」

と黒眼鏡は問ひかけた。返事はどうしても上等兵がせねばならない。

「僕の聯隊で一箇大隊、各中隊から選抜するんださうです。僕の中隊が一番少ないですが僕等の外にもう四十名、選抜されたです。」

「名譽ですな。中隊何百名の中から選抜された……、失禮ながら御見上げ申します。最初何處へ上陸なさるですか。」

「其れは知りません。」

大塲との談話を中止して、例の高襟に向つて

「何うです君、此れから遠征の途に上らうと云ふ軍人と、同室に乘合した、此れも奇遇ですな。」

「さうです。殊に此度の戰爭は、人道の味方……公明正大の、所謂名實相叶つた戰爭ですからな。特に味方は各國の同盟軍ですから、列強環視の中に、我軍の精鋭を示すのは、實に此處を外ずしては外にないですな。」

と大塲を見返つて、

「鳥渡國まで。」
「失禮ですが、どうしてお歸りですか。」
「其なんです……」、
と野口を顧みて目を見合はせて、
「其、明後日營所を出發して、淸國へ向ふんで……、明日の午後八時まで、約四十時間の外出が許されたです。其れで國へ歸るのです。」
淸國行、此言葉は一室の注意をひいた。
「お國と云ふと……」
「宮原の停車場で降りて、約一里半、川沿に行くと、其處が坪川と云ふ僕の村です。野口の村はまだづゝと先です」
「ハ、ハア宮原。イヤまだ大分ありますな。」
大場は銀の無双の時計を出してしきりに見詰めて居る。野口は腕組のまゝ此も目を其時計にくれて言葉はない。
「國家の干城！羨しいですな。何程ばかりの人數が渡淸するですか。や、然

し、これは軍機の秘密ですな。」
と黒眼鏡は問ひかけた。返事はどうしても上等兵がせねばならない。
「僕の聯隊で一箇大隊、各中隊から選抜するんださうです。僕の中隊が一番少ないですが僕等の外にもう四十名選抜されたです。」
「名譽ですな。中隊何百名の中から選抜された……、失禮ながら御見上げ申します。最初何處へ上陸なさるですか。」
「其れは知りません。」
大塲との談話を中止して、例の高襟に向つて
「何うです君、此れから遠征の途に上らうと云ふ軍人と、同室に乘合した、此れも奇遇ですな。」
「さうです。殊に此度の戰爭は、人道の味方……公明正大の、所謂名實相叶つた戰爭ですからな。特に味方は各國の同盟軍ですから、列強環視の中に、我軍の精鋭を示すのは、實に此處を外ずしては外にないですな。」
と大塲を見返つて、

「君達は重任を負ふて居るですな。イヤ然し名譽です。僕等は君達の祝福を祈つて、芽出度凱旋せられるを待つです。」

とカフスを氣にして妙に氣取つた。大塲は、

「有難う。凱旋はしたいとも思はないです。望は名譽の戰死……、名譽の爲めに死ぬのは、吾々軍人の本望です。」

と流石に凛として答へた。

高襟と黑眼鏡はまた話し合ふ。高襟は手眞似を入れた、氣の惡い聲の話振で黑眼鏡は氣にしてはまた兵士連を顧みる。人道、名譽、同盟軍の動靜、これが話頭に上る重なるもので、つまり新聞の論說と從軍記事とが、此處で繰返されるのであつた。

時計を前に兵士二人は、指を屈して何か數へながら私語いて居る。黑眼鏡と話した折柄の元氣は、やがて寂しくなりまさつて、野口は橫向きに顏を窓へ出した。

「おい野口、今日は汽車が遲いな。」

「なに氣の故よ。」

「其樣かな。然しなんだか遲いやうだぜ。お互に時間のない身體だからな。」

「然うだ。今日の一時間は平常の一日と同じだからな。然し僕等はまだ仕合よ。恁うして鳥渡でも歸れるんだからなア。成澤を見ろ。國からも人は呼べず、自分はなほさら行けずさ、其れと比べりや僕等は本當に仕合だぜ。」

言ひながらも浮かぬ顏。

「うん、成澤から見りや仕合だな。……こうと電報を見なけりや彼方が九時の發と、十時十一時……、行き違つちや仕樣がないが……」

上等兵は獨語いて、安からぬ胸をまぎらすやうである。

また小驛を一つ過ぎて、更らに一驛についた。其處には此列車を待ち合せて他の列車が小休をして居つた。

大場は忙はしく其列車に目をつけたのである。

（一一）

停車場は形の如き構造、狹いプラットホームを挾んで、二條の列車が相對して、蜒々として横はつた。向ふのは動き出さうとする。中賣は彼方を捨てゝ此方に其調子を勇ませた。

大場は身を乘り出して、向ふを見詰め、そは〳〵として沈着ない。

「野口、鳥渡出てくるから、賴むぞ。」

「どうしたんだ。」

「イヤ來て居るかも知らんからな、」

「誰が、」

「親父よ。電報と行違うと何んだからな。」

「おゝ然うか、早く行つて見ろ。發車と何んにもならないぞ。」

大場は急いで出て行つた。例の會社員も軈て降りて行つたが入れちがひに、十八、九にもならうか、二皮目の愛嬌のある、二子の袷に、メリンスと繻子の晝夜

帶を締めて、小包を片手にして、つぶし島田に取上げたのが乘つた。續いて日にやけた顏の、髮は亂れ髯はむさく延びた、段鼻の、目口に取立てゝ云ふ程のない、五十四五の老爺が、手織らしい千筋の紬の羽織、襟垢の見える同じ薄綿入を着て、綿フランネルの股引に草鞋穿き、右に茶皮の鞄、左に風呂敷を眞田の紐に括付けた包を打ち違へにかけて大場を後に從へて入つて來た。押し並んで腰を下すと、

「其鞄を下すが可い。電報は屆かなかつたかい。」

と大場が言葉に、

「え、那樣もん來ねえだよ。われ一體まどうしたゞ。」

「なに急に歸れるやうになつたから、來るなつて電報かけたのさ。」

「何時なつ。」

「今朝早く。」

「ハアテね。其れぢや大方、俺が出た跡へ着いたのだらう。けれどもまア此處で遇つて可い鹽梅だつた。」

とゆつくりした調子で、鞄を下し、煙草入を出して、木彫の筒を膝について、煙管を抽いた。

「野口、これが僕の親父だ。阿父、この男が野口つて、此度一所に淸國へ行く手紙に云つてやつた友達だ。」

と紹介して、大場は月形に白い額の汗を拭つた。

「此れは初めまして、俺がハア、此治六の親父の權六でがす。治六がまた段々御世話になりまして、はい、御禮のう申します。」

野口も先刻から樣子にそれと知つたが、丁寧に、

「どうしまして、僕こそ大場から世話して貰ひますので、……此後は何分とも御別懇に。」

「此後もなからうぢやないか。明日から生命がけだ。」

「むゝ、其れも然うだ。」

と寂しく笑ひ合ふ。

談話のうちに、列車は停車場を見捨てゝ、風に吹かれる雲翳のやうに、背後へと

飛ぶ桑圃の中を轢るのである。權六は眞田の紐を解いて風呂敷包を開けた。なかは紙に包んだ手拵への柏餅。そのまゝ左手に載せて、

「サアお前樣、一つどうでがす。自家で拵た這麼もん、甘くもねえだが、」

大場は脇から一つ摘みながら、

「おい食はねえか。どうせ甘くはねえが、」

「ありがたう。」

「遠慮はつまらないぜ。厭ならだけれど、」

「其れぢや貰はうか。」

「どうか澤山食らしつてくだされ。」

列車をおして、見上んばかりの絶壁が、累積して右に迫り、楊櫨の花は岩罅を彩色つて匂ひまさる。左は近く谿で彼方に青葉の山が屹として、見るもたはゝな若葉はさながら濕ひ立つて、逶迤とした其山勢は、崔巍なるもの、奇峭なるもの相交つて、樹々の向背、峰巒の參差を飾る。あざやかな新綠の色を映して、碧瑠璃を溶いたやうな水が、列車に逆つて、時に石を嚙んで日光を碎いて流す。

粒の見える餡を黒い餅に包んだ、しかも無造作の拵へ振に、餡ははみだして、柏の葉も皺くちやのものであつたが、二人は頗る健啖であつた。權六は其態を見つゝ、鞄を開けて、

「此れをなお前の處へ、新屋敷の利雄さアがよこされたゞ、」

と一通の手紙と、水引をかけた目錄を取出した。

「利雄さんから這麼物を、……其れは濟ないな。」

「何書いてあるだか、讀んで見るが可え。」

其手紙を大場は讀み始めた。繰返し〳〵二度三度、會心の箇所でもあらう。

「邦家の爲め這般の御重任、貴兄のみの名譽にあらず、また以て吾鄕の面目として」云々の文句が聞える。權六は其隙に話を野口に向けて、

「お前樣、何處まで行かつしやるだ。」

「僕ですか、僕はずつと先ですよ。大澤までゞす。」

「大澤ッ、まだえらくあるでがすな。停車場を降りて、餘程あるでがすか。」

「何、大澤の町です。」

「然うでがすか。其れぢやハア譯なしだ。」
と一服吸いつけて、また一服、掌に受けて吸殼を火種に、煙管を横に啣へて。
「俺新聞で聞いたでがすが、此度の豚尾坊主は中々強いつて話でがすな。」
「なに那樣ことはないです。たかが豚尾ですもの、強いと言つた處で知れたものです。つまり人數が少なかつたから苦んだんで、なアに一戰爭で最うぐうの音も出ないやうにして了ひますわ。」
「餘り強いと心配でがすよ。お互にハア親の身になりますとな。してまア何日清國へ着くでがす。」
「其りやまだ定らないんでせう。何時とも、」
「まだ定らねえ、其樣でがすか。どう云ふわけて行く人と行かねえ人とがあるでがす。」
「何別ぢやありません。今度は外國の兵隊と一所になつて戰爭するですから、下手の者を遣ると帝國の耻になるからつて、其れで出來る者ばかり選んだんです。」

「ハア出來る者ばかり、え、本當でがすかい。して見るとこの治六めも其出來る者の中に選ばれたんで、……本當でがすか。」

目錄はポッケットに、其手紙を捲きをさめて大場はまた一つ柏餅を摘み、

「利雄さんは、矢張役場へ出て居るのかい。」

「然うだ。昨夜其手紙のう持つて來て、遲くまで談話して戻られたゞよ。」

汽車は只ある停車場へついた。例の黑眼鏡は丁寧に兩兵士に會釋して降りる、娘も降りて空いたと見ると、どや〳〵と四人、日向臭い連中が入つて來て、無遠慮に腰を下して何事かわめき散らす。眞岡の三紋の羽織に、一昨年流行つた中折の帽子を眉深に、キャラコの手巾で頸を卷いたのがあると、手織縞の紺糸の勝つた袷に、小倉の帶を胸高に締めて、りうとした山高帽子を阿彌陀に冠つたのがある。跡の二人も何れ劣らぬ扮裝で、この地方の若者と見える。

「大場、もう一つだな。」

「おう然うだ。貴樣はまだあるな。」

若者連中は此方へ目を向けて、何か私語き合ふ。權六は降る仕度の風呂敷を

たゝむやら鞄をひき寄せるやら、とん／＼と足を踏み鳴らして、ぐいと裾を端折つて、

「治六、われ高谷へ廻つて行くだらうな。」

と小聲。

「高谷へツ、何しに、」

「何にしにつて、解らねえなア。高谷の祖母樣床についてござるだ。其れにわれを待つて居られるもんだに。」

「さうか、高谷へ廻るのか。」

と大場は時計を見て、

「高谷へ廻ると、三里半あるだらう。」

「二里の廻りだけでねえか。」

「其れは然うだけんど、今一時半だらう。高谷へ廻つて三時、家へ行けは四時になる。空身で歩るいても、一時間一里半は骨だ。其れにこんな荷があるぢやないか。」

「何、荷は俺、どうでもするだ。」

「それに高谷へ行けばつい談話もあらうと言ふもんだ。鳥渡寄つて鳥渡出ても卅分や四十分は經つぢやないか。別に用もないんだらう。」

「むゝ用つてねえけんど、祖母樣が待つてござるでなア、俺寄つて行くが本當だと思ふだ。平常とア違うだ……。」

「だけれどお前、最う一時半だ。」

と時計を父に見せて、

「此處までにやつと戻れるだらう。ホラ此處から此處まで來ればまた直ぐに隊へ戻らなけりやならないんだぜ。」

と小指で數字を指摘する。

「其れも其樣だらうけんど、鳥渡でも寄るが本當だらう。お作も待つて居るだによ。」

大場は如何にも廻りともない態度である。

「俺寄るが本當だと思ふだ、其れもハア、お前の勝手だけんど。」

と色を見て、これも無理にとも勸めぬ。

汽笛は不意に險しく響き出した。野を行き谿を渡り、遠く薄れ〳〵て谺返しにまた響く。停車場は近づいたのである。大場は立ち上つて、帶劍の帶皮を締め直した。大杵川の磧は礧砢相連つて、瑩然とした大杵の水は、幾折轉して遙かに木立の中に流れ込む。川沿の道に流につれて蜒つて、これも木立と畑とに隱され、其先が坪川の村である。花立山の一本松、長者屋敷の野の匂、一帶の風色は、總て忘れ得ぬ俤であつた。目を放つて大場は飽までも其風物を貪つて居る。宮原の停車場はもう其處だ。

「野口、其れぢや此處で失敬するぞ。機嫌よく行つて來いなア、明日は二番で屹度だぞ。僕は先に來て待つて居るから。」

「おう失敬…………明日はどうしやう、何か目印がなくちや解り惡いがなア。」

「然うだ、恁うしやうぢやないか。貴樣此驛へ來たら、左側此方へ顏を出して居てくれ。僕はまたぐつと先に出て居るから。」

「ようし然うしやう。お互に勢ひよく明日は出掛けやう。」

途端に蒸汽を抜いた音がした。速力は徐々に緩く、信號器は目の前に立つた。

「お前樣、此處でお別れしますだ。どうか治六が事はお依み申しやす。それでは御機嫌よく御出でなされませ。」

「左樣なら。また明日お目に懸ります。」

（三）

木賊を根方にあしらつて立つた石の外に、殆んど見立てのない、隅に亂雜な罇蒼した植込のある、狹い庭を越えて、出掛つた穗に蝶の舞ふ麥畑を控へた、十疊の座敷は坪川村で中通の家、大場上等兵が親の權六が住居である。

一間の床の間、其處には天照皇大神宮、春日大明神、八幡大菩薩と、三行に書き流した軸をかけて、三寶に御酒を載せたのが供へられてある。　緣なしの疊も障子も稍や煤ばけて襖は更らに古色を帶びて居る。

一夜隙なしの應接に勞れた治六は、僅かに憩ひ得たので、瀟洒とした袷に、天笠木綿の兵子帶をぐる／＼捲にして、際立つて白い額を打ちつけに見せて、大胡坐、煙草を吹かして居る脇に、中天狗の五十本包が、殘り少なに吸ひあらされてあつた、座敷の次は直ぐに茶の間、戸襖なしに臺所や勝手を續いて、二枚の煤に黑んだ板戸で、水板を仕切つてある。　勝手に女が五六人、治六への馳走の案配で、甚だ取込んだものだ。　權六は茶の間に何すとなく沈着ぬやう。　ふいと立

つて坐敷の襖をあけると、治六がうつとりとした顔で、此方を向いた。

「おい坐敷は治六獨でねえか。誰か來て居ねえかよ。お作どうしたゞ、われ其處へ居ねえで可いだ、治六が相手のうしろやア。」

と自分は用あり氣に茶の間へ戻つて、坐つてまた立つた。左りとて何にもせぬ。

「お作や早く行けや。」

とまた呼ぶ。新しい前垂で兩手を拭きつゝ、赤糸の際立つて目につく手織縞の袷に、瓦斯博多と繻子の晝夜帶をしやんと締めて、くるりとした眼眸に愛嬌の籠つた、眉の濃い廿才ばかりのが、片襷を外し骨太の指を其れにかけて、此方を向いて、

「ハイ。」

除隊の上は、治六が妻と定めてある、妻が生家の娘である。お作は云ふなりに坐敷へ行つた、輕く柱に身を寄せて、斜に立つて言葉はなく、見合はして微笑んだが、急がしく眼を逸した。

「此處へ來て坐るが可い。」
と治六は腮で招いた。
「お前さア、何時戻らつしやる。」
「何處から。」
「何處つて戰爭からさ。」
「ハヽヽ、戰爭から戻る奴があるらんか。戰爭へ行きや死ぬのさ。」
「えッ本當かね。」
と今更に、吃驚したやうで、いきなり膝を進め、しげ〳〵と見上げて、
「あて事もねえ那樣處へ、廢さつせえ、行くのは。」
「はゝゝ、何を云ふのだ。死ぬのを恐れて、戰爭へ行かん軍人があるもんか。僕が死んだ跡は、お作は誰の處へ嫁に行くかな。」
「あれ冗談でねえだ。お前さ死なしつたら、俺どうしやう。」
「どうすることもねえさ、好い男子を亭主にするさ。僕の處へ來るよりや割だせ。」

「治六さア……。」

跡は續かずに、恨めしげに凝と男を見詰めた。睫は早や濡れて居る。

「お前さ、左樣思つて居さつしやるか。」

と俯向いて了つたが、不意に、迫つた一聲、

「人の氣も知らねえ！」

「はゝゝ馬鹿戲謔を本氣にする奴があるものか。何だい其顏は、醜ねえよ。豚尾を相手に戰死してたまるものか。」

「え、」

と女は振仰いで見て、蘇るばかりになつたが、

「それでもお前さ、情ねえことを云ふだもの。俺那樣事云はれるやうに、浮ちや居ねえだ。本當にお前さ、何時戻らつしやるだ。」

「遲くても來年の秋だらう。其れで直ぐに除隊だから、通常よりや五六十日は早い。」

「本當かね。」

「本當さ。土産を持つて來てやるぜ。勳章一つ。」

「俺信心して待つて居るだ、身體大事にしてくらつせえよ。」

颯としめやかな風が朝のかをりを吹き送つて來た。高からぬ朝暾は、家根に隔てられてまだ庭に射込まず。地は濡色にしまつて、何處ともなく奇麗である、風に取られて、はら／＼と散る植込の雫は梢の綠が滴るやう。麥はしつとりと浴びた朝露に、塵を洗ひ出穗に葉末に露の玉を綴り、彼方は朝暾を宿して、はやきら／＼しく、其處は洗はれた綠が、更に光澤を増して、庭近くはまた清く沈んだ葉色が、植込の樹々と續いて、ゆつたりとした淸新の色は、庭に畑に充ちて居る。霽ながら向ふの林をかすめて殘つた朝靄は、日光を受けて明るく、何んとなく引きつけるやうな景色である。治六はもとの大胡坐、お作は片手を支いて橫に身を開いて、目は其れの景色に、然し二人とも眺めて居るのではない。

「おい早くしねえか、何ぐず／＼して居るだ。」

と焦立つ權六の聲が聞える。お作は立つて勝手へ行つた。

日影は段々に高く、見る目は次第に晴れやかな眺めを映して來る。
お作は膳を運んで來た。治六は立ち上つて、
「もう仕度は出來たのか。」
「さうですよ。」
床の間を背後に据ゑた火鉢を片付けて待つた。やがて配膳も濟んで、心盡しの肴が運ばれると、權六を先きに、藍微塵の袷を着た、五十格好、禿頭、髯むしやな、頑丈作の老爺。手織の袷に二子の羽織を被つた若者。あとは四五人の女が續いで、銚子を持つてお作は最後に入つた。
正坐を一つ除けて、治六は右に坐を占めると、若者は其次に、老爺は正坐の左に坐つた。あとは女、一つ飛び離れて權六。お作は銚子を持つて扣へる。末坐の女は、目元口元治六を其儘、權六が妻だ。出穗の麥畑、露のきらめく植込の葉末、爽快な朝景色を隈なくうけて、內輪だけの酒宴である。
「お作、お前ら阿父はどうしたゞよ。」
ハッとしてお作は立つた。暫くして、

「どうも申譯ねえだよ。昨晩の勞で、すつかり寢過したゞよ。」
と節糸の羽織を引つかけて、濃い眉の口のしまつた、四十七八の、寢起き眼のとろりとしたのが、
「御免なせえよ。」
と正坐へ坐つた。一坐揃つたのを見て權六は、
「お先、お毒見しますだ。」
と波々うけて、
「サアどうか、お始めなすつて。」
正坐から順に、お作は銚子を持つて酌して廻つた、あまり浮くでもなく、また沈んだでもなく、談話に花が咲いて、お作が頰を赭めたことも幾度か、わけもなく時を移して、治六が出發ねばならぬことも忘れたやうだ。治六は帶に絡めた時計を抽いて掌で一撫、硝子を撫でゝ時を見、
「ヤツ、時間が來たッ。」
突如に立ち上つた。

「なに、まだ可いだらう。」
と權六は沈着いて言つた。
「可いもんか。時間が來たんだ。おいお作、洋服出してくれ。」
とせき込んで、聲さへ棘々しい。
「まあ、さう急がねえで可いでねえか、碌に談話もしねえぢやねえか。」
「那樣事を言つたつて、仕樣がないさ。僕だつて好きで急ぎやしねえんだ。おいお作。洋服持つて來いつてのに。」
「これお前のやうに、さうがみ〳〵云はねえでも可いだ。なんでまたさう急ぐだよ。」
權六は譯もなく更に沈着いて、手酌で喉を鳴らして優然として打見やる。外の誰も彼も一樣に優長に搆へて居た。
治六は實際沈着ては居られなかつた。よしや僅かの時間の餘裕があつたにしても、首途を盛にしてくれる、村民への挨拶にも時は費る。のみならず、これから一里半の距離を宮原の停車場まで……野口を乘せて汽車は直ぐに着

くであらう時は迫つて來たのである。然もこれが敵と戰ひ氣候と戰ひ、更に運命と戰はねはならぬ最後の首途であるのだ。心は亂れる。治六が胸は浪立たずには居られない。

「時間が來たんだつてのに、解らないなア。野口と約束したのを知つてるんぢやないか。僕だつて面白くて急ぐんぢやないよ。」

「はて野口さと約束したつて可いでねえか。俺これから一走り宮原へ行つて、野口さに話して一所に來るだ。これから先き長い間お前が世話になるだに、何もなくても緩くり一杯上げてえだ。其樣してお前一所に出發ば、何惡いことあるだア。」

「治六や、其れ可いでねえか。俺も其野口さによくお賴みのうしてえだ。阿父行つて來るだに、われまあ、急がねえで居ろや。」

と脇から妻も口を入れて、

「折角來たゞに、もう立つたア、あんまりあつけねえでねえか。」

治六は一口に、

「那様事が出來るものか。」
「アレ何故出來ねえだ。」
「阿母の知つたことぢやねえ、默つてお出で。」
「ぢやどうするだ。」
「どうするつて、これから出發のさ。」
とお作が持つて來た洋服と、着更へやうとするのである。權六は尚も緩やかに、
「出來ねえことはあるめえ、さうしちやどうだ。」
「解らないな本當に、六時までに隊に行つて屆けなくちやならないんだつていふに。」
「どうして……………」
「六時までしか外出が許されて居ないんだ、六時を過ぎれや罰ぢやないか。平時とは違ふ。」
「だからさ、野口さからも來て貰つて、緩りしろと云ふだ。これが平時とは違

うて運でも悪りけりや一生の別離だ。」
「平時だつて遲刻は營倉だ。それを今は戰時ぢやないか。逃亡と見做れりや銃殺だ。考へても見てくれ。卑怯の名を取つて死なれるかい。厭だつて仕樣もない話だよ。僕は大日本帝國の軍人ぢやないか、阿父は帝國の臣民ぢやないか、天皇陛下に捧げ奉つた生命だ、卑怯のことが出來るかい。」
「はてさ平時とは違うだもの、何も逃げ匿れしるでなし。親子一生の別離だに、一日や半日遲れたつて何んでもねえでねえか。」
「那樣事は、軍隊にや出來ないよ。」
襯衣下穿、ズボンを細い皮でしめて、上衣の白い裏を見せて一振振つて手を通した。
「出來ねえつてお前、平時とは違うだもの、其れ位の推量のねえこともあんめえが。」
と權六は繰返した。
「出來りや居なくつてさ、出來ねえから急ぐんだ、僕が好奇で急ぐやうに、僕に

だつてなつて見るが可い。」

「其れぢや、どうあつても出發にやなんねえだか………」

むゝ、と俄かに氣拔のした調子で、注きさしの杯を措いて腕を組んだ。一坐もそれに連れて誘はれたやうに欝いで了つた。

上衣を着てボタンをかけた治六は、不意と父の顔を見て、どつかとまた大胡坐、ホツと吐息を一つ、新しく一本煙草を抽いた。

暫時は無言であつた。

「本當にお前此から出發にやならねえだが。 野口さからも來て貰つて、緩りして出發と可いんだけど………」

「左樣なれば此上なしさ。 然し軍隊は普通の處とは違うから、どうしたつて歸營時間に歸らにやならん。 其れに今は戰時だから、遲刻して逃亡とでも思はれりや、此上もない耻辱だ。 其れだけぢやない。 ひよつとして銃殺でもしられりや、其れこそ談話にも何もなつたもんぢやない。」

「那樣御規則があるだか。」

「あるだかつてお前、戰時は殊に嚴しいのだ。逃亡と見做れりや銃殺だ。戰友つてまあ野口なら野口に、鐵砲で打たれるんだ。」

と言葉は暫時途絶えた。

「規則とあれば據もねえだ。歸りが遲れりや殺されるつてどうしても死なにやならねえ生命か。よしそれぢやけア機嫌よく出發てくれ。」

ついと立つて、床の間に供へた神酒を持つて、

「お作彼方から、三寶に載せて置いた盃を持つて來てくれ。」

と治六が前に跪坐た。

（四）

右に帽子左に帶劍の欛を握つて武者振凛々しくぐつと反身、治六は今を首途の上框に腰を下して靴を穿うとした。靴は磨いてはないが、よく拂はれて流石に塵を止めず、其處へ揃へられてある。何の緣起か權六は燧石を持て來て、後からカチ／＼切火を浴びせた、お作は人先きに下駄を突かけて土間へ立つ、母親やお作が父は權六に續いた。顏は言ふまでもなく涕に曇つて居た。

「治六や、那樣なら壯健で居てくれ。勳章なんてどうでも可い、生命にや易えられねえよ。輕卒のうしてくれるな、注意て行つてくれ。俺、禱つて居るだに。」

一家殘らず宮原の停車場まで見送るので、留守を預る母親はもう此が別離の言葉であるのだ。誠に夢の如く遇ひ夢の如く別れて、また相見る事も覺束ない。昨日來て今朝去つ、この僅かな時も何や彼や忙がしくておち／＼沈着いて談話す閑暇もなく、名殘を惜む便とてはなかつた。「せめてもう一日だけでも」と思ひはつい口にも出る。

「本當に何んて呆氣ねえ事だ、せめてもう一日も居られるやうだと可いけんど、治六やどうか都合して居られねえか。俺、お前と碌に談話もしねえだがよ。」

「今も云つた通り、恁うして一晩でも歸られたのがまだしものゝだ。出來りや十日でも廿日でも居たいんだけれど、軍規だから那樣事は出來ない。阿母も壯健で居てくれ。僕は勳章を持つてぴん〳〵して戻るよ。」

「本當に待つて居るだよ。」

と互に見る目、涕は云ひ敢へぬ胸の中を語つて、治六はそつと目を拭ふた。

煤ぼけて黑く光る葦簀張の天井も、今更に心を留められて、づらりと列んだ神棚の燈明も、あゝ如何程か兩親は心を痛めた事であらう。

「戰爭に出りや必ず死ぬと限つた話ぢやない、くだらなく心配するものがあるもんか。阿母も身體を注意て、……行つて來ますよ。」

帽を冠り姿勢を正して、

「左樣なら。」

上框と向き合つた廐に栗毛の駒が、穩かな目に見送つて居る。ゆくりなく目

を付けて、

「おゝ先達の手紙の馬はこれかい。可い馬だ、得したな。」

と親父を顧みる。

「得もしねえが可い馬だ。われが戻るまぢや壯健だらう。」

治六はいきなり鬣をつかんで、

「ドウ〳〵、壯健で居てくれ。」

二ツ三ツ掌で馬首をたゝいて、更に一眄母を見返つて戸外へ出た。

花立山は西を閉いで、山の根はなぞへに村端れの其處まで延いて居る。あざやかな朝暾は頂の一本松の梢をかけてもう茫々と繁茂る山腹の草の上に影を投げ、花の匂、草のかをりが糸遊のやうに立ち靡く。裾近く立つて居るのは鎮守の森で畑を隔て田を隔てた茅葺屋根はまばらに、一様に此方へ向いて走る小路の合ふた其處から、少し空地があつて、此處には家並を造つて百軒あまり、板葺と茅葺とをこきまぜて、形ばかりの町並をなして居る、其中程に二流の旗が中空高く飜る。これは治六が行を盛にせんとの見送の人達である。逸

早く目に入れた治六は一寸と不動の姿勢を取つたが、態度は際立つて變つた。見る限り雲翳一つ浮いて居ない拭つたやうな空である。風は輕く下して柔かに肌に當り、若葉はサラ／＼ともう葉摺の音を立てる、家門の欅にきほひ立つたやうに高調を張つて小鳥が囀つて居た。治六はふいと見上げた。茅葺の屋根は枝を壓して年を經て朽ちかけた處へ、二株三株、葉や莖の緑の色が生々とした雜草か生え茂つて居る。治六は更に眼を轉して四邊を見た。通へ出る路の兩側の畑は、以前と變らず日當を氣にして横畝に切られて、通への出口は屋根に烏が羽休めをして居る家に挾まれて、畑の一方は小杉の樹立に、一方は隣の家に限られてある。此處を小中飯の後に耕ち返した事もあつたがなど〻思ふと、表の物干場なり收納の物置場なりの掃庭の片隅に、白く咲き誇つた常夏の花がまた目につくのである。これは治六がお作の家から持つて來て植ゑたものであつた。

「阿父、屋根の葺換しなくちやならないな。」

「む〻大分古くなつたけんど、まだ一年や二年は耐へるだ。われが戾つて來

たら背後へ二間か二間半の建て增しするだから、其時一所に葺換する積だ。」

「葺換はどうでも、屋根に草の生えて居るのは醜ない刈つて置けば可いに。

何を思ふて居るのか權六は返辭もなく、治六はまた四邊を眺めて歩み移さない。四邊の光景はまた妙に治六が注意をひくのである。

「ちよッ、不作用の垣だな。」

と小聲に云つて、

「お作お前の處の常夏は咲くか。」

お作は只だ默頭いて見せた

家や垣や庭を眺め廻す治六が眼眸は、やがて涙に曇つて來て、阯と見合して思はずもほろりとしたが、紛らすやうに脇を向いて毅とした。通から此方を望む者がある。見送の連中が遺した斥候でゞもあらう。其れと見ると、

「阿母、行つて來るぜ。」

と云ひ捨てゝ、勢込んで歩き出した。

「治六や壯健で居てくれ。身體のう注意てな、輕卒してくれるなよ。」

繰返す言葉を背後に聞き流し、歩調正しく父やお作と母を殘した。通へ出れば其處の押立つた旗の下に、一群の見送の村人が其れと見るから一齋の拍手、

「大場君萬歲。」

小學校の敎員を筆頭に總勢二十餘人、一隊の人々は恐ろしい元氣で、田舍の見聞の底をたゝいた義和團の噂を、果もなく筒拔けの高聲にわめき散らす。笑ふもの、巫山戲るもの、お祭の騷と選ぶ處もない。

「諸君、昨夜は失敬しました。」

元氣の好い輕い調子で、治六は敬禮とゝもに、一足踏み出して微笑を投げる。

「昨夜はまた遲くまで御邪魔しました……、」

と頗る低いカラーに色の褪めたモーニングと云ふ扮裝の、四十格好、團子鼻の八字髯が寧ろ汚く見ゆる小學敎員が挨拶。續いて跡のは言葉丈は挨拶の辭で、態度は巫山戲て居るのだ。

「ちよツ、」

と舌打をして何と思つたか、權六は面白からぬ面持で此樣を見て居る。大場

上等兵萬歳と白金巾に書き流した旗の物々しさ、何時に似ぬ小學教員が丁寧な挨拶も治六が品位の高いのからと、お作は又何んとなく肩身の廣い心地がして思は穂に出て、わけもなく嬉しさうに見えた。

「君名譽ですな。」

と治六が肩を輕く打つて。其まゝ腕を任せて、撰抜されて此度の出征に與るなんて、軍人の本望ですな。しつかりやつてくれ給へ。」

と覗き込んでこう云つたのは、小學教員である。

「有難う、卑怯の眞似はしない積です。」

治六は此處へ來てから、動作が全く變つて言葉も熱はないが、雄々しく聞える。

「おい君、」

と紺綾スコッチの鳥打帽子を冠つて、白ッぽい二子の袷に、茶大名の紬の羽織を被つた、小作な色白の怜悧さうな男が近寄つて呼びかけた。幼友達の利雄と云ふ村役場の書記をして居る男で、

「やア、昨夜は失敬。君何うか充分に働いてくれたまへ。國家の爲めに身命

を抛つは君等の名譽だからな、何かまはんさ。後の事なんて、心配せずにやつてくれ給へ。國家の爲めには一身一家はどうでも可いさ。君が萬一の事があつたつて、親父さんは何んとも思ひやしないよ。君が選拔されたんで、村でも他村へ對して面目をあげたわけさ。實際君の功名は僕等までが名譽だよ。」

云ひ終ると唐突に、

「大場上等兵萬歳。」

と怒鳴つた。他の連中も直ちに和したので勇しい響きは治六をつゝんで空に滿溢れた。ぽつと逆上せて、治六が目は輝き眉は動き意氣自から昂つて、

「有難う、屹度卑怯の眞似はしません。名譽の爲めに死ぬのは吾々軍人の本望です。生きて戻らん覺悟はして居るですから、安心して、ださい。」

「えッ、」

とお作は、はッとして權六が顏を見上げた。

「其覺悟で居てくれ給へ。必ず後事を思つちや可かんよ。僕等が死んだつて犬死だが、君の一死は大いなる名譽を買へるわけだから。」

と云ひさま利雄は治六が手を握つた。

關係も薄く何の痛痒も感せぬ見送の人々は、只だ〳〵大勢熱に浮かされて、面白づくに騷ぎ廻るのではあるまいか。と先刻から此さまを見此言葉を聞いた權六が顏は、曇て來平かならぬ色は次第にあらはになつた。

「名譽つてはの、死なにやなんねえもんか、恁うして煽動てられて殺されるのか。」

と獨語くやうにまたお作に話しかけたやうでもあつたが、扨てこの群集に聞えるのを恐れてか、不安の色できよと〳〵と見廻した。日は眩いばかり照り渡つて居るが、灝氣は暗碧色に集めて薄つすりと空を煙らし、風を胎んで旗は旗竿を捲いてほぐれてばた〳〵する。

「大場君出掛けやうか。」

と利雄は治六を顧みて、

「おゝ旗持は先に立つた。サア出掛けるんだ、威勢よくやつてくれ。」

「おい來たサア出掛けやう。」

旗を眞先に晴々しく騷々しいうちに、寂しげな權六を交へて此處の一隊は隊伍を亂して武者押を始めた。

四五町が程は庭らしい空地やら、奇麗に畝を切つた畑やら、狹い小路に挾まれた茅葺の家居が連なつて居る。怪氣な荒物店の隣に、紺暖簾の白拔きの字も砂塵に汚れて、店には店番も居ない更に怪氣な呉服店、葦簀張の掛茶屋に駄菓子を併べたものが一つ、此三軒が道と接して居るばかり、あとは大抵前に收納の物干場をかねた掃庭を置いて、其端は皆一樣に夕顏棚が結はれてある。見ると不意に、治六は又思出して、月夜に冴えた其花の色に重く夜露のかゝつて、くつきり、白い一房を結ひ立の髮に飾つて踊る、お作が粧はまた見られやうか。自分も滑稽た姿に容を變へて、東雲の稍や明くなる頃まで、興に狂つた面白さが再び出來る事であらうか。屋根越しに家門の槻が高く見える。振向けば父とお作が顏色も勝れず、おど〳〵として運ぶ歩みが目につくのである。槻の下にはまだ母が家にも入らず立ち盡くして居るのであらう。と治六は思はずも歩みを鈍くした。

旗はづんぐ先へ行つて、人々も參々伍々、亂れた隊伍は同勢甚だ亂次である。小學敎員はぐんと先へ、治六は利雄と肩を併べて、最後に權六お作其父などの一群は、更に談話も冴えぬ。

「おい君、急がうぢやないか。」

「さうだ。阿父ア早く歩るかう。」

利雄が言葉に、治六も父を促がして先へ進む人數を追ふて急ぐ。進まぬ歩も仕方なしにと云ふさまで、權六が一組も歩調を早めた。

何時か村も出離れて道は大杵川の流と丘に繁茂つた山毛欅の梢を左右にした。流は行手の彼方が一曲りしたのであらう。其處から屏風を建てたやうに、斷崖が根を水に擣たし、榛奔の若葉を粧ひ、頓に流域を狹めたなり背後を遙かに流を壓す。向ふの岩に衝る波の音が、梢を下す風の呼きと穩かに響き、美しい波の綾は、此方の汀を洗つて流れ行く。大杵の水の薫も、治六は今の風物として見ることが出來ないのである。胸を衝いて出て來るものは過去の紀念で、誠に利雄と此處に遊んだことも一再でないのだ。

「君よく一所に來たぢやないか此處へ。」
「左樣だつてね。よく來たつけね……。」
「思ふと夢のやうだな。あの時は君達にかうして送られやうとは思ひもしなかつたが、これもまた夢になるだらう。もう二度と此處は見られまいから。」
迫つたやうな物言である。利雄は流石に返辭もなかつた。一隊はよく續いて先のやうに途切れず。無言のまゝに道を急ぐのである。權六が胸は懊惱の數を增したやうで、眼眸の異樣の光、寂しい顏色は名殘なく其れを語つて居た。山毛欅林が盡きて廣い〱畑となつた、道は爪先昇になつて畑につれて蜒る。彼方の岸に峙つた斷崖は俄かに窮つて、其處からは磧も廣く、水は日光を裏に宿して長閑に穩かに、流は靜である。畑の末は薄く靄が罩めて雲井に高く雲雀の聲、風にもまれた鄙歌が絕え〲に聞え、彼方に宮原停車場の信號器が見える。誰が云ふとなく、
「來た。來た。もう其處だ！」
權六が顏は嶮しいまでに變つたが、一隊は元氣をもり返して、廣い畑も長い川

沿の道もわけもなく過ぎて、横さまに停車場へ、プラットホームの一隅に二旒の旗を押立つた。

あぶなく間に合はなかつたのだ。汽笛は聞える、列車はもう其處へ來た。見送の人々は吾勝に治六を圍んで出征の名譽を稱揚するやら、勇氣を鼓吹するやら、治六も挨拶に殆んど吾を忘れるばかり、流石に人目をかねて、お作は打付けの心も言はれず、たゞ術なさゝうに治六を打目戍つて居る。このやうな場合に權六は人を擠し除けても治六と話すことを敢てし得なかつた。

「おい大場君しつかりやつてくれ給へ。君の名譽は坪川一村の名譽だから、後事は敢て…………。」

利雄が言葉の終らぬうちに列車はプラットホームへ入つて來た。野口は半身を出して帽を振つて居つた。

「大場ッ。」

「おう野口か。」

と云つたが、治六は振返つて凝と權六を見詰めて厭かぬ言葉を交したい風情

は見えるのであるが、僅かに二分の停車時間は、驛夫に急かれて、はや乘らねばならぬ。見送の人々が取籠めて言葉を盡くした心切も、治六には寧ろ有難迷惑の次第であつた。思ひは同じ權六は何故見送の人々が遠慮して、親子に少しも多く談話をさせぬことだらう。と今更に盛な見送の人達が怨めしい。

治六がドーアを開けるを機に、

「大場君萬歳。」

一隊は狂氣のやうだ。權六は雪崩を打つ人々のあとに、思はず押返されて眼ばかり動かして居たが、矢庭に近くに立つた人を手荒に擠しのけて窓近くへと進んだ。忽ち聲を上げて、

「治六や、身體のう注意てた、壯健で戻つてくれ。」

「おう阿父も壯健で居てくれ。お作、阿母を賴むぞ。死ぬも生きるも上官の命令次第だ。」

權六がまだ何をも云はぬうちに、列車はにべもなく進行を始める。

「大場君萬歳。」

とまた沸返る聲。汽車は帽子を振りつゝ半身を乘り出して居る治六が姿を容赦もなく匿してしまつた。

「死ぬも生るも上官の命令次第だ。」

とうつゝのやうに繰返した、權六は突如として、

「俺、何んで徴兵に徴るか解んねえ。」

と我を忘れて言つた。人々は一齊に權六を見詰めた。

（五）

都には號外の報知、田舍は其れから其れと語り傳へて、津々浦々の末まで、同盟軍の動靜は隈なく知れ渡る。

新綠の眺も過ぎて、治六を宮原の停車場まで送つた其日からがやて三ヶ月の日子を過した。葉越月に蚊遣の煙を立てる納凉の團欒に夏蕎麥の豐凶よりは例の同盟軍の動靜が絕えず話頭に上つて、敵愾心が齎らす軍人崇拜の熱は、嘗て廿七八年の其れとまでは行なかつたが、治六の從軍は坪川村の人々に少なからぬ一種の尊敬を權六に拂はせた。

二番草も一渡り引終つた農家の手隙に乘じて、尙武會の有志は幻燈器械を擔いで、郡內各村を說き廻はる。今夜は坪川小學校に其幻燈があると云ふので、郡役所から兵事課主任の郡書記が出張したと云ふ、目先の換つて珍らしいのに郡書記の御出張が人氣を牽いて五間十一間の階上殆んど立錐の餘地もない、時は早や九時半近く、此次の一映畫で閉會する報告があつた。扨て最後に

はどんなものが映づるであらうか。七時に始まつて二時半あまり、古今內外打ち交ぜての歷史繪で、而かも一々言葉を極めた、挑發的の說明であつた。權六は手織の單衣を着て、白の瀧縞の浴衣に黑メリンスの兵子帶を緩く結んだ利雄と併んで坐つて居つた。これを外に小學校の生徒やら、若い男女やら、年輩の年寄やら、犇と詰めかけて、少し聲高に話し合ふと、利雄は直ちに立ち上つて制止して居た。

中古なセルの二重ボタン、三揃の洋服に、ネクタイ付の縮のシャツ、貝細工のカフスボタンといふ扮裝の、卅二三の男が、脇にした杉の澁塗の卓に載つた洋杯を輕く握つて、半眼に閉ぢた目は天井を見詰めて立つて居る。純白の幔幕に、圓くぼうつと明るく、光がさしたかと見ると、見る〳〵沸く雲の其れのやうに、異樣の形があらはれて、次第に色を具へ形を具へ、またも山猛り川叫び劍躍り血飛ぶ修羅の巷の繪であつた。一同は思はずもがや〳〵とした。濛々たる砲煙四方を罩めた彼方に、一彪の人馬が四半指物まち〳〵に、雪崩を打つて敵軍を追ふかと見ると、此處には孫子の四句を書き流した旗のもとに、燃え立つ

ばかりの緋の法衣を鎧に投げ懸け、七曜二十八宿を象眼したる團扇を膝に、威風あたりを拂ふ一將が胡床に寄つた背後に、鬼とも組まん一隊の猛者が扣へた。前には哮吼耳を打つ激流さも物凄く、今しも月毛の駒に青貝研つたる鞍置いて、馬上烈しき騎馬武者が、其洶亂の波を亂して、膽太くも只一騎此處許さして斬込まんず光景、白布に頭を裹んで精悍の氣眉宇に溢れ、一刀眞向に振り冠り、殺氣畫面に充ちて人に迫る、二重ボタンは群集を見渡して、一口喉を濕した。

「この繪は皆さんがよく御存の筈だから、此繪については別段云はないで、此れを一つ前の元寇の繪と比較て見やうと思ふ。

謙信と信玄とは誠に高名なもので、川中島の合戰と云へば誰も知らんものもあるまいが、然し元寇の亂と比較ては當然比較物にならない、從つて戰は上手でも、信玄も謙信も先刻お話をした河野通有に比較れば、價値もなにもない人になつてしまふ。」

と云ひさしてまた水を飮んだ。熱心に聞き入つた權六が顏には瞭かに不審

の色があらはれて居る。二重ボタンは口を手巾で拭ひ、語を繼いで、

「信玄と云ひ謙信と云ひ、皆さんがよく御存で、河野通有と云ふと左樣まで御存のお方もないが、いくら信玄や謙信が名高くても、二人とも其やり方が大義にかなつて居ない。一人は私慾の爲めに、一人は僅かに一箇人に依まれたのしかない。謙信が俠氣だと云ふが、昔の博徒でも賴まれゝば生命がけで助勢をした。其處へ行くと河野通有は誠に見上げたもので、吾々國民たるものは信玄を忘れても謙信を忘れても、河野通有を忘れては相濟んのである。妻子を捨て家を捨て生命を捨てゝ蒙古の船中へ躍込んだも、只だ國家即ち日本國の爲めと云ふことより外に考へなかつたのである。彼の神風も畢竟此やうな國家を思ふ忠義の勇氣を感應ましましたので、一夜に蒙古十萬の兵を海底の藻屑と沈めたのも、つまり此忠義の凝つて彼の神風となつたのだ。國家の爲めに生命を捨てゝ戰つた河野通有は、決して信玄や謙信と一所にならない。元寇の役からやがて七百年、この末幾千年後も河野通有の名は消えないのみならず、那樣後の世にまで河野通有は日本國中一般の人からお禮を云はれる

のである。これは何からであるかと云へば、國家の爲めに生命を捨てゝ戰つたからで、即ち國民の義務を盡くしたからである。」

と言葉を留めて、群集を見渡したが、盡く靜肅に聞き入つて、僅かに灰吹をたゝく音がするだけであつた。權六は其中にも、殆んど身動きもせず一心に耳を傾けて居た。二重ボタンは一層聲を締めて、

「國民の義務を盡すと云つて、強ち戰爭するばかりが義務を盡くすのではないが、然し兵士として國家の難に趣くのは吾々擧つて御禮を申さなければならない。

今夜は此れで閉會と致します。其れでこの尙武會の趣旨は先刻御話しましたから別段云はんことゝ致しますが、郡長閣下もひどくこの尙武會には力を入れて居られるので、よく其趣旨を御話をしろと此度私を尙武會の有志諸君と一所に、廻らせることになされのたです。私は皆さんに奮つて尙武會に御入會なさるやうに強ひて御勸めする。聞く處によれば此村からも大場治六君が選拔されて、出征軍に加はつて居られるさうだが、當人の面目は申すまで

もなく、一村の名譽でもある。つまり治六君が此度戰爭に出られたのは、河野通有が元寇の役に戰つたのと、聊か變つたことはない。此點から云へば治六君……のみならず、此度從軍した兵士諸君は、信玄や謙信よりも世間に誇るに足るべき人と云はねばならない。」

一語も餘さじと耳を突出すやうにして聞いて居た權六が顏には、次第に意を得た色が見えて、幾度か無意識に點頭く態、郡書記はなほ語を繼いで、

「此の如く世間から重く用ゐられるも、別段偉い事をやるのではない。つまり日本國の臣民として、正當に盡さねばならぬのだが、左樣かと云つて、世間では其れに向つて碌々御禮もせんやうなことはしない。立派な御禮をするのだ。身體の強健な者が兵役につくのは、國民たるものゝ義務で、日本國に生れて居る間はどうしても其義務を盡さなければならないのだ、然るに心得違の者もあつて、まだ兵役につくのを厭ふものがあるが、此奴等は日本の國に生れても、日本國の人間と云ふことは出來ない、上は天皇陛下に對し奉り大不忠の臣であり、下は國民相互に對して對等の權利も持つことの出來ないものだ。」

はツとしたやうに、權六はこれを聞くと、急がはしく周圍を見廻して、何となく耻かしさうな素振で、口元ははげしい痙攣を起したやうに震へて居た。

「終りにもう一つ皆さんに御話しやうと思ふのは外でない、允聖允武に在ます 天皇陛下は、畏くも大御心を忠勇の兵士諸君に分ち賜ひて、若戰死したものがあれば一々其姓名を聞し召され、恐れ多くも、御自身御意匠遊ばされました振天府に、戰死者の寫眞を御備遊ばすと云ふ御話です。上御一人の御耳に數にも足らぬ吾々の姓名が達するのみか、寫眞さへ御手許に召さるゝと云ふ此名譽は兵士諸君でなければ得られないのである。此點ばかりでも、吾輩は治六君………のみならず、兵士諸君が羨望に耐へんのだ。この名譽も只だ國民の義務を盡しさへすれば、別段六づかしいこともなく得られるのだから、吾輩は此れから丁年にならうと云ふ小學校の生徒諸君に、進んでこの務を盡されんことを望んでやまない。甚だ長くお饒舌をしました。今回はこれで閉會致します。 終に臨んで謹んで、 天皇陛下の萬歲を祝し、本郡尙武會の萬歲と津川村從軍兵士大場治六君の萬歲を祝します。」

洋杯に殘つた餘瀝を飲干して、反身になつて郡書記が退ると、拍手一時に堂に滿ちて暫時鳴も止ない。權六はそれも忘れて、茫然として自失したやうであつたが、顏は逆上せて眼眸は輝いて、底に何處にか嬉しさうな、勝誇つた得意らしい色がほの見えて來た。

郡書記が見えなくなると、利雄も最早制止しないので、さながら堤を決したやうに、一時に總立ちになつた騷がしさ、先を爭つて降りて行く、階子の其處は芋を洗ふやうな混雜である。

「巧いもんでねえか、俺、祭文のう聞くよりか面白かつたゞよ。」

「さうだよ。流石は郡書記樣だ、違つたもんでねえか話も上手なら言ふ事も確りして居るだ。」

どこの混雜を避けて殘つた連中が、向ふの隅に話合つて居たが、やがてそれも一人立ち二人立ちして、居殘る人は數へるばかりになつた。權六も其中の一人であつたが、別段人と話合ふでもなく、何やら夢心地で、後れて一人戶外へ出た。

上弦の月は彼方の空に、はや落ちかゝつて、ほのかに橙黄の色をまして、背後に長く權六が影を投げた。空は星もまばらに、村はぼうつと薄靄に包まれて、靄を隔てた樹々や家居は、一樣に輪廓を薄墨にとられて居る。一組また一組、話聲は遠く人影は定には見えぬ。眞直に六七町田面を埋め立つた道を胸の思ひに足元も覺束なく、月に步んで權六は、怨むが如き虫の音も、月を宿した露の玉も、見やうでも聞かうでもなく不意に背後から背中をたゝかれるまで何も知らなかつた。驚いて振返つて、

「ヤア利雄さ、お前さ今戻らつしやるか。」

「むゝ一寸と、郡書記に話があつたんで…………、お前さんはまた遲いぢやないか。」

「俺か、俺ははア…………なによあの混雜が厭だから、あとから一人で來ましただよ、一所に參りましやうかい。」

「談話しながら行きましやうよ。風があつて可い晩ですね。」

げに田の面を渡る夜の風は、晝間の暑さを流し盡して、並んで行く二人が袂を

さも涼しげに吹抜いて行く。

「治六君から、音信がありましたかね。

「處がねえでがすよ。待つて居るだけんど。」

「戰時だから仕方もないが、然し御心配ですな。」

「左樣でがすよ。諦めちや居ますけんど、矢張心配は心配でがすよ」

「イヤ其内に音信もあるでしやう。御心配のこともありませんよ。間もなく大手柄をして歸つて來ますさア、盛に迎に出ましやう。」

「どうかはア、左樣云ふやうにしてえと思つて居るでがすが、どうなることでがすか。」

と云ひよどんで、

「あの今夜、郡書記樣が云はしつたことは、本當でがしやうかね」

「杉野が云つたことゝ云ふと、何んですか。」

「…………。」

「今夜の演說ですか、本當ですとも。杉野は郡役所の中でも出來る方だから、

面白いですよ。つまり徴兵に出ると云ふことは、自分で自分の財産と生命を保護するので、人の爲めにしてやるのぢやないですな。其れに今夜も杉野が話したやうに、生きて歸れば勳章、死ねば招魂社で日本國中の人に祭られる、姓名は　天皇陛下の御耳にとまると云ふのだから、治六君なんて名譽ですな。僕ア羨しいやうな心持がしますよ。」

「御勿體もねえ話でがすな。」

「どんな偉い人でも、國家の爲めに働かなければ駄目ですな。國家の爲めと云ふことを忘れゝば、早い話が第一に祖先に濟ない譯ですからな　杉野も話した通、俺は日本人だと云つたつて、人が相手にしない。其れを治六君は立派に國家の爲めに働いたのだから、何處へ出たつて押しも押されもしない。」

「左樣でがすかなア。」

談話のうちに田面に渡した道を通過ぎて村へ入つた。學校へ集つた彼の人達は何處へ行つたのか、此處は話聲さへ聞えぬ靜かな夜、打煙る蚊遣火、窓に當つてほの紅い火影は、流石にまだ人の起きて居るからであらう。夕顏の花は

しほらしく吾物顔に夜を占めて居た。
只ある小路の前に立つて權六は、
「利雄さ、寄つて行かつしやらねえか。まだ御談話のう聞きてえだ。今朝貰つた鯇がある。何もあるめえが、それに有合せもので、一杯やつて行かつしやらねえか、飮みながら色々御談話のうしてえだが。」
「これは有難う。しかしあまり遲くなりましたから……其れに是非今夜過なくちやならん人がありますから。何れまた其中に――。」
「然うでがすか、用事がありや仕方もねえでがすが、まあ可いでねえかね。飮んで行かせえよ。」
「イヤ折角だが今夜はね――。」
「ハヽ、仕方がねえ、負けて上げますかい、若え人達の邪魔するでもねえ。那樣なら御寢なせえよ。此次にや寄つてくらつせえ。」
「ハア有難う。いづれ其中に――左樣なら。」
權六は其處に立ち停つて、利雄は步を續けた。一步々々相離れて、利雄が姿は

濃い影のやうになつて、靄に遮ぎられてやがて見えずなつた。
物干場を前にした障子をあけて、蚊遣火の其處に蚊を攻めて、茶を飮みながら妻は戸外を眺めて居たが、入つて來る權六を見て、
「戻らしつたか。」
「おう今戻つたゞ。」
と其處から上つて、前の蚊遣火から一吹吸ひつけて顏を上げると、
「俺がお燈明上げたゝ、お前さ早く拜ませえよ。」
神棚には燈明が煌々として居る。治六が從軍の其日から息災延命を祈つて、毎夜神棚に御燈を捧げるのである。今日は日暮前に小學校へ行つたので、妻が代つて御燈を捧げたのであつた。權六は立ち上つて、神棚に向つて拍手再拜祈念をこらして坐についた。妻は茶を薦めて、
「一人で戻らしつたかね。」
「なアにな、利雄さと其處まで來たゞよ。」
「左樣かね。利雄さはまた、寄つて茶でも飮んで行かつしやれば可いに。」

「其れがな、俺も然う云つたゞよ、云つたゞけんど待つてる人があるつてな、阿魔子でも待て居るのだらう、急いで行つたよ。」

「ホヽ、本當かね。まあ………おゝ今日の話は面白かつたかね。」

「おう面白かつたゞ。話の大體がかうだ。國の爲めに盡さねえ奴は、日本人でねえつてなア、國の爲めに戰ふことになると、謙信公よりも、信玄公よりも偉え人になれるんだつてなア。」

（六八）

「………何んともお氣の毒の次第で…………」、と何時に似ぬ元氣で、言葉の末を濁した利雄は、火鉢を向前に權六と對座つて、奇麗にわけた髮を、右手で掻きながら相手の樣子を氣の毒さうに打目戍つて居る。秋風が何時ともなく立つて、利雄が扮裝は二子の袷に同じ縞の羽織と再び更つて居つた。

「恁う云ふことになるのは、覺悟のうして居ましたゞが…………」、と言葉を途切らして、權六はさも苦しげな吐息をして、また無理に押し出したやうに、

「それははア、國の爲めに死んだゝから治六は本望でがしやうけんど、跡に殘つたものは…………。」

支へて聲も出て來ず、

「これも國の爲めに、子息一人御上納にあげたと思へば諦めもつくのでがす

が…………。」
と言ふ事がすべて調はぬ。
「まあ、左様思つて戴かなければなりませんで、どう思つても兵役に就いて居る上は仕方もないことですし、また強健な身體に生れて來れば、申すまでもない兵役につくのが國民の義務ですから、これは避けるわけにはまゐりませず。と云ふものゝ、場所と云ひ時と云ひ、あんまり不慮のことでなほさら御察申します。」
「ハイ、有難うござります。まあ其樣思つて諦めちや居ますだよ。御規則と世間の義理にや、負けなきやなんねえ浮世でござえまさ。國の爲にや身を粉に碎いても盡さにや、日本人ぢやねえちうこんだから、俺も其れ聞いてから、然う思つちや居ますだよ。」
「實際ですな。つまり生れてくれば、どうしても其國の爲めに盡さなくちやならないんですな。其れに徴兵と云ふことは、武士と云ふ商賣がなくなつた其換ですな。ですから徴兵に出られた人達は、昔の武士と同じに戰はねばな

らず、また其丈の名譽はあるつてわけですな。」

「左樣でがすよ。其りやもう俺もよく知つてますだよ。治六なんども行き處は、まあ信玄公や謙信公より好んべえと思つて、少しはまぎれるでがすが…………。」

「さう國家の爲めに盡すと云ふ點から見れば、謙信や信玄より偉いですとも。」

「國の爲めとあれば、何んでも厭だとは云へませんわ。厭だと思つちや日本人でねえ。厭と思ふのを、思はねえやうにしなくちやなんねえだ。其れに俺、勿體ねえこと聞いてから有難くて、どんな事でも厭だと思つちや、濟ねえこんだと思ひましたゞよ。治六が死んだのも…………」

權六は言ふ事があつて、終に云ひ切れなかつた。

尚武會の幻燈の說明を聞いてから、村中の敵愾心軍人崇拜の熱は一層亢進して、國家の爲めに出征した治六を勞はる好意が、權六へ迴つて、權六を見ると觸ると、治六が噂。其次は國家への義務、國家の犧牲にならねば非國民であると云ふことを繰返し繰返すのである。其義務の爲めに治六は討死した。而か

も花々しい死方で、中隊長の命を受けて、前哨の小隊へ傳令に行く途中、敵兵に圍まれて奮鬪したが衆寡敵せず、同僚三人と枕を併べて斬死したと云ふ。其報知が其筋の手から今朝届いたので、取敢ず利雄が見舞に來たのである。
幾度か水を潜つた藍微塵の素袷に、野良着の紺木綿の帶を亂次なくぐる／＼捲にして、腕組のまゝ火鉢を見詰めて居る權六の色は蒼白で、眼眥は屹として而かも平素に似ず鋭く見える。庭を越えて畑を控へた例の十疊に、今日は障子を締め切つて、眞中に据ゑた火鉢に利雄と對坐つて居るのである。
談話が途絶えると、悄然力なさゝうに二人とも言葉はなくて、利雄が吹かす煙草の濁つた煙が徒らに消えまよふ。治六を送る折柄の天照皇大神宮、春日大明神、八幡大菩薩と、三行にかき併べた一軸は其まゝ改められず、前の天神机に燈明の土器が一基、一對の神酒德利が載せられて、其神酒さへ代へて間もないのであらう。德利にさした松の若枝が生々して居るのも、今更ながら刺すやうに、利雄が目を迎へる。あゝ權六夫婦はどれ程、治六が身の上を案じ詫びて居るのであらう。

「子供の時からの友達だけになほさらですが……　……昔話をして宮原へ送つて行つた時は、恁うならうとは夢にも思ひませんでした。」

「お前さまは子供の時から、いけえことお世話になつたでがすが。」

「お世話處か、僕こそ萬事世話になつた友達一人殺しましたよ。」

「ハイ俺も、唯た一人の子息を殺して了ひましたゞ。」

二人はまた默つて了つた。思傚ばかりでない、權六が頬の殺けたのが際立つて、一體の動作が痛々しいまでも、落膽と悲哀とに充されて居る。長く正視することが出來ず、利雄は眼を逸らした。

氣が付かなかつたが、何時の間にか空模樣が怪しくなつて、墨を抹つたやうな雲翳が走り去りまた走り來り、濕氣を含んだ風さへ吹き起つて、今にも雨になりさうな有樣になつて來た。利雄は只見て急に身支度して、

「何れまた伺うことにして、此れで御暇いたします。あんまり思ひ過ぎして身體にさはるやうなことがあつちや何んですから御注意なすつて、また用事がありましたら、何時でも御手傳にまゐりますから遠慮なく云つてくださる

やうに。」

「ハイ有難うございます。何れを何うして可いですか、譯が解んねえでがすから、何れ御相談のう願ひに出るでがす。何分御依み申しますよ。」

「では、いづれ又、」

と挨拶もそこ〳〵に利雄は坐敷を出ると、茶の間には目を泣き腫した主婦が居るのである。

「治六君がまた思ひもよらん、とんだことになりまして、…………御察し申します。」

と丁寧に挨拶をして、下に降立つた。權六が送つて出たので妻は屈折れながらも、其儘立つて上框に送つた。

利雄を送つて權六はまたもとの座敷へ、襖を手荒に締め切つて入つて了つた。妻は茶の間の圍爐裡の脇に、茫然自失の態で坐つて居る。雨は果して降つて來て、風は次第に吹き募り、横さまにばら〳〵と障子に打ちつけた。日も暮れて、風は更に烈しく雨はさながら盆を覆すばかりに降りしきる。家内は寂然

として、妻は坐つたなり晩餉の仕度も全で忘れて居た。權六は末を吐息に消しては、あはれな音聲で呟いて居るかと思ふと、忽ちにして激越した聲音を漏らして居る。戸外は嵐が暴れまさるばかり。

「阿母！、俺どうするだア。」

表から飛び込むやうにして入つて、投げるが如く主婦が膝に泣き伏したものがある。嵐を犯し横なぐりの雨を犯した、づぶ濡の裾も袂も雫が滴れて、雨脚のまくしかけて傘をうつた名殘は、髪さへ淺猿しく濡れ亂れて、鬢はくしやくしやに下に垂れ下つた毛の、蛇のやうにからまつて雫は其れを傳うて襟を濡らす。

「おうお作、治六は死んでしまつたゞよ。」

いきなり引き寄せて確り膝に抱へた。お作は折重なつて泣き返すばかりであつた。

お作は治六が討死の報知を得ると其まゝ、驀地に此處へ駈込んで來たのである。嵐の光景も目には入らず、何も忘れて一散に來たのだ。此處へ來てどう

しやう成算もない。戰死と聞くと直ちに此處が思ひ出されたので、只だ驅け出したのであつた。

「阿母！俺どうするだア！」

「おうお作、治六は死んでしまつたゞ。」

「阿兄は何故死んだゞよ。」

「仕方がねえだよ。諦めるより、戰爭に行つたゞから。」

「諦めろつて阿母！諦められるかよ。俺どうでも諦められねえだ。」

「おう無理はねえだ。無理はねえだけれど、これも因縁ごつた………。」

「何の因果で徵兵にとられたゞ。徵兵にさえとられねえけりや、這麼事にならねえでねえか。」

「これ那樣事云ふでねえぞ。俺も切ねえ。切ねえけんど、徵兵に取られたり戰爭で死んだりするのが、男の義務だちうだから、切ねえけんど、我慢して諦めてるだ。其れに戰爭に行けば勳章ちう物が貰えるとよ。」

「阿母、死んで勳章貰つたからつて、其れが何になるぞ。俺勳章なんて用はね

え。阿兄から生きて居て貰ひてえだ。」
「其樣だよ其樣だよ。其樣だけんどなア…………。」
「阿母、其れちやお前さ、子を殺さしても可いのか、男の義務ちうもんはどんな大事なもんだか知らねえけんど、そ、其れちや、其れちやあんまりだ…………。」
「なんで俺が其樣思はふだよ。人に何と云はれたつて、俺矢張！俺！治六を活してえだ。」
「阿母、俺、阿兄がなんで徵兵にとられたかと思ふと、口惜くて〳〵仕樣がねえだ。」
「本當によ。子を殺して人にちやほやされたからつて、何んで心持がよからう。俺切ねえばつかりだ！」
「阿母。」
「お作。」
とばかり涕に咽んで聲も得出さず咽噎く。二人が此態を權六は襖越に聞いて居た。雨に亂れた銀杏返に髷を顫はして、濡れしよぼたれた袷が肌につく

氣味惡さも覺えず、顏を蔽ひ匿して其處に屈折れたお作がすゝり泣きの姿、其れを凝視るでもなく茫然此態に目を移して、涕は眼瞼に漲つて血の氣の失せて黝く變つた唇を嚙み締め、瞬く度に其涕は蒼白た頰を傳つて溢れても、其れを拭はふとせず、つくね髮のほつれは俯向く顏に亂れて、一際悲しさうな妻が態はあり〳〵眼前にちらついて、耐へ得ぬ權六が切なる胸を亂してまた刺すのである。空に鳴る風雨の聲は愈〻勢をまして、瀧をあざむくばかりの軒の溢れにもまして權六が耳に響くのは迫つたお作が泣き聲と、妻が泣かじと喰しばる切齒の音とである。お作はもう言葉もかはし得ず只泣き入つて居た。

おゝお作めが泣くのも無理はねえだ。從兄妹同士で二人で情事をして居ると村の衆の云ふなり、俺にも其れと讀めるで、治六が歸つたらばと云つたときの二人が樣子、お作めの羞かしがつて、紅い顏を袖で匿くして逃げ出した嬉氣な素振も昨日のこと、何の今日這麼事にならうと思はふ。此れから先きの一生は樂も苦勞も、治六次第と娘氣の身を抛出したしほらしい胸の中では、種々なことを推量して嬉しがつて居たに違えねえ。其れが其治六が死んでしま

つた。大事の大事の其男は居なくなつたのだ。若い娘の心はまあどうであらう。其ればつかりでねえ。娘と云つてももう廿才、これからの計畫も考いないこともねえ。無理はねえだが、左樣思ふわれよりも俺等は………俺等が思は何の位だらう、天にも地にも唯た一人の子でねえか。嬉しいも悲しいも治六が目標でなかつたことはねえだ。治六が生れてから廿三年の長い月日は、皆治六が爲めに勵みもし骨を折りもしたのだ。あゝこれから先に何の樂があらう。と先きを儚む際から、直ぐに現在の悲みが心を奪ふて、其れを儚む餘裕さへなくしてしまふ。譯もなく滅入込む樣な心持がして、何が悲しいのか、其對象は心から消えて、只だ悲しいと思ふ外に、治六が死んだことすら忘れて居るのである。家内は燈火も未點ず全く暗に閉されて、戸外ははげしく注ぐ雨脚、庇を拂ふ風の聲、襖を隔てゝ二人が嘘唏の音が際立つて權六が胸を打つ。妻も既や耐へきれずに泣音を漏らすのであつた。何んで左樣泣くだ、何うで死なにやなんねえ生命でねえか。早えと遲いだけのことだ、治六は立派な死方したのだぞ。泣く事ねえ。泣いたつて治六が戻るかつ。と云つたら

些少は二人に力が付くだらうが、俺にや其叱言は出ねえ。泣いて思つたつて死んだ治六は戻りもしめえ、戻りもしめえけんど、思はずにや居られねえ。お元（妻の名）が耐え切れずに泣くのも無理はねえだ。其れでもわれや可く耐えた、よくお作に言ひ聞かした、治六は男の大事の義務をして死んだのだぞ。立派な死方なんだ、壽命事でねえ死方したつて何んでもねえが、俺にや泣くなつと云ふ叱言は云へねえ。どうも其叱言は言はれねえだ。今度の戰爭に死んだ人も治六一人ぢやねえ。治六一人御上納に上つたわけぢやねえ、何百何千の人も治六と同じやうに壽命事でねえ死方をしたのだらう。其れに日本の國に生れて來れば、其國の御恩はどうしても返さなきや人間でねえだ。兵隊になつて戰爭に行けば御恩返は出來る。治六はもう御恩返しが出來たのだ。何處へ出しても押しも押されもしねえ偉え人になつたつだ。と云つて、唯だ一人の子息を殺してまで國へ御恩返をしなくちやなんねえだか。國へは御恩返しが出來ても、後に殘つたものはどうしやう、もうこれ五十四、此れから先は治六を便りの二人と治六の歸國を今日明日と待つて身を定めるお作はど

うすれば可いだ。國の爲めとあれば人はどうでも可いだか。切ねえことでねえか國家の爲めちう事は、と思ふ下から甞て郡書記から聞いた振天府の事が思ひ起される。御勿體もねえことだ、治六が名前が天子樣の御耳に入るちうのは、あゝお有難え。郡書記樣の前へでも滅多に出られねえ、俺のやうなものゝ子の名が、天子樣の御耳に入るとは、これも兵隊になつたお蔭からだ、戰爭に死んだお蔭からだ、這麼御勿體ねえことに遇つて居て、何んで不足が言はれやう。後の者は何うしたら可いだか解らねえだけんど、治六は可い死方をしたのだと。權六はあまりの有難さに强ひてこの悲みを忘れやうとする。悲んでは誠に濟まないやうに思はれるので、言知らぬ衝突が心中に起つて、

「這麼御勿體ねえことして貰つて、切ねえと思つちや申譯がねえことだけんど。」

と吾知らず口走つた。此れを聞きつけたお作は、ついと身を起して襖をひきあけさま權六が膝にしがみついて、

「阿父！阿兄死んでしまつたゞ。何故阿兄は戰爭に行つたゞよ。」

「おゝ、お作。」

と權六は迎へ取るやうにして、お作が背中へ手をかけて其背を撫でたが、扨てどう返事をしやう。何んと云つて慰めてやらうか、それも知らぬ。

嵐は愈ゝ勢を增すばかり、空鳴り地叫び、屋根をめくり垣を倒し、縱横無盡に物凄じく暴れ廻る。屋根を破られてか上に登つて居るらしい人の叫びが、暴風に揉まれて凄慘のさまを加へ、消えては聞ゆる絕間を、又もどッと吼えかへす風は、門に突立つ槻をひつ包み、無慚に大枝をひつちぎつて庇の片端をはね飛ばし、强く壁板を打つて恐ろしい響を立てゝ地に墮した。

「アレまあ。」

とお作は思はず振返つた。權六は始めて暴風雨に氣がついたやうに、さながら熱を患つた人の眼眸で、暴れに暴れまさる外をぢッと見たが物とも思はず、雨も風も次第に餘所のものになつて、何時の間にかまた治六の昔に返つた。紺の筒袖の野良着に同じ半股引、照る日にぼつと逆上せて、向ふ鉢卷の元氣よく、鍬を振る治六が耕耘の光景が、前に幻像のやうにちらつくと、歌にそゞろ心

の白地の單衣に晒の手拭、脊戸に頰冠りの其姿が映つて來る。記憶と想像が生む過ぎた昔が、眼を追うて走馬燈のやうに變つて行つたが、忽ち、限もなく廣い平原の彼方に白楊の木立が風に靡いて、此處には身丈に餘る葦茅が繁茂つて、がさ〳〵風に鳴つて居る。見ると其片蔭に、ひそ〳〵私語めく聲がする。恐ろしく窶れて日にやけた顏は、塵にまみれ汗に亂れて、軍服は裂け靴は破れた、あはれなさまの日本兵が三人、着劍した銃を取つて、四邊に目をくばつて、跫音を盜んで來た。すると矢庭にばら〳〵と三、四百人の淸兵、あはやと見る間に犇々と取圍まれた。三人は左突右衝、奮鬪の勇しさ。二人は直ちに淸兵の毒刄にかゝつて、殘るは一人銃槍中段に取つて屹と身構へた。と見ると誰あらうそれは治六であつた。胯を一箇所、洋袴の上から手拭で結へて居たが、先刻からの奮鬪にはや片呼吸の血走る眼を怒らし、白眼む目元に血潮は迸る。はつと思ふた其時はもう淸兵が獸のやうな叫を發しておめき掛つたのである。

「うぬ糞ツ」、「殘念」、見る〳〵亂刀の下に血烟立つて倒れた軀。寄つてたか

つて清兵共の目を剜り鼻を削ぐ無慚の光景、

「南無阿彌陀佛、々々々々々々、」

あゝッと思ふと權六は又元に返つた。

「阿父、阿兄何故死んだや。」

途端にお作の聲は夢のやうに聞えた。

「お作泣くな。國の爲めだ。」

と搾り出したやうに言つて、的もなく見詰めた眼眸は暗にも怪しく光るばかり、折しも又どつと吹付けた暴風は、横手なぐりに障子を蹴破つて、礫の如くに雨を投込んで處嫌はず權六が顏から肩からお作が背中へ注ぎかけた。戸外はあやめも分かぬ暗黒のうちに、轟く風の音と折々聞ゆる悲鳴の聲とに充ち充ちて又も物騷しい一しきり權六は眼を据ゑて稍暫く身動きもせずに居たが、又も荒狂つて吹込む風雨の、それと同時にすつくと立上つて、

「く、國の爲めだッ。」

と一聲あッと叫ぶが如き音を殘したが、面も觸らず、いきなり暴風雨の戸外へ躍

出した。

（七）

暴風雨に乘つて家出した權六は、其後卅七日を過ぎて飄然と歸つて來た。權六が家出の當時、行衛が知れぬと聞いた時は一方ならぬ騷動であつた。村中總出で手配をして、法螺貝を吹き立つて、山と云ふ山、谷と云ふ谷、大杵川の水底まで、あらゆる手を盡くして搜索したが、更に手掛りが付かぬ。隣村の巫女で、五十年來此土地の迷信を支配した老婆が、怪しい神下しの末に西南に當つた大山の天狗樣がお召しなされたのだと云つたので、其れでは治六が死んだ悲みに一寸としたすきが心に出た、其れに魅つて魔がさして、天狗樣に攫れたのだと評判が立つた。殊に權六が家の混雜は誠に目も當られぬ樣で、子息は死んだ、時を移さず主人が神匿に遇つたと云ふ、其れで萬事が推されるであらう。治六が從軍から、村中の同情を得て居つたのだから、恁うなるとまた更に村中の愍みを買つて、治六が葬式も、兎もあれ一同出來るだけ手を貸して立派に濟し、跡は何れ緩くり相談と云ふことにして、お作は母と二人淋しく家を守つて

居つた。

秋もやう／＼深くなつて來て、追かけ端綱の馬鈴の音と、小枝を鞭に馬を追ふ三階節が、其處に此處に追ひつ迎へつ、四邊に忙しさう。笠の影が動いて、刈稻をかけた木立は、結び連ねた柵のやうに見える。一人は向ふ鉢巻、一人は息杖、平素野良には縁遠い孫と老爺が、生稻一束に汗を流す一頃。早穂の刈入は旣や濟んで、中手も半、これからが晩穂を刈入れるので、ひとり坪川の村とは云はず。手足のきくものは家に居るのは數へられる程、他人を雇はふにも此中で來てくれるものでもないので、この秋仕末も權六が家では何うしやう手段も出ない。殊勝にもお作が一人、其中に手傳つてくれるであらうと、村の人達を心頼みに、身體を匿すばかりの稻の中で、利鎌を振つて刈つて結へて畦へ抛る、其手に暫時の休みもなかつた。處が一日、結へるはずみか抛るはずみか、不圖したひやうしに一穂の稻で眼を拂つた、たいしたことはなかつたが、痛みの爲めに野良を休んで、今日の天氣を見過しに、毛繻子の襟のかゝつた、どんつく布子に、小倉まがひの手織の重い帯をひつかけに、井の字飛白の垢の見えた前垂を締

めて、詫びしげな顔で端近に居た。

寂しさうな遠山は雲を離れて、高く澄み切つた空は蕭殺な色を籠めて、索々しい小春間近の日光は、浮いた内にも沈着があつて、長閑に温な裡に、凋殘の薄い光を隠したさまは、老人の若返つた色とも見える。其日光に長く影を曳いて、ふら／＼と家の前に來た人があつた。はげしく窶れて、蒼白た顔に延びた髪は蓬の如く亂れかゝつて、眼は落込んで鋭い光を放つて骨立つた手は垢に埋つて皮膚も見えず、着て居る衣服も裾はちぎれ袖は綻びて、肩のあたりに僅かに申譯の形を存したばかり、物狂しい乞食のやうな姿で、去りもやらず、其儘お作を見詰めて立つて居る、薄氣味惡くお作は其視線を避けるやうにして見返つたが、矢庭に、

「ヤア阿父！阿父でねえかね。阿母、阿父が戻つたゞよ。」

と跣足のまゝに驅け出して、

「阿父！今までまあ何處へ行つて居たゞ。」

「サアまあ、早く入らつしやらねえか。」

手をひくやうにして入ると、背後で聲を聞いたお元も驅け込みさま、

「まあ阿爺！」

二人等しく返辭もない權六を見上げた。顏も手足も荊棘に刺された傷だらけで、如何に道もない榛莽の下を無理に通つたかゞ解る。

「お前さまあどうさつしたゞ。」

言葉せはしく二人は左右から問掛けたが、權六は更に何の返辭もせぬ。洗足やら衣服の着更へやら、一切二人がなすがまゝに全で氣拔がして、突如横に倒れたかと見ると、もう熟睡して正體もなかつた。權六が歸つたことを聞いて村の人達は、忙しい中にも後から〳〵やつて來たが、いづれもこの態を見て、覺めての後と長くも話さす歸つて行つた。うまる其儘に三日の間、鼾の外は死人と異もなかつたが、四日目の朝になつて始めて覺めて起上つた。其儘異狀もなく二人と朝飯を喫べて、何からどう話をしやうかと、權六が質問を待つて居た二人に失望さして差當り一大事の秋仕末のことも聞かず、治六が葬式のことも、自分が不在中の樣子などは、一言も聞かなかつた。

權六が歸宅は二人にどの位の歡喜を與へたらう。然し權六にはもとの權六の俤は見ることが出來なかつた。朝に夕に二度天に向つた中臣の祓と、一種の叫、怪しげの咒文を唱へて、家事には全く關係しない。只だ凝と考ひ込んで居るばかりであつた。今まで何處へ行つて居つたのかと問へども答へず、隣村の巫女の話を云つて聞かしても一笑に附して何とも言はなかつた。折々左の掌を撫でゝは妙に豫言めいたことを云ふ。其れが不思議に當るので誰が云ふとなく、權六は神に近づいて教を受けて直ちに其旨を傳へるのだから、卜占祈禱共に凡人の及び難きものだと噂が立つて、占を乞ふもの、祈禱を依むものが、ぼつ／＼出來て來た。權六はまた喜んで其れに應ずる。占は左の掌を撫でること、祈禱は中臣の祓と普門品の偈、——これはこの土地の者大抵知らない者はない、鎭守の廣前には中臣の祓帝釋天を祭つる庚申講には、打ち寄りて般若心經と普門品の喝を讀誦するのだ。——其れと權六が獨合點の例の咒文を繰返し繰返し唱へるのである。外に儀式も何もない。其れがまた不思議に功驗があると云つて、權六の名は遐邇各村に響いて、坪川村に一名物

男が増した。權六が顔は何時となく縮つて來て、額に深い皺が出來て、眼はまた凄いばかりに鋭く輝いて、人が來れば罪もないことを話して、何時までも引き留めるが、出掛けて話することはなく、家政は妻に預け放しにして、妙に考へにのみ沈んで居る。お作を養女にして來年婿を迎へやう其相談も些少も心にかけぬやうであつた。權六が戴く神樣は何神であらうと云ふ疑問が起つて、色々臆測の末權六に聞くと、淺間大明神でも首肯くし、稻荷樣でも石尊でも、人が問ふがまゝの神樣である。其れで村では淺間大明神にしてしまつた。木枯が立つて、來て早くも冬構への日となつた。權六は隣の同じやうな百姓家で、二番娘のお末を前に据ゑて祈禱を始めやうとして居る。久しい間のぶらぶら病氣で、醫者の藥もはか〴〵しい効能がないので、祈禱を權六に依んだのであつた。衰へて勝れぬ色のお末は首垂れて前に畏まつて居る。怪しげな白の行衣を着けた權六は、病人を白眼んで何も持たず、口を閉ぢて眼を瞬る。病人の背後には家内のものが揃つて、これも殊勝な面色で言葉もかはさず、家を廻つた梢に、木枯のみが音を立てゝ居た。

權六は物々しく三度拍手して、やがて中臣の祓を始めた。神官のやるやうな節はないが、鬱結した音調は自から莊嚴な響を漏らして、居並ぶ人々は何んとも云へぬ、一種の力に打たれたやうであつた。やがて聲を落して、なだらかな調子で、すら〳〵と讀み行く普門品の偈が終ると、顏色颯と變じて、行衣の袖をうち返し〳〵顏は熱し眼は輝き額に汗を流し口に焔を吐んばかりの態度に、幾度か繰返す咒文は室内を震蕩して、お末は有難さと恐怖さとに其處へ突伏した。其背を撫でゝ小聲に何にか唱へて、恭しく拍手して祈禱は了つた。

お末が挨拶して退ると、茶が出る駄菓子ながら茶受が出る。談話に興が乘つて來ると、

「つかねことを聞くやうだがね、」

と云ひかけたのは此家の主人なので、紺木綿の筒袖の綿入を着た、五十ばかりの小造な方である。

「はア何だね。」

と權六は微笑した。

「何つて別でもねえだ、俺何時つから、聞いて見やう見やうと思つちや居たゞが、何うも變だもんだからな、其れにお前さも云はねえつてこんだから、扣えちや居たゞが、お前さいつか長え事家を明けて何處へ行つて居たゞよ。」

「はァて何時な。」

「アレ其樣しらばくれちやおへねえだよ、…………其れぢやお前さ何神樣から法事習はしたゞ。」

「何だと思つたらあの晩のことかね。俺些少も解らねえだよ。何處をどう歩いたか、全で覺えて居ねえだ。」

「其れぢや法事は。」

「法事ッてはァ別にねえだよ。一心に神樣のう念じるだ。其樣して左の掌を撫でゝ見れば、大抵のことは其處に出て居るだよ。祈禱だつて其通で、一念さえ通りや何に叶はねえことねえだ。」

「然う匿さねえでも可いでねえか、其れぢや何神樣のう念じなさるだ。」

「何神樣ッて事もねえだ。たゞ神樣だ。」

「はてお前さのやうに、さう匿くしちや全くおへねえだ。俺とお前さの中でねえか。教さつせえよ。」

「なに別に匿しもしねえだよ。何れ今に教るだよ。其れまちやまあ聞かしやるな俺も教ねえだ。もう此話はやめにしやう。」

このやうな質問には何時も／＼過つたが、何時も要領を得るやうなことはなかつた。然し權六が考に沈む事は、一日が一日とはげしく脇目にも痛々しいまでに獨悶えて居る事もあつたが、或日の事、肌を刺す朔風も氣にとめず、冬枯のわびしい景氣の中をさまよふて長い間獨言を云ふかと見ると急がしく家に歸つて、ついぞ取らぬ筆をとつて一心に何か記す樣子が、餘程平常と變つて居つたが、恁うなつてから五日目にふいと出てしまつて二日過ぎても三日過ぎても歸つて來なかつた。また權六が姿を匿した、と村中總出で搜索すと、どうした事であらう、大杵川の崖から墜ちたのか半身水に浸つて死んで居つた。檢視の時に、何にか懷に持つて居るものがあつたので、見ると其れは半紙を百枚ばかり綴たもので、中には權六以外に解することの出來ぬ、奇怪な文字が記

されて、今に坪川村では、それは權六が神樣から習つた神書の一卷だと云つて居る。

行衛

（一）

路の柳をすれ／＼にひらりはらりと蝙蝠の身をひらめかす夕暮時、向の小間物屋の店には既燈火が見えて、お世辭で名代の薄脣眉を剃落した跡の青々とした、薄皮出の惜しい縹緻の内儀が、夜の支度の手廻しのいゝのを得意顔に坐つて奥には蝶々髷の女の兒が、いつもの清元を甲高に浚出した。表の松の湯といふ日の出に其枝を染出して、斜に大きく其字を見せた暖簾を押分けて建具屋の源太郎は湯上りの門を好い心持既ほんのりとした薄月に未だ濡色の額を照らして素袷の裾を開いて其儘我家の方へ足を向けると、

「おい、源待ちねえ。其處まで一處に行かう。」

續いて跡から出て來た、井戸堀の龜吉といふ齒の白い剽輕な眼付の男頭で暖簾を掻分けて衝と傍へ來た。

「龜か。お前何時の間に上つたんだ。」
「お前が番臺と談話をしてる間によ。」
「然うか。些少も知らなかつた。」
と歩連れると、源太は右へ手拭を持ちかへて、前を見たまゝ、
「何うでえ、好い時候になつて來たぢやねえか。俺ア年中で此時分が一番好きだ。」
相手は笑つて、
「むゝ、お前は好いだらうが、俺のやうな土左衛門出來の身體にやア、そろ〳〵是からが御難の時節だ。」
「違へねえ。だが些少ばかり薄ら寒くなつて來ると、此方は又一句もなしさ。お前なんざア、着物の一二枚は確かに違はうッてもんだ。」
「其奴がよ、よくしたもんで寒いなア矢張人並に寒いや。何にもなりやしねえやな。好きだッて言へばお前は又、此時候に打つて付けだな。」
「何がよ。」

「お前此頃にいゝ嬶が來るツて言ふぢやアねえか。」
「えツ誰に聞いた。」
「誰でも知つてらア。知らねえのはお前ばかりだ。はゝゝ冗談ぢやアねえぜ。」
源太は少し狼狽へたが、直に笑つて、
「はゝゝ、なにも別に隠す事でもねえ。好いも惡いも有りやアしねえ、一人厄介物が殖えるんだ。なに俺ア未だ貰はうツて氣もねえんだが、ついお袋が喧ましく言ふもんだからな。」
「へん巧く言ふぜ。何でも戀女房だツて言ふ噂だぜ。」
「口は五月蠅えな。まア何とでも言ふが可いや。」
「其口裏ぢやア思遣られらア。何しろ當座は見て居られねえな。俺ア其間、お前の家の前は目を閉つて驅拔けるんだ。」
「お前も鬱氣だな。いゝ加減にしねえ。嬶と名が付きやア最う色消しだわな。」

「其口を忘れめえよ。」

「はゝゝ、惡く念を入れるな。默つてそれから御覽しろだ。」

話して路の曲り角へ來た。源太の家は左の路、傍で會釋して左右へ分れて、町家續きの漸く月影になつて行く往來を、源太は一人我家を指して歸つて來た。町は住馴れた處であるから、別に目を止めるでもなく何心なく歩を移して家から僅八九軒手前、表の腰障子に小さく花豐とした、中の土間を折廻して時節の花物が見える店の前まで來ると、不意に向から、危く突當るばかりの勢ひで來て、いきなり前に立塞がつたものがある。

「おい、建源てえなアお前だらうな。」

源太は驚いて立止つた。

「な、な、何だ。お前は。」

見ると怪しげな風體の、四邊の暮纏る色に判然とは知れぬが、瘠せた、干涸びた、蔭の深い骨張つた顏に、見るから心持を惡くさせるやうな凄味のある、五十五六の、額の抜上つた老爺であつた。

返事もせず夜目にも人を射るやうな、奥に落込んだ眼にぢッと見据ゑたまゝ、

「源か源でねえか言つてくれろい。」

源太は半ば氣味惡く、半ば怫然として、

「俺は源だが何うしたッてえんだ。」

「むゝ源か。」

言つたぎり、口を結んで、瞬きもせず、ぐいと睨付けたまゝで立つて居た。

源太は怺へず、

「やい、何うしやがつたんでえ。何處の馬の骨だか知らねえが、突如に人の名を聞きやアがつて木偶の坊見たやうに突立つて居やアがる。俺の面をお祭が通りやアしねえぞ。何をぢろ〳〵見やがるんでえ。退きやアがれ。まごまごすると撲りのめすぞ。」

相手は其言葉をも耳に掛けぬやうに、前と同じく、穴の開くほども見詰めて居る中に、何かは知らず急込んで來た樣子で、忽ち、

「源、手前お新の阿魔を家に入れると承知しねえぞ。」

「なにいッ、」
と源太は更に氣色ばんだ。老爺は口を衝いて、
「お新は俺の阿魔だ。己等の好きにされて默つて居られるかい。冗談にも祝言のやうな眞似えするが最後、其場へ血の雨を降らせるから覺悟して居ろ。」
源太は聞いて呆れたやうな顔で、思はず相手を打目戍つたが、俄に笑出した。
「はゝゝ、狂漢だ。」
再び取合はず、其儘身を開いて行過ぎやうとした。老爺は何處へといふ風に急に押隔てゝ顔と顔、又も目を据ゑて、
「狂漢とは何だ。戯弄面だと思ふと大間違へだぞ。今言つた通りだ。お新は俺の阿魔だ、何處の何奴にも手は掛けさせねえ。手前も溫順しく引下がりやア可し、さもねえ時にやア甚麼事をするか解らねえぞ。可いか確かりと覺えて置け。これから先の手前の出やうに依つちやア、文句はねえ命づくだぞ。やい、死んでも七代祟るから然う思へ。」
源太は全で了解む事が出來ぬ。見上げ見下ろして、

「全體手前は何だ。」

「何でも可いや。今言つた事をよく覺えて居ろ。これから先、手前が手を引いて了ふまでは、俺は目を離さねえで見張つてるんだ。氣を付けろ、罷り間違やア只ぢやアねえぞ。」

聲に力を見せて迫つた調子に言切つたが、忽ち蹶と引離れて、衝と向へ行つて了つた。源太は呼止める間もなく、向直つて、急がはしく、

「待て。やい、待たねえかい。」

老爺は見も返らず、さながら突拔けて行くやうな風で、見る中に其半白の頭も、瘠せすがれた肩も、月明りに幽かになつた。

「源さん何だえ。」

と折柄通りすがつた、知合の、女房らしいのが、樣子を見て訝かしげに思はず立止つて聲を掛けた。

「何だか譯が分らねえ。變挺な奴も有たもんだ。」

と言つたが源太の顏色は曇つた。向を見込むと、月の町を、西へ東の人通、怪し

げな老爺の姿は、物に紛れて最う影も見えぬ。
折角の心持を此爲に變に惡くして、急いで家へ歸つて來ると、留守をして居た母親は蒼くなつて居る。今の老爺は此處へも來たさうだ。氣の小さな心の弱い女であつたから、突如に入つて來た老爺の其風體や、相好や、脅しの言葉に初めから慄上つて了つた。
「お前生首になつても轉げ込んで咽笛へ喰ひ付くツて言つたよ。」
とおど〳〵して居る。
「ふーむ」
と源太は眉を寄せて腕を組んだ。

二重帶

（一）

「定どん見たか。」

と三時過勿論客の相間時、湯島切通坂上の齋藤洋品店といふ槻の大看板を屋の上に見せた可成りな店先。こゝに店員の一人、伊勢平氏、藤の由造二十一歳、お手前物のコスメチックで、隅から取つて貼付けたやうに、薄い柔らかさうな髮をぴたりと搔分けて、身には唐棧の白つぽい柄、眞新らしい小倉の帶、少し奮んだらしい黑八の前掛、瘠せぎすの、色の惡い、しやくれた顏であつた。

右手に一人、端近く持場を固めた、同じ程の若者。綽名を天きなの定吉、別に言立てるまでもない、天井がきな臭いとあるのより來たのを、いつか略してきなとばかり、きなから轉じて丁幾とも呼ばれた。本名榛澤定吉、かたの如くの大胡座の鼻、圓らな眼、厚脣、色黑の膏切つたのであつた。話掛けられて、けもない

風に、
「何を。」
「今通つたのをさ。」
「何だ。珍らしくもない。那麼者を。」
「へん、大分お高いね。昨夜横町の師匠に、變な拜むやうな手付をしたのとは、全で別の人のやうだから妙だ。」
「おい、外聞の惡い事を言つて貰ふまいぜ。そりやア大方、隣の娘に氣障な事を言つて蜜柑の皮を叩付けられた、確か由どんとか言ふ人の事だらう。」
由造はぢろりと相手を見たが、嘲けるやうに、薄笑、
「ヘツヘ、那樣憎まれ口を听くやうぢやア、可愛や何にも知らないな。」
「はゝゝ、君の事なら知らない方が仕合せだよ。」
「然うさ、知つた日にやア氣が揉めて、堪るまいからね。だが全ツきり默つて居るのも殺生だから、些少ばかり罪滅ぼしに聞かして遣らう。改まつて言ふやうだが、お隣の娘は菊ちやんだらう。」

「べらぼうなのは由どんさ。」

「えゝ姨くには未だ早い。まアさ、聞いてから後の事だ。可しかね、其きいちやんとさ、此由さんと、ね、一寸恁ういふ風に、」

と惡身の當振、袖を引き、襟を扱き、中腰に身を捻つて、

「さもね、睦ましさうにさ並んで撮した寫眞といふ奴を、何うだい此懷中に忍ばして居やうとは、そこは凡夫の淺猿しさで、定吉なんぞは夢にも知らずさ。何だかお氣の毒見たやうな譯だね。」

と空嘯いて、濟ました風、定吉は物をも言はず、呆れた顏で、打目戍つて居たが、

「由どん氣は確かゝね。」

由造は大得意、思ふさまに脊を伸ばして、ぐいと反返つたもので、

「へん、甚麽もんだい。羨ましくばあやかれ〳〵。」

「わッはゝゝゝゝ。」

「何だ。何が可笑しい。」

「これが可笑しくなくつて何うするものか。よし〳〵そんならまア然うい

ふ番狂せがあつたとしやう。矢張南瓜の當り年としやう。として置いてさ。何しろ其寫眞といふのを拜見しやうぢやないか。」

「なに拜見！何うして。お大事の物を矢鱈に見せて堪るものか。へい、誰にもね、屹度ね、見せておくれでないよッてな事を彼孃が申しましたよ。」

「はゝゝゝ、大方那樣事だらうと思つた。なんぼ彼の孃が茶人でも、家の喜多八を掘出さうとは思はなかつたが案の如くだ。そこらが由どんの行止りだらう。」

「えゝ何とでも言へ。今に見て吃驚しないが可い。」

「はゝゝ、又蜜柑の皮かい。今度は芋の尻尾だらうぜ。」

「何だと、」

と冗談ながら、いきなり傍の算盤に手を掛ける。途端に、

「由造、」

「へい、」

と吃驚して振返ると、いつの間に奧から來たのか、店の花、町の花、一部の客の噂

の花、此家の女房、お組と言つて二十歳前、今裏口から髪結が歸つて行つた跡、其結立の目に立つ頭髪、未だ年若の化粧を捨てぬ美しい面嫮婷とした、たわゝな姿を前に見せて、輕く、

「何うしたの。」

「いえなに………何でもないのです、」

と由造は少からずどきまぎして胡麻化さうとする。定吉は得たりとばかり、

「なアにお内室さん、恁うなんです。」

「おい定どん、餘計な事を言ふもんぢやないよ。」

「可いぢやないか有りやうを言ふのだから。」

「なに有りやうを言ふ風かい。お内室さん此男の饒舌つた事なんぞ本當になすつちや可けませんよ。御存じの胸氣な奴ですから。」

「はゝゝゝ、いくら悶いても帳面は消えないよ。お内室さん、聞いて下さい。」

「ちよッ、覺えて居ろ。」

お組は微笑みながら、二人の爭ふさまを見て居たが、

「おほゝゝ、大層仲が惡いね。見つともない、喧嘩なんぞおしでない。何だか知らないけれど一人が心持を惡くする事なら私は聞くまいよ。」
「え、」
と定吉は由造と眼を見合せて惡黠しげに、
「ですが折角ですから少しばかり匂はせましやう。」
「お止しよ最う那樣人の厭がる事を、お前。」
「然うですか、それぢやアまア今度だけはそッとして置いて遣りましやう、」
と由造を見返つて、
「由どん、お蔭樣で助かつたね。」
「ふん、然うまで敵役に廻りたいかい。」
お組は仲裁顏、
「あれ又始めるよ。お止しといふのにねえ。」
言ふ時轣轆として前を、二頭立の箱馬車が一臺、反身になつた馭者の絹帽が既西へ廻つた日差に輝いて、眞黑な骨張つた顏、撮んで着けたやうな、ちよッぴり

とした尖つた鼻の下に、有るか無しの薄い髭の影が衝と目を過ぎたかと思ふと、中に一人酒肥りの腫上つたやうな赭ら顔、五十七八の、額の禿上つたどしりとした主人公の姿が窓の硝子越しに見えたが行くと程もなく引返して來てはたと店の前に止つた。

同時に馬車の戸が颯と開いてフロックコートも張裂れるばかり麥酒樽のやうな腹を前に突出して、其赭ら顔に横目を浴びて下立つた。

「御前。お買物ならば私が、」

と脇から馬丁が小腰を屈めた。

「よいわ。待つて居れ。」

中音ながら、底響きのする地聲、言捨てゝ、軒の上の、欅の看板に一寸目を留めて、其まゝつか〳〵と店へ入つて來た。

「入らつしやいまし。」

と定吉、由造、いづれも居住ひを直して恭しく迎入れる、其方には目もくれず聞流しに土間を衝と、お組の坐つて居た前へ寄つた。

「あの齋藤といふのはお前の處ぢやな。」
「はい左樣でございます。」
とお組は貴客と見て取つて丁寧に、會釋して顏を上げると、直と打目戍つて居られたので、何となくきまり惡さうに、伏目になつて愛想らしい笑顏、
「お掛け遊ばせ。」
と脇の火鉢を直して前に薦めた。
「むゝ。」
とばかり客は落付いて、やがて露西亞皮の卷煙草入から、むツくりと太い指に一本葉卷を抽取ると、
「なに少しな、脇から聞いた事があるでな、今度お前の處へ邸の出入を言付けやうと思つて居つたが、幸ひ今日通掛つたから寄つて見たのぢや。」
お組は恭しく
「左樣でございますか。有難うございます。御註文は何に寄りませず精々氣を付けましてお納め申します。何分共にお引立てを、」

「おう。」

と鷹揚に客は輕く首肯いて、

「處で主人は在宅かな。」

「はい。只今一寸出掛けましたが、歸り次第伺はせます事に…………。」

「むゝ然うして貰はう。」

とぱッと葉卷の烟、目は其まゝに、

「お前はこゝの家内ぢやらうな。」

「はい。」

「幾歳ぢや。」

「十九でございます。」

「名は、」

異な事をとお組は訝かるやうな目を上げたが、流石にそらさず、

「おほゝゝゝ、私なぞの名を何うなさいます。」

「いやなにちよと入用があるぢや。」

「御冗談もんでございます。」
と言つて紛らすやうに、
「あの、お邸は何方様で、」
「お内室さん存じて居ります。」
と隅から注意するやうに由造が心得顏の聲を掛けた。
「おや、然うかえ。」
と返して又客の方へ、
「では早速に伺はせます事に致します。何うぞ此後とも御贔負になりまして、澤山御用を願ひますでございます。」
客は何をか言はうとして脣を動かし掛けたが、直に氣を變へたやうで、
「承知ぢや。歸つたら主人に直ぐ來るやうにな、遇つて話して置く事もあるから。」
「畏まりましてございます。」
「や、邪魔したな。」

とぬツくり立上つた。お組を先に、店の物は聲を揃へて送り出す。折節往來の人足は疎らで、日は傾いて、さら／＼と柳の落葉、乾いた地の色の横目に赤く見える路中へ、葉卷を啣へたまゝでずいと出ると、見るより馬丁は馬車の扉を開けて脇に畏まる。ゆらり乘移ると程もなく、馬車は軋り出して跡は大路を風が吹いて過ぎた。

「由造誰樣だえ。」

とお組は振返つた。

「小野寺さんです。巣鴨の小野寺の御前です。」

「え小野寺の御前。」

巣鴨のそれと言へば、誰も知つて居る。時の權貴の一人。殊に財界に少からぬ勢力のある、子爵小野寺良顯。お組は眼を睜つて、何か思寄らぬやうに、

「まア、あの方が、」

と言つて又、

「それにしても何うして家へ入らしつたのだらう。」

「そりやア屹度、旦那が何處かゝら手をお廻しなすつたんでしやう。
「然うだらうか、それにしても、」
と少し言淀んで、
「何だかお手輕だねえ。」
言ふ處へ十三四、滿丸顏の、愛くるしい小僧風、萌黄の小包を首に掛けて刻足で店へ入つて來たが、上つて包を下すと、直にお組の前へ、
「へい只今。」
「おや三吉か。旦那は、」
「旦那は夕刻までにお歸りになります。先へ歸れと仰有いましたから、直ぐに戻つて參りました。」
「然う御苦勞だつたね。」
途端に、
「郵便。」
續いて客が二人。跡から又一人。表は絶間のない人通りを、夕日が長く曳い

て、其時軒下から、隣りの鶏が一羽、とッ〱と來て羽を擴げると、一聲日に向つて鬨を作つた。

（一一）

齋藤の主人彌三郎は、小野寺子爵の邸から歸つて來て程もなく、奧の一間に灯を點けさせて一寸と言つてお組を呼寄せた。一面花氈を敷詰めた六疊の部屋、床には呉春の芦に鴨、下に好もしい時代の正觀音の置物が見えた。桑の手提の煙草盆を前に柱を離れて三尺ばかり、正座を切つて、ぴたりと膝を折つて右手に如心張の銀煙管を持込んだまゝ、稍氣の立つた思入、見るともなしに目の前の洋燈の光をと見詰めて居た。

お組は合の間を急ぎ足に取敢へず其處へと言つた姿で入つて來たが、何か事ありげな良人の態を目に留めると、流石色に動いて、坐ると共に、

「何の御用、」

と安からず打目戍る。彌三郎は待ちかねたやうに膝を進めた。いきなり、

「お組、内談だ、其處等に誰も居まいな。」

「え、内談？」

と我にもあらず前へ出て、

「はい、誰も居りません。貴方、まア、何の…………、」

「むゝ、聞きな。」

といつにない調子、改つて、

「お組、お前も俺の女房だ。いざと言つたら俺の爲に、身體を投出してくれる位な覺悟はあるだらうな。」

お組は此言葉に、いよ／＼只事でないと思ふと、良人の面の又更に打目戍られるばかりで、急込むやうに、

「まア何うなすつたの、甚麼事があつたんです。だしぬけに氣になるやうな事を…………何ですかまァお話しなすつて。」

彌三郎は喫みさしの煙管を拂いて、はッたり下へ落すやうに置くと、

「おう、話さにやア譯が解るまい。聞いてくれ。實はな、今迄お前にも隱して居たのだが、俺は今、最う手も足も出ないやうな場合に居るんだ。」

「はい、其事なら、私も何ですか存じませんけれど、一人で只心配をして居りま

した。先達てからの御様子で、何だか甚く屈托してお出でなさるとは、疾うに氣が付いて居ましたが、お聞申しても仰有らないし、始終氣になつて仕樣がありませんでした。」

「むゝ、然うだつたか。俺もなア、知らしたくもない事だから、つい聞かれても言はなかつたが、とう〳〵切出さにやアならなくなつて了つた。驚くなお組、罷り間違へば此店も閉めて了はにやアならないんだ。」

「えッ、まア、何うして、」

かねて相應な、隨分確とした財産もある家、然ういふ方へは全で考へも付けて居なかつたので、お組は聞いて今更のやうに打驚いた。彌三郎は中肉の、がッしりとした身體を眞直にして、屹と脣に力を入れたが、稍あつて、

「なアにそれも、俺が餘りあせり過ぎたからだ。飛越すよりは踏んで固めろ。と亡くなつた親父にもよく言はれたが、俺は全體這麼店一つの主人で候で脂下つて居るばかりぢやア、何うしても虫が納まらないのだ。俺の代になつてから、石炭にも手を出した、茶山にも出した、鐵道にも出した、一々割つて話しき

れもしないが、閊いた揚句が、見事に仕損つた。遣繰一つで、何うにか操りの糸を引いては居たが、惡くなり出すとどん／＼拍子だ。彼方が歪む、此方が傷む今一搖りで何も彼も滅茶々々だ。尻尾も出さずこれ迄はまア押堪へて來たが、お絹最う何も彼も駄目になつた。」

「まア那樣にまでなつてお了ひなすつたのですか、濟みませんでした。私も暢氣ですねえ。それぢやア此迄に本當に甚麼にか御苦勞をなすつたでしやう。堪忍して下さいまし。それにしても最う何うにもならないのですか。」

「むゝ。俺もな恁うして口に出す位だから出來るだけの事は遣つて見た上だ。なアに浮沈みは當り前、よしんば身と皮だけになつた處で、それでめげて了ふやうな俺ぢやアないが、家は潰す仕掛けた仕事は抛出す、見込んだ事には一時に遠くなる、と恁うなるとな業が沸えて何うにも癇癪が押へ切れない。いま／＼しいが然し遣るだけ遣つた上だから是非はないのだ。どの道火の中を潜らずばなるまい、と思つてな、實は夕方歸つて來た時既にお前にも話して置くつもりだつた。處がこゝに、妙な事が起つたのだ。」

と言つて下に置いた煙管を手に取つた。促すやうにお組は、
「え、甚麼事が、」
「外ぢやアない。今行つて來た小野寺さんだ。」
「小野寺さん、」
と鸚鵡返し。
「小野寺さんが何うしたのです。」
「それがよ、飛んだ談話なんだ。假令ば甚麼お得意だらうが、此場合、燒石に水のやうな心持だ。然しまア行くには行つたが、御用はと伺つて見ると、御前が直々にお逢ひなさる。驚くぢやないか商賣の方は二の次で、談話のあつたのはお前の事だ。」
「えッ、」
「俺も聞いて呆れ返つた。隨分彼の人の事ぢやア、色々噂も聞いて居たが、まさかに這麼處まで手を出さうとは思はなかつた。なにお前、店の有る事なんざア、てんで知りもしなければ聞いた事もないのだ。今日何處かへ行きと歸

りに前を通掛つて初めて知つたといふものだ。それもお前が店に出て居なかつたら邸へ歸るまでにや、此處に唐物屋があつた事さへ忘れて居たらう。何うだい、お組、お前は見染められたんだ。」

「…………」

「欲しけりや、何だらうが摑まない中は承知しないんだらう。身分が身分でいゝ年で、然も主のある相手を捉へて、其上然も主に向つて臆面もなく切出して來るとは、俺をまア何と思つてるんだらう、呆れるぢやないか。」

お組は彌三郎の呆れるより勿論呆れた。冗談ならば知らぬ事、何といふ談話であらう、言ふべき言葉もなかつたが、腹立たしげに、

「貴方、本當ですかまア。」

「本當でなくて、わざ／＼呼んで這麼談話をするものか。何しろ餘ツ程の思召だ。場合に依つちやア事のむづかしいのを知つて居るから、先方も只ぢやア言出さない。俺が承知をする代りには、隨分商買の上の相談相手にもならう。うんと働ける處へも廻して遣らう。と恁うだ。餌は餌だが、何しろ彼の

御前のだ。一通りの餌ぢやないと思へ。それから繫がつて、こゝを一つ盛返すばかりか、思切つて乘出す仕方は、俺の胸にちやんとある。それでなくとも時が時だ。起すか寐るかの必死の場合、畜生、一番目を瞑つて、」

「えゝッ、」

とお組の色は颯と變つた。彌三郞は我に奪はれて、目にも止めず、語氣さへいつか荒々しく、

「先方の懷へ飛込まうか。彼方が道具に使つたか。此方が道具に使つたか。俺の切れ味を見せてくれやう。なァに今こそ身分も違ふ、長い物で卷かれても居やうが、俺も彌三郞だ。見ろ〳〵いつかは俺の立場で丈競べをして見せるわ。苦しい時には鼻をも削ぐ。えゝ思切つて貸して遣らうかい。」

お組は最う急上げた。口を銜いて、

「もし、一寸、貴方そ、那樣事を、本氣で言つて居らつしやるんですか。」

答へず屹と見て、

「お組、恩に着る。俺の爲だ。無理にも此場を脊負つて立つてくれ。志は忘

れまい。こゝをさへ踏切つてくれたら、あとは一伸しだ。切なからうが二度か三度思切つて苦しい夢を見てはくれまいか。俺の口から這麼事を言ふのだ。よく〳〵の事だと察してくれ。

お組は俯向いて、いつか胸を押へて、火影に思餘つた顔を背けると、鬢の後れ毛の先が慄へ出した。

「お組。」

「はい。」

「解つたか。」

「解りません、」

「むゝ、」

と眼がきらりとした。お組は顔も上げず、影が動いたと見ると、はら〳〵と膝が濡れた。二人の中を鐘が行く。

（三）

昨夜落葉を打つて更けて雨になつたが、今日はからりとして、一天雲もない淺黄を拔いて鳶の影、田町の上臺町の奧の、脆啼の鶯の聲がする某寺の藪を西にして、表は間疎な要冬青垣、南を受けて日當りのいゝ、一寸した隱宅らしい構門に大師樣のからびた手で大石純造とあるのは、お組が父の住居である。

靜かな町で、人の足音も時折に絕え、車のあとに車の來る事は稀であるから、朝夕一しきりの賑やかな往來の外は、ぽつり〳〵と間を置いて人の聲音、蜿つて一町ばかりの路の中に、今影を曳いて居るのは一人二人。

路の角に、さながら老將の武者振を見せて、いつの代からの置紀念か、半ば空洞になつた欅が一株、蜘手を高く肱を張つて東の半空を掠めて居る。がちりと錠の跳ねる音がして、見ると下のポストの前に集配夫が一人、忙はしげに中の手紙を小脇の鞄の取込んで立上がると、默つてすた〳〵と行過ぎた。暫くして端へ寄つてちよこ〳〵と、黑い、天鵝絨のやうな毛をした小犬が、何處への使

ひか、飼馴らされて心得顔に小さな風呂敷包を首に掛けて脇目も振らず路を曲つて行つた。寺には咲殘りの茶山花の影、のッと高い本堂の屋の上を、鵯が一羽欅の梢から鳴いて過ぎた。此時紺の紋綾のコート、當用履の小町形の下駄、家から一寸といふ風で、ひよつくり其處へ、お組の姿が見えた。一夜眠らなかつたので、腫れぼッたい、色の惡い顏をして、ともすると伏目になつて躓くばかりの足取で來たが、只見て實家の影が目に留まると、いつもは我にもあらず進む足が、急に釘付けにされたやうに立止つて了つた。良人の爲、家の爲、と忘れるほども胸に繰返しては見たが、今迄嘗て思ひも寄らなかつた一大事假令何であらうとも從ふ事の出來ぬといふ、奧に深く根を張つたものが牢として拔くべくもあらぬのである。淺猿しい汚らはしい、重ねて聞くさへも厭はしいと思詰めるまでにお組は眞正直で、人もあらうに、然も當の良人から直に說かれるほど、つくづく又なさけないと思つた。果は威壓してまでも彌三郎は無理押付けに押付けて、遂に言出した事を引かうともしなかつた。良人の心が最早動かぬと見ると、お組は全く何うして可いか解ら

なくなつた。
いつもの時刻に、良人は枕に就くと既雷のやうな鼾、怨めしげに其顔を見て、お組は忍び泣きに泣いて居た。一番鶏、二番鶏、東京の夜は跡から出るお組の大息を裏んで、いつの間にか既水霜の朝に譲つて明離れた。むツくり起ると彌三郎は横にもならず悄然と坐つたまゝで居たお組を見て、勵ますやうな、威すやうな終りにはツとするやうな恐ろしい言葉を殘して、軈て一時ならず忙はしげに外へ出て行つた。晝になつて中休みのやうに一寸歸つたが、これから子爵の許へ行つて來ると言つて出た。歸つて來ての宣告は何うであらう。事はいよ〳〵急になる。お組は思餘つてなるならば兩親の手で、此場を救つて貰はうと思つて、俄かに用達しにと言つて程近い實家へと來たのである。來は來たものゝ、這麼談話を何うして兩親の耳に入れられやう。と思ふと今更ながら又途胸が突かれる。それも思切つて打明けるとする。言へば勿論の事、父は頭からして差止めるに違ひはない。我から波を卷起して身は兎も角に立つ事も出來やう、良人は何とする家は何とする、跡の仕末にお組は固よ

り何の成案もない。よしや手鍋を提げやうとも、道さへ全ふして行かれたら何のやうにか心安からうとは思ふけれども、良人の立場になつて見れば何れほどか、又男の意地の、女の身には思及ばぬ苦しい事もあるのであらう。とは言へ。とは言へ。と又しても打惱む。

心付いて二足三足、夢のやうに前へ進むと、ちら／＼と生垣を洩れて、外から見え透く庭の配置、障子を半ば、縁へ一杯に日は敷居を越して暖かさうに疊の上へ差込んで、中に二人、父と母の懷かしげの姿がさも鮮やかに見えた。丁度茶を入れたあとゝ見えて、茶器やら菓子器などを前に、父の純造は煙管を持込んだ手を膝の上に、今年は更に白くなつた長い髯を捻つて、今日掛替へたらしい床の守景の幅を悠然として眺めて居る。母のお妙は少し居退つて縁に近く半身日を浴びて、大きな昔風の眼鏡を掛けたまゝで、ほか／＼と暖かいのに面の皺も延びるやうな心持、膝から新聞を落して、うつら／＼と眠りかけて居る。穩やかな、さも苦の無さゝうな四邊の光景。

縁には蘭の鉢が並べてあつた。傍に丸々と肥えた三毛猫が一匹、後足の一つ

を背後へ長く伸ばして、たわいもない姿で寢込んで居る。軒の上を雀がこつこつと何やら漁つて居る庭は霜の跡のさながら美しく風も立つのを憚かるのやう。お組は餘所ながらぢッと兩親の方を見て又立止つて了つた。此何も知らない、老を樂んで居る家の中へ、這麼仕末を耳に入れる自分は何ういふ事であらう。阿父樣は六十七、阿母樣は三歳下、今年は去年より、今日は昨日より、めッきりお年をお取りなされた御樣子が見るほど目に立つて見えるのに殊更兄樣が亡くなッてから、其四五年の御苦勞は容易ではなかつた。やうやう此頃其苦も脫けて、何うやら安心をなさつた今、又新らしい心配を子として掛けるに忍びやうか。つらい事ではないか。とせぐり苦しい女心、途端に、

「お妙、」

と父の聲、振返つて微笑みながら氣を付けるやうに言つた。呼覺まされて、お妙ははッと目を開いて、顏を見合せると、

「おほゝゝゝゝ。」

純造も打笑つて、

「何うしたのぢや。たわいもない。」

「ほゝ。長い間でしたか。日向で暖かなもんですから、つい好い心持になつて了つて、新聞を讀んで居ると思つて居る中に、いつの間にか、うと〳〵として了ひました。年を取ると氣の張も無くなつて了つて、仕樣がないものですねえ。」

「はゝ。ついぞ居眠りなどをした事のないお前だつたが、最う加藤の姪の始末を付けた時のやうな、五日の間目を合はさなかつた彼の元氣もなくなつたと見えるな。」

「本當に最う意久地はありません。」

「いや年と言へば、俺もなア、自分で氣が付くやうに弱つて來たよ。來年あたりは最う杖が要るかも知れんて。」

「私も此頃では一寸通りへ出るのも何だか大儀のやうになつて來ました。恁うして日向ばかりが戀しくなるやうになつては全く最う埒は明きません。」

「然し又言つて見ればぢや、一年增しに弱るのは當り前、那樣事より外に、これ

といふ氣苦勞のないのが何よりぢや。善かれ惡かれ働く時は最う過ぎた。何處も無事で靜かに休息して居る事が出來れば、何も言ふ事はないわさ。」

と言つて何の氣もなく、靜かに庭の方へ目を遣つた。お組は跡へ思はず身を引いて蔭に隱れて行きもやらず立つたまゝで居たが、不意と氣がさして振返ると、今通掛つた、一人、二人、いづれも怪訝な顏で、立止つてちッと此方へ、不審の目を寄せて居るのと顏を見合せて、はッとして繕ふ間もなく、急に歩き出して既門の前未だ跡を見られて居るやうで、逃げるやうにして中へ入つて了つた。潛戸に付けた鈴の音が耳を打つて未だ跡に響殘る、座敷の話聲は同時にはたと止んだ。垣について敷石を先へ、前の格子戸までの僅かな間も、時めく胸に言はれぬ心地で、躊躇ひながら手を掛けると母は衝と立上つた樣子、

「阿母樣私でございますよ。」

「組か。」

と聞取つて父の聲、

「はい。」

お妙は聞くより、

「おや。」

と忙がはしく、襖を開いて驅寄る物越、お組は竦然としたのであつた。

（四）

「よく來た。此處へ來い。此處へ。暫く訪ねんから今日あたり行つて見やうかとも思つて居つた。近所へ用でもあつて來たか。なにわざ〳〵然うか何にしてもよく來た。妙、茶を替へて遣れ。それから何か、それ河田から貰つた何があつたらう。開けて出して遣つてくれ。組、まアゆッくりして話して行つてくれよ。」

と何も知らず、ほく〳〵して目を細くする、昔の嚴ましかつた面影は何處へやら、一年增しに和らいで來る父の樣子をそれとなく打目戍ると、一入白くなつた長い眉毛、額の皺、肩の瘦、くねつた腰も今日は殊に目に染むやうに見えて、何も言出さぬ先から最う言後れて居た。努めていつもの面持に、

「阿父樣あの何うぞ最うお搆ひなさいますな。今日は一寸思立つて上つたので、餘り然うしては居られないのですから、」

「可いさ。まゝ、落付いて話して行くさ。時に彌三郎さんは何うぢや、相變ら

ずか、」

「はい。」

と言つて口籠る。純造は獨合點の、よくも聞かず首肯きさま、

「むゝ、何よりぢや。や、此間もな、」

と言掛けた處へ、お妙は接待振りの茶菓子を持つて入つて來たが、これも顏を見るからの上機嫌。

「お前、此方へお出な。え、此方が可いぢやないか。」

「はい、なに何處だつて同じ事ですわ。可いぢやありませんか此處で。」

「然うかえ。それぢやァお前のいゝやうにおし。おゝ、お禮を言ふのを忘れて居た、此間は珍らしいものを有難う。家は小人數だから、那麼に澤山にお遣しでなくつても可かつたに。」

「あれ何ですねえ。わざ〳〵お禮を仰有つちやァ困りますわ。阿父樣がお好きだからと思つて、少しばかり持たして上げたのですものを。」

と見ると純造は煙管の先で灰の中を探つて居る。さそくに、

「おや、お火が消えましたか。持つて參りましやう。」
お妙は脇から、
「あれ私がするから可い。お前はまア坐つてお出で。」
「他人がましい那樣事を。まア私にさせて下さいまし。」
身輕に次の間へ立つて、火を取分けて歸つて來る。お妙は優しく、
「憚りだつたね。」
「あれ又、」
「はゝゝ、まア可いわさ。」
と純造は心地よげに吸付けて、微笑みながら前の談話を續けた。彼一句、此一句、それからそれと移つて行く雜談の中にも言知らぬ親心は影の隨ふやうに付いて廻つて、右から左から避ける事の出來ぬ慈愛の光にお組を裹んで行く。お組は言出す事は次第に遠くなつて行くのを知つて居ながら、割つて出る勇氣もなく、言はうとしては言ひそびれて、幾度か機會を逃してつい餘所事にして了ふのであつた。

兎角して時は移る。純造は何と思つたか、不意に、
「や、俺の方もな、緣に繋がつて彌三郎さんの爲に、これまで何れ程世話になつたか解らんのぢや。今恁うやつてまア〱樂にして居られるのも、全く彌三郎さんの骨折でぢや。婿とは言ひ條一方ならん厄介になつて居る、疎略には思はんぢや。お前からもなア、折を見てよく言つてくれよ。」
と思入つたさま、聞くとお妙も。
「ほんにねえ。お前を遣つてあるばつかりで、這麼にいろ〱世話にもなると思ふと、お氣の毒でならないやうな心持がして仕樣がない。今ぢやお前、半分は彼方の力で家も立つて行くやうなもの。お前も中に立つて心を遣ふ場合もあらう。然し彌三郎さんが、何も彼も飲込んで居てくれるから、つい好い氣になつては居るが、思ふと濟まないよねえ。」
お組は思ふより外に、
「いゝえ良人も、なに助け合ふのはお互ひだと何時も言つて居ります。それほど思つて居て下されば甚麼にか喜びましやう。」

お妙は重ねて、

「それにお前、友雄（お組の弟）の學資までも、どう〳〵彌三郞さんの手から出して貰ふ事になつたぢやないか。うッかり思つて居られる譯ぢやない。」

「おゝ、友雄。」

「え、」

「いえなに、」と口早に、「あの友雄は此方へよく參りますか。」

と父の方へ振返つた。

「むゝ、土曜日には屹度來る。喜んでくれ、相變らず成蹟は極上ぢや。彼も兄に離れてから、一角氣が立つたと見えて近頃めッきり大人振つて來たわ。」

「然うですねえ此間も、たしか此方からの歸りだと言つて家へ寄つて行きましたが何か良人へ向つて、大層眞面目な事を言つたとか申して跡で笑つて居りましたつけ。」

「へえ、甚麼事を、」

とお妙は何か、面白さうな事を待設けるやうな風で問掛けた。

「よくは聞きませんでしたが、何でも良人に、滿洲とかへ行けと言つたのださうです。」

純造は打笑つて、

「はゝゝ彌三郎さんは困らせられたのぢやらう。」

「いゝえ好い機嫌で、一人面白がつて居りましたつけ。大層肥りましたねえ。去年あたりから、見る度に大きくなつて來るやうな心持がしますよ。力自慢でね、姉さんなぞは、指の先で差上げて見せるなんて、威張つて居るのです。」

「おう何でもな、仲間で寄つて運動に相撲を遣るさうぢや、西の關ぢやとか言つて居つたよ。」

「まア、」

「然し丈夫なのは何より嬉しい。お前も氣を付けて患はんやうにしてくれ。先刻寢が足らんとか言つたが、今日は何だか勝れんやうぢやの。」

「いゝえ氣分は何ともありません。」

と押出すやうに笑つて、

「此方へ參る位ですもの。」

と我知らず言つたが、心竊かに何故這麼事を言ふのだらうと思つた。目を落すと父の聲、

「それなら至極ぢや。むゝ、丈夫と言へば、彌三郎さんは格別だの。あの位達者な人も又少ないもんぢや。」

「はい良人の達者なのは本當に憎らしいほどです。私が覺えてから、未だ風邪一つ引いた事もありません。」

「むゝ、それが第一の幸福よ、何に付けても身體が資本ぢやからの。」

お妙は笑ひながら、

「それにしてもお前、最う初孫の顏を見せてくれても可いぢやないかね。」

引取つて純造が、

「はゝゝゝ、然う自由に行くものかな。」

「私の勘定では、最う二三人は出來て居る筈だつたが。」

「むゝ、勝手な事を言つて居るわい。」

お組は突然、
「阿父様、友雄は十六でしたねえ。」
「おう、然うぢやが、何故。」
「いえなに、一寸お聞申したのです。」
「然うか、彼もな、これからが大事の身體ぢや。親の心では何處までもよくなつてくれいと思ふが、然し本人も、兎もあれ人にも負けず勵んでくれるから、俺も實は喜んで居るのぢや、何うか彌三郎さんにもな、此後とも手を添へてくれるやうにな、お前にもよく頼んで置くぞ。」
「はい。」
とお組は上の空に答へて、息を飲んで、血の氣の涸れた父の手許に、ぢツと目を注いだのであつた。

（五）

これから四月餘り、齋藤の店は其後旭の昇る勢ひで、同じ町並びの中でも一軒飛離れて景氣立つて見えた。春に入つて、隣家を一呑みに店を取擴げて今普請の最中、夜を日に繼いで、大工左官の大勢の影が、板圍ひの中に競立つて仕事を急いで居る。朝から自轉車を飛ばして、店員の幾人は、出入の役所、學校病院屋敷々々、それ〴〵の得意先へ八方に駈廻る。跡から品物を積んでは箱車が四方に出る。引切りもない電話の應接、來客の接待、店はさながら戰場のやうなさまで、片時手をあけて居る者は一人も無かつた。

お組は奥に疊から續いての女客、一人は程もなく歸つて、あとに一人光枝といふ母方の從姉が殘つて未だ話して居た。光枝は二十一、安井某といふ内輪の餘り豐かならぬ、さる官吏のもとへ嫁付いて居る、色白の、ぽつてり肥えた風、地藏眉に鹿のやうな眼をした婦人であつた。質素な扮裝で親しげに、稍容儀を崩して、片手を前の桐胴の火鉢の縁に、差向ひの、氣の置けぬ面持。

「本當に賑やかだ事、此方に比べると、私の家なんぞは全でお寺のやうだわ。」
「羨ましいわ。閑靜で。此方は最う朝から晩まで此通りなんだもの。本當に騷々しくつて仕樣がありやしない。」
とお組も打解けて近く火鉢へ寄つて、何かなし寛いだ風であつた。
「陽氣でいゝぢやないか。良人が嫌ひだから仕樣がないけれど、私なら最う何うしたつても此方のやうな處へ來て了ふわ。」
「なアにそりやア偶にお出でだから、一寸目先が變つて那樣氣にもおなりなんだらうが、まア三日でも居て御覽、そりやア屹度厭におなりだから。」
「巧く言つてる事。」
と光枝は何と思つたか、一寸部屋の中を見廻して、
「もつとも家からして違ふからねえ。」
お組は目を擧げて、疾口に、
「あれ、那樣事を、光枝さんでもない。」
と氣を取るやうに、

「二つ取なら、私は光枝さんのやうな家の方が好いと思ふよ。」
「好ければ何時でも取替へるわ。」
「おほゝゝゝ、出來れば直にも然うしたいけれど、」
光枝も打笑つたが、
「お組さん、恁うして居てまア何が不足なの。」
「だつてそれは好き〳〵だもの。」
光枝は不意と其顏に目を留めて何をか思出したやうに、
「然う言へば貴女は、此頃何か心配がありはしないの。」
「え、」
とお組は思はず聲を奮ませたが、取つて付けたやうに莞爾して、
「いゝえ。」
光枝は脇へ氣を配るやうに、彼方を振返つて見て向直ると、
「なアにね、私少し、此方の齋藤さんの事で聞いた事があるから。」
「おや、甚麼事を。」

「あの、齋藤さんは、全體以前からお道樂をなすつたの。」
お組は何と答へやうかと思つたけれど、内輪同士と微笑みながら、
「え丶、隨分性惡の方よ。」
「それぢや知つてお出でなの。向島のを、」
「え、向島の。何。それは、」
「あら全で知らないの。何よ。あの圍つてお出でなのよ。」
「えッ、」
とばかり、颯と色を變へたが、流石に人前を、慌てゝ隱すやうにして、
「まア、いつ那樣事を、呆れて了ふのね。これまでちよい〳〵私に隱してなすつた事はあつたけれど、那樣深入をした事はついぞ無かつたのに、まア油斷がならない。相手は何なの。」
「私も今日聞いたばかり。ほら先刻話した武田さん處ね、彼處で聞いて來たの。だから詳い事は知らないがね、何でも芳町に居た人だつて。」
「まア、然う。」

と默つて考へて居る。

「それにね、もつと惡い事があるの。」

「え、惡い事つて、」

「何でもね、最うお腹が大いんだつて。」

「えッ、それぢや此頃の事ぢやないのだね。 本當に、いつからまア那樣、」

と言つて又默つて了つた。

「此正月頃からだとさ。 私もね、今迄齋藤さんを、那樣方の人ぢやないとばッかり思つて居たもんだから、先刻聞いた時は本當に吃驚して了つたの。 だが貴女まア何する心算なの。」

と打目戍る。 お組は顏を上げて、眼を見合はせると少し周章た氣味で、間に合せのやうに、

「本當に、私全で知らなかつたの。 良人も酷い事、いゝ笑ひ物にされて居たんですねえ。」

「だから思入れ言はなくつちやア、」

「ぢア何うしたら可いだらう。」
「何うしたらツて、那樣者、其儘にして置く事があるものかね。追出して了ふのさ。」
「けれど……………」
「あれ、何がけれどなんだよ、打捨つて置くほど碌な事はありやしない。齋藤さんだつて、仕方の違つて居る事は勿論知つて知るわ。先は水物だもの、何うでもなつて了ふ。初めに確かりして事をお決めでないと、後になるほど面倒な事なんぞが出來て、それこそ仕樣がありやしない。」
「でも身重にまでなつたものを…………」
「なに子供なんぞは、何處へでも遣つて了はれるわね。」
「まア、」とお組は思はず、「貴女は那樣に譯なしに事が濟んで了ふと思つてお出なの。」
光枝も首肯いて、
「そりやア些少は紛紜もあるだらうけれど、なに貴女さへ確かりしてお出な

ら、何うにだつて始末は付けられるわ。」
「だつて貴女は未だ這麼事に出遇つた覺えもないのに」
「無くつたつて貴女、」
と言掛けたが、不意に言葉を止めて背後を振返つた。ばた〴〵と廊下を通る足音がして急がはしげに其處へ來たのは店員の一人、
「お內室さん、旦那から電話でございます。」
「おや然う。憚り、」
と言つて光枝と顏を見合せた。
「直に歸つて來るやうにお言ひな。」
お組は立上つて、
「まア兎も角行つて來やう。一寸失禮。」
背後を通つて出て行つた。光枝は跡に一人ぽつねんとして、床の盛りを過ぎた梅の花を、しよざいなさに見て暫く經つた。

お組は光枝が歸つて行つた跡、喜代といふ仲働に少し頭痛がするから奥で休んで居ると言つて、居間へ入つて襖を閉切つて了つたが、四邊に人目が無くなると共に捲いて返して來るやうに、俄かに騒ぎ出す胸を押へも敢へず其處に頽折れて、さて何うしたらと思つた。

良人は隱し妻を持つた。其人は身重になつて居る。お組は嫉ましいより腹立たしいより、口惜しいより、先に良人の心の底を思ふと、有られない氣がする恐懼を持つた。

妻として言ふべき事も、執るべき道も知らぬ事はない。けれども、けれども、とお組は言ふ事の出來ぬ苦しい心地を覺えた。家の爲に、良人に強ひられての上ではあるが、お組は其後の、小野寺子爵との言ふも耻かしい關係を思ふと、心から身を切られるやうな思ひがする。

良人は其時、手を取つて頂くまでにしてくれた。自分は其膝に泣伏した。此

志は必ず忘れぬ、と良人の言葉は耳に殘つて居る。自分と良人の間には、充分の了解があつたと思つて居た。それから爾來、良人の心寄は前にも增して、大事にもしてくれる。何彼に目を掛けてくれる。自分は其淺猿しい、裏悲しい中にも、良人は何處までも、自分の本心を知つて居てくれるとばかり思つて居た。恩に着るとは仰有つたが、勿體ない那樣にまで、と心に手を合せて拜んだ事もあつた。

けれどもそれは義理ばかりで、良人の心は移つたのではあるまいか。厭氣がさしたのではあるまいか。邪推をすれば、只子爵との中を繫ぐ爲ばかりで、自分を恁うして置くのではあるまいか。いつか其中、最早子爵の手を藉るにも及ばなくなつた曉、其曉の自分は何うであらう。

自分は最う良人の愛を失つて居るのではないかと思ふと、お組は不意に闇の底へ落ちて行くやうな氣がした。利益の爲に自分を賣る事を敢てした良人が、自分を何と思つて居る筈があらうか。

矢庭に、押へても押へ切れぬ、一種の念は胸の奧から燃上つて來た。恨みと、悔

いと、怒りと、嫉みは、さながら狂ふやうに一時に入亂れて、赤く、蒼く、血は嵐の中を荒廻るやうで、身はわなく〳〵と慄へるばかり。

はッとして我に返つて、さながら漂ふやうな眼差で暫く居たが、何としたのかはら〳〵と涙を落して、萎れて俯向いて了つた。俄かにさも心細い、野の奥、山の奥、蒼茫として暮れて行く中を裾から、帶から、袂から、次第に消込んで行くやうな淋しさを犇と覺えると、物も見えず、既堪へられなくなつて、前に突伏した儘暫く顏をも上げなかつた。

「お内室さんえ、お内室さんえ。」

襖の外で呼ぶ聲が聞えた。お組は聞付けず、其まゝに平れ伏して居た。

「お内室さんえ。」

靜かに襖を開けて、敷居越しに顏を見せたのは、仲働の喜代であつた。

「おや、」

と夢から呼覺まされたやうに、お組は不意に起上つた。

「まア喜代かえ。」

部屋はいつの間にか暗くなつて、暮の色は透間もなく四邊を包んで居た。白く殘つて居るのは、障子と、額と、お組の襟から上。

「はい、あの御飯ですが、直に召上りますか。」

「然う。私は今喫べたくないから。」

「おや未だ御氣分が可けませんか。」

「あゝ、何だか未だ………、」

と額を押へて顏を隱すやうにした。

「可けませんねえ、」

と喜代は目を上げて、氣遣はしげな顏、

「あの、お床を展べましやうか。」

「なにそれほどでも無いからね、最少し侭うやつて置いておくれ。」

「然うですか。では後に召上りまし。」

と立たうとした。お組は口早に、

「旦那は、」

「未だお歸りがありません。」
「然う。」
と言つて少し途切れて、
「それぢや可いから最う彼方へお出で。跡をぴッしやり閉めて行つておくれ。」
「あの、洋燈を點けて參りましやうか。」
「なに、可いよ。」
「はい。」
襖を閉めて喜代は退つて行く。しと〳〵と其足音の薄れて行くのを、お組は現のやうに聞いて、既四邊の闇をも忘れて了つたが、誰に怪まれるのを憚つたか枕を出して横になつて、壁を前に眼は冴えて居た。
けれども今、事を荒立てた處で何にならう。自分と良人の間は、いよ〳〵遠くなつては了ふまいか。はしなく事を壞して了つて自分の眞情を知られる事が出來やうか。最も今度のやうな仕末ではないが、以前時たま浮氣沙汰のあ

つた折、自分は何うであつたか。自分は何處までも美しい心で良人を良人として冊いた。お前のやうな氣を持つてくれると、俺も全く手が出ない、と其折良人も言つた事があつた。然うだ。自分は何うして取亂したのか。たとへ良人が甚麼事を爲やうとも、自分の持つて居る誠實は一つ、よもや此心の通らぬ事はあるまい。

お組はがばと又起上つた。然うだ。私は私の事をする。濟まない氣を出すのではなかつた。良人に向つてあられもない。假にも今のやうな氣を出された事か。勘忍して下さいまし。濟みませんでした。濟みませんでした。あゝ私とした事が…………。

とは言へ、とは言へ、もしや本當に私をば最う…………。

がらり襖が明いて、脊の高い、黒い影が見えた。

「何だ。眞ッ暗ぢやないか。」と振返つて「おい、燈火を持つて來い。」と正しく良人の聲、お組は吃驚して振仰いだが、闇を幸ひに、慌たゞしく目色を繕つて、

「おやお歸りでございますか。」
「むゝ、今歸つた。」
と彌三郎はつか〳〵と入つて、
「何處に居るんだ。暗くつて些少も解らない。何うした加減が惡いと言ふぢやないか。」
「はい、少し。」
「何うしたんだ。え、何處が惡いんだ。」
「なに大した事はないんです。少し頭痛がして氣分が惡かつたもんですから、暫く橫になつて居たのです。」
「然うか。俺は又寐て居るといふから、何うしたのかと思つた。」
ぱッと明りが射して、喜代が急ぎ足に臺洋燈を持つて入つて來た。お組は眩しさうに顏を橫にして、笑つて輕く、
「いゝえ、最う餘ッ程いゝんですよ。」

（七）

茶の間の、どッしりとした、桑の長火鉢の前に、彌三郎は常の服に着替へて、春から新らしく入つた番頭の淸四郎を對手に暫く餘念もなく事務の上の談話をして居たが、やがて總ての指圖を終つて店へ歸ると、前に差向ひの、お組が酌んで出した茶を快く飮んで、活々とした顏に、滿足らしい、微笑の影を浮べて坐つて居た。

お組は成るべく厭な顏を見せまいとして、言ふから物和に、

「貴方、今日は餘ッ程いゝお心持のやうね、」

持つて居た湯呑を下に、彌三郎ははきとした調子、

「むゝ、お組、喜べ。事は何も彼もうまく行く。此處で。俺は根限りに働いて働き拔くのだ。金だなア、金の背後には力がある。今日も集まつた五十人ばかりの膽を上げたり下げたりさした。馬鹿なものさ。はゝゝ。」

と健やかな人の氣を打つた笑ひ聲、お組も誘はれたやうに、笑顏を作つて、

「まア、何ですの。それは、」
「なに今企畫んで居る鐵道の事よ。おゝ、忘れて居た。」
と膝を打つて、
「今日向島で大石の阿舅さんに遇つたよ。お前に傳言があるのだ。」
向島、と其言葉は刺すやうにお組の胸に閃めいたが、疊んでさり氣なく、
「へえ親父に、それぢや多分寺島の親類の方へ行つたのでしやう。」
「然うだ。遲いが梅見を兼ねてだとよ。同じ年格好の蝦蟇仙人のやうな顏をした連があつたつけ。瘦せた、干涸らびた僧侶だ。」
「あゝそれは大宗寺のでしやう。傳言は、何か私に用でもあるやうな……。」
「むゝ、明日麻布へ使の男を遣る時、お前の方へ道寄りをさせるから、いつか話した八丈雛を其男に渡してくれ。留守でも解るやうにして置いてくれといふ事だ。」
「然うでしたか。それぢや今夜にでも出して置きませう。」
と言つて氣色を見て、

「貴方は又向島へ何しに行らしつたの。」
「俺か。俺はなに、一寸用向で鐘が淵まで行つたんだ。」
微笑みながら、
「それればかりですの」
「え、」
「貴方、私ね、脇から少し聞いた事があるのですよ。」
「むゝ、」
「貴方、私に隠して居らつしやいますね。」
と莞爾、裏のないやうに笑つた。彌三郎は少し色を動かして、
「何だ。何を。」
「貴方と、」優しく「私を悪くお取りなさらないで、仕舞までよく聞いて下さいましよ。私今日ね、貴方が内所にして居らつしやる向島のお方の事をね、一寸ですが聞込んだのですよ。」
「失策つた、」

彌三郎は火鉢の縁を丁と叩いた。
「知つたか。むゝ。」
と目を瞬つたが、忽ち、
「あッはゝゝゝ。や、知れたら是非がない。眞直に白狀する。や、何うも、—
と手を返して頭の前に押當てた。お組は落付いたやうに、」
「よく直に言つて下さいました。私は又貴方がお隱しなさるかと思つて心配しましたよ。ほゝゝ。」
「なに隱した處で仕樣がない。お組、あれはな、實は、—
お組は遮ぎるやうに、
「貴方言譯ならばなさるには及びません。私は厭な事は決して言ひません。最う然うなつた上は、お互ひに美しくして打明けた事にしたいと思つて、すつかり考へましたが、貴方私の心を了解んで下さいましやうね。」
と直と見て、わりない態で言つた。彌三郎はぢッと見詰めて暫く無言で居たが、

「お組、」

「もし、聞いて下さい。私はね、貴方からよく言つて戴いて、其向島の方に逢ひたいと思ひますよ。逢つて置きませんとねえ、お互ひに解らないで、つい餘計な疑り合ひなどをする事があるだらうと思ひます、そして彼方からも心易く本宅へ出入りをするやうにして貰ひたいと思ひますが、

前の本南部の鐵瓶を脇へ、火鉢の上に手を翳して、彌三郎は耳に留めて聞いて居たが、

「お組、お前は先の事を何處まで知つて居るのだ。」

「いえ私もね、有りやうは又聞きですから、立入つた事は未だよくは知らないのですよ。それに又、そんなに根を掘つて聞かうとも思ひませんでした。ただ以前芳町に出てお出だといふ事と、それから最う身重になつてお出だといふ事に、」

「むゝ、それまで知つて居るのか。」

と流石にきまりの惡い思入、苦しさうな笑顔が見えた。

「然しそれでなくつても、貴方が最う脇へお置きなすつた上は、私は何處までも今言つたやうな融合つた事にしたいと思つて居ます。」

「むゝ、」

と彌三郎は重苦しい聲で、

「お前の出やうがそれだ。俺は最う何も言ふまい。默つてお前の心意氣を買ふ事にしやう。」

「え。」

とお組は悦はしげに、

「貴方聞いて、下すつたの。本當に、よく聞取つて下さいました。若し態と言ふやうにでもお取りなすつて、直に御承知をなさらなかつたら、と詰らなく案じもしましたが、あゝ、これで胸が開けるやうな心持がしました。」

「解つた、何も大目に見て居てくれ。お前を知らない俺ではない。兎もあれ然う行けば何よりだ。」

「それからね、貴方、」

とお組は他事もなく

「未だ甚麼人だか知りもしないで、恁麼事を言ふのも何ですけれども、先の方に何うぞ初つから捌けてくれるやうにね、貴方から事を分けて仰有つて戴きたいのです。」

彌三郎は皆まで聞かず、

「そりやア最う一も二もないわ。下らなく氣を廻しやがつたら俺が承知しないわ、」

「貴方、其方の名は何と言ふの。」

問はれて、たぢろいで、

「名なんざ可いやな。」

「おほゝゝ、可いたつて可笑しいぢやありませんか。」

「何うせ其中に知れるわな。」

「仰有いよ。」

「止せ最う。」

「おほゝゝゝ、それぢやまア知らないで居ましやう。然し貴方今に見て居て御覽なさい。私はね、屹度貴方より仲を好くして遣りますわ。」

「はゝゝ、何もお前に任せるとしやう。や、俺は未だ用があつたつけ。お組其事は又後に緩くり談話さう。」

と身を返して、背後の柱の電鈴を押す。喜代が小走りに來て、手を下に。

「御用でございますか。」

「むゝ、定吉を呼んでくれ。先刻の書付を持つて直に居間へ來いと言つてな。」

「はい。」

と、喜代は店へ。其間に彌三郎は、今夜歸つて受取つた手紙を一纏めに持込んで立上つた。

「お組あとから火を持たして遣してくれ。」

言捨てゝ出て行つた後影、お組はぢッと見送つたまゝ、あゝ、恁うして濟むのであつたものを、はしたない事をしないでよかつた。と我と我が身に思はずも感謝するのであつた。

（八）

「望みの如く、お組は幾程もなく思つた通りを事實に見た。向島の隱れ家の、も、嘗て苦勞をしたゞけ通つた女で、お組が奇麗に出てくれたのを喜んで受けた。お組の創意で二三日の後、芝居で初めて逢つてから、二人は何の綾もなく互ひに心を殘さぬほどに最うなつて了つた。

女はお仙と言つて、お組に一つ下、逢つた初めから能く讓つて、味方になると脆いほど優しいのであつた。

僅かの中に互ひの往復もあつた。お組は姉妹のやうにと言ふ。お仙は勿體ないと言ふ。半日向島で遊暮らした事もあつた。

お組は兎も角嬉しかつた。今日は殊更晝前良人から今度小野寺子爵が、向ふ一年を期して海外漫遊の途に上るといふ事を聞いた。一時とは言へ矢庭に暖め鳥の放されたやうに、はツと思つたが、あの移り氣の人、若しこれぎりに、此苦から離れる事が、とほツと息のつかれる心地。かてゝ加へて父の純造から

其昔何か舊藩主の爲に盡した事で、今まで隱れて居た其功勞がゆくりなく見出されて、辭したが聽かれず押付けに、土地と株劵の贈り物があつたといふ報知を聞いた。それも心喜びの其晝過ぎの事。

今、紺屋から屆けて遣した小紋帳を手に取つて見て居る處へ、喜代が水差を持つて其處へ入つて來た。

「喜代、大山さんは、」

「はい、未だ由どんの處に、」

と喜代は水差を、いつもの茶簞笥の脇に置いて、打向ふと、

「何ぞ御用でございますか。」

「あゝ、跡で私が少し診てお貰申したいからね、彼方が濟みましたらと一寸言つて置いておくれな。」

喜代は驚いたやうな顏をして、

「おや、何處ぞお惡いのですか。」

「なに氣分は那樣でもないがね。何だか食が進まないし。胸の加減が可くな

いやうだからね、序に診て貰つて置かうと思ふの。」
「はい、それぢや直に行つて参りましやう。」
と尻輕に出て行つた。
大山といふのは、掛り付けの醫師晝から由造が病氣で部屋に引込んで居るのを丁度診察に來て居たのであつた。
お組は待つ程もなく、喜代が先に立つて、
「あの丁度お濟みになつた處でした。」
續いて丸顏に頰髯の見るから愛嬌に富んだ風、下り眼に箒のやうな眉、氣の輕さうな大山醫師、五つ紋の、ぞろりとした扮裝で入つて來た。
「やア何うしました。」
と馴染顏の直な言ひやう。
お組も莞爾して、
「いえなに、わざ〳〵診て戴くほどでもないと思ひますが、お出になりましたから序に一寸と思ひまして、お願ひ申しました。」

「や、それは、」
と向前へ薦められた座蒲團の上に一寸會釋して押直つた。
「由造は何うでございます。別に氣遣ふほどではないと思ひますが、」
「はアなに至つて輕症ですから、少しもお案じには及びません。明日一日も過ぎたら最うよいでしやう。時に御主人は、」
と喜代が注いで出した茶を一口、
「今日は那邊の方へ。」
「先程用向で、一寸横濱へ參りました。」
「ほう横濱へ、相變らずお忙しいと見えますな。」
「はい最う何ですか、彼方此方とよく出て歩きます。」
「いや然し御繁昌で結構です。何うです此頃は碁の方は、」
「碁も最う一向のやうですよ。いつでしたかそら夜分貴方がお出でになつて良人と奥の六疊で、一晩お手合せをなすつた事があつたでしやう、あれッきり最う碁盤を出した事はありません。」

「はゝア、いや彼の時は大敗北。はゝゝ手酷く叩かれましたわ。」

と顏を顰めて薄笑ひ、お組は愛想らしく、

「おや然うでしたか。まアいつもにもお似合ひなさらないでしたねえ。」

「いやなに其中に一つ夜打ちを掛けましやう。」

と語調をかへて、

「どれ、御容體を。」

「はい何うぞ。」

醫師は鞄を引寄せて、打診器、聽診器などを取出して前に置いた。お組は近く膝を進めて、やがて問はれるまゝに容體を話して行く。はゝア成程と輕い受言葉の間に脈を見、舌を檢し、眼を檢し、横にならせて胸から腹へと進んで行つた大山は其時輕く、

「おゝ、」

と思當つたやうな聲音、お組は聞咎めて顏を見上げたが、深く怪しむともなく、其まゝ眼を逸した。仔細に診て行つて大山は、終つて元の坐に返ると、お組の

問出すより先に、
「お喜びなさい。御懐妊です。」
「えッ。」
お組は其やうな事を言はれやうとは、全で思ひも掛けずに居たので、不意を打たれて、驚く其儘忽ち颯と顔を赧らめて、さも極り惡げに差俯向いた。
其時、其時であつた。矢庭に胸に閃めいて來た者し雲か嵐か血の海か、渦巻き昇る輪の中に、お組はあり〳〵小野寺子爵の愉快らしく笑ふ赭ら顔を見た。
お組は最う大山の言葉は、何も耳に入らなかつたし

（九）

其日からしてお組は一日として心の安まる時は無かつた。お組は生れながらの子煩惱の女で、全で縁もない人の子を見てさへも、可愛さに目を無くすほどの質であるから、況して自分に何れ程子を欲しがつて居たか知れぬのである。是迄も空憑めに、母と呼ばれる日を何れほど待つたか知れぬのである。それが今眞實となつた。尋常ならば何れほどに喜んで、何れほどにも勇んだらう。如此して、如彼してと前から心細かに先の先までを胸に築上げて置いた、其いろ／＼を殘らず此處へ持つて來る事が出來る。それが何うであらう。お組は全で最うそこ處では無いのであつた。

跡から恐ろしい疑ひの雲が殆んど何をも闇にして了つた。良人の子御前の子其やうな事を思ふさへ何れほどか淺猿しい事ではないかと、お組は身にしみじみと情けない心を覺えた。

打消しても打消しても、追掛けるやうに沸いて來るのは有るに有られぬ方の

事ばかり。若し然うであつたら何うしやう。汚らはしい那樣者を片時も宿して置かれやうか。置かれぬと言つて何う仕樣があらう。今からは生れるまで、生れてからは一生の間、見る度に身の罪を數へられる。何のやうに憎く、何のやうにつらく、何のやうに又悲しからう。いよ〳〵然うであつたら最う生きては居まいとまでに思つた。

思つた其中にも又思亂れて、あゝ親として子を慈まぬものはない。乳に取付かれたら、慕はれたら、纏はられたら、外ならぬ生みの子のつい引かされて、最惜しくなつて了ふやうな事に、と思ふと冷水を濺掛けられたやうに、身の毛も彌立つばかり竦然とした。

悶えに悶えて、幾度か言ひかねては躊躇ひながら、お組は遂に此心を彌三郎に打明けた。彌三郎は期して居たやうに、それほど驚く色もなく、笑つて事もなげに、

「出た處勝負だ。那樣下らない事を心配して何になる。馬鹿な、もつと膽を大きくして乘出す處へ乘出すやうにしろ。可しさ。俺が承知して居れば何

の事もありはしまい。最う那樣事は決して思ふな。」
とお組が思ひの外の挨拶であつた。お組はせき上げて、物も言へず膝に取付いて泣いて了つた。
お組の實家方では、其やうな事を素より知らず、お妙も純造も、聞くと共に待設けたやうに喜合つた。お妙は取るものも取り敢ず來ると其まゝ、
「おゝ、お前！」
と其時の顏色は、お組の眼に何のやうに映つたらう。お妙は我を忘れて品に形に、止め度もなく出て來る言葉に、溢るゝ喜びに押されて、人の見境も付かぬほどであつた。お組は殆んど座にも堪へられなかつた。
流石に終には心付いて、中途に礑と言葉を止めて、思はず打目戍ると共に、
「お前、何うかおしか。」
お組は周章返つて、
「いえ、なに、何ですよ。昨日からね、譯もないのに何だか鬱いで了つて仕樣がないのですよ。何も那樣事はありもしないのに悲しくなつて、涙が出たりな

んかするんですもの。おほゝ、那樣に變に見えますか。」
お妙は半ば聞いて、それと獨り合點の旣最う首肯いて了つて、
「おうそれならな、に案じる事も何もない。矢張お腹のね、それからの加減だよ。那樣事は有勝だから何でもね出來るだけ氣を樂にして、身體を大事にするやうに爲なければならないよ。」
と續いて直にこれから先の日常の注意、何から何まで事細かに割つて聞かせるのであつた。お組は尻聲の消えて行くやうな返事で、心は空に只聞いて居るばかりであつた。
時は過ぎても事は變つても、其疑ひは解くに解かれず、お組は心の責を身一つに、晝となく夜となく惱み苦み歎き悶えて時を送つて行く。
店は其間に、めき／＼と猶繁昌して行く。彌三郎は勝に乘つて更に手を擴げては、一步十步、飽まで先へと進むのである。
小野寺子爵は過ぐる某の日盛な見送りを後に漫遊の途に上つた。到る處に歡迎の噂は逸早く、新聞の上に傳へられたのであつた。

（十）

「お組、一寸御覽。先刻の舟は最う那麼處まで行つて了つたよ。」
と開放した障子に近く、お妙は外を指さして莞爾やかに振返つた。其處から目の下の湖を繪のやうな小舟が一つ、岸の彼方に巍然として立つた旅館の下を、水に一筋舟路の跡を曳いて靜かに漕いで行つた。

信州梅澤の里、こゝはもと彌三郎と親交のあつた杉浦某の別莊であつたのを、近頃彌三郎の手に讓受けたのである。

お組は其後、日に添へ衰へて行くばかり、果は床に就くほどになつたので、未だ臨月には餘程間もある幸ひ別莊も出來た事、這麼騷がしい處に居るよりは、彼方へ行つて暫く保養して來たら何う。土地には病院もある。僅か離れて町もある、便利には事を缺かぬ。何彼の手當は勿論整へて遣らう。からと恁ういふ事で、お妙と喜代今一人臨時に雇入れた產婆代りの女が付いて、お組は此間から此處へ來てぶら／＼病ひの、寐たり起きたりして居るのであつた。

髪も櫛卷きに、瘠せ衰へて、色は透徹るやうに眼は落ち、頰は削げて肩の細りも、痛々しいやうな窶れやう、夏ながら未だ袷のまゝで今は母親が指さした方へ力無げの眼を向けたが、義理のやうに、

「おや、ほんに。」

とばかり懶げに最う脇を向いて居た。

お妙は一わたり彼方を打眺めて、

「天氣が好いから今日は遠くまでよく見えるね。何うだえお前庭へでも出て見ては、今日は餘程好い心持のやうだね。」

「はい、少しは好いやうですけれど……………矢張何うも、」

と勢がない。

「那樣事を言つてないで、まア出てお見な。些少は又氣晴しにもなるだらう。喜代も初も其中に歸つて來る。今に又お隣りの別莊の、小川の奧さんもお出でになるだらう。皆で昨日のやうな事でもしやうわね。」

とお妙は何彼に紛らして遣らうと思つて、老も忘れて、努めて氣を若くして居

る。お組は猶張合ひのない聲で、
「いゝえ、まア恁うして居りましやう。何を見ても別に變りはありませんから。」
「あれ何故然うだらうね。那樣に氣を弱らせて居ると、病氣に喰はれるばかりで仕樣がない。一日も早くよくなるやうにね、くよ／＼思ふ事は何うぞ最う止しておくれな。」
お組は俯向いて、默つて膝頭を見詰めた居た。お妙は坐ろに、
「本當にねえ、何うして這麼事におなりだか。彌三郎さんは彼の通り、えらい勢ひぢやと、いつか坂田の隱居が、あの脇の事を決してよく言つた事のない人さへ蔭ながら驚いた程。私の方は私の方でお前も知つての思掛けない事になつて、以前とは行かないまでも今の二人には餘つて返る程になつた。お前さへ此中でよかつたら、好い事ずくめで何れほどか命も延びると思ふのに、儘にならないものだねえ。まア／＼何うかね。精出して藥も飲んでね、自分にも氣を張つて、元の身體に早くなつておくれよ。」

お組は顔を上げて言葉もなく打目戍つたが、目を屢叩くと稍迫つたやうに、
「阿母樣、」
と言つて息を繼いでやがて鼻聲に、
「濟みません本當に、お年を召した貴女にまで、這麼御苦勞を掛けやうとは、夢にも思つて居りませんでした。私は何といふ不孝者でしやう、お免しなすつて下さいまし。私も好んで這麼……………、あゝ何うしたら可いと言ふのでしやう。阿母樣。私は………」
と言敢ず旣さめ〲と泣くのである。お妙は慌てゝ、
「そ、そんな氣を出すのが可けないのだよ、私に何の遠慮が要る。氣を廣くして、一日增しに力の付く方へ、何故心を向けておくれでない。どの醫者も皆お前氣鬱とばかり言ふではないか。無理にも紛れるやうに爲なければならないよ。」
「阿母樣、」
とそれには答へず、お組は不意に、

「私貴女にお願ひがございます。」
「え。何だえ改まつて。」
「阿母様あの、」
と口籠つて居たが、惱ましげの目色を見せて、
「恁うして喜代と、あの初が付いて居てくれますから、私の居廻りに事は缺きませんし、儀助の老爺も、あの女房も娘も居ります。少しも不自由はございません。阿母様は一先づ歸つて下すつて、身體を休めるやうにして戴きたいと思ひますが…………」
お妙は聞きさして旣膝を進めた。
「まアお前今言つたばかりだのに、私に氣兼をしてくれては私は却つてお前を恨むよ。那様心遣ひを決しておしでない。それにお前何うして私が離れて餘所にぢッとして居られやう。それこそ氣が揉めて居ても立つても居られやしないわね。」
「けれども私は…………」

「あれ最う那樣事はお止しなさい。それよりかお前、おゝ、あの儀助でも呼んで、いつもの諧謔けた談話でも聞かうではないか。」

お組は耳に入れず、思込んで、

「いゝえ阿母樣、まアお聞きなすつて、」

「まア何うしたものだ。お前それも病氣のせいだよ。最う考へちやならないよ。」

「いゝえ、それでも……………」

「あれ未だ仕樣がないねえ。」

お組は押して又言はうとしたが、何としたのか、俄かに顏を顰めて、腹を押へたなり前へ、

「あ痛たゝゝゝ、」

お妙は吃驚して中腰に、狼狽へて口急しく、

「おや何うおしだ。え、不意に、まア何うしたの。」

お組は苦しげに息をついで、漸くに其下から、

「何ですか急にお肚が、」
言ひも終らず、悶えるやうに身を返して又、
「あ痛たゝゝ、」
「あゝ、折の悪い。まア兎も角も床へ。」
と急がはしく介抱しながらも、
「何うだえ。え、餘ッ程切ないの。」
「はい、何うも、恐ろしい痛み方で。」
と身を揉んで悩み出す。其時室を隔てゝ彼方に打連れて來る話聲、お妙は耳に留めると慌たゞしく、聲を揚げて、
「おゝ、喜代か。早く。こゝへ、早く。早く。」
彼方の二人は、今使先から歸つて來た、喜代と其初といふ老女であつたが、聞くと等しく、言ふまでもなく駆込んで來た。
「おやッ。」
「何うなさいました。」

初は流石に其爲に雇はれたゞけ、物馴れて甲斐々々しく未だ持つて居た風呂敷包を下に置く事も忘れて、うろ〳〵する喜代を脇から勵まして、まめ〳〵しく介抱する。お組は床の中に、はや唸き聲を立てゝ苦しみ出した。

程もあらせず、寮番の儀助といふ獵師上りの達者な老爺が、お組の今掛つて居る院長の許へと飛んで行く。儀助の家内もそれと聞いて織掛けた機を捨てて駈付る。家は俄に降つて沸いたやうな騒ぎになつた。

※　※　※　※　※　※

一日一夜の間それから引續いてお組は苦しみ通した。前後も覺えず周圍に誰が居る事も、自分が何のやうに扱はれて居る事も劇しい苦しみに半ばうつつで、我かの心さへ何處へか消えて了つた。あゝ、これは流産をするのだな。と思つたが、それも夢のやうで跡から身を絞るやうな惱みに亂れて、何も全で解らなかつた。

遠い、遠い處から、何物か、幽かに呼ばれるやうな心地で、漸くに正氣付いた時は疲れて綿のやうに、力は全で脱けて、身を動かす事も出來なかつた。枕元には

電報に呼ばれて來た彌三郎の顏、母の顏、醫師の顏、初、喜代未だ其外に誰か居た。忽ち耳に入る良人の聲。

「お組、氣が付いたか。確かりしろ。最う大丈夫だ。」

「おゝ貴方。」

「むゝ、」

お組は何か言はうとして言葉を整へる事が出來なかつた。お組は程もなく、母から流産の事を聞いた。お組の色は、目に立つて動いて見えたが忽ちにして、又はら〳〵と涙を流したのであつた。

（十一）

彌三郎は忙しい身の、日ならずして歸つて行つた。お組は又三人の女の手に介抱されて、漸くにして稍力付いて來た。

お組は自由の身となつた。日も夜も分かず、果もなく身を苦めた其物は最う去つて了つた、お組の目の前に未來の光明はさも花やかな舞臺を見せて立つた。

けれどもお組は其やうな事を何とも思はなかつたそれよりも。先に、又新らしく直と心に忘られぬ影を殘して行つたものがあつた。

お組は頻りに過ぎた事を悔み出した。そして何物にか詫びるやうなさまに見えた。

五日ばかり過ぎての夜。

其夜は遲くまで目が冴えて寐られぬまゝに樣々の事を胸に描いて、疲れて漸くに寐入つたのは幾時であつたか、半ばに一度物驚きをして不意に覺めて再

び目を閉ぢた其後であつた。
何處とも知らず、目の覺めるやうな、美々しい殿作りの中にお組は何で來たと覺えずに來た。間每々々、廻廊は遠く彼方に續いて、先は見霞むばかり。障子は何處も殘らず閉つて居た。
不意に、良人の聲が、襖を隔てゝ間近に聞えた。おや、いつの間に先へと思つて走り寄つて襖に手を掛けたが、さながら釘付けになつて居るやうに、引けども、引けども開かうともせぬ。
「貴方。貴方。」
と呼んで見たが返事がない。態と隱れて居るとばかり直に廊下から廻つて前の障子を開けて中へ入つた。
と見たが影も見えぬ。いつの間に何處へ行らつしたのだらう、未だ那樣隙もありはしないのに、まア、何の御冗談をなさるのだらう。と一圖に隱れて居ると思つて、隅々物の陰屛風の背後などを撿めて見たが、はてなと流石に不思議立つた。其時不意に片脇の、何とも正體の解らぬものが目に留つた。丈は五

歳位の小兒ほどに見えたが、上からすッぽりと、被衣のやうな着物のやうなものを引冠つて、前を引合せて居るので中は全で見えぬ。

お組は最う良人の事は忘れて了つて、怪しみながら近く寄り竊と上の着物のやうなものを引上げると、するりと脱けて、下に又一枚色は違ふが同じやうなものを冠つて居る。

不思議に思つて其又着物を引上げる、同じく手に從つてするりと取れて、其又下に未だ冠つて居る。

一枚、一枚、幾枚取つても幾枚取つても、いつまでも同じやうで果しが付かぬ。

お組は腕もたるくなつて、ほッとして、呆れて立つと、突如に、

「見せて上げやうか。」

と中から聲を掛けてひらりと冠つたのを脱捨てると丸裸の、くり／＼と肥つた、さも愛らしい男の兒であつた。

「母さん私だよ。」

お組は吃驚して引下がつた。見ると其顔は彌三郎に生寫し、

「母さん、お前は私を殺したんだ。私は這麼になれるんだよ。私は殺されたんだい。手こそ下さないが、え〻、殺したんだい、お前が。」

お組はわな〳〵と總身を慄はせて、それなり下へどうと膝を支いた。

「母さん。」

といきなり其子は飛込んで來て、膝に跨つて犇と抱付いた。お組は思はずあツと叫んだが、叫んだ其聲に驚かれて、愕然として目が覺めたのであつた。

お組は岸破と起上つて、きよろ〳〵と四邊を見廻した。外は風を巻いていつの間にか雨になつて、ざア、ざア、ざッと落して來る聲が、響を打つて母さん、母さんと呼ぶ。はつと思ふと、軒を廻り、木の葉を打ち、水を叩き、風に揉まれて、聲を揃へて一齊に、母さん〳〵〳〵。

お組は耳を掩うて前に突伏した。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

雨は小止みもなく、次の日一日を降通して山は雲に、林も雲に湖畔の此家は、松も柳も、軒も垣も、一圓濛々とした中に裹まれて、波立つ水の黄に濁つた湖水は

半面茫として舟も見えず、氣候は急變して俄かに秋のやうな心地を覺えたが。
お組は其日から逆戻しに、又も枕を上げず、さなきだに前からの病氣揚句、常ならぬ產後を受けて、身躰は更に衰弱して來た。
越えて一日、未だ宵の口であつた。
すや／＼と寐て居たやうであつたが、矢庭に消魂しい聲で、
「あれえ。」
と言ふと、寐亂れ髮に波を煽つて、さながら彈かれたやうに起上つた。不意を打たれて、お妙も初も、驚いて慌たゞしく、
「何うしたの。」
「何うなさいました。」
双方同時に、急がはしく目を押向けて枕に近く膝を進めた。
喜代も逸早く聲を聞付けて、用を捨てゝ彼方から驅込んで來た。
お組は物をも言はず、額を横に、色の褪せた羽二重の鉢卷の上から、亂れて振冠る髮の毛を其まゝに、落込んだ眼をきよろ／＼させて、前に居並ぶ人の顏を只

見廻すのであつた。

「お組、何うおしなの。夢でも御覽なのかえ。吃驚するぢやないか。え、何うしたのだよ。」

お組は猶も其處等を見廻して居たが、

「今來たのは何ですの。」

「えッ、」

「今阿母樣が連れて入らしつた。」

「あれ、私は先刻から此處に居るぢやないか。夢だよ、それは。」

お組は目を睜つて反對にお妙の顏を打目戍つた。

「まア何を仰有るのでしやう。私些少も寐はしませんよ。」

「えッ、」

とお妙は、又更に驚いた目を擧げたが、やがて靜かに、宥めるやうな調子で、

「お前今夜は何うかしてお出でだよ。少し落付いて氣を靜めるやうにおし。矢張先刻からの熱の加減だらう。然うして居ちや惡からうから、横になつて

まア身躰を休ませるやうにおし。」
言ふ尾に從いて、傍から初も、
「それが可うございます。まア、まア、お休みなさいまし。些少又お摩り申しましやう。」
と脇へ廻つて、心得顔に衝と蒲團の端へ身を進めた。お組は後へ引くやうに、振返つてぢッと見たが、不意に、
「お前は誰だえ。」
初は思はずも又、眉を寄せやうとしたが直に笑つて、
「あれ、まア何うなさいましたの。おほゝゝゝ、初でございますよ。」
「初！」
「はい。」
お組はけろりとして、何も耳に入らぬ態、暫くして氣の脱けたやうに、がツくり頽折れると、初に扶けられたも知らず、倒れるやうに身を横にした。
これが最初であつた。

時を待たず、跡から押冠つて、霧の掛つて行くやうにお組は次第に以前のお組のやうではなくなつた。思ふ事は只現在の、それも殆んど常識を失つて居た。何者か來て、前に囁き、背後に忍び、其處に隱れ、彼處に現はれ、離れて招き、近く寄つて纏付く、お組はそれのみに心を疲らして居た。

颯と山風が、靜まり返つた湖水の面へ吹落して來ると、さら／＼／＼と、波は蜿りを打つて直押しに此方へ押寄せて來る。颯と吹き、颯と吹く、一陣、二陣、其度毎に葉末の露の、音を亂して吹散ると見ると、四邊は騷然として、雲も水も、草も木の葉も皆動いた。

日は十一日、時は眞夜中を過ぎて居た。

お組はゆくりなく目を覺まして、何とはなしに聞耳を立てたのであつた。近くに居た誰も彼も看病疲れの寐入つたあとは何も知らず。

外は風の聲。

隔てた下に、ざぶり、ざぶりと、岸を洗ふ水の音が續いて聞えると、草を渡り、木々を搖つて、跡から妻戸に音訪れて來る。隙間を洩れて、障子の紙が、煽られては

たはたと鳴つた。

「行くよ。今行くよ。お待ち。あれ、せはしない。」

お組は立上つた。病衰へた寢衣姿を、其まゝ掻繕ひもせず、ふら〳〵と正躰もなく、夢心地で前へ踏出して、よろめきながら部屋を外へ、千鳥に縫つて出て行つた。

障子を開けたも、縁へ出たも固より覺えず、何處から下りたか、お組は素足に土を踏んで、風に揉まれて庭の四目垣の外に立つた。

空は降るやうな星の影。

ぼうツと黑く、水に臨んで突出した岩の端が目近に見える。草の繁みに、風の絕間を蟲の聲。

それか。

「此方よ。此方よ。」

「あれ、何處。」

「此方よ。此方よ。」

遠く近く、絶えては又起つて、彼方へ、此方へと呼立てる。お組はよろ〳〵と、西へ東へ、裾は露に、足は茨に、それも覺えず、惹かれ、惹かれて尋ね迷ふ。

「此方よ。此方よ。」

「あれ、又那樣處へ。お待ち。待つてお出で。直に行くから。」

「此方よ。此方よ。」

「あいよ。待つてお出で。」

「此方よ。此方よ。」

風は折しも息を休めて、松は黒く、岸に屹立ての岩を劃つて、星を鏡の水の面は、闇を透して同じく黒くきらりと光つて、沈とした夜の姿を、前の草叢に、一しきり虫の音が澄切つて聞えた。

「此方よ。此方よ。」

お組は走るやうにして駈寄つた。岸を離れて九尺に足らず、ぴッしり露のさながら雨の跡のやうな、葎の中を踏分け踏越え、時も處も上の空の、お組は直走りに、よろめき躓き、身の危さも何も知らず、一意に前へと進んで行く。咄嗟と

見る間に石か、根株か足を取られてばツたり横へ、合羽を煽つて伏轉んだが、はや先のない崖の端、幾年越しの苔の滑りに、つるりと辷つて乗出す途端、翻筋斗打つて眞倒まに下へ落ちた。

あッと叫ぶ聲と諸共、水は時ならぬ贄を受けて、驚き騒ぐ波を揚げたが、其まゝ一呑みに、躍つて抱込むやうに底へ沈めた。

誰も知らぬ。闇を通して、又もや風が吹いて過ぎた。跡を一引き、颯と流れて星が飛んで其時五位が、姿は見えず上を鳴いて行つた。お組の閉殘して行つた隅の雨戸は、物言ひ顔に半ば開いたまゝで、中は音もせずしんとして居た。

一軒百姓

（一）

星一つ高く照して暗は山より林を罩め、鎮守の森向ふの山は薄墨色せる幕に包まれ、村は其下にほのかなる輪廓を見せて燈火ちらほらと其處此處に見ゆ。暗を隔てゝそれとは定かならねど、田をも畑をも交へて茅屋六十ばかり、斜傾せる地勢は家並み亂次に、街道を過ぐる旅人それも見えず、闇を縫ひ行く村人も通らで、動かぬ林は次第に増せる星屑と我もの顔に打臨み、葎に喞く虫の音漸く滋く、夜を警むる犬の何に驚いてか、藏の戸口に吠立つる一頭。

此處は村の中央らしく、道の脇に少しく左へ寄りて、槻杉高く聳ゆる木立を背後にせる茅葺の小さき庵室の前、約一反歩の平地なり。若者五六相集ひて何を話すか、燐寸の光は時ならず打集れる顔を示して、煙草の火のみ紅う殘れる、折しも亦來る一人二人。

「今晩は。」

「お揃ひで。」

を口切りにや、

「や、常と寅が來た。」

と談話は更に賑はしく忽ち笑聲一團に起り、一團は又、來いと言ふたとて行かれっか佐渡へと、誰が歌ひしか心行くばかりなるに喝采しぬ。女の噂隣村の若者が火防道具揃ひし話、誰が傳へけん近き頃の東京の噂など、それよりそれと移行く浮世のさが、何時か談話の絶間なる其時、隔たれる彼方の家に女共の笑聲、

「やア、集つたやうだぜ。」

「それぢや出掛けやうか。」

と他は應へつ。

「今日は初めての晩だ。寅、汝も交際へ。」

「俺、御免蒙らう。樽田の阿魔に濟まねえ。」

「ふざけるな。行かなか行かねえで可いや。のろけるない。」
「はゝゝ岡燒と來たな。面白いや。のろける樣にや誰が爲たい。金造、汝もそら待たすがも氣の毒だちや。樽田の橋で今頃は出て居るぞ。」
「ほう、又樽田組が空威張か。樽田組は樽田組さ。俺は俺がに爲るさ。此處で斯うして居ても詰らねえ。さア行かうちやねえか。」
と言ひさま立上る一人を先に立てゝ、跡より續く若者等の談話は歩みがてらに、米山甚句口にうなれる、浪花節に獨りよがれる、鳥羽繪の活動寫眞其儘に、此處を去つて行くは何處ぞ。跡には虫の音涼しく起る。
村の片隅兎ある茅屋に燈火際立ちて笑聲漏るゝ、中は廿三四を頭に十人ばかりの女共、五分心洋燈を取卷きて芋を績ぐに暇なし。談話は此處の小天地を出でぬ出來事にて、多くは人の陰口のみ、此處は北越の片田舍小千谷縮の產地、こは其が原料の苧を績ぐなり。雪深くて養蠶の業普ねからぬ此處は副產物に縮織れば、野良を歸りて夕饗了ひ家を定めて其處に寄り、手間を厭はぬ苧績事。若者共は來りて此處に遊び、笑ひつ狂ひて果敢なき戀を此處に語る。庵

室の前に集ひし若者等は、やがて足音を高く響かせて、

「やア今夜つからか。」

を挨拶に、皆々中に入り込む。戸襖なしの明け放し、寐室と水板は相對ひて、脇は厩屋續きの出入口、藁むしろ敷きし土間と隣りて、膳棚はそが片隅に片脇に、鍋を置きて、右手に三尺の窓、衣物二三枚其下の竹に掛る。

寐室に併びて一段高く緣張りせし處に、佛壇は六尺床と併び、若者等は土間の障子を開けて出入す。女は其處の緣に圓座して苧を續ぎ、若者は土間に集ひて談話は前に惚けし寅が身に燃出でぬ。

「なア、寅の野郎豪儀に威張るが、此の中で樽田のお時見た者あるか。」

「汝は未だ見ねえがゝ。お時を。」

「おう。どんな縹緻だ。」

「なに、ろくなもんぢやねえ。まア十五人並かな。」

「笑はしやがら。それで彼樣に力味むがゝ。」

「然うよ。彼奴も餘程薄鈍だな。」

言ふは廿二三の若者二人、地木綿の素袷着たると單衣に羽織引掛けたるそれ。

「寅ばつかぢやなからうぜ。」

と色は日に燒けたれどもさまでは黑まず、二子の袷兵子帶仔細に結びたる、廿左右の若者の微笑みながら言へば、

「何んだと。」

「はゝゝ何でも可いや。」

「喜三甘くやつたな。和平の好男子やい。」

など打囃すに、兵子帶は得意顏。女も績ぎがてらの談話絕えず、色黑く銀杏返の際立ちて大なる、手織の袷相應はしき十九ばかりなるが、

「なに喜三だつて威張られた義理ぢやねえがだぞ。此頃人の世話で情婦の一人も出來たつてがで。」

と言ひも切らぬに、

「そら和平、力め。情婦の加勢が出たぞ。」

忽ちにして苧績みは何處へか。らちなき談話に彼此等しく入亂るゝ、それも

少時、障子引開けて、萬筋の單衣に唐棧の半纏色黒く眉秀で口元しまりたる若者入來る。挨拶も惡くからず身のこなし廿には大人びて、張分けの煙管を洋燈の上に翳しつ一服の煙豊かに、

「もう苧績は大抵になつたがゝ、俺ア今日は皆に相談があつて來たがだが、寅の野郎なんて又樽田だな。仕方の無え野郎どもだ。まア可いや、寅が方は何うか俺に談話の付かねえ事もあるめえ。恁うと女は皆集つて居るな。なに澤が來ねえ。然うか澤が來て居ても仕方がねえ。あの阿魔は板屋と可笑いからなア。」

と其言葉に一座靜まりて見ゆ。年かさらしき女、

「豊作、何うしたがだな。そりや何の談話だな。」

「まア、皆よく聞いてくれ。恁ういふ譯だ。今十王堂の前で外の衆に話した處が、皆は差支あるめえ、ソッけえな、馬鹿の事はねえつて言ふだ。」

「豊、まア何の談話だな。些少も解らねえがに。」

と兵子帶巻きし喜三が不審の眉を顰むれば、

「待ちなよ。皆聞いてからにしてくれ。さう急付かれちやア困るわな。係うい ふ譯だ。あの利一郎な、何うした事かあれが家は村交際を止められて今ぢや一軒百姓のやうさな。其譯つてがも、そらまア皆が知つての通りの話さう。俺ア入らねえ事だでも腹が立つわな。」

「それが何う爲たつてがで、俺等に相談があるつてがだ。俺等に言つたつて仕方のねえ談話だ。」

としたり顏に手織縞の和平が言ふを、

「はて、默つて聞いてろ。これからが談話だ。係うと、あの利一郎さなア。遠慮して今迄家に居たでも、父と母と三人の鼻合ぢや退屈で何う仕樣もねえつて、それで今日向山の畑で何うだらう遊びに出ても可からうかつて談話。俺ア構はねえ遊びに出ろと言つて來たがな、皆が心持も解らねえすけえ、今も十王堂の前で金や猪の松なんてがに談話を爲たら、皆も構ふ者か若連中は若連中で村の關係にや構はねえつて言つてくれたがな。それでも女共が何うだか、外の喜三や寅は何う思つて居るかと思つて此處へ來たゞが、寅が方は俺が

何うにか談話を付ける事にしやう。きや、汝は年長だ。何うか返事を爲てくれ。喜三、汝もよく考へて返事してくれ。俺は汝等が心持まで言ふ譯ぢやねえでも構ふ事はあるめえと思ふが、汝等は何うだらう。」

語り終りて又も煙草の煙を立てゝ、ぢつと皆の者に目を注ぐ。喜三は咥へし煙管をはたきて、

「俺、構ふめえと思ふ。利一郎が遊びに出ねえがは然ういふ譯か。其樣な遠慮は無くして面白く遊ばうぢやねえか。女共は何うしる氣だな。」

きや返事とばかり目もて促す。俯向きて兎角うの返事もなく績むともなく績みつゝ居たるきやは、

「皆は何う爲る氣だか知らねえでも、俺まア皆が可いと思つた通りで、別段何といふ事もねえが、其樣な事なしに面白く遊んだ方が宜いぢやねえかな、皆は何う思ふ。」

「有難え。きや、汝が然う言つてくれゝば外にや別に何う言ふものもあるめえ。これで利一郎はどの位嬉しがるか知んねえ。俺も談話が屆いて嬉しい。

やア飛んだ邪魔したな。」
「何の這麼事が。」
と後は笑に落ちて、程もあらせず、尺八を吹ける月琴を合奏せる、女も績むを止めて爐に茶を飲むもあり、十八ばかりの色白く島田のほつれ毛顏に掛れるは豐作と話合ふ。和平は何やら面白からぬ顏して柱に凴れ居たる、折しも猿戸を開けて急ぎ足、
「汝等もう苧績は了へたらうな。夜業に手間が取れて出られねえッけでも、今日は始めての晩ぢやあるし、一寸顏出しだけしやうと思つて、明日から仲間に入れてくれ。おう豐作も來て居るな、きやや、今晩は。」
「おきく、來たな。まア何うしてさう精を切つた。」
「なに其處で追はれたもんだで。」
「然うか。」
などきやが脇に坐りて睦まし氣に語り合ふ。きやが何事か耳打ちに顏を紅めしが、

「有難うよ。」

「なにお互ひだな。」

家内は洋燈を圍みて移り行く談話面白氣に絶えず起る女の笑聲、何時しか集まれる男も數を增して、外に遊びなく僻地の野良仕事の慰藉を此處に集めたる態。

此時又も、

「お揃ひで、今晩は。」

と土間の障子を開けて半身を見せたる男、

「よう、好男子。何うして遲かつね。女共がこがれて居ましたぜ。」

「まアスいらつしやれ。那樣處で立つて居ねえで。風邪でも引くと氣が揉めるすけえ。」

誰かは知らず女が言へるを得意氣に聞流して、衝と入來る、千筋の紬の羽織に荒き久留米絣の單衣、鼠色スコッチの鳥打帽子冠り銀ぶちの眼鏡掛けて、色も黑まず指も優しく、繭紬の兵子帶の都めきたる年は廿二三なるべきか小作り

の歩み可笑しく、眼は斜視みの鼻低う口は流石に締りたり。坐に付きて袂を探り、ピンヘッドを象牙のパイプに挿みて、其の他人の注意を惹かぬをもどかしげに、袖に眼鏡拭きしも幾度、眼は絶え間もなくきくにのみ打注ぎぬ。

（二）

談話は同じ道を來往して、遊びは同じきを繰返す中にも、よく話す喜三巧みに人を弄ぶ豊作、きやは笑ひきくは默し、男と話すもあり立ちて帯結ぶもあり、坐相撲は一隅に起れば、一隅は又聲を揃へて歌謡ふ。月琴彈く者の合さんとして合ざるも可笑しく、思ひ／＼に戯合へる中に、眼鏡掛けたる若者のみ獨り取離れて相手欲しげに、袂を探りて手巾にパイプ拭きつゝ、

「然しそれは縣知事の意向一つで、巡査自らがそれを左右する事は出來んのぢや。」

と喜三が談話に横槍入れて、相手を冷やかに見詰むれば、怫として喜三は、

「それでも手心つて者がなくつちや、一年一度の盆踊だ。それを大目に見ねえで、何うなるもんか。」

「はゝゝ、そりや喜三が得手勝手で、巡査から言へば當然の職責ぢやからな。」

「また巡査贔負か。大抵にさつしやれ。漢語とか言ふ其言葉は止めてくら

つせえ。」
誰れとも知れず背後に叫べば、言葉を止めて怪しからんを口の内に銜と起ちてきやが脇に來り、
「きや、何うだ、いろが取れるか。あまり男を殺すも罪だぞ。ちとのろけでも聞かせて貰はうか。」
「はい。色が取れるせね。毎日笠一つで畑耘ひだすけえ此の通りだがね。お前樣も畑でも耘はつしやれな。色は直ぐ取れますせ。」
「何ぢや、はぐらかすな。聞いたぞ。お樂みがあるさうぢや。皆、きやがお樂筋を聞かんか。」
「あれ、お前樣は噓つきだね。お前樣こそあれだつてがね。あの澤と大變な情交だつてがね。ねい、汝等。」
「怪しからん。いや、僕には誓つて那樣者は、──」
「よう、板屋の好男子樣。澤が待つて居ますぞ。」
と忽ち口々に四方より、きやは打笑ひ。

「それ、其通りだがね。」

きくは何時か此處を避けて佛壇の前に坐りぬ。和平は起ちて何事か其眼鏡かけたる若者に囁き若者が幾度か首肯けるに、此處を辭して去りぬ。囁きしは何か、若者の顏曇りて、きやとの談話も止み、ピンヘッドの烟りのみ高く、女共の顏も勝れず怪しう一座白けぬ。されども喜三が輕口豊作が高笑のみは脇に取離れて、それに惹かれて女共の笑聲も時に低く洩る。暫くして、

「此の中で人は知らんが利一郎が爲に女共へ調停の勞を取つたものがあつて、女共は其調停者の言ふ通りになつたと言ふが、そりや何う言ふ譯か聞きたいものだが、きや、一體何うしたのだ。」

とピンヘッドさし易へて、不意に言出づる以前の若者、聞くより豊作は係くと期せる面持ちして、振返りさま、

「板屋の若旦那、那樣いやみらしい事言ひこなしにしましやう。今和平の馬鹿野郎から聞いたがだらうね。調停なんて、毛唐人の寐言見たやうな言葉は知らねえがね、女共に利一郎とこれまで通りに遊んでくれと談話爲たがは俺

だ。女共の知つた事ぢやねえ。その談話を爲たがは又惡りいだかね。」
「おう、今更言ふの必要は見ん。言はずとも明かな談話ぢや。」
「こりや面白え。それは又何ういふ譯だね。」
「言はずとも知れた談話だ。然し汝がさう言ふなら言つてもやらう。利一郎が親即ち勘作だな、」
「はア、勘作阿爺が何う爲たね。」
「默つて居なさい。人の言議中に、」
「はてようがすわ。それから、」
「其勘作だ。其勘作一家の者は一村の交際を絶たれて、今では一軒百姓の狀態に立ち到つて居る者である。また一方からは一村の契約として、竊かに勘作一家と交際を續ける者があるとすれば、其者の一家も勘作同樣村内の交際を拒絕すると言ふ事になつて居るのである。然るに今利一郎と以前同樣其交際を續けるとすれば一方では村内の契約を破り、一方では勘作一家は一軒百姓と爲た精神に戻るものと言はなければならない。此二箇の矛盾した結

果を生ずるから、僕は今汝が調停に從つて從前の交際を續けやうと言ふた女共に其理由を聞いた次第で、又其調停を爲た汝は已に利一郎同樣一同から其交際を絕たれねばならん者である。」

喜三は默し他はなほ言葉なく、女者は互に目を見合せては、互みがはりに豐作と若者とを打見やる。豐作は膝を進めて、

「むゝ、お前樣の言ふがはそれだけかね。若旦那。それだけでねえとしても理窟はまア似たやうなもんだらうねえ。お前樣が今言つた俺が利一郎と一所に交際を絕たれる。面白え。俺が惡けりや絕たれましやう。お天道樣は此處ばつか照らすがぢやねえから、村が戀しくつて學問半途で歸つて來た人とは些少違ふつもりだすけえ、立派に絕たれましやうぜ。俺がお前樣に聞きてえがは、利一郎が何の咎があつて、一軒百姓に爲られた譯だか其が聞きてえ。其譯だつて知らねえ事はねえ。明ちや言つてよくねえすけえ默つて居るが、まア勘作阿爺が一軒百姓に爲られた處で、それは村中の約束で、村中のものは成程さう爲なくちやならなからう。然し若連中と村中は別で、村中がさうだ

から若連中までさうだつて談話はねえと思ふ。もし利一郎が若連中に爲た咎ならそりや仲間除者にもしましやう。交際も絶ちましやう。それだでもかつ利一郎はこれまで若連中に付いちや隨分役に立つた男で、塵一本咎がなかつたがだ。それでも利一郎が遠慮深えすけえ、遊びにも出なかつたがで、なにも若連中から除者にした譯ぢやねえ。それであんまり氣の毒だすけえ、皆に俺から話しゝた處が皆だつてお前樣のやうな解らず屋ぢやねえすけえ早速承知した。皆が承知して見りやア些少も差支ねえ談話で、それに又女共も恁うして苧績に集つて居る中は若連中に付くか古來からの習慣で、して見りや若連中が承知したもんなら女共も承知するがは當り前の談話だもの。お前樣のやうに青筋立つて言はなくても可い譯ぢやねえかね。俺恁う思つて其調停つて事をやつたがさね。皆もさう思つて承知したがで、何も不思議のねえ談話だやねえかね。」

同時に喜三は聞えがしの獨り言、

「若連中の事まで若連中ぢやねえ人から口を入れられると困る。那樣人間

こそ仲間に入れねえが可い。」
豐作はあたりを見廻して、
「汝等は何う思ふ。」
とばかり若旦那を尻目に掛けて言ふをも待たず、
「成程豐作が言ふ處も一應の理窟は立つて居るが、然し又一方から……」
若旦那は急込みて何をか言はんとするに、
「今夜は餘程遲いぞ。明日の障りになる。皆戻つて寐やうぢや。」
きやは心利かして歸り支度すれば、それを機に忽ち崩れて、今の爭ひも何處へから喜三も豐作も、いつの程にか其處の女と連立ちて逸早くいづれへか姿を隱しぬ。
夜は更けてはや起きたる人もなく、林を渡る涼風木梢に鳴り、虫の音清く草の葉に宿れる露は玉を散らし、星美しう光りて鐘も聞えず、時に聞ゆる歌の聲は此處を去りし若者のそれなるべく、まだ去りやらぬ若者は、女の出づるを待ちて連立たん心構家の前は少許の空地の其先は楮畑、路は其處を通りていたく

蜒る。折しも猿戸を開けて立出づる女幾人、一人は急ぎ足に隣りの前を通りて、右に切れし小路に入れるを、何處より來りしか若旦那は追ひすがりて、輕く肩を打叩き、

「大層足が早いぢやないか。大急ぎでやつと追付いた。」

「然うかね。」

「おきく、今夜はお前を送つて遣らう。」

「はい。いゝえ、送つて貰はなくつても可いぜね。」

「またそれか。きく、大抵にしろ。些少は人の深切も受けるものだぜ。好いた人でなくて氣の毒だけれど。」

「はい。」

連立ちて歩む幾足、道は其處を過ぎて少しく廣く蜒らぬ處へと出でぬ。若旦那はピンヘツド吹かして、肩の動き異樣に、せゝこましき刻足、きくは俯向きて足取早く、

「あの若旦那樣。」

「何だね。」
「此處でお歸りなすつて下され。」
「なに、歸れつて。何うして。」
「はい。」
「何うしたのだ。」
「あの、人がまた厭な噂を立てますけえ何うぞ此處で、」
「可いぢや無いか。汝との噂なら僕は本望だ。なにも耻かしい事があるもんか。それとも彼の人でなくつちや厭なのか。」
きくは只俯向きて返事なし。稍ありて人家を離れて、杉の木立の一むら繁き方、
「きく。」
「はい。何うかしましたかね、」
「否や、お前は僕の心は解つて居るだらうね。」
「いゝえ。」

「なにまだ解らんのか。」

「はい。」

「それぢや餘りといふものだ。お前も最う子供ぢやなし、僕は衷心からだよ。浮いた心で言つたのぢやないぜ。お前と談話をしたのも一度や二度ぢやなし、なんぼ何でも大抵は解りさうなものだが、」

「…………、」

「お前は僕を嫌ふのか。」

「いゝえ、何の勿體ない。」

「それぢや僕を弄つて居るのか、」

「いゝえ那樣事が……、」

「それぢや何うしたと言ふんだ。僕を見れば何時も逃げるしさ、僕が胸を明かしてからも最う三月だよ。何方付かずにいつまで恁うして焦らして置くのだ。お前は面白からうが僕の身にもなつて御覽。そりやお前は面白からうさ。むゝ利一郎といふ男とこれ見よがしの情交ぢや外の者は目には入る

まいさ。殊に僕だもの、今夜なんぞは定めて憎い奴と思つたらうが然しこれも村の爲めに時には敵役ともならなくちや。」

と言葉を途切らせしが、重ねて又、

「きく、何とか返事をしな、默りぢや仕樣がない。おい、何とか言つてくれ。それぢや矢張不承知なのだな。よし、それなら僕にも仕樣がある。さア、何とか返事をしてくれ。これ、きく、」

「あれ。何を爲るね、放してくんねえかね。」

「いゝや、返事を聞かん中は……」

「それでも何と言つて可いか、俺には解らねえんが。」

「さア返事を。」

「何うか勘辨してくだされ。ね、後生だせね、若旦那。」

「勘辨してくれぢや解らん。返事が出來ないのは、何うでも僕を嫌ふのだな。」

「放してくだされ。何を爲るね。」

「それぢや返事をするが可い。返事がなきやア……」

「それぢやア返事をするがね、那樣事は俺厭だせね。俺末の見えない情交は厭だすけえ。何うか最う苛めねえでくだされ。」
「きく。」
「はい。」
「それぢやア末が心元ないから厭だと言ふのだな。」
「はい。」
「何の事だ。那樣事か。僕も男だ。誓つて變らんわ。」
「いゝえ、そりやお前樣の口上手からだで。俺が何うしてお前樣の……。」
「いゝや決して僞りは言はん。」
「否々俺騙かされねえせね。お前樣が何と言つても俺騙かされねえせね。
あ、若旦那、俺此方の路行ぐすけえ、此處で別れるせね。」
と矢庭に取られたる手を振拂ひて逃がれ行きぬ。

（三）

前に開けし水田を扣へて田を綴る杉の茂みも見るべく、遠く連なる小山重疊して松面白く青葉崖に懸り、東の空は遙かに見えず、北に起る小山の盡くる處雲とや紛ふ遠山參差隆起し、夕暮の光近き山々を照す、背後に些やかなる岡あり檜林茂り、岡は南に延びて取亂れたる八重葎、岡を越えて茅屋相並ひ村道其處に通じ、北はまばらに家建ちて、斜めに續く地勢の其頂きは鎭守の森、赤き鳥居の杉の木の間にほの見えたる、其處より右手にいと廣やかなる板葺屋あり。田の畔を踏んで北へと昇る坂路は前を通る、道の傍り屋敷の端、二戸前の藏は壁白くして丸に橘の定紋あざやかに、背後は岡をあしらひての庭廣く、雪にも折れぬ松黒く梅に櫻にやがての春を忍ばするばかり、何處よりか一條の水流れて半は泉水に入り半は南に延びし岡の根を走り、末は分れて田に灑ぐ用水沼に入る。水に副ふて岡の盡る處に屋敷に渉る大竹藪、北は通路を界に蔬菜を植ゑ脇には塵を積みて、梯子竹棹など種々の道具は軒に懸られぬ。李の老

木はそれを匿し、餘りの枝は延びて藏の屋根に擴がり、二三株の桐を其處に植ゑたる群を拔いたる家造り、こは此村の素封家勢力家なる板屋と呼べる家なり。遠く木の間を透して舊街道も見えぬ。日も沈み行きて野良歸りの若者幾群、其鼻唄の聲々もやがて休みて燈火早く見え初めたる頃、此一村の主人達は大方此家に集まりぬ。今宵村の相談のありとか。障子板戸に隔てられて奥は見えねど、土間は廣く荒莚敷きし臺所水板元臺所の脇帶戸半ば閉て切りて、下男らしきが夕餐したゝむ三尺五尺の爐は土間の近きあたりに切られ、鍋かけて物煮る、其處より上手一尺ばかり高めに廿五疊ばかり疊敷きて、こゝにも程よき處に爐を切りて鐵瓶の湯たぎり、茶道具も其處等に並び、正面の壁際に机を据ゑて帳面三四冊行儀よく載せられたり。用簞笥の金具きら／＼と取散らされし新聞紙四五枚小說本らしきも見えぬ。臺所の爐には五六人、五十恰好の人々集ひて薪添ふる下女に冗談口きゝて居たりしが、折しも勝手より來れる若者を見るより、

「や、若旦那樣。今晩は。」

と挨拶手始めに浮世談話の序開き。若旦那は衝と立ちて上の疊敷ける方の爐に近づき、新聞片手に低きながら音讀す。臺所には又二三人新らしき顏見えぬ。

「やア、これは新屋敷さ。早かつたね。」

「よう、大門さか。さア、まア此方へ。」

「皆早かつたね。俺が一番槍だと思つたら、時に新屋敷さ。今夜の相談つてがは何だらう。」

「さア俺も知らねえが、何も別に相談の入る事もねえがだがさう。集れッてがだすけえ集つちや來たでも。」

と眞鍮煙管啞へて小聲に囁き、

「何うだい彼の樣子、日本一の學者は俺だと言はねえばつかぢやねえか。あの新聞の持方は何うだ。さうして旦那は未だ出ねえがヽ。」

「然うだ。」

「然うか。時にあの若旦那は、あれでお前何ていふ事た。新右衞門のおきく

に、だアさうだな、」
「然うだとよ。」
「それが今夜は家に居るがは不思議ぢやねえか。」
「なに不思議の事があるもんか。あれで今に何時の間にか出て了ふから、」
「はゝゝゝ世の中にあれッ位、こせついた上づッた野郎はねえな。」
「おい、止めろ。聞えると惡いぞ。」
「むゝ、然うだな。」
「時に大門。」
「おう、何したがだ。改つて、」
「なに外でもねえが。お前の處の柿の木な。」
「おう。」
「あの枝二三本くれてくれねえか。接木にしるがだが。」
「何だ。那樣事か。やる位ぢやねえぢや。何時でも切りに來んされ。」
話合ふ其時彼方の、上爐へ來れる主人を見て、

「今晩は、好いお天氣で仕合せでござります。」
「あい、好い天氣で結構だのう。まだ皆は寄らねえか。」
「はい、まだ。」
「あ、然うか。まア緩りして、大門新屋敷さア此方へ來て茶を飲め。おい定、皆に茶をやれ。」
と下女に指圖し、
「何うした、新屋敷、來て飲まねえか。」
「はい有難うござります。それでは御免くだされ。」
主人は四十六七、色白く口大きく、眼尻下りて頭の毛薄う稍禿げんとし、わざとらしき尊大、せゝこましき振舞、風采卑し氣に、手織らしき紬の袷に同じ羽織重ねて、胡坐かき茶を注いで二人へ出す。大門と呼べるは、盲縞の綿入着て小倉の帶細く、藍縞の袷に息子の羽織らしき荒き唐棧物羽織れるは新屋敷、何れも五十二三の年輩なり。臺所には一人また一人と集ひしも廿人ばかり、上爐の傍へも二人數を增して、何を話すか若旦那得意氣に新聞を示し居たり。此等は

此村の門閥家の中臺所にはいづれも談話賑はしく、今夜の相談の何なるべきかを推し合ひしも知れず、稻の品評天氣まはりの心元なさ、彼を話し是を話し今日山に䖝出でし、秋海棠の苗くれずやなどそれも盡きて、やがて山の脇と家名に呼べるが川中島の軍談。

「おい新屋敷さ。」

「おう何うしたい。」

「臺所を見さつしやい。また山の脇の川中島が始つたせ。

「然うだの。だが山の脇はあれで中々軍談が甘めえすけえな。」

若旦那は嘲笑ひつゝ、

「新屋敷。」

「はい。」

「笑はれるぞ。」

「何故ね。」

「何故つて、山の脇のは年も處もお構ひなしで、談話の順序も滅裂なんぢやな

いか。それを上手なんて、これから些少考へて物を言へ。東京の確かなのを聞かせたいな。田舍へ歸ると何うも不自由で可かんよ。」

「なアに、若旦那樣は那樣な上手のがを聞いたすけえだでも、俺には山の脇で澤山だ。」

「はゝゝ、然うだらう。比較的智識に欠乏して居る新屋敷だから、」

「いや、何うも若旦那に掛っちゃ、はや、」

主人は其時、

「おいまだ集らねえか。汝等。」

「はい、まだ五人ばかり。それに清水の主人が來ませんが……」

「然うか。何うしたもんだらうな。」

噂に影の此時猿戸口に咳の聲して、續いて十人ばかり、

「やア、來た〳〵。」

と新屋敷の筒拔の聲。

（四）

「皆様お揃ひで。はい、これは旦那様、何うも遅くなりまして、」
「おう、大分遅かつたな。」
「はい。その、山が遅くなりまして、それで恁うでございます。まこと申譯がございませんが……」
「いや、然う詫びるにも及ばん。まだ時もある事だ。其處で茶でも飲むさう。」
「はい。有難うございます。」
一群加つて談話は又新たに、臺所はいつか喧騒の態に返りぬ。此時しはぶきと共に入來れる一人、輕く臺所の人に挨拶して上爐に通り、
「今晩は。何うも大變遅くなつて、待つたでござりましやうね。大門も新屋敷も何時にねえ今夜また早く來たんがなア、」
主人は未だ返事もなきに、若旦那は新聞を腋に、一寸目禮して、
「日本人の癖だ。時間を輕ずるのは怪しからん惡癖だ。」

と聞えよがしに獨言しつ。又も新聞を取上げぬ。

「清水。寄合には最う少し早く來てくれ。お前獨りで相談も初められねえ。」

「いや、何うも申譯がござりません。ぐだらねえ用事があつた者だすけえ、今度から氣を付けます。」

と煙草を息休めしつ、襟を氣にして幾度か手をやれる、藍縞千筋の二子の袷、茶勝の紺縞の半纏着て、左の眼尻に黑子ある四十五六の年輩なり。主人は臺所を眺めて、片手を懷に、

「これ、皆集つたかな。」

「はい。最うこれで皆集つたやうだがね。」

「然うか。それぢや相談を初めやうか。」

「はい、何うか然う一つ。」

「皆此方へ寄つてくれ。定や、煙草盆を茶の間へ出せ。山の脇も汝も其處等から煙草盆を探して火を持つて來るやうに。忰、今日は汝も寄合の仲間にならつしやい。」

若旦那は新聞を捨てゝ、忘れたる澁茶に喉を濕すや、ピンヘッドは軈て象牙のパイプに挿まれぬ。主人は何やらん清水と呼べるに囁きて、物々しげに向を改めぬ。來れる人々は主人に打向ひて煙草盆を圍み、清水と若旦那は主人が脇に坐りて、大門新屋敷等五人は其横に坐り、流石に廣き其處も人に滿ちて、談話初らぬ前の靜かさ、灰吹叩く音ばかり此處彼處に頻に聞ゆ。主人は住吉張りの銀煙管にしばし煙を立てゝ流し目に若旦那を見て、一際灰吹の音高く、さて膝を進めぬ。

「さて今夜の相談と言ふがは、外でもねえが、あの勘作を一軒百姓にした事だがな、」

言葉は僅かに切れてまだ次ぎを語らず、若旦那は居併ぶ人を打ち目戍り、大門は新屋敷と點頭き合ふ。途端に誰とも知れず、

「左樣でござりますかのんし。それは有難い事で勘作も助かりましやう。何うか早く許してやつて下され。」

と言ふ下より他の者も又口を揃へぬ。主人は澁面作りて物を言はず灰吹の

當り烈しく、大門は冷やかに微笑むのみ、餘儀なき面持ちして淸水は、
「皆、さう早合點しちや困るぢやねえか。まア旦那樣が談話をよく聞いてつから、返辭を爲たら宜からう。」
若旦那は手巾に眼鏡を拭ひつゝ、
「今淸水が言つた通り、お前方のやうに早合點しちや話しにも何にもならんが、これから僕が親父に代つて先づ原案とも言ふべき談話をするから其つもりで…………いやこれは淸水から言出して貰はう。淸水、お前何うか一つ切出してくれないか。」
淸水は心得顏に、
「それぢや俺が談話を爲るが、別ぢやねえ。此頃勸作とこツそり交際を爲る者があるつて談話だが。それでは困るつて事さのう。」
「へえ、誰がこツそり交際をしたか、判然言つて貰ひてえ。」
言葉は口から口へと傳はりて、其處の隅此處の群には、既や不平の呟き、主人は益苦き顏して、淸水は迷惑氣に、若旦那は聲高く、

「それは判然言はんが宜しいです。何故なればそれを言ふと同時に、其人をも村交際を絕たねばならぬと言ふ結果が生じて來る。其故に淸水が故らに其氏名を明指せんので、つまりはそれを彼是言ふ諸君方が解らん話しですな。」

一坐は靜まり返りぬ。若旦那は更に得意氣に、

「勘作を一軒百姓に爲た、其原因は勘作の行爲が一村の平和を破る、即ち此村中のもめを起すと言ふので、それを懲して以後の手本とも爲すが爲にと言ふのが主意で、諸君等が合意上如是村約束を定めたのである。然るに其村約束の主體とも言ふべき諸君等にして、私かに其申合を破るに至つては吾輩一圓合點が行かんですな。」

一坐愈靜かにして、若旦那益得意なり。

「扨その村約束の秩序を維持する諸君等にして私かに勘作との交際を復するに至つては、諸君等は既に勘作が充分改心した者とお認めになつたのだらうと思ふ。故に今日は勘作をなほ一軒百姓にして置くか、然らざれば元通りに堅く約束を守るかを相談せんが爲に、諸君からお集りを願つた譯で、諸君は御

腹藏なく充分御協議をして戴きたいです。」

一坐は顔を見合はせたりしが、誰も進出でゝ恁うとも言はず、其處に此處に囁く聲のみひそ〳〵と聞ゆ。若旦那は又更に、

「諸君等が御意見を御發言なさらん先に、吾輩から言ふのも如何はしい次第ですが、吾輩の意見否父上を代表した吾輩の意見は、それに對して絕對的反對の意を表するです。勘作が行爲上まだ膺懲の實が見えん。勘作が村內の平和に蹉跌を來らしめた事は、實に一夕の短時でない。それを僅かの時日に許すは、後來の例にも重大の影響を來たすかと思ふ。故に吾輩は父上を代表して、こゝに許すべからざる事を明言するのです。」

淸水は意を迎へて直ちに賛成の意を表し、新屋敷は僅かに其意を漏らし、大門は只俯向きて默しぬ。

「今若旦那樣が言はしつた言葉は、面倒の事が澤山で俺には解らねえが、この前にも大勢が聞いた通り、勘作殿が一軒百姓に爲られた譯は、何ういふがだらうのんし。」

中央とも思はしき邊りより慿く言出でしものありしが、同時に跡より同じ言葉の尾に從くもの多く、痛くも主人の心を刺しけむ、主人は突如、

「汝等今更其を聞いて何うしるな。あゝ汝等は勘作を許したか許すさう。俺、俺で又いくらでも出る道があるすけえ。」

聞くより清水は言葉急はしく、

「それ、今言はれたやうにでもなると、村が又困る。俺は勘作を今の通りにして置いて私り交際爲た者が有れば嚴しくそれも一軒百姓に爲る方が可からうと思ふが、お前達は何う爲る積りだい。」

「清水の主人が言つた通り、それが一番可いぢやあるめえかの。」

「然う〳〵。」

一座に又相和するものもあり、心ならぬものも、遂には默して餘儀なく從へば、主人が機嫌もやがて直りて、若旦那が顏は微笑を浮べぬ。主人は煙管をはぢきつゝ、

「處で今のやうにしても、未だ勘作を懲すにや足るめえと思ふが、それでな、慿

うしやうと思ふ。皆も贊成序だ、これも是非履行して貰ひたいもんだ。」と一同を見渡して、

「其事つてのは別ぢやねえが、今迄の通りぢや未だ勘作が懲りまいと思ふ。從つて他の見せしめにも成らねえ談話だ。そこで今度は若連中と女共とを連合さして、そいらに利一郎を仲間除者にする事だ。今までは若い者も中には利一郎を贔負するものがあるさうだ。また若連中は村と離れて居ると言ふたものもあるうだ。其理窟なんては何でもねえが、それを今言ふがも變だすけえ、兎に角さう言ふ事にして、一層嚴しく苛めて充分懲らさうと思ふ。皆からも娘共によく然う言うてな、」

此時坐隅に又呟きの聲。主人は聲を張りて、

「尤も此は俺から強ひて言ふ譯ぢやねえが、お前達は勝手に爲たが可い。其時は其時で俺にも充分覺悟があるすけえ。」

此言葉は何を含みてか一同は詮方なく、やがて必ず守るべき由を誓ひぬ。

主人は斜ならず喜び、

「相談もこれで了へたが、多忙時に氣の毒だつたの。臺所で緩り話しでもして、何もないが一杯宛飮んで行つてくれ。」

程もあらせず臺所は又車坐の賑ひ、女中が持てる德利は其處此處に置かれて、冷酒機嫌の心地好げに、暗を犯して家へと歸り行く、主人等は主客八人杯幾回り、清水は主人に打向ひ、

「私もあんまり打捨つては置けねえし何うしやうかと思つて居たが、第一示しが付きませんわ。」

主人は打笑ひつ、

「はゝゝ、これで又些少は懲りやう。悴、其杯を大門へ、清水一杯差さう。」

（五）

板屋は此村の素封家、其家の主人は此村の君主なり。都を離れて百幾里、村を擧げて手紙を認め得る者數ふべく、背戸の芋の豐凶を氣にして、世を見ず時を知らず、嘗て、往來の衝にも當りけるが、驛路改まりて道は此村を避け、往交ふ旅人の姿も絶えて、物賣る小商人も寄らず、勝ちに、背後は小山續き其處は畑、谷は田のみ開けて、雜木林近く村と連なり、見渡す限り重り合へる端山に隔てられたる一廓、風を嫌ふての村構へ、小山を冠に岡の中腹に家を並べて、屋並は平ならず、家の先は崖其下はまた家、隣へ行くも田を左にし畑を右にするさまの道も細く嶮しう岡に蜒行けるなり。

七歳學校へ上り十歳早く退きて、餘生を長に野良にまかせ、晩食しまふてより一夜を笑ふ夜遊を此上なき慰とし、終には分家するものもあり、出でゝ他家を繼ぐものも多かり。女も野良より野良に一生を暮し、夜間は慰みがてらの苧績ぎに戀を語り、押掛け嫁も多く私生兒も多けれども、金に戀を易ゆるを厭ひ、

盆三日正月五日、鎮守の祭收穫の祝に骨をのばし、身を惜まず立ち働くかばかりの生活はなべての人を單純にして、壓せば蹙まり放てば伸び、反撥心もなく敵愾心もなく偏に板屋の主人が爲すがまゝに任しぬ。今は左迄に稀ならねども、其昔際立ちし屋根を其まゝ板屋と呼ばれ、代々名主の威勢よく、家も大きく屋敷も廣く、群を拔きたる生活向き自からは此村草創の家と稱して、藏に收めし胴丸の鎧に系圖の一卷を誇る。殊に久しきに渉る地主と小作人の間にはさながら主從の如き關係を生じ、更らに先々代が天保の凶作以來、身を捧げて村の利益を計りたるに村人の此家を思ふこと大方ならず、何事も板屋の意向を待つて決するさまに至れるなり。この家運に負ふて生れし當代は、姓は鈴木名は六郎、今年四十八の分別盛り、十九より父に繼いで家を治め、村人の尊敬を受けて村の爲めに計ること十五年、漸く人のなづきてをさ／＼其祖父にも勝る程となれる頃、彼は漸く假面を捨てゝ横暴專恣の自己を現じぬ。

彼が一子初雄と云へるは、東京へ遊學しけるも何を學びしやら、其は嘗て口に上らざりしが、只だ在京三年に渉りて大に社交上の智識を得たりと誇りぬ。

紳士を以て任ぜる彼は學を賣つて食を得るを卑とし、偏に家の財産を的とし
つ。學ぶに耐へず半途に歸りたるなりと嘲ける若者もありしが、初雄が言葉
に鄙振絶えて漢語さへ多く交りたるに、村には珍らしき學者と信ずる老人も
あり、六郎は此上にもと初雄を誇れば、隣へ行くにも帽子を冠り洋杖を携へ、片
田舍に珍らしきピンヘッドの薫りさへ風に吹かして、常に背皮金字の書籍を
懷に入れ、怪しげの外國語をさへ絶えず口に上しぬ。かゝるさまに東京通を
誇り、さながら人も無げに打振舞へる初雄が行爲は、此頃の物議に上りて、六郎
が益我意を振へる處置と共に、村人の嫌厭を買ひて、心を板屋より離すものも
少なからずとか。

されども家は村人が敬慕の的なり、己は祖父の再來を歌はれたること十五年、
村人の心は一に吾を慕ふと思意したる六郎は、やがて恣に利己の慾をも逞う
したりしが、祖父を思ひ彼が前半生を喜べる村人はなほ多くの望を彼に囑し、
彼が爲すがまゝに任して敢て反對せんとは爲さゞりしも、六郎が行爲の愈甚
しきに寄り〳〵は其が陰口さへ漏らすやうになりぬ。あまりの六郎が行爲

に、今はと挺出して非を正さんとしたる勘作は、五十を越えて分別者の聞えあり、子息を一人妻と三人の家庭も温く、富めると云ふにあらねど、自から耕すにあまりありて、殘を小作せしめ、村にては先づ中流の生計を營める者なり。村人は只だ自己の欲するまゝなりと、高く自から居りし六郎は、勘作が太刀打に怒りて、呼寄せての威嚇も甲斐なく、彼が虛榮心は少なからず傷つけられぬ。殊にさあるべしとは思はざりしに、彼とうらうへなる勘作が穩健なる態度は村人の心を動かして、人々も少なからず勘作に心を寄せぬ。六郎は安からず思へども自から許すことも深ければ、なほ自己の意のまゝならぬ事あるべしとは思はず。

六郎は其の態面心より、街道を離れて家に人力車の橫付けにならぬを政友に恥しき心地して、街道より彼が家へは爪先上りなるがまゝに、間を隔つる村の共有田を通じて、私道を開かんことを村に謀る處ありしが、それも勘作が異議に其志を挫かれぬ。其年も過ぎて翌年の七月縣會議員の改選に、彼は自黨の候補として、反對黨と血戰すべく陣立劇しく應戰したりしが、反對黨の候補者

は遠からぬ、村の素封家の長男にて質實穩健の聞え高く、學校を卒へてなほ學に携はり、去年の卯月、廿七歳始めて鄕に歸りし若者なり。勘作自家の利益の外に何物もなき六郎が黨派を嫌ふて、獨り反對黨に投票しぬ。開票の結果僅々一票の差を以て落選したりし六郎は最早暫しも忍び難く、勘作が行爲は村内の平和を好んで破るものなりと、腹心の淸水に發言せしめて、其を懲さんとしぬ。其不條理の肯すべきにあらざりしも、板屋に對する先天的の服從心は、六郎が恐嚇に一層盲從の度を增し、他は板屋の分家が出入の者のみなれば、終に勘作が村交際を絕ちて勘作が小作人に其田を返さしめ、私に勘作と交際するものあれば其をも同じく交際を絕たんと申合せて、勘作を虐げんとしぬ。かねて期したる事とて勘作は驚くさまもあらざりしも、女氣の妻はいたく心を痛めて、其子息までにこの寂しき日を送らすることのいぢらしきを、勘作に口說きて、はては悲みに沈み仕事も何處へやら、終日只だ茫然と暮す事さへありき。

他家は賑ひても此家ばかりは寂しき茅屋、月を浴びて長く影曳く銀杏の下に建ちぬ。今日は村の祝日の、晝よりどよめきあるく若者、夜に入りて一際面白氣に、若々しき笑聲の其處此處に漏れ、隣は酒に氣をかる聲高く、月は穩かに麗しくて、群なす小兒勇ましく、話して通る其談話さへ長閑ながら、此家ばかり一つ引離れていと寂し。

「利一郎汝も遊びに出ろやれ。」

「おゝ、今に出るせね。」

聲あり家より漏る。五十ばかりの女子と廿左右の若者、こは勘作が家なり。

「今日は秋餅だつてがに、今の若きが何故内に居るがださう。豐作の處へでゝも行つて見ろ。其樣家にばかり居ちや身體に毒だがんに、ちつと外へ出て情婦の一人もこしらへろ。左樣して其のくよ〳〵して居るがを直せや。」

「ハヽヽヽ、其れぢや出やうかのう。ヤアまあ止めやう。此本が面白い。讀

みあげてしまつてからにせう。母上こそ茶でも吞んで寢やつしやれ。」

突當の板戸を隔てゝ彼方は坐敷此方に十疊ばかりの板の間の疊八疊其れとつらなりて敷かれ、臺所は水板と續きて、寢室は奥に、大黑柱の太くして手摩れたる、板戸帶戸の光澤美くしう拭かれたるは、何となく昔を忍ばるゝさまなり。

「本も可いでもな、汝見てえに毎晩々々さう、細字と首引をしてると目も惡くなるし、また身體にも障るぢや。」

話しながらに茶を入れて夫にすゝめしは、藍縞の綿入に亂次なく手織木綿の帶引き結び、久留米飛白の汚れたる前垂にて、束ね髮の亂れたる老婆なり。圍爐裡の正座は勘作の坐りて、老婆は其脇に、利一郎は坐敷らし。盲縞の筒袖狹き小倉帶と盲縞の前垂締めて、火箸に炭をならしつゝ二人が談話を聞き流す勘作は五十四歲半白の髮短く刈りて、うとましき迄に深き皺額に刻まれ、高き鼻は通りて、細く切れ長の目は妄りに動かず、日にやけて色黑し。

「利一郎茶が出たゞ。來て飮めや。今日は秋餅だに。金米糖の茶菓子でも奢るわ。」

「おう、今。」
「利一、茶が冷めるわ。本はあとにしろ。まあ呑め。」
「おう、」
と聽て講談の筆記らしきを片手に坐敷を出で來たる、廿一二の若者、少しく張れる目に情籠りて、口元優しく、野良仕事する若者の武骨なるに似ず、節糸まじりの手織物に瓦斯小倉の帶は、今日を秋餅の外處行き衣裳なり。母と爐を隔てゝ坐り、一寸と微笑みてまた本を差のぞきしが、
「父上、お前は今夜は本も讀まねえで、彼の此度買つた赤穗義士傳、彼讀んで見やつしやれ。」
「利一郎、サアお茶。」
「母上、茶菓子はどうしたがだい。」
「さう〳〵忘れて居たつけ。」
「其れだすけえ、母上の云ふ事は當にならねえ。」
「ハヽヽ、嗅出してやれ。」

「おう、今出してやる。」

折しも聞ゆる彼方のどよめき、交々起る男女の笑聲、利一郎は目を書籍に移して餘所に聞き、勘作が冴えし顔は曇りて、

「利一、義士傳の堀部安兵衞のあるがを貸してくれ。」

其どよめきは次第に近寄りぬ。勘作は中音に義士傳を音讀し、利一郎は立つて坐敷へ歸らんとしぬ。

「利一郎、何故出ねえな。」

「まあ、今夜は出たくねえすけえ。」

「さうか。出たくねえがだら可いでも、汝はまた若衆に除られやしねえか。乾度さうだらう。」

「何條、左樣だねえせ。」

「さうだねえことァあるめえが。毎晩のやうに遊びに出て、毒だすけえ止めろといつても聞かねえ汝が、此頃は些少も出ねえ。俺乾度汝がまた除ぎられたがだと思ふが、何うだな利一郎。」

「其れはお前の取越苦勞だ。豐作がお前に話をしたつけがの。」
「否や、左樣ぢやあるめえ。お前口惜しくねえかい。お前利一郎まで此樣な目に合はせてさう。それも俺等が惡りけりや何う爲ることも出來ねえでも、俺等に一分一厘だつて惡い事があるぢやなし、お前どうかしてやらつしやんの、お前この子が可愛ねえかい。」
「まあ可いわ。默つて居ろ。今に何うかなるわ。」
「まあ可いぢやねえかい。母上。」
「何うかなるぢやねえ。何うか爲てやらつしやれよ。」
「母上お前何を云ふがださう。俺でも口惜がればだでも、俺が何んとも思つて居ねえがんに、お前も從順して居やつしやれ。」
「それはな、汝が方は汝次第だでも、一軒百姓にしられたなんと人前が惡くて、他村の衆にも顏が合はされねえがな。俺本當に其樣思ふぢや。お役人樣が解らねえと、罪も報もねえ人間を一軒百姓にして苛責るがを、御理解もしてくれねえなんて、何たる事ださう。」

茶一口、舌打して夫を打目戍りぬ。利一郎は腕組して俯向くのみ。

「利一郎、汝は本當に除ぎられたがだらうな。汝が俺に匿すがも、無理ちやねえでも、俺も其位な事は覺悟して居るがさう。今にはまた可い事もあらうやれ。我慢しろ。俺も父上も不自由して居るがも、皆村の爲めだと思つて居ればば何んでもねえ。汝も其積でな。」

涕は何時か眼を濕しても、其を匿さんと連りに薪さしくべ、勘作は只だ氣を義士傳に奪れたるやうなり。

「俺や父上は男の事でもありし、しるすけえだが、お前こそまあ我慢しての氣を揉ねえ樣に。」

「俺が、俺が何條氣なんて揉うに。那樣な事心配しねえがにしろや。其れは其れだでも、汝が除ぎられたがは何時からだな。何う云ふがて除ぎられたゞ。」

「其れは云はねえがにしやうい。云つてお前の氣を惡くするよりか、云はねえ方が可い。お前も聞かねえで居やつしやれ。」

「聞かなくても可いでもな。またあれだらうあの板屋の若旦那だの、十兵衞

の和だのつてがゞ、あの何か言つて而うして除ぎられたがだらうな」
「おう、さうだわ。」
と云ひし聲少し震へ、眼を下の表紙繪に移して凝つと見詰め居たりしが、
「あのお前にも話したつけの、豐作が若衆の方を周旋つてくれたこと。あれは云はゞ表向で、其前にも皆一所に遊んでくれたがさう。其れをあの和平の野郎がくだらねえ事を云つたんだすけえ、まさかの時の用心と豐作が骨を折つてくれたがさうの。其時も板屋の若旦那が何の彼んのと云つたさうだつけでも、豐作と喜三に言ひ込められて其れつきりさう。其れを口惜しがつて、寄合を付けて、利一郎を子供達に除らせねえ樣だら、俺の方にも仕樣があると威して皆を無理に承知さして、其れは皆がまた甚麼な事をされか分らねえんだすけえ、恐がつて若衆にも女衆にも云ひつけて、俺を除らしたがな、皆が可哀想に思つても、和平と初雄と頑張つて居るんだすけえ手も出ねえがだ。豐作と喜三も親達が何か言ふがを怒つて、まだ早えがんに上州へ行つてしまつたがだ。外の者は恐つて、俺を除るし、其れでこの頃は俺家ばつか居るがさう。

何も村寄合までして俺を除らせなくても可けゞな事だでも、俺板屋親子があんまりだと思ふと、いくら我慢してても口惜くつて、今に見ろ復讐してやるすけえ。と腹ぢやア思つて居るでも、豐も喜左も居ねえでから、俺相談しる人もねえ。初雄の意久地なしめが、金の威光を笠に人を威して俺等を苛責やがる。」

「おう、其れぢや村寄合までつけて…………」

お靜が口より出でしは此一句、利一郎は目を閉ぢて立つて坐敷へ返りぬ。

「利一郎、今に見返す時も來るすけえ、虫を殺して我慢しろ。」

「おう、俺よりか母上、つまらねえ事で、腹を立つて身體を損めぬやうに、」

帶戸を閉ぢて長息一つ、あとには勘作が讀書の聲斷續して聞ゆ。

「お前、あれ聞いたかい、何處まで人を呵責たら胸が霽れるがだらうのう。何にも若衆の事まで干渉して、まあ何にも知らねえ利一郎まで呵責なくても可けゞな者だが…………。」

勘作はなほ講談の筆記に目を放たず、お靜は聲を急込まして、

「お前の云つた時は俺も利一郎も宜く合點したがだすけえ、此位の覺悟も爲

ちや居るし我慢もしなきやなんねえでも、現在今若衆にまで干渉してあれを除ぎらしてさう。あれだつて一年一遍の秋餅だ。遊びに出たくねえ事もなからうし、俺等だつて出して遊ばせたくなくて何うしやう。板屋の鬼共は何も若衆の事まで干渉しなくても可いものを、此樣で長く續けば病氣にもならうし、俺等も一日も心の安まる事はねえ。お前彼が可愛くねえかい、何うかしてやらつしやれよ。一軒百姓なんて人聞きも惡けりや、第一惡い事をしなくて、此樣難義をするわけがねえんが。」

妻は目に持つ涕を今は匿さんともせず、持てる火箸を深く灰に差込みぬ。勘作は、

「まあ靜かにしろ。利一郎のやうな若者でさへ默つて居るがに、汝はまた何んと云ふ事だ。何うかしろつて、今何うなるものか。現在の親類さへ板屋を恐がつて彼通りぢやねえか。利一郎まで除者に爲るやうに干渉したのは、些少と非道い樣だでも惡い方の長く勝つて居る理窟はねえ。苛責られる丈苛責られゝば、今には其れだけ光を增さア。」

「其れだつてお前、其れが何時になるか分らねえぢやねえかい。」
「分らなくても可いわ。あれほど云つて聞かしたがゞ分らねえのか。板屋の仕方が村の爲にならねえすけえ、故意と反對したがで、あれが長く續くかい。其内に村の者にあきられて俺に詫を依むやうになるは知れた事だ、其時十分あの自分の爲ばつかしるがをやめて、村の得の行くやうに爲なくちやならねえと意見しる積だ。板屋の家は村には大事の家だすけえな、利一郎にはよく云つて聞かしてある。汝も我慢しろ。」

筆記を脇に冴えぬ顏にも故意らしき笑を漏らして、妻をなだむれども、

「村の爲めにしるがだがんに、其れを此通りに苛責める板屋の鬼共、何うしれば腹の立つが、直るだらう。人を苛責たが澤山苛責ろ。俺等自分の爲だねえ、村の爲めにしたがだ。其れを若衆にまで干渉して除者にしやがる。今に覺えて居ろッ。」

「つまらぬことは言はねえで寢ろ。利一が氣分が惡くさせら。」

靜は猶もくど／＼と言續けたりしが詮方なげに軈て、

「利一郎風を引かねえやうに寝ろ。」

とばかり、帯戸を開きて寝室に入りぬ。勘作は再び本を取らんともせず、ほつと長息して座敷を見やり、やがてまた寝室へ向きて深き思案に沈みぬ。

（七）

岡の中腹前に田の面を控へ、背後に續く山毛欅林の下草もはや色づける美しく、林に次いで一わたりの畑、今し林を蜒つて畑の中程にと通ずる畔道より、荷繩に鎌を結びて肩へ掛けたる利一郎は、野面の景色にみとれて小枝折り敷き腰より出す煙草入に長閑に一服の煙を吹かし、無心のさまに眺むともなく空を眺めて小時打ち休みぬ。折しも向ふの岡に現はれたる少女一人、暫し此方を打目戍れるさまに見えしが、澄みたる聲に遇へば名が立つ、遇はねば濟まぬ。と張上げたる歌の一節、聞くより利一郎は微笑つゝ起ち上り、手を動かして打ち招きぬ。招かれし彼方は急がはしく下を見下して、やがて足がゝりを見出せしものか、七間ばかりの崖を草に身を支へて下立ち、畦道を渡りて此方の崖を攀ぢ、忽ち利一郎が傍に走り寄りぬ。

「きく、汝どうして彼處へ來たがだ。」

「どうしてつて、虫が知らせたがだらうて。」

と犇と寄り添へる、大縞の筒袖の袷に、襟垢着けるメリンス友禪の半襟かけし襦袢着て、紺地に白く七草の中形の褌して、千草の脚袢に草鞋穿き着たる蓑を脱ぎて、

「此方へ來て、一所にこれを敷けな。」

「でも可笑ちやねえな。」

「可い事や。誰も見て居る者がありやしめえし。」

「其れでも可笑いわ。彼の林の中だらまだ人も見めえでも。」

「さうだな。左樣しやうか。」

日影穩かに其錦織る林の中に、やがて人目を避けて沒し去れる二人、

「おきく汝が髮はどうしたがだ。色々な物がくつ付いて居るがさう。」

「何うしたがだつて、今崖を通つたすけえさう。其樣なこと云はねえで取つてくれな。」

とばかり頭を男の膝に差付けぬ。

「そら此樣に澤山に。」

「ほんにさう。」

と相見て微笑み、またも無言に手を弄ぶり合ふて、

「利一郎久々で遇つたね。」

と顔を紅めて男を見上ぐれば、

「おう、さうだな。」

「さうだもねえもんだ、人にばつか氣を揉ませて。」

「汝にばつか。汝こそ人が何樣に氣を揉んだか知らねえ癖に。」

「其れなら何故出てくれねえな。」

「俺も出て遇ひてえでも、さうしてまた面倒な事でも起ると、俺可いでも汝が……」

「其樣な水臭え事ア止めるがんにしやうぢや。お互に恁うした譯の身體だんが、汝が苛責られる事なら俺もだぢや。其れだすけえ汝は人の氣を知らねえつてかだ。此樣な事でもう卅日も遇はねえがな。男つて者は薄情で氣の強い者ねえ。」

「どうしるやれ。よし出た處で汝には遇はれはしめえし。汝には離れねえ人が一人附いて居るがな。」

「あらッ、汝は其れを疑つて出ねえがゝ。誰があの生意氣野郎に………」と譯もなく推冠せて、「汝は矢張其れを疑つて居だらうな。」

と伏目に太息一つ、

「いや疑るわけぢや些少もねえがな、汝はまた悪く取るがはどうしたがだ、それともまた疑つても可いことをしたがゝ。」

「澤山疑れ。俺知らねえぢや。」

「疑る譯ぢやねえが、あゝ附いて居られちや遇はれねえぢやねえか。其れに薄々知つて居やうでもまたよく知るめえが、見付けられたる薄々位で俺まで交際を止めさした位だから其れこそ後の障りが思はれるわ。其だすけえ我慢して居るがさう。」

「汝はまだ知らねえがも道理だでも、もう以前に知つて居るぞ。ほら苧績の始まつた晩、ねあの時俺が走んで行つたらう。あら汝が歌を聞えてさう、そら

あの時さう。あの時な初雄が處から逃げて行つたがだがな。」

「さうか、道理だ。あの野郎。」

「利一郎、汝は何言ふな。」

「俺を遊に出さねえやうにして、汝を手に入れやうつてがで、若衆にまで干渉して………」

と流石思ひは顔色に出でぬ。きくは心元なげに其顔を見戍りたりしが、

「利一郎。」

と暫くして、其聲震へ、其目も顔色も深き思を表し、兩手はしかと男に縋りて、

「利一郎、俺一生懸命の相談があるが、汝其れに乗つてくれな。」

「な、何だな。」

「外ぢやねえが、汝俺をつれて逃げてくれな。」

「えッ、逃げて、………何う云ふ譯で逃げるなんて。」

「其りや外ぢやねえことや。板屋の鬼爺め汝をまで除者にしやがつて、汝は遊にも出られねえ仕末だし、二人が恁うして卅日も遇はれねえ譯ぢやねえな。

爾うしてあの生意氣野郎は過ひさへしれば嫌な事を云つて困るがな。」
「おう、それで。」
「其れだすけえ汝が本當に俺を可愛いと思つたら連れて逃げてくれな。さうしれば氣がねも苦勞もねえがな、二人して稼げば食はれねえ事はあるめんが。」
「其れは其れでも可いが、逃るつてがはどうも…………。」
「可いちや。連れて行つて貰はなくても、どうせ俺のやうな馬鹿阿魔は皆に欺かされて死ぬがだんが。俺は汝に欺かされゝばと覺悟もして居るし、汝はまた俺を欺かす氣で居たがだんが、利一郎覺えてろ。」
と衝いと身を起す、
「まあ待て。短氣ものめ。」
と押隔てしが、
「實は俺も其れを思はねえ事はねえでも、あとがなア…………。」
「あとの心配なんて要らねえ事や。父上も母上も壯健でさう。食ふに困る

がだなし。」

二人は默して暫く言葉はなかりき。

「利一郎、さうしてくれな。」

「さうしやうかな。俺が居ねえがゝ母上の氣が靜まるかもしれねえ。」

「本當に。利一郎本當に。汝は左樣してくれるな。」

「おう…………初雄の野郎にもこれ見ろと云ひてえなア。」

「其樣だがな。さうしてくれな。本當に汝は其氣ながだらうな。本當だな。さて何處へ行かう。商賣は何しるだ。それよりか何日にしやう。」

「まあ待て。仕度も要るし、ほかにも用があるわ。汝も仕度をしろ。見付けられねえやうな。」

「おう大丈夫だとも。さうなれば何樣に嬉しからうな。其れだでも汝は好い男子だし、俺は這麼醜女だが、汝は何時にか俺を苛責めるだらうな。外に美女を見付けると俺聞かねえぞ。」

「きく、もう何時だらな。」

「まあ可いぢやねえな。まだ。久々で逢つたがだかな緩くり話をして居ろ
それ。」

（八）

「利一郎か。」

「おう、俺だ。何うして遲かつた。」

聲は夜の靜けさを破りて、茂れる木立を脇にしたる藏の陰に起りぬ。

「何うしたつて、俺大變の事が出來たゞ。それで遲くなつたがさう。何うして可いか俺に解らなくなつてしまつたがな。何うしやう利一郎、本當に大變な事になつて了つたが。」

「大變な事なんて、何だな。俺は汝に嬉しがらせる事があるが。」

「ま、汝は何うしたがだ。那樣に氣樂で俺が身にもなつて見るんどう。俺が荷は匿されて了つたがな。匿されて…………。」

「えッ荷が。」

「それがよ。それが家の者ぢやねえがだ。家の者ぢや。」

「おう、また板屋の若旦那の邪魔か。」

「俺もさう思ふがさう。」

「何うしやうな。父上も母上も承知のがだすけえ、汝さへ都合が出來れば俺は何時でも可いんが、無據ねえ、今日は止めるか…………」

返事なければ、此方はあせりて、

「利一郎、何うしやうな。汝は何うしたがだ。返事をしてくれ。」

「まア待て。汝がやうに然う急いても返事は出來ねえんが。」

「出來ねえッて何うしるな。係うしちや居られねえがな。」

「荷は何うして匿されたがだ。それから先に話せ。」

「汝が言ひつけのう。彼處へ昨夜匿して、今行つたら無えがだがな。それで彼方此方搜して遲くなつたがさう。」

「然うか。汝は今親達が承知だと言つたが、そりや何うしたがだ。」

「何うしたがだつて、隱すよりで二人が係うした間だつて事は知れて了つたがな。」

「なにッ、知れた。」

「まア後を聞けさう。そりや父上も母上も知らねえ分さう。其であの板屋の鬼が二人の間をせく事も知て居るわな。何ういふ譯が一昨晩姉が俺に、無分別をしるな、時節を待てつて談話、そこへ丁度兄が來て帶を買へつてほら、此金をくれたがな。汝が處へやつて置かうか。」

「はての、俺も汝がやうの談話だが、かうと其荷には大事の物でも入つて居るがゝ。」

大事のもんて衣類丈けさう。

「然うか。よし。それぢや今ッから行かうわ。今度こそ邪魔が又ひどくなつて何う爲る事も出來なくなる。衣類なんて何うなとなるだ。汝も仕度はして居るがだらう。さア直ぐ出掛けやう。」

「然うかな。それでも彼の中には、汝と對に拵へた單衣も袷もあるが……。」

「馬鹿、其樣物は、何時でも出來るわ。」

「それぢや出掛けやうか。何處へ行くな。他國へ行つて浮氣でもしると、死んで怨むぞ。」

「其樣な事言つて居る時かい。早く爲ろ。」

二人は藏を離れて路に出でぬ。女は折目新らしき着物着て帶も廣う、甲斐絹らしき脚袢に草鞋穿、利一郎も脚袢甲掛かひ〲しく羽織姿の鳥打帽子、痩形の身體を包みて、風呂敷包み背負ひ洋傘は鞄と女に渡して、女は二本の洋傘を持ちて脇に添ふ。

「利一郎、汝も家の方は可いがゝ。」

「おう。金もあるし困つたら又言つて寄せつて談話さう。家が一軒百姓で居るがも、最う些少の間だすけえ、其中信州へでも行つて商買でもしろつて事だが、それやこれやは跡にして、氣取られたかゞ心配だ。何も彼も道中での相談にしやう。今夜中に五里なり七里なり行かなければ、何ういふ事になるか解らねえ。無理でも我慢してくれ。」

「あれ、俺から言出した事だんが。どんな苦勞だつて………夜道位、俺此樣に嬉しい事はねえぞ。板屋のあの畜生の面が見てえね。」

話しながらも打連れて急ぎ足、家の脇岡の下、畑に挾まれし路を過ぎりて、村端

れなる雜木林のもと、忽ちあなたに、

「おいきく、其顔を見せてやらう。」

聲は正しく初雄なり。同時にばら〳〵と和平を始め若者六七人、矢庭に二人を打圍みて、

「きく、汝は若衆の規約を反古にしやがつて。やい。此若衆の顏を何うするのだい。」

「おい色男、生憎く追手が先だつた。氣の毒ながら若衆仲間の規約通りにするすけえ、はゝゝゝ。」

言ふより一時に立掛かる。見る〳〵きくが手の鞄は踏みにぢられ、洋傘はさんざんに打折られぬ。

和平はつか〳〵と利一郎の方へ、

「野郎、よく〳〵も村を馬鹿にした仕方をしやがつたな。さア、何うするか見ろ。若衆を馬鹿にしやがつて。」

「何が馬鹿にした。汝等こそ人の邪魔をしやがつて。さア、出來るなら何う

でもして見ろ。汝等が自由にならうかい。」
「何をしやらくせえ。うそ〳〵來やがる盃暗野郎。」
「和平、遣つて了へ。」
「合點だ。」
きくは我を忘れて前にかけ隔たり、
「汝等何をしるがださう。大勢して一人を。戻れよ。利一郎が何が太いだ。譯を聞かせろ。情交の邪魔する太い野郎だらけだすけえ。村を立つたが何うしたゞ。二人を何うするつてがだ。何うでも勝手にしろ。」
されども若者も左右なくは汀つても掛らず。おつ取卷きてわや〳〵と打騷ぐのみ。一人其時、
「和平、未だ來ねえな。」
「むゝ今直きだ。」
折しも宙を飛んで來れる提灯二つ、燈火の過ぐる處暗を照らしてはら〳〵と、軒並木立を見しも刹那、やがては元の暗に返りて光は其先々々々々へと飛ぶ。

光の背後影黒き人二人、提灯に先んじて若者一人馳來りぬ。

「和平居るか。」

「おう、何うしたね。」

耳より耳に、其若者は何事をか囁きたりしが、首肯合ひて走り去りぬ。やがて近づく提灯の火に、暗は破れて前に照らされたる四邊のさま、林に沿うて十人ばかり藍縞の袷着て小倉帶胸高に、手拭首に卷きたる若者を左右に、鳥打帽子地に落ち風呂敷包脇に横はり、脣の色青褪めたる利一郎を、圍うて涙持つ目充血せる面差怒りを含み亂れ姿に立居たるきく。今しも跡より來りし二人は、きくが父と家の其兄。若者は如何に二人が計らうかを見んと囁き合ひつ、威を示して立つ。きくが色は見るより動き、得意さは若者等が面に顯はれぬ。

「きく、この阿魔、親の面へ泥を塗りやがつて、俺に何の面で村の衆へ顔出させる積りだ。板屋の若旦那が知らせてくれなけりや、俺も村交際を絶たれる處だつけが。汝は親の顏へ泥を塗つて可いと思ふかい。」

と犇ときくが手を握りて、なほも語氣荒く、

「利一郎、汝はよくも人の娘を疵物にしてそれでも足りずに駈落まで勸め居つた。この大盗賊野郎。知れた事だ。きくは汝のやうなもんに遣られるかい。連れて戻るすけえ然う思へ。」

とばかり、拉して歸らん氣色。

「あれ、父上、まア待つてくれやれ。これには色々…………」

「えい、譯も糞もあるものか。この阿魔、汝は何の面で俺に物言ふ。何も彼も跡で解るわ。來う。」

と、無理やりに二足ばかり、

「きく。」

「おう、利一郎。」

「何を愚圖々々して居るだア。」

と父は引立てゝ伴ひ去る。其折までも俯向きて言葉なかりしきくが兄は、

「皆大きに御苦勞だつた。利一郎は俺が連れて行つて、勘作殿に確かり談判しなけりやならねえすけえ。汝等一足先きに此處を行つてくれ。利一郎、さ、

この荷は俺が持つて行つてやる。汝は此の洋傘を、」

と引添ひつゝ、

「何かは道でな。これ、此の野郎共、用もねえがに何故此處へ長く居る。早く歸れ。」

と右と左に、提灯は分れて軈て見えずなりぬ。

（九）

暗さは暗し廿日暗、目に見るものは星ばかり、それさへ冬の空の光凄く、落つる木の葉のはら〳〵と、山も眠り林も眠り、燈火消えて聲一つ聞えぬあたり、恐る處何なりけむ足音を盗みて深く憚る人一人。折しも彼方に人待顔の手拭目深に、これも忍びて佇立める背後を、

「きく。」

「おう、來てくれたか。」

手を携へて暗を先へ、間近の木陰に身を寄せて互の長息に、其まゝ暫し言葉も絶えぬ。

「きく、彼奴等は知るめえな。」

「先刻皆戻つて寐た樣だすけえ、其隙に漸つと來たがだ。久々だつたさう。」

「おう。」

暫くして、

「利一郎、俺等何時になつたら夫婦になれるだかね………、」

男の兎角うの返事もなきに、

「汝等家が元通りにならなけりや、兎ても夫婦にはなれねえぜね。然うか言つて二人憑うして居る中は、あの初雄の畜生めが、親父に何とでも言つて元通りにや何うしてもさせねえだ………、」

利一郎の聲なきに又、

「あゝ、兎ても最う邪魔が澤山で村を逃げる事は出來ねえし、なア、何うしたら可からうな。え、何うしたらのう。」

「むゝ、切れて了ふよか仕方はあるめえがに。」

「えッ、切れるッ。」

矢庭に犇とばかり、

「な、何を言ふがだ。汝はまア何うして其様な事が言へるよう。今更意地だつて添遂げなくつちや、」

「此世ぢや兎ても駄目だが、」

「これもあの初雄からだ。なア利一郎。」
「何した、」
「此世ぢや駄目ならせめて未來にでも夫婦になつて、あの初雄の畜生を見返したいだがさう。」
「むゝ、未來でッ。」
「汝はあれからの事を知るめえが、初雄の人でなし顏を見るたびに厭らしい事ばかり言つて、一つ違へば手籠にも爲かねゝえだせね。利一郎、何うかしてくれ。」
「きく、汝はまア何う爲る積りだ。」
「俺最う、汝さへ承知してくれゝば、面當にでも……　……、」
「おう。」

※　※　※　※　※　※　※　※　※

曉の烏の勇ましう、朝暾まばゆく村を照らし林に射込みて木影丈長き頃、村の

中央なる岡の上に、人に圍まれて橫はるは利一郎、きくも其脇に、きくが扱帶に二人して生を捨てしなりき。

醫師も來り警官も立會ひたりしが、きくは終に蘇生せず、利一郎は漸くにして僅かに息吹返しぬ。きくが葬送はそれより少しく經ちて勘作が家よりし、此事ありてより一軒百姓の申合せも緩みて、勘作が不幸を弔し一つには板屋がこれまでの處置に反撥して、表は申合せを守りつゝ裏は何時しか以前に返りて、勘作が分別を借るも近かるべく見えぬ。お靜は僅かに愁眉を開きて、殊には利一郎が身の漸くにして癒えたるを喜べる折柄、巡査は來つて利一郎を拘引して新潟の裁判所に引致したり。利一郎に罪なきを信じたりしお靜は、直ちに歸るべしと左は驚かざりしが、審理の末自殺幇助の罪名に利一郎は六ヶ月の禁錮を苦役すべく申渡されぬ。

「お前、利一郎は何うして入つたがだらう。」

「むゝ、そりや心中でも、相手が死んで自分が死なねえ時は、何うしても牢へ行かなくちやなんねえ御規則だ、直き戻るは。まア神信心でもして壯健で居る

やうに祈つてやれ。」

「はていくら御規則だつて、それぢや無理に心中さした板屋の奴は何故牢へ行かねえがだ。俺其様理窟は無からうと思ふ。」

と此押問答も日に幾度、お靜は誰とも言はず遇ふ人每に話掛けて、

「何故初雄が牢に行かねえがだらう。」

折しもあれ、利一郎が入獄も、畢竟するに板屋の指金、官吏の目を晦ましたるからと村の女房が臆測の陰口、犇と胸に響渡り、さしも有らゆる苦を見せて可愛き子息と其情婦には情死迄の苦痛を受けしめ、今又其告げ口に可憐き利一郎は牢獄の中に繫がるゝ身、かくまで理不盡なる擧動にもなほ飽き足らでや、吾物顏に村に臨みてまだ吾が家の縛め解かず、己が橫紙に人を殺せし板屋が昨日に變らぬ有樣、天も此惡魔を罰せずお役人も知らず顏に過す言ひ甲斐なさ、最うお天道樣もお役人も駄目、おう、よし俺が呪り殺してくれうぞ。

水氣を含みて碧く澄める空果てしも知らず、日は輝けども光薄く、梢は骨の冬木立村に臨める小山の頂き左右の谷間を吹き上る風は、山より颪す凩と打ち

ては響き響きては身を刺す音を其處に投げ、見渡す限りの遠の山々、田は水寒く畑は凍て、目にするものは凋落の跡、一鳥鳴かず心自ら悲しげなるあたり、眼血走り色青く、髮はおどろに振冠りて帶は何處へ失せたりけむ、衽を前垂の紐に保ちて足は土に血に汚れ、走るが如く倒るゝ如く、蛇と村を睨みては物凄き笑を漏らし、手にせる鎚を振上げて、老木の幹に打込む釘、一鎚、二鎚、打つほど心はいよ〳〵亂れ、十よ二十よ百二百、此釘今に盡くる時、人の命の盡くる時、打つ音木魂に響渡る。荒立つ風の只中に、頭を打振り眼を閉ぢて祈念すれば見る見る大石は頭上を飛行して板屋の空へと走り去る。如何なる魔王も此惡人を引裂き捨てゝ吾が此怨みを霽し給へ。

「お願ひでござります。だ。天狗樣も摩利支天樣も來てくらつせえよ。」

あれ〳〵どッと吹來る風に、翼あるもの異樣の面差。

「やア、天狗樣がござらしつたぞ。さア、直ぐに引裂いてくらせえよ。」

忽ち彼方に紫の雲棚引きて、遙の臺に合掌するは、

「おう、おきく。其處に居ただか。俺も直き行くぞ。利一郎は多祥だしな。」

またもや吹來る怪しの風に、前の天狗は如何にせしか、翼を縮めて走り行く。

「あれまア、板屋の鬼共は天狗様にまで勝つたがだらうか。」

天狗にも勝て神にも勝て、一心凝つて百八十丈の大蛇となり、九毒の息を吹いて、猛火となし、家をも人をも灰となしくれん、此の一打ち此の一鎚。

「これでも未だ死亡んねえか。」

おう、血が出るぞ。はゝゝゝ、とう〳〵死んで了ひをつたわ。板屋の鬼共は俺が殺してやつた。鬼共が味方したお役人、さア、心中が何うして惡い。何うして心中までさした初雄が可い。己が非道で一軒百姓までにした板屋の旦那が何故可いだ。さアこれから俺が相手は役人共だ。さア野郎共。

きちがひ婆の評判長へに、役人と見れば、さア俺が相手だと猛り狂ふ日に幾回。

鶴澤橋

（一）

幾棟かの土藏、ぬいと高い大榎、並んで立つた木小屋納屋の影を、夕日に曳かせて廣々とした表の掃庭にあつめ、嚴丈の土堤をぐるりと廻らし、其處に植並べた風防きの杉が仰いで見上るばかりに伸立つて居る、古風な茅葺の、ずぬけて大きな家で、北に築庭を取たらしく、庭木の梢が屋根越に見え、其處等の樣子の何となく打上つた一構。土藏の白壁が折しもの日差に輝いて、晴がましく道行く人の注意をひくのである。

「ヤア白が吠えて居るぞ。」

と塀脇から、蓬の髮を振冠つて、洗晒した中形の、眞岡の脛きりの筒袖を着た、鰐口、團子鼻、くるりとした目の、十一二の惡戯盛、跣足で長い竹を擔いだ蜻蛉釣の歸らしい。

「むゝ、子鬼も居らア。」

と素裸に絞の兵子帶を腹にまいた、同じ年程の毬栗がこれも同じやうな竹竿で、道傍の草に羽を休めた、赤蜻蛉を覗ひながら及腰に答へた。

「甚五見ろや、白奴子鬼と戯遊けてるだア。子鬼が居ねえと白奴連れて行くだがなア。」

と甚五が肩へ手をかけると竿が動いてはらりと、影が亂れたので蜻蛉は驚立つて颯と逸れた。

「此野郎何しるだ。見ろッ。赤蜻蛉が逃げたでねえか、われが怒鳴つたからだ。邪魔しやがつたな、ようし覺えてろッ。」

「何云ふだア、俺知るもんか。われ下手だから逃がしたゞ、蜻蛉に耳があるか、」

「何だ此野郎。」

「何ッ。」

とはや喧嘩腰、互にしつかと竿を握つて隙をねらつて打ち下さうとする。途端に塀の内から同じ程の年頃の子の笑聲、云ひ合したやうに、外の二人は聞耳

立つた。

「止さう。つまらねえや仲間喧嘩は。なア甚五俺等鬼退治しるんだ、なア、隣りの叔父さア然う言ッけよ。」

と筒袖は手を緩めて急にしたり貌。甚五も擬勢を捨てゝ、

「そんだわれ、これから邪魔したりしねえか。」

「今だつて邪魔したでねえぞ。俺白奴連れて行きてえだからわれに話しただ。邪魔したでねえぞ。」

「さうか、そんだら止さう。彼方へ行つてまた捕めえやう。鬼の居る處は俺ア厭だ。」

今の氣色は何處へ行つたのか、肩を併べて睦じく、まばらに樹木の生茂つた曲屈つた道を通つて、彼方へと行く。此處は村から一寸離れて居て、畑に沿うて五六町鬱蒼とした森の角で屈ると、其處から茅葺の家居が屋並を作つて居る。今しも入りかゝつた覺束ない橙黄の光は、四邊一面に亂れ懸つて、家居も樹々も小道のさまも何となく渺茫と見渡される。空は澄んで眼も覺めるばかり、

輕く涼しく夕風が戰ぎ出した。構内では犬の吠える聲、子鬼と呼ばれた子供の聲、近郷に響き渡る奥村の大盡の、夕暮の忙しさもこれからである。

（一一）

中深澤の旦那樣で通る奥村家は、舊幕時代の大庄屋で、近鄕肩を比べるものもない門閥家で、また富豪である。中深澤の耕地の大半は自分の所有で、なほ他村にも何百町歩の小作を持つて居る。其期節になると駄馬の鈴の音が、端綱を持つサノサ節と、引切りなしに續いて、小作米の取立て時は鎭守のお祭より人出があると云ふ程、奥村家の一擧一動は、直ちに中深澤の村民に重大な關係を及ぼすのであるから、奥村家の中深澤に於ける勢力はまた格別で、舊幕時代の大庄屋の威權は依然として衰へやうともしない。其上溫厚の主人が相繼いで三代、小作も緩める救恤もする、橋の架け換へ、野良道の普請、あるにまかせて手一つに、甞て村民を煩はさなかつたので、左なきだに富が持つ一種の勢力は、一層村民の尊敬心を牽いて、鎭守樣より旦那樣がと云ふやうに、先代まではなつて居たのだ。

「太田サ、お前樣奈邊へ行つて來さしつただ、暑いに御苦勞樣でござえます。」

と大根畑の畝を切る鍬を休めて揉手しながらの丁寧な挨拶を受けたのは、仔細らしい顔付の男で、二三度水を潜つた飛白の單衣を着、ぐッと裾を端折つて、素足に草鞋穿き、繭緞張の洋傘を翳かけて居る奥村の小作の口を受持つ番頭の太田と云ふ男である。

「おう源作か。暑いに大分精が出るな。」

「へゝゝ、貧乏閑暇なしで、仕方もござりましねえ。お前樣こそよくまアお精が出ますことで。」

「これも役だから仕方がねえ」

と急はしく手拭で、顔から脇の下から胸元をかけて拭きまはす。其間に源作、一吹吸ひつけて、さて、

「今日の暑さは別でがすわ。其處の楢の下は日も射しましねえ、しよつちう風があつて涼しいだ。一吹つけて休んで行かしやらねえか。」

「イヤ、左樣もして居られねえ。時に源作、此間から云ふんだが、節季の小作尻はどうする積なんだ。幾度云つても埒が明ねえ。此方だつて何時までも、べ

んべんとして當にならねえ、お前の言葉を當にしちや居られねえ。一體どうしてくれるんだい。」

「ハイ御尤樣でござります。もう仰有るまでもねえ、かたをつけてえと思つちや居るだけんど、何分にも此不景氣で今の處どうにもこうにも方がつかねえでがすよ。盆にやお末が幾何か持つて來てくれますだ。さうすれば直ぐにも納めますだから、どうか其れまでの處お前樣から何とかねえ、旦那樣に御願ひ申して…………」

「いけない。那樣言譯も幾度だと思ふ、不景氣はお互樣だ。何時も〳〵も同事、旦那樣に云ふとつて、どう云ひやうもねえぢやねいか。」

「其處でがす。其處をどうかお前樣の御骨折で、何んとかして旦那樣の方を…………長い事ぢやねえ盆までゞがす。其れに期限が切れてまだ幾何も過ぎねえことでがすから、」

「なに、何だと、期限が切れてから幾何も過ぎねえ、むゝ、もう一偏言つて見ろよもう一偏。其期限は誰が切らしたんだ。お前は期限を何と心得て居るんだ。

お前が其樣云ふ了見なりや、此方も其れ丈の事はして見せる、もう一日だつて待つ事は出來ないわ。今夜にでも屹度した話はしるから、其積で居るが可い。」

いきまき立つて詰寄つて來る。途端に隣の畑から、

「まあ〳〵太田さ、左樣もきどうに言つて了はねえで、」

と鍬を肩にして來た老爺がある。

佛が三代續いて四代目の當主に、閻魔が生れ出たと言はれて居る。兎の毛で突いた程の同情もない、いやが上にも貪つて、苛酷な手段で、自分の所有以外の中深澤の耕地を、殘らず貸金のかたに取り上げてしまつた。小作人の中にも其小作米で生活して居たものは、差詰め生活の道を失つて村にも居られず、他郷へ流浪したものも少からずある。このやうにして惡辣の手を些も止めやうともせず、富が有するあらゆる暴虐、あらゆる惡德を恣まゝにして、能ふ限村民を虐げ、其無慈悲なことゝ云つたら、今身を殺さうとする者を見ても止める處か、手を貸して斷末魔の苦痛を多からしめる程である。見やう見眞似に、番頭共もまた、瞑鬼を苛責む馬頭牛頭にもまさつて、無法の振舞を敢てする。三代相傳へた恩惠も最う此頃は何の殘る處もなく、闔村怨嗟の聲の潜まぬ處もないのだ。が、主人を始め番頭一同更に顧慮せず、愈〻其暴虐の手を擴げて來たのである。今も番頭の太田は些細な言葉の行違ひから、かさに懸つて威嚇

し罵り、散々謝罪せて惡々しい捨言葉を挨拶に、ふいと行つてしまつた。跡に源作が、

「何うも有難うがした。御蔭でまあやつと馬鹿野郎戻りやがつた。」

と仲裁をしてくれた、尻切の筒袖半股引、菅笠を冠つた、同じ扮裝の百姓に禮を云ふのである。

「はて禮處かお互樣だ。些少と早いだけんど、木蔭で一吹つけねえかね。」

「俺、先刻からつけてるだ。其れぢや一休みしやうかね、どうせ働いた處が、鬼の奉公だに。」

「其通だアよ。」

と二人は、枝を張つた楢の木の、日を遮つて道を蔽ふ木蔭に草を敷いて、そよそよと面を撫でる風を飽まで入れ、臭い煙草を吹かして目的もなく見とれて居る。縱横に畦路を渡した畑入り亂れた田面、繁茂た桑畑、突當つて雜木林が見える小山、何れも暑さに元氣なく、芋も稻も若い太根も萎れ返つて、空には燒山のやうな雲の峰が恐しい形に湧いて居る。思ひ出したやうに源作が、

「あんまり非道でねえか、聞いてくれせえ、内證話だけんど、節季の小作尻がまあ五兩と三分殘つてるだ。それを此の十一日に納めるつて證文を入れて置たゞが、今日十五日、たつた四日で毎日の惡催促でねえか。長い事ちやねえ盆まで待つてくんろッて、腰ッ骨打つて居るだが聞きなさる通りだ。お前何と思ふまア五兩のかたに家を抵當にしろつて言ふでねえか。借たが惡いは知つてるけんど、あんまり無法にや、いくら俺がやうなもんでも腹ア立つだよ。」

「ほんにのう、あのまた太田の野郎が挺でもおへる野郎かい。アヽア先の旦那樣は好い人物だつけが、とんでもねえ鬼を生んで下されたゞ。」

「全くだアよ。あんな好い旦那樣の子に、どうして那麼鬼が生れたゞか、あのまア鬼が生きてるうちは、年が年中働いても、彼奴の食物になるより外に、全で何も仕出かす事は出來ねえだ。」

「長い物にやまかれろだから、仕方もねえだが、此れちや全くやりきれねえよ。」

「何、かうばつかりでもねえだ。中深澤の百姓だつて犬猫ちやなし、左樣何時までも鬼の好都合にやなつちや居めえ。今に何とかなるだらうよ。」

「けんどもまア、何を言ふにも相手が鬼だからなア。小作でも取上られて見なされ、直に顎が乾上るだア。あゝ。」

とうつとり向ふの小山を眺めた。風は煙草の煙を散し、頭上の楢の葉が戦ぐ毎に、日光を溢れて、二人が足もとに小さい丸い光線が亂れる。

（四）

「其れが可かんと云ふんなら、小作をあげるまでだから、どうでも勝手にするさ。」

と空嘯いて、相手を見下して居るのは、奥村家の當主で、卯三郎と云ふ四十五六、體格の可い肥肉の鼻の高い、濃い眉の下に凄い光を持つ大きい眼の、いつも傲然として下目に人を見下す癖がある、前に尤もらしく頭を下げて、村の總代三人窮屈さうに跪座て居る。今まで五分々々の小作料を俄かに七分に上げる其れが厭なら小作を取上ると云ひ渡されたので、眼と眼を見合はしたが詮もなく、何はしかれ出來るだけは哀訴して、何卒もと通にして置いてくれるやうにと、打揃つて來たのであつた。

「何方にしても俺には別にかはることもないのだから、どうともするさ。然しお前方からも算盤を取つて貰はなくつちや困る。地租は上るな、縣稅や村稅は此頃は倍宛もかゝるわ。用水の堤だとて年々費用が嵩むと云ふわけで、

中々一通の入費ぢやないわ。俺も好奇で小作に下して置くんぢやない、幾等か儲がなくちや食つて行かれないから、お前方のやうに自分勝手の考ばかりやられては、全く困るといふものだ。」

「ハイ〳〵、お前樣の云はつしやる處は、誠に御尤ぢやござりますけんど、何を申しやすにも、此頃の不景氣で、只さへ困り拔いて居る處でござります。其處へ持つて行つて又た七分の小作米となりました日には、全く村の者が行き立ちましねえでがす。どうかまア御慈悲にこれまで通で、御勘辨くださりますやうに、」

「可かんよ。其りや何と言つても可かんよ。前から言ふ事だが不景氣はお互樣だ。俺一人景氣の好いわけではねえわ。」

「左樣云はつしやれば、全く其れまでゞござりますが………、」

と恐る〳〵見上げたのは、額にも頰にも深い皺を刻んだ、誠實らしい氣の弱さうな、五十七八、もう六十に近い老爺で、他の二人も同じ年格向である。

「全く村の者が行き立ちましねえだ、御慈悲に此迄通で御勘辨くだされえまし。

其代り村内一統申合せまして小作尻の滯るやうなことは必ず致すやうな事はしましねえから。」

「くどいわ。解らんなア、何度云つても同じ事だ。七分の小作料を出せなければ、小作をやめる分の事だ。なにお前方から强ひて小作をして貰はんでも可い。何とあつてもお前方の要求は容ることは出來ない。」

「ハイ。」

と度胸をついて、三人とも顏を見合すばかりで、暫時は言葉も出ない。

「ではござりませうが、其處を御慈悲に御勘辨くださりまして、小作尻は必ず……………」

「ふむ、小作尻を滯らせない。其りや當然の話だ。滯らせるなら滯らせるで可い、此方は此方で滯らせない手段がある。出來なければ出來ないで無理にとは言はん。今日から斷然小作は取上るから、然う思つて貰はう。もう用はない筈だ。歸るが可い。」

ついと立たうとするのを、慌てゝ縋つて、

「まあ、ま、待つてくださりまし。那樣事になりますれば、村中殘らず他鄉へでも行かにやアなりましねえで、御慈悲にどうか……」

「其れでは云ふ通の小作料を出すと云ふのか。」

「ハイ、でござりますが左樣いふ事になりますと、全く生活して行かれましねえので、其處々をどうか……」

「えゝ那樣事は出來んといふに、最ういふ事はない。今日から一切小作は斷るぞ。」

やれ、ま待たしつてと、三人の村總代が縋るのを振切つて、荒々しく奥へ入つて了つた。取付く穗もなく、怨めしさうに見送つたまゝ、誰云ふものもなく、屈托さうな、失望した顏色は蒼白て、言合はせたやうに膝はわな〳〵顫へて、太息と共に老の其眼には既や涕さへ持つて居るのもあつた。

(五)

「おい聞いたか。」
と呼びかけて、づいと寄つて押し並んだ壯漢。
「何を、」
「何をつて解らねえか、鬼の返事をよ。」
「鬼の返事つて、鬼がまた何か云ひ出したのか。」
「あれ、われまた聞かねえかい。まあ歩かうよ。歩きながら話すだ、早く行かねえと待つてるだから。」
と話しながら行くのは野良を了つてこれから寄宿へ遊びに出掛ける矢先なので。
夏の日脚は、まだとつぷりと暮れきらず、蒼味がゝつた薄闇で、立木の姿も定かに見えた。彼方に奥村の屋敷構がゆゝしい輪廓を見せると、此處に木立をあしらつた茅屋から其れ〳〵に火影を射出して彼方此方に、心ゆくまゝに謠ひ

すます追分節が、揉れ〳〵て澄んで聞ゆるばかり、沈んだ空はほの闇く、糠星の數もまだ少ない、拔いて取つたやうな夕の景色である。まばらに建てられた茅屋根の間を屈り曲つて縫ふ道を歩いて、二人の若者は其談話を續ける。

「俺今まで汝のやうな暢氣な野郎見たことねえ。言はゞ喰ふや喰はずの境でねえか、其れを知らねえなんて、汝餘程どうかしてるぞ。」

「だからよ、其れがどうしたゞつて言ふんだ。」

「これだ、われ其れだから人が暢氣だと云ふだ。聞けよ。鬼奴がお前小作料を七分だすか、其れが出來ずば小作を殘らず上るつて云つたゞ。其れで村ぢや又兵衞さと酒藏の親父さと九郎助さを總代に立つて、どうか舊來にして置いてくれろと手甲擦つて頼んだが、鬼奴どうしても聞かねえだ。」

「何、小作料七分出せ。そ、那樣無鐵砲な事あるもんでねえ。これ、地主は可からうが百姓はどうするだ、えい庄六、七分の小作料を出して食つて行かれると思ふかよ。三人の衆もまた三人の衆だ。うんと云つてやれば可いでねえか。」

「其れがよ、何を言つても相手が鬼でねえか。厭なら小作を上ると云ふだ。」

「小作をあげるッ。へん威嚇しやがる。あげるならあげて見ろ。中深澤五千刈の田地を荒らして置けるかい、小作をあげると云つたら仕方があんめえと思つて云やがるだ。畜生、あげるならあげて見ろ。」

「左樣は行かねえよ左樣は。鬼奴意地になつて他村から小作を入れゝば廉けりや何處からも來るでねえか。」

「ヤイ馬鹿。那樣態だから鬼が威張るだア。他村から小作を入れる、面白いや憚りながら中深澤にや淸四郎が居らア。他村の奴等が一足でも踏込みやがれ、向脛敲折つてくれるだ。全體今までに村の衆が鬼を退治すれば可いだに、恐がつてばかり居るだからおへねえだ。小作料を七分出せたア何の事だ。鬼奴あんまり增長しやがると只ア置ねえぞ。やい庄六、確りしろ此野郎。今にでも鬼退治が始まれば、汝も出なきやなんねえ若衆でねえか。小作をあげれば他村へでも行なきやなんねえ。其れは出來ねえ事だから多寡を括つて難題を出しやがるだ。まご〳〵しやがりや鬼退治しやうぢやねえか。」

「何が何だつて鬼の仕方が、あんまり酷いわ。俺も左樣は思はねえでねえが」

「思はねえでねえぢやねえ、遣るだ〳〵。遣付けるだ。」
と話し合ふ背後から白手拭で頬冠をした、これも寄宿へ行く若者らしいのが
「待てよ。其處へ行くのは誰だ、」
「おう俺等だ兼藏か早く來う。」

（十八）

「今夜は早いでねえか。待つてる阿魔もねえに急いだつて駄目だ。其れとも早く行つて一つも餘計に世辭を云つたらつてのか。廢ろ／＼。御人態と相談しろ。」

「何を云ふだ、稀に一人化物退治だと思つて力味むない。われは知るめえがな、誰一人汝が好奇を笑はねえものはねえだ。」

「はゝゝ、猜むな／＼。それよりかわれ今何相談して居たゞ、何でも俺除物にするのは怨みだぞ。」

「何でもねえ鬼の事よ。汝知つてるだらう、俺今庄六から聞いたゞがな、俺聞いたばかりでも腹が立つてなんねえだ。兼藏汝化物退治が甘いや、鬼を一つ退治してくんろよ。」

「これ、化物々々つて言つて貰ふまいぞ。人聞きが惡い。憚りながら俺がお末はな……、」

「はゝゝゝ澤山だ。默つてそれを聞いて居られるかい。其れだから汝は好奇だつて言ふだ。それは可いが鬼の事だ。」

「むゝ、言分はあるが今はまあ許して遣らう。鬼の話は聞いたがな、俺もう癪に觸つてなんねえだ。那樣無法な事しやがるが最後、只は置くめいと思ふだが、汝等だつて左樣だらう。」

「左樣だとも今も其話なんだ、默つてばかり居ちや癖になるわ。一番中深澤の若衆の手並い見せてくれにやなんねえ。」

と移り行く夜の小路を、三人はやがて家の一寸途切れた處へ出た。左は雜草が敷いたやうに密かに茂つた原で原を越して窓から漏れる火影にそれと首肯れる一軒家がある。

見渡す彼方は靄が瑤曳くともなく瑤曳いて、次第に數をました星は煌々としきりに瞬いて居る。調子を取つて水車の音が、かすかにあるかなしに、やさしく聞えると其近くに、折しも密々と話し合ふ若い男女の話聲がした。礑と步を止めた三人、顏を見合つて點頭いた。

「彼奴は太田でねえか。」
「彼奴も仇敵の片割だ。主人に負けねえ業突張だ。畜生手始めにやッつけやうか。」
「よからう。庄六、確りしろ。」
「合點だ。」
いふなり各自に腰の手拭を取つて、顔を匿くすと下駄を脱いで尻端折、手早く帶を締めなほして、
「可いか。」
「よし。それッ。」
とも知らず、談話に夢中の二人の、いきなり背後から女の肩へ手をかけて、
「この阿魔借りるぜ。」
と二人が手を割うとした。
「こらッ何をしる、惡戯ると聞かねえぞ。」
「惡戯も糞もあるか。阿魔を借りるに不思議があるか。」

「この野郎誰だ、俺を知らんのか。貴樣等は誰の御蔭で生活してるんだ。こら、太田を知らんことはあるまい、惡戲ると其分には差措かんぞ。」

「えい、生意氣云ふない。」

と矢庭に拳を固めて打ち込んだ。其手を逆に取つて鞺と投げ、一足下つて身を堅め、下駄を片手に振冠つた。

「サア來るなら來い。」

此方も左右には打込まず、隙を覗ひ背後へ廻り、一人忽ち力を極めて組付いた。

「それ足を取れ。」

云ふより早く庄六は、飛込みざまにもろに兩足を引手繰つた。倒れる太田にのしかゝつて、頰も歪めと打据ゑる清四郎。あとの二人は足を擧げて處も嫌はず蹴立てる、喚く、罵る、打つ、悶く、靜かな夜も散々に掻亂されたのであつた。

（七）

小作料について村の願を許容なかつた其夜に、何れ村の若者であらう、番頭太田を容赦もなく散々に打ら据ゑた。これで談判の綱は斷れたやうなもので、彼此對峙の姿で、十日ばかりは別段に話もなかつた。が、征矢はついに奥村家から切つて放たれた。

昔は可なりの資産があつて、中深澤では中通、小樂に生活した方で、人望も相應にあつた飴屋と呼ばれて居る家名の一家が、數年來の不幸續きで、主人は一夏流行つた赤痢で死ぬ、家計は頓に衰へて勿論其苛酷な手段に陥つたのではあるが、所持の土地は殘らず奥村へ抵當流で取られ、なほ若干の借金があると云ふ始末である。子息は若し、女主の手一つで、踏張つてどうすることもならず年々衰へる家勢に、子供二人を子守奉公に出し、一人齷齪して其日に追はれて居る。其さへ種々な苦勞に負けて、久しい前から惱むヒステリーが亢じて、此頃は枕に就いて居るのである。

壁は煤け障子は破れた、薄暗い陰氣な家の、佛壇と床の間とが並んだ座敷らしい處へ其佛壇の方を枕にして、固い蒲團を敷いた上につぎはぎの當つて垢のついた綿入を着て汚ない手拭で鉢巻をして窶れ拔いた四十一二の女が寢て居る。亂れた髮が鉢卷を越して顏に亂れかゝつたのが蒼白た顏色、痛々しく瘦せ殺けた頰骨、落ち凹んだ眼眸を更に物凄く見せる。生計の事、子供の行末差當つて嚴しい催促のある、奥村への借金はどう方をつけてよからうか。斯樣な思ひに胸は搔き挘られるやうで、儚ない考のみが浮んで來る。慰めて貰はふにも子供は居ず、只さへ心細い病中を、佗しく一人で、ヒステリーの尚更憂鬱に沈んで居る處へ、あてつけがましく手荒に潜戸を引き開けて入つて來たものがある。

「おう、此れは太田さ。」

と大儀さうに起き上つて出迎へた女は、もうおど〳〵して、どうしやうと的もなげな、胸の亂が術なさゝうな樣子を見せたのである。

太田は立つたまゝ、刺々しい聲を張つて、

「おい此れを知つて居やうな。お前の入れた證文なんだ。」
「ハイ。」
「今日はどうあつても埒をあけて貰はなくちやならん。すつぱり埒をあけて貰はふ積で來たんだ。度々の事で云ふも面倒だ、サアどうしてくれるんだ。證文の期限は誰よりお前が一番よく知つてる筈だ。」
「ハイ其れはもう……、誠に申譯ねえ譯でござりますよ。せめて俺が身體でも可けりやまた何とか仕樣もねえでもねえだが、何を云ふにもこの通の身體で……、度々御氣の毒樣でござりますが、どうか後生にもう少し、」
「駄目だよ。これ期限を何と思つて居るんだい。自分で入れた證文だ、期限を忘れることはあるまい。今月は何月の何日だと思つてるんだ、返濟ないなら返濟ないで可い。然しこれは知つて居るだらう。」
と懷中からまた一通の證書樣のものを示した。
「そ、其れは、」
「これだ。知らんことはあるまい。愈々期限が切れて返濟ないときは抵當

に入れたこの家だ、何時でも立退きますと云ふ念書なんだ。」

「えッ。那様者入れて置た覺は全くありましねえが、ど、どうしてまた那様物が……」

「覺がないことがあるもんか、證文が物を云ふ世の中だ。此印形に間違があるか、サアよく見るが可い。」

驚きながら、見ると入れた覺のない證書にまぎれもない自分の印形が捺されて居る。相手は鬼のやうな無慈悲の太田飴屋の後家は見る〳〵蒼白めて齒の根さへ合はぬ。太田は振返つて、

「おい、始めるんだ。皆が入つて來るんだ。」

（八）

「な、何を云ふんだ。正當の權利を主張したに何の惡事がある。勘辨もしやう容赦もしやうが、其れには其れ丈の合點が此方に行ねばならん。動ともすれば亂暴な眞似をする、那樣村の奴等に勘辨も容赦もあるか。飴屋ばかりぢやない。お前方にも屹度太田は太田丈のやり方をして見せる。其積で居るが可い。」

と念書の不正を爭ひ、家を出まいともがく、見るも哀に衰へた病婦を無法に外へひきずり出して、戸も障子も犇々と釘付けにして、後家が泣き叫ぶ聲に、詫をしてやらうと來た村人を一喝して、太田は連れて來た四人のものと去つて了つた。あまりの事に來合せた人達は呆氣にとられて、暫時誰云ふものなく茫然として其去るにまかせて居つたが、やがて互に口を極めて奥村の不法と太田の殘酷とを罵り合て居つたが、

「やアお前等、此家の內儀はどうしたらう。內儀が居ねえでないか」

と不意と一人が云ひ出したので、
「ほんに左樣だ。まあ何處へ行つたゞア。」
と今更らしく四邊を見廻したが病婦はつい先刻殆んど太田と前後して、見返り／＼悄然此處を去つたのを知らないのである。
熱にでも犯されたやうに、ばうとして、此處等の人々に顏を合せるのが耻かしいやうな氣がして、何處と云ふあてもなく、ふら／＼足に任せて何時となく村の脇を流れる荒瀨川の畔に來た。夏の眞中のしかも數日來の天氣に水涸はして居るが、なほ飛沫を飛ばして瀨は足元に、岸を擣ち岩に激し、水音高く流れて行く。
水を打つて折しも吹き上げて來た川風は、病婦の袂を拂つて肌にひやりと當つた。はつと吾に歸れば、忽ち口惜さが胸に込み上げて、何としてこの怨を返してやらう。覺もないあの念書は、捺してあつたあの印形は、まあどうしたことであらう。よしやまさしく自分が入れてあつたものにしても、このやうに病み衰けた病人を窘る處もない目に遇はすとは酷いといふにも程のあつた

もの殊に例令印形は本當でも、あの念書は何處までも自分は入れた覺えはない。女と見蔑つて何時の間にか、あのやうな念書を書いて印形を捺して置いたのであらう、あゝ自分が愚から先祖代々の家を取られて、何うして御位牌に合す顏があらう、家までなくして世間へ顏向けも出來ぬ。二人の子供等に只一の遺物もなくしてしまつて、かうと知つたら親甲斐もない親と定めて自分を怨むであらう、あゝ三方四方自分の行く道は殘らず塞つてしまつた。これと云ふのもあの鬼奴が、あの鬼奴が無慈悲からだ。口惜しい、どうにかして怨がかへしたいと云つて此處まで來てさへ呼吸切れのするこの病身では、どうすることが出來やう。と亂るゝ思ひに足元も亂次に、なほ流に沿ふて行くあてもなく步いて、瀨々は矢を射るごとき急流も一處油を湛へたやうに波もなく蒼く澄んで、渦を捲く水の綾が、枝を張つた楊の大木の下に白い泡を寄せてじつと沈んで引付けるやうな淵の脇へ來たのである。何と云ふ名もないがよく投身のある淵なのだ、此處へ來た病婦は其まゝ足を止めて、また思に沈んだのである。岸の楊や椎や蘆やが風に揉まれて寂しげな音を擧げると、音も

ない淵は何とも知れず引寄せるやうに沈んで行く。一心に淵を見詰めた病婦は窶れた面に朱を注いで、屹と背後を白眼んで、

「奥村の鬼奴、死んで〳〵怨んでくれるぞ。」

とあはや身を躍らせやうとした。同時に、

「これ飴屋の内儀でねえか、まあどうしたゞ。かうれまあ、」

病婦は口もきかぬ。抱留めた手を離れやうともがくのである。抱き留めた清四郎は、

「危険ねえ、まあ氣を靜めてくんろ。俺今話聞いたゞ。敵は屹度取つてやる。これさ、まア危険ねえでねえか。」

（九）

此處に二人、其裏若さの、心はとくに浮世を離れて、丁度翼でも生えて天國を翔けて居るかのやう。此夜も此場所も、人を雜ない二人が天地に、二人は現心になつて胸の小琴を調べて居るのである。嬌羞しさうな優しい眼眸で、そつと男を見上げ、何にか氣怯がした樣子で、肩を流して眼を逸したのは、十七八、すらりとした見好い姿で、色白な面長のつゝまやかなしほらしい娘で、白地の中形の浴衣に、模樣はわからないが、赤いメリンス友禪の帶を締めて居た。四邊は閴として、頭上の木の葉ばかりが風を迎へて、ほのかに夜を私語くのである。月は段々光を增して來て、模糊とした處も明るくなつて、薄明るい野を透して古風な村がぢつと立つて居る。村から離れて、荒瀨川の瀨が見える原で、古い欅の下に娘と戀を語つて居るのは白地の浴衣に兵子帶と云ふ扮裝の柔和さうな小造で、廿才を越して間もない男である。月は梢を辷つて枝越に影を漏らして、二人を包んで足元に咲く覺束なげの月草を洗ひ、月の光をうけて、じつ

とり浴びた露が、煌々光る彼方から遠寄に寄る虫の音がする。
「若旦那様。」
「何だね。」
「若旦那、あの…………俺お前様に聞きてえことがあるだが、」
「むゝ、何ういふ事。」
「あの、お前様、怒らなくつて、」
「何だね、まア言つて御覧。」
「はア、言ふがね。俺には大事なこと俺一生懸命で聞くだから、お前様も其積で…………」
お靜と云つて、酒藏(屋號)の一番の孫娘なので、祖父の自慢ばかりでない好容貌である。
今年十八、田地は奥村へ取られても少しは樂なので、野良へは出さす、衣物も相應に注意するので、鄙には惜まれるほどにも見られて居るのである。
「何だか言つて見なくつちや分らないぢやないか。え、何だね。」

「それだから怒らねえでくださえましよ。」
「む、可し、何ういふ事。」
「あの一生懸命なのだから、本當に一生懸命なのだけんど………、」
と何處までも邪氣ない。女は云ひかけて言ひ淀む。言つて了はふかどうしやうかと、さまざまに胸を惱めたやうであつたが、思ひ切つたやうで聲音は上走つて調子の亂れて居るのに、何を言出すかと思ふと、
「お前樣、あの津川のお孃樣の談話を斷らしつたつて、本當？」
「む〻、斷つたが何うしたのだね。」
「何故に、え、何故斷らしつたゞ。」
「何故とは何の事だ。解らないの、え、お前の解らない事はない譯だ。」
「でも、そ、那樣事なすつてお前樣大旦那樣が默つて居さつしやる筈はねえでねえかね。」
「む〻、親父が何うした處が、私の心は、」
と言掛けたが、折しも脇路を誰やら通る人の氣勢に、衝と避けて急がはしく木

蔭へ身を寄せた。女も同じく後を追つたが、振返ると其足音は聽て彼方へ遠ざかつたので、其儘犇と寄添ふと又、

「と言つて御前樣、大旦那樣の仰有ることをお聞きなさらねえで、何うなさるだ。お前樣が那樣事をなさると、俺心配で仕樣がねえだ。其れに俺何だか申譯がねえやうで、」

「誰に。」

「誰つて大旦那樣と、あの…………、」

「親父と、誰かね。」

「あの…………津川のお孃樣に、」

「ふむ、何故。」

「何故と云つて、何だか俺は、」

嫣然と打笑みながら、

「それよりか御前樣本當に津川の御孃樣をお貰ひなさると可いだに。」

と聞えよがしに獨言いた。

「可いさ〳〵、お前はお吉さんに申譯がないか知らんが、私もお吉さんを妻にすると申譯のない人があるから、それでお吉さんの方は斷つたのさ。」
「誰だね。其申譯のねえ人つて、えゝ若旦那敎てくだせえよ。」
「聞いて何うするね。何處かの其處等に居る人さ、」
「誰。まア、」
「お前さ。」
「あれまア。」
と言つて躍る胸を押匿すやうに。
「俺なんてどうでも可いだ。お前樣は津川の御孃樣をお貰ひなすつて……」、
「お靜。」
「はい。」
「お聞き。一寸、」
と耳元に口を寄せて、二言三言、何か知らず囁いた。お靜は聞くと共に、
「えッ、お前樣。」

云ひさま不意に取縋つて、胸に頭を押當たと思ふと、感餘つて泣き出した。男は肩に手を、

「可いか。え、お靜、其内時節も來るからな…………お吉さんへはお氣の毒だけれど、私には那樣事は何うしても出來ない。お前も其積でね、可いか解つたらうね。」

「若旦那樣、何にも申しましねえ、し、死んでも…………」

（十）

何か小聲に歌ひながら行く男の後姿を、お靜は吾を忘れて凝と見詰めて居た淚は頰を零れて月にきら／＼とする。原の彼方へ一歩ごとに男の影はぼんやりして來て、黑ずんだ小さい屋根の見える水車小屋のあたりで匿れると、お靜は俄かに我に返つたやうに、見えない信一を伏し拜んで、

「若旦那樣、し死んでも、死んでも…………」

男の情のつく／＼と身に泌みて、お靜は嬉しさ有難さに胸が迫つて、言葉も斷斷に殘を續け得ないのだ。稍や更て月の光が潔よく澄んだ具合、闇としづまつて來る夜の氣勢、生き返つたやうな草のうちに、露を貪る虫の音を前後にして、お靜はなほも思ひ續けて居た。何よりも只だ勿躰ないやうな氣がして、至く自分で自分の身が解らないのだ。信一が言葉を繰返して、信一が情に涕の上に涕を注ぎかける。一時の浮いた心からではなかつたが、お靜は信一が妻にならうなどと云ふ心は露程もあつたのではない。娘氣のわけもなく最愛

くて、いつしか深くなつて了つたので、さうなつては尚更其人が忘れられず、何事も吾身の先に信一が事の胸に浮んで來て、若旦那樣の爲めには、此身はどうなつても可い。とお靜の思ひは單にこれより外になかつた。然しながらこれも此土地の素封家で、津川の總領娘のお吉と云ふのが、信一が妻になると云ふ話を聞いたときには、我にもあらず口惜しい、嫉妬しい、言ひやうもない儚ない氣がして、胸が閉いで二日ばかり枕も上げ得なかつたが、あゝ死ても自分は信一が妻にはなれない身の上なのだ。自分もまた始めから奧村の嫁御寮になどゝ云ふ心で、この眞心を信一に捧げたのでないと思ひ返して、起きは起きても、忘れかねるは其人の事で、どかうして一生若旦那樣の御傍に居たい、假令へどのやうな苦勞をしても若旦那樣の御傍は離れたくない。人が何と云つても構ふものか、出來るものなら若旦那樣の…………。時折かうして逢つてさへくだされば、其れで何の望もない。今度逢つたら御願ひ申して見やうかと斯う思つても、逢へば嬌羞さで口まで出てもつい云ひ切らなかつた。其内に信一がはげしく親父の言葉に反對したことを聞いて、あの柔和しい若旦那樣が

と胸を躍らしたが、遇つて話を聞けば、まあ何と云ふお情けの深いことであらう。吾身の爲めにあの美しい怜悧者の評判なお孃樣さへお斷りなさつたと云ふ、あゝどうすれば可いのだらう。

「若旦那樣、御恩は、屹度々々御返し申しますだ。」

と吾知らず口に出して、お靜、は最早影も見えぬ信一を見送つて居る。涕は收まつて美しい顏には活氣が充ちて、眼さへ冴えたやうに見えたが、心付くと早夜は餘程更て來た。四邊を見廻してお靜は何時になく遲いのに急いで歩を村の方へ押向けた。胸はさま〴〵に亂れて居るので、いつかは知らず望が叶つて、今若旦那樣が言はしつた通りに、やがて奥村の嫁と呼ばれたときに、今のやうな不束でも仕樣がないなどゝ、當にせぬ思ひ過ぎなどもして、何處をどう歩いたのか、いつの間にか家の脇へ來た、只見ると家の中には煌々とした洋燈の光、村の若者の數を盡して囂々と話し合つて居る。隅の方には年寄の一團話の的は奥村家の事で、

「馬鹿な事だ、子息も敵の片割だ。柔和しいも糞もあつたもんか。やるなら

一所よ。」

とかねて知つた清四郎が音聲。お靜ははつとして小脇にかくれて身を寄せて、思はず知らず耳を澄した。

（十一）

「其様だけんど、何も若旦那様まで………鬼さえやれば其れで可いでねえか汝知らねえ事だけんど、奥村ちう家は其りや中深澤の爲めにやなつたもんだ其れを汝若旦那様までやつて了つちや。俺が先代の旦那様に濟ねえ。汝も知つてる通り、若旦那様は柔和くて情も深えだ。其れを何も………」

と老人の聲。躍起となつて淸四郎は、

「其りや恩は恩、讐は讐さ。先祖は恩もあつたらうさ、若旦那は柔和くて情もあらうわけんどもあの鬼はどうだ、鬼は。」

只ならぬ事とは思つたが、何を爲うとするのか、お靜は直には合點が行かなかつた。淸四郎は一層聲を張上げて、

「其りや年寄衆は奥村の恩をうけたらうが、俺等にや恩も糞もねえ、なあ兼藏左様でねえか。」

「左様だとも。俺等のやうな二歳の云ふ事ちやねえかも知んねえが、其りや

寛大に見て貰つて、俺等にも云ふ丈の事は云はして貰ひてえ。九郎助さの前だけんど、今度の鬼の仕方は何と云ふ事だ。欺詐で謀判で盗賊だ。盗賊は可いさ、鬼の爲さうな事だ、勘辨もしてやらア。盗賊は勘辨しても人殺は勘辨出來ねえ。どうあつても勘辨出來ねえ。其れに飴屋の内儀と清四郎と約束した言葉もあるんだ、鬼の一族と來ちやどれもこれも容赦はねえ。俺等がやつつけてしまうわ。任して貰ひてえだ。おいお前等も故障はあんめえ。」

と席に連なつて居る若者等を見渡した。

「おうさ、故障があつてどうするだ。若連中相談の上の事でねえか。年寄衆が聞かなけりや若連中一分でやッつけて了ふ約束ぢやねえか、苦情があつてどうするだ。」

と殆んど同音に答へたのである。兼藏は清四郎と面を見合せて、互に其れと合圖をしたやうであつたが、起ち上りさま清四郎が、

「左樣でなけりや男でねえぞ。其れぢや先刻の相談のやうにサアやッつけるだ。向ふの樣子は誰か見て來て置いたか。子息の方は今夜は何處に居る

だ。」

「矢張まだ川向の隱宅に居るだ。」

と一座の中に答へたものがある。

「左樣か、それぢやァ論なしだ。先刻のやうに二手に分れて、よしか。」

「合點だ。」

すはとばかり、座は氣負立つて、見る間にどよめき渡つた光景。飴屋の後家が身投の事を小耳に挾んで居たお靜は扨てはと思ふと、胸は躍り思ひは直ちに信一が周圍に飛んで、思はず固くなつて此場の成行に心を痛めて居た。

飴屋の後家を救助ると、其まゝ清四郎は村のためなり重なる此れまでの怨恨を報い、殊には飴屋の後家に誓つた約束を履むやうに、奥村家へ押し寄せて、一擧に家を燒き人を屠つて甘心しやうと、仲間の若者を説き廻つたのであつた前後の思慮もなく、怨恨に驅られた若者等の心は、事の痛快なのに更に動いて相談は直ちに一致して、酒藏が村總代を爲て居るので、一寸と斷りをかねて村議も一致させやうと來たのである。氣の早い輩はもう得物おつとり甲斐甲

斐しい仕度で來たのもある。奥村の當の主人の、卯三郎はやッつけてしまふだが、然し信一まではよくあるまいと云ふ年寄輩の所説と折合なくて、幾度か云爭つた揚句、面倒だ。よしそれならとばかり若者丈でやつて了ふ氣勢を示して、清四郎は兼藏と共にすつくと立ち上つた。年寄手合も今は仕方なしにと云ふさまで、やがて同意したやうな色が見える。お靜はどうしやう、信一が身の上の大事は只だ一時に迫つて來て居る。言ふ迄もなく手配は最早整つて居るのであらう、若者連中は總立になるかと見ると、颯と二手に分れて今にも押し出す氣勢、お靜は吾を忘れて飛び込うとしたが、矢庭に又踏止まつて、屹と家内を白眼んで立つた。

（十二）

氣がついて見ると座敷の障子際に何十本かの棒と鳶口が立てかけてある。かねて知つて居る村の若者が喧嘩に押出す折の其得物である。家内では年寄までが向鉢巻、若者輩はなほさらの事呼吸はつまり顔色は蒼白め眼は張り口はしまつて、殺氣は自から溢れて見るから物凄い。一手は淸四郎、一手は兼藏が若者の指揮を取るらしく、祖父も兼藏も背後に此連中につれて、年寄ながらも手助をするのであらうか、樣子に其れと露はれて居る。

お靜が胸の轟は更にはげしくなつて、氣ばかり焦つて差迫つてどうしやう手段も出ず、と言つて氣がゝりな此處を離れることも出來ぬ。開放した座敷の敷居に腰を掛けて、いざと云はゞ一番に躍出す氣構の若者が十五六人、殆んど半逆上に逆上て、がや／＼と胸の潰れる事のみを云ひ散して居る。

「兼藏、汝何處へ行く。」

と忽ち又淸四郎が云ふ。

「俺りや何處へでもだ、まあ汝勝手の方を選れ。」

「さうか其れちや俺を鬼の方へやつてくれ。汝子息の方へ。よしか。しつかりやれよ。」

「大丈夫、殺さねえまでも半不具にや、逃げやうと匿れやうと乾度するわ。」

打ちつけた此言葉は、今更に劍のやうにお靜が胸を刺して、あゝ若旦那樣をどうして可いだらう、あれもう押出すだ。少しでも早く聞いたらばまた仕樣もあつたものを、今まで何も知らずつい浮か〳〵と談合うて居たことが口惜しくて、吾と吾が身を怨むばかり。

「サア兼藏出掛けやうぞ、おいお前等仕度は可いか。まだなら直ぐ仕度して後から來るだ。それ行け。」

と清四郎は勢込んで戸外へ立つた。一手のものは後に續いて、奥村家を目掛けて既や押出したのである。見るより兼藏も、

「サア俺等が方も出掛けるだ。あんまり押し合つて橋から落ちねえやうに注意ろ。」

勿論この一手は、荒瀬川に架した鶴澤橋を一向押しに押して橋向ふの隱宅をおつ取り包んで、信一が身を散々にさいなまふ目的のだ。」

おう、かうして居る場合でない。何とにかせねばならぬ。身に泌みて忘れかねる若旦那樣の御情戀しい懷しい若旦那樣、よしや大旦那樣に何れ程の惡い事があつたにしても、若旦那樣に限つて那樣事をなさるやうなお方ぢやないだ。何も知らない若旦那樣までを、不具にしやうの殺さうのと、此樣に業々しい村の人達こそ、あゝ鬼だ。假令村の人達を敵にしても若旦那樣の加勢をしなくては、女の意地が立つまい。なんとして又見す／＼あの最愛しむ若旦那樣の大難を見て居られやう、何とでも云はゞ云へ、女でこそあれお靜が一念、若旦那樣には讐の此奴等。と出來ぬ事とも思はず、一人殘さず殺したいやうな氣がして、すつくと立つてよろ／＼と、其處へ躍出やうとした途端に、兼藏が脊後に四邊に氣をくばる祖父を見ると、お靜が擬勢は拔けてしまつて、思はず其處にあつた石油の鑵に躓かうとして、僅かに支へて吐息長く涕ははら／＼と沸き返つた。

「仕度は可いか仕度は、爲てねえ者は早くして來るだ。坂の下通るだから、其處で追ひつくやうに早くして來るだ早く。」

と言葉を後に兼藏はもう押掛けて行つた。

あゝ信一が身の大事は目前に迫つて、お靜はどうすることも出來ない。祖父と最愛しい男の其間に、お靜は身を縛られて居るのである。段々と遠くなる兼藏が一手の跫音、一足毎に身はずた／＼に切られるやうな思ひがして、眼も眩むばかり、胸は波立つ。無茶苦茶に地韛踏んで泣かうとしたが涕も出ぬ。跫音は次第に幽かになつて行く。若旦那樣の一大事、お靜が面は痙攣が見えて來て、愛らしかつた眼は鋭く輝いて、喰切る程にも下唇を嚙締めて、足は踏度も知らぬやうであつたが突如何を思ひあたつたのか屹とした面は熱し右手に前の石油鑵を提げて、墓地に兼藏が手の跡を追つた。

（十二）

生命にかへて思込んだ男の上の大難も、お靜に今何としやう、男を殺さうとする憎い相手の中には、祖父が居るのである。祖父につかねばならぬものであらうか、死んでもと御恩返はすると云つた其口のまだ乾きもせぬのに、どうして又若旦那樣に反かれやう。と云つて若旦那樣に從へば祖父に抗抵せねばならぬことになる。それも出來ぬ。戀と義理との襖は嚴としてお靜が前を建て切つて身動きも出來ぬ苦しい場合に、始めて遇つた穩かな娘心は思ひ迫るばかりで何の思案も出て來ぬ。かうして居ては鬼のやうな村の奴等が、踏み込んで若旦那樣を殺してしまふであらうと、起つ居つ。祖父に義理も立ち最愛しい若旦那樣の御無事であるやうな事は出來ないものか、この身もこの生命も若旦那樣の爲めには惜くはない。時刻が遲れては何にもならぬ。早く其思案の出てくれと兩手で胸を押へて焦り立つた。亂れに亂れた心の中に猛然思ひ當つたことがあつたか、はつとしてお靜はぶる〳〵と身慄したが、

つい口に出た火燄のやうな語氣。

「俺さへ死ねば、若旦那樣も無事だし、祖父へも義理は立つだ。」

と兼藏が手の行手を白眼んで、女の纎弱さも一斗入の石油の罐を輕々提げてすつくと立つて驅け出した。罵り立てる聲音は未だ切々に來るが、跫音は漸く聞えずなる。坂の下から宮小路を通つて少し田甫を拔けて鶴澤橋へ對岸はもう信一が居る奧村の隱宅がある。後を追つては間に合ふまい。邪魔立てもせられやう、先きに廻つて思ひ當つた防ぎをせねばならぬ。とお靜は咄嗟思ひ定めて、件の石油罐を提げたなり、村を橫ざまに突切つて、先刻戀を語つた原を向ふへ眞正に橋へ行く間道へと掛つた。

ほつと息をして急がしく四邊を見廻したが、お靜の外に人も居ない。村の方ではさながらの吶喊の聲、手に取るやうに泣き叫ぶ聲々、淸四郞が一手は最早奧村家へ襲ひかゝつたのであらうか。坂の下やがて宮小路の端とも思はれる邊は、先きへ／＼とひた押しに押進む大勢の聲音、あれこそと血は更に沸返る。石油の罐を左手に持ち換へ、右手に高々と褄を端折つて、脛もあらはに素

足に草を蹂躪つて、身を前に倒れるやうに先きへ驅ける。
月は落方の西の山際に幽かに殘つた寂しい光、川面には一段と濃い霧が遙かに流域を白く曳いて風に破られて雲の纖翳のやうに、ばうと來てお靜を包んで行き過ぎる。暫くして一團風に破れてぱつと散ると、凄いばかりのお靜が姿はひたすらに前へ急いで居た。向ふも急ぐ男の足、橋の間際の田甫の其處で、兼藏が一手は罵り立つて、吾一番にと先を爭ふ光景が夜氣を透して氣勢にそれと知られるのである。寸を爭ふこの燒眉の急に、四邊の何も目に入らず岸に建つた水車小屋の其脇を上の空に驅拔けて、彼方に架つた鶴澤橋へと遮に無に先へ揉立つて行く。
道も撰はず磧も嫌はず、只だ一散に宙を飛んでまた遲きを焦せるばかり川の對岸には信一は恁樣とも知らずお靜と語つた樂さを再び夢に繰返して居るのであらうか。隱宅はたゞ寂然として居る。急がはしく眼を遣ると兼藏が一手は最早橋とは一町とは離れないまでに迫つて來た。お靜は何處を何う驅けたか、身の續くだけ驅けて驅けて驅け拔けて、橋梁の眞中に轉ぶが如く驅

けつけた。はつと見ると橋梁一杯の石油の波。

（十四）

程もあらせず兼藏が一手は橋へ近くと見るとどつと吶喊をつくつて、各自に得物を取直し逸足出して渡りかゝる。途端に、橋梁の眞中から俄かにばつと火の手が起つて、見る〳〵橋を蔽つて行手を遮つてしまつた。

「ヤツ、こりやどうしたゞ。」

と二足三足たぢ〳〵と退つた思ひも寄らぬ敵の手段に、

「油斷なんねえぞ。注意ろ。」

と互に聲を掛け合つて、急に踏込んで行くものもない。云ひ甲斐なしと兼藏が、

「えゝ、お前等どうしたゞ、臆病ものめ。サア俺に續くだ。」

と眞先掛けに鳶口繰込み向ふ鉢卷、勇んで進むを見ると共に、其れ兼藏に負けるなと三四人ばら〳〵と續いたが、火の手間近に眞向に火の粉を浴びて兼藏諸共あつと云つて飛び退つて進みもならず突立つて居る。爆然として渦卷

上る火焔の舌にさしも濃かつた川霧も拂はれて、水はあらはに焔を流し、空は其れを反映して燃え立つばかりの雲の色である。

火は風を呼び風は火を助けて黑煙渦を惓いて吐き出す火焔凄じく桁を渡り柱を捲き欄干を這つて、恐しい音がしたかと見ると、片欄干が燃落ちたのだ。

吶喊に目を覺し火焔に驚いて衾を蹴つた信一が慌てゝ戸外へ出て來た此時。橋の對岸には業々しい扮裝の人々が何となく殺氣を含んで、この火を救はふともせず、喚き叫ぶ吶喊の聲遙かに又物騒がしい叫喚の聲が、原を隔てた屋敷の方に擧つて、橋對岸の一手が怒鳴る聲々も、切々ながら身に振かゝつた言葉の綾。扨てはと氣がついて驚きながらも、對岸を眸る折しも、一陣の風は吹き來つて黑煙が颯と靡くと、髮もおどろの女が火焔の中を驅廻るのを見出した。

また一吹き火焔は勢をまして急にぱつとすると、

「ヤツ、お靜。」

矢庭に躍上つた信一は、手足を爛かし髮を燒き裙も袂も飛火に包まれて、雨のやうに降りかゝる火の粉の中を、なほ去らぬお靜をしつかと抱へて後退に火

の傍を離さうとする。退らじと焦せるお靜は、もう半ば狂氣して居るのだ。
「これ、どうしたのだ。こらッお靜。無茶も大抵にしろ……、危險ッ。何をするのだ。こらッ退ないか。僕だよ。僕が解らんのか。」
「えッ、若旦那樣。」
突如しがみついてわッと泣き倒れた。
「まア、どうしたのだ。」
お靜は口も利き得ず、僅かに對岸の人數を指して、
「あ、あい彼奴等が。彼奴等が。」
「むゝ。」
「あのお前樣を。」
「おう。」
とばかり振返つたが、咄嗟の感はあらゆる事の始終を直覺したので、
「お靜、この心切は忘れないぞ。」
言ふと其まゝしつかりお靜を抱き占めた。お靜は取縋りざままた泣き返し

た。

颯々たる夜風は、川面を眞一文字に橋に當つて、火焰の舌は勢猛に左右に這つて行く。數日來乾ききつた橋梁は見る／＼火の手が廻つたので、横に渡したさながらの火龍のやうである。對岸の人達も只だ人を揃へて怒鳴る丈で殆んど手もつけられぬ。信一はお靜を抱へたまゝで、凝と對岸の人と橋の摸樣を見詰めて居る。大釘小釘の緩む響、燼火の水に消ゆる音、柱を傳ふ火の手の一つが水際に消えると、忽ち他の火にぱつと燃立つて中程幾本の柱はまるで火柱が建つて居るやう。風に靡いては次へ燃え移り、次なる柱は下から燃え上つて桁についたかと見ると、颯と廣がつて橋裏一面の火は又吹き上げる川風に煽られて、橋板を越えて炎々と燃え上り、燃え殘つた片方の欄干はもう落ちて橋板も續けさま燃え落ちる隙から、また凄じく一團の火焰を吐き出すのである。お靜は信一に縋つたなり稍や暫時泣き入つて居つたが、わつと呼はる對岸の人聲に振返れば、今し柱は燃え初れて危く橋は傾いたのだ。また一本見事に倒れると支へは斷れて、橋梁の眞中は釣瓶落しに川面へ折れ込んだ。

同時に煽られた左右の火の手は一時に燃盛る。

「若旦那樣、俺死なゝきやなんねえだ。お、お前樣御多祥で……津川の津川のお孃樣と。」

言ひ敢ず火焔逆捲く川面へ身を躍して飛び込んだ。

「な、何をする。こらッ。」

と吾知らず續かうとする信一は、誰にとも知らず後から抱き止められて、

「放せ、お靜が、お靜が。」

と絶叫しては身をもがいて居る。橋の向側も俄かにさわぎ出した。村の方では愈〻はげしい吶喊の聲、折しも彼方から宙を飛んで來る提灯の數々〱、提灯には警察の記號が赤く照らされて見えたのであつた。

※　※　※　※　※

この騒ぎも温和な信一が盡力で負傷位はと聊か恐毛だつた父をなだめ、警察の方も無事に濟まして、萬事先代の時のやうにして事ををさめた。鶴澤橋は田舍に見ることの出來ぬ立派なものに架けなほして、橋の名はお靜橋、橋供養

も此土地未聞の盛典であつたといふ。

鶴澤橋

三銃士

(一) 瓦斯困太郎

花か其武士の劒の光、世は未た十七世紀の四月初旬、佛國米因の一郷は折しも新教徒の合圍地となり、素破と云はゞ竹槍蓆旗、遙かに婁攝の宗匠と呼應し國教革新の義擧に出でんづ、殺氣に滿ちた眞只中。

今しも其郷の一旅館、米因館の階前に毛の脱落ちた瘦馬を牽き、宿を頼みに入つて來たのは、十九足らずの面長の、日燒のしたる在所者、見るから土臭い姿でこそあれ、さも勇々しげの面魂、殊更目に立つ大刀を取廻したる身の態度、さては是も喧嘩好きの瓦斯因生れの荒童かと、見る人は疾く見解る骨柄。

有田太郎と呼ばるゝ青年、國を出る時父の口から、今世の中は武士の天下。鎗一筋の功名次第で何處まで立身しやうと儘、早い談話が利根里隊長、貴様も音に聞いたであらう今佛蘭西で彼人の威勢は飛ぶ鳥落すと云はれて居るぢや、そ

れが貴樣の稚い頃には、隣同士で俺とも懇意、似たか寄つたの身分であつた。裸體一貫有りさへすりや、人間の芽は何うでも吹く。此處にある三十圓と年は貴樣より上であるが俺が大切に飼つて居る彼の馬、それに祖先傳來の此一刀を資本にして運の限りを開いて見ろ。武藝は俺が仕込んで置いた、貴樣の手並もかねて承知、手柄は貴樣の胸にあらう。俺が添書を見たならば、利根里隊長だからと云つて、滿更菅なくも仕はすまい。萬一取合つてくれなくて、國王の近衞に成られぬなら其時は何處を何うしても、せめて李泄龍大法主の配下の武士に成つてくれ。國王路易十三世陛下を除けりや、當時は李泄龍大法主と利根里隊長との世の中、外々の武家や法師の家來ちや、思ふやうには出世も出來ぬ。何でも刀一本で、有田の家を興す氣になり、巴黎で立派な主取りして決鬪だらうが、戰爭だらうが、拘ふ事はない跡へは退くな。斬つて斬つて斬捲り、腕限り魂を磨くが肝腎、よし一歩でも引いたが最後、それが出世の打止めだと、今から覺悟をして出て行け。むゝ解つたか其れなら無事で。隨分道中氣を付けろと手渡しされた添書と共に、母の秘藏の金創膏傷には稀代の妙藥

といふ、其賜物を押戴き、さればとばかり膝下を辭したが、今しも旅路に疲れた老馬を責叩かんも難面しとや、數里前から降立ちて、漸う米因の旅館まで牽込んだ。

賴むと聲を二三度掛けたが馬から扮裝から粗末に過ぎた樣子を早くも見て取つたか、館内から急に誰も出て來ぬ。只見れば戸口の右手の窓に、二三人の男の顏、有田を眺めて何やらん、ひそ〳〵嘲りの唇を動かす、夫さへあるに今一人の、椅子に憑つたる上髭の紳士が、今時得難い名馬の標本何處の伯樂に見せるのか、死馬の骨にも値は附かうが、是は又格別生きて居て、あれ彼の通り動くが豪氣と、階前の棕梠に繫付けた太郎の老馬を無慘の冷罵、もとより氣早の太郎の身に、何條我慢の成るべきや、聞くより窓近くツカ〳〵と進んだ。

有田「な、何が可笑しい。笑ふなら外へ出て來い。男なら外へ出て、笑へ。」

紳士は靜かに振返つて、ぢろりと一目冷やかな眼を押向けたが、

紳士「何だ。俺は貴公に話して居るのではないわ。」

有田「いや、俺は貴樣に話して居るのだ。さア來い。爰まで來い。」

云はれた紳士、四十越の髪の濃い、色の淺黒い髭の立派な、旅裝束の其紳士は尙も嘲り顏に微笑みながら、やをら身を起して、態とらしくゆる〳〵と戸口の方太郎の立つて居る庭まで降りれば、何が扨瓦斯困育ちの血氣盛り、居合腰の太郎の利腕は、早くも一刀の柄に掛つた。

（二）なに利根里隊長殿

血を濺いだる太郎の面、逸り切つたる身構への早二三寸鞘走らせた紳士は、それに目もくれづ繋いだ馬の傍近く、やがて歩みを運ばせると、振返つて窓の中の男共に、

紳士「何うだ。見るほど良い馬だな。佐野の馬戸塚の坂で二度轉びか。はゝはゝ。」

わはゝゝゝと二三人紳士の嘲罵に撃節を入れたる、それより早く太郎は一喝、

「默れッ。」

とばかり拔打ちに太刀風烈しく躍上つて斬付けた。彼方もさる者ひらりと交し、

「危いッ。や、小童、味を遣るな。」

「なにを、」

と重ねて又一打、紳士も今は猶豫ならず、さそくに拔合せて丁と受けた。

「それッ、若造が抜いたぞ。打絞めろッ。」と彼の撃節入れの二三人、いきなり厨所へ駈込むが早いか、手當り次第に得物を取出し取つて返して前後左右、太郎を四方に追取卷き雨を霰と打つて掛かる、太郎は更に物ともせず、火花を散らして渡合つたが、焦つて左右へ當つた機みに思はず跡へ一足退つた。あな此一足が出世の打止め、悲しや父の訓は早くも覿面爰に現はれたかと心一つに踏出す途端、おぞくも辷つて片膝落した。得たりと付入る寄手の面々、番頭料理人給仕と言はず、一人が太刀を薙拂へば殘るは寄つて處嫌はず、續けざまの滅多打に流石の太郎も遂に堪らず、うむと一聲背伸反り返るを、今まで怖々見て居た亭主は、今更のやうに狼狽へて、水よ藥と立騒ぎ、番頭全體お前が惡い、儚しか死んだら何うするのだと、愚痴たらたらに叱付け、軈て太郎を取敢ず、只ある一室に舁入れた。

紳士は逸早く身を退いて舊の戸口の室へ引込み、何だ〳〵と往來に立懸る男女の姿を睨み苦々しげの面持して葉卷の烟を立てゝ居たが、物の十分程を經て立懸る者の薄れ行く折柄、御前には別にお怪我は、と揉手をしながら伺ひに

來た亭主、紳士は應揚に振返つて、

紳士「何うした今の氣狂は。」

亭主「へい、まア漸つと息を吹返しましたが、や恐ろしい氣暈者で、直さま起つて御前を最一度、何でも仕留めなきあ置かぬと申して飛出しさうに致しましたが、何に致せ御承知の彼の手傷。氣は焦つても身體が利かず、其儘ガックリ倒れましたが。」

紳士「はて、何處までも厄介な代物だな。」

亭主「いや最う、厄介處ではございませぬ。彼の革袋に持つて居りますのは只つた二十と五圓限り、此儘こゝで死なれましたら、何う致さうと存じましたが好い鹽梅に蘇生りましたので、私めも心配を先づ帳消しに致したと申すもの。」

紳士「はゝア、商人と云ふものは如才ない。それぢや氣絶をして居る中に、全然所持品を檢めたのだな。」

亭主「へゝ、其處はソノ、私めも、商賣柄でございますし、それに彼奴の申しますには、これが巴黎でないから好いが、儻しか巴黎であつて見ろ、俺を這んな目に遇

はせやがつて、今の武士こそ其場で捕縛だ。晩かれ早かれ此怨を乾度彼の武士に晴らして見せると、大層な口を利きますから、儻しかして何ぞ身を窶した豪い若君でゞもあるまいかと、時節柄氣にも懸りまして……。」

紳士「ふむ、假裝して居る奴かも知れぬ。名は何と云ひ…… 取持物に何ぞ變つたものでも無かつたか。」

亭主「へい、夫がその只今申しました二十五圓と、外には利根里隊長殿へ宛てました書束が一本しか。」

紳士「なにッ、利根里隊長殿? はて妙な書束を持つて居るな。」と輕うく言葉の尻を結んだ。同時に何か只ならぬ色の颯と面を掠めたのを、運好く亭主には見られなかつた。

（二）目の覺めるやうな美人

資本の要らぬ御世辭交りに哆へり立てる亭主の口を、夫となく一層釣り寄せて、結局少年漢は今昏睡中なる事、革袋は厨屋の亭主の座席に留保してある事などを確に呑み込んで扱て改まり、

紳士「亭主、此館は安全な宿かと思へば、彼ア云ふあぶれ者の飛び込んで來る、隨分不用心の旅館だな。早速勘定を仕て貰はう、而して吩咐けた馬を直ぐに。」

亭主「エヽ、何と仰しやいます。御前はアノ、直ぐさまお出發で……。」

紳士「知れた事だワ。先刻も現に馬の準備を家來に吩咐けて吳れるやう、賴むと言つておいたではないか。」

亭主「ヘイ、夫は旣承りまして、彼方の大門へ廻らせてはムいますが、」

紳士「夫ぢや勘定さへ仕て遣つたら、何も言ふ事は無いではないか。」

亭主は大分の目算違何やら口の內に呟いたが、夫では、帳場に申し付けましてと澁々立つて室を出て行く、跡に紳士はそゞろの思ひ。

紳士、宮子は一體何うしたのか。時刻はとうに過ぎて居る。寧そ出懸けて途中で遭はうか。處で今の利根里の書束、是も兎に角見て置かぬと、—と、獨言きながら起ちあがり、厨屋の方へ歩を運んだ。

亭主は帳場へ吩咐けて、紳士に書附を出せとばかり、直ぐさま太郎の室へ驅け行き、茶代の外れた憤腹を、責めては此室で癒やさうと、睡てゐる太郎を引擦り起し、無闇に喧嘩騷ぎを仕て、拔いたり斬つたりした者を家に置くのは掛り合ひだ、只つた今出て行つて貰ひましよ、お前樣ゆゑ馬鹿々々しい、立派な殿樣を失敗つて、俄にお出發になるのだわい。商賣の邪魔をするにも程がある。サアサア早く只つた今と、繃帶の下に焮け付く傷疾を衝ッ突くやうに押し立てられ、無慈悲な奴とは思ひながらも、もとより聞かぬ氣、痛みを忍んで突ッ立上り、厨房の前まで來懸る折しも、其直ぐ横方の大門に立停まつたる一臺の馬車只見れば踏梯の此方に居て、車中の婦人と話してゐるのは正しく先刻の敵の紳士だ。二十一二歲のクッキリと白い、南部佛蘭西では見た事もない、素晴しい瀟洒な目の覺める樣な美人、紳士の方に頸差延べて、

婦人「では大法主閣下の仰しやり付けで……。」

紳士「一時も早く英國へ歸つて、そして公爵が倫敦を出發つたら、直に知らせてよこせよとの仰せ。」

婦人「惶まりました。而して外に何も御用は……。」

紳士「萬事は此の小筐の中に詳しい事が籠つて居るから、海峡を渡つて向岸へ着いたら、其時始めて開ける樣にとの事。」

婦人「心得ました。而して貴君は……。」

紳士「私はこれから、直さま巴黎へ引返しますわ。」

ナニツ、歸る、己ッ、逃がすものか。と太郎は皆迄聞も了らず、メリ〳〵ツと裂けんず繃帶の手傷も忘れて飛び蒐れば、振返りさま身を開いて紳士も思はず身構へする、婦人は見るより急がはしく、

婦人「もう今一刻をも爭ふ時、其御戯事は何事です。」

紳士「おゝ、如何にも。」

とばかり太郎を振捨てゝ、傍の馬に飛び乘つた紳士、

紳士「では宮子さん、貴女も馬車をと、」
と云ふなり颯と米因館の大門を右と左に分れゆく二人、
太郎「己ッ、卑怯者めが。戻せ、返せッ。」
と門迄追驅け、バッタリ倒れた太郎の跡から、息せき驅け出した番頭が、
番頭「御前、御勘定が、御勘定が未だでムいます。」
と喘ぎ乍ら來た足元へ、それッと二三の銀貨を投げ、其儘紳士は馬に鞭。此時
婦人の乘つたる馬車も、早や小半丁驀直に蹄を蹴立てゝ馳走つた。

(四) 書束の紛失

失敗つた、折角好い客を取り逃したが、兎も角若いのゝ二十五圓、むゝ、一日二圓半に見ても、十日の滯在は確だから、マア〳〵責めては此客でも拾つて埋合せを仕て呉れやう。と忽ち撥いた胸算用、亭主は倒れて氣絶してゐる太郎を再び室へ舁き入れさせ今の間とは打つて變つて、やれアルコールの創藥のと、並等客の並等の取扱ひ。

翌朝五時、太郎はフット眼を覺まし、起き上がつて四肢の燃き付く箇所を、繃帶脫つて檢めつ、こんな赫黒い藥ではと、隱袋にあつた母の贈物、丹色の金創膏を取出し、唾液に浸して、貼り了り其儘再び横になつたが、不思議や其日の夕方には痛みもふッつり止まつたばかりか、伸して試ても歩いて試ても、手足に何んの故障もない、驚くばかりの藥の効驗に重ねて母の恩を謝し、其處等邊を運動して二日目の夜が明けるを待兼ね、心の巴黎へ急ぐ儘革袋を呉れ序に勘定も一處にと、早や健康しい結束に、エッ、勘定と亭主は吃驚、左樣云ふ筈では無かつ

たが、十日でなくとも、責めては五七日、滯在しなけりや起てない勘定。イヤ、ナニ勘定へイ／＼勘定と、復も外れた目算の、詮無さゝうに自分の室から、彼の革袋を持つて來て御勘定は御客が一圓半、馬が一圓は高いやうでも、膏藥に繃帶、アルコールに葡萄酒、牛乳に鷄卵も引くるんで、二日に五圓はお廉いもの、へイへイ精々働きましてと慾に目のない得手勝手。

よしと袋に手を入れて、太郎は中を搔探つたが、書束の無いのに蒼くなり、

有田「ハテ、不思議だ。大切な書束が無いが……。」

亭主「エッ、書束？」

有田「爰に確に入れてあつた、利根里隊長へ持つて行く書束、落ちる譯は勿論無し、誰か盜んだに相違無い……。」

亭主「なに盜……。滅相な、緣も由緣も無い書束を誰が持つて參りましやう。一體其書束と云ふのは何んぞ大切な物でも入つて……。」

有田「大切の物とも、金ぢや買はれぬ親から貰つた大切な書束、利根里近衞隊長へ持つて行かなきやならぬ物だ。」

亭主「ハテな、利根利隊長殿と言へば、少年漢は寢てをるか、而して其の、革袋は今何處に有ると、先刻の御客がしちくどく、妙な事迄聞くがと、思つたが、夫ぢや適切彼の客だ。讀めた。讀めましたわい。おう、其件が知れると大變だから、夫で勘定さへ仕もしないで、慌てゝ馬で駈け出した奴、畜生飛んだ泥棒を買ひ被つて頭を下げたがいま〳〵しい。伯爵の御前だなんて、吐かした、彼の馬丁から喰せ物、飛んでもない事仕出かしをつたわ。」

と云ふ口吻なり面なり、僞りらしい樣子も見えぬに太郎も怒るに怒られず、併し兎も角念の爲にと、番頭初め家内の者を一人殘らず檢めたる、亭主の仕打に禮を述べ、落膽しながら、來因を發つた。

斯くて老馬に跨がりつゝ、幾日重ねて辛との事、無難に安頓の門までは着いたが扨其巴黎へ着くと、同時に革袋の底を拂つて了つた。是非なく乘つて居た老馬を賣り、代金七圓五十錢を虎の子のやうに、大切に懷中深く押し隱し、徒歩で巴黎を彷徨ひ、歩いて細道の或る二階の明き間を精々手附金を負けて貰ひ、兎も角借りて住む事となつた。

翌日は衣類の手入に手間取り、翌々日の午前となつて始めて利根里隊長の廨を尋ねに出る事となつた。宮城の傍で遇つた銃士に近衛隊長の宅はと聞けば、哥倫比町だと教へられ、念無う處が判つたので、有田太郎は大喜び、佩刀抱へて急ぎつゝ直ぐ其足で取敢ず目指す邸へ訪ねて行つた。

(五) 利根里邸内

利根里近衛隊長の父は、人も知つて居る通り、顯理四世陛下に仕へ、前後數度の戰爭に、拔群の功績を顯はした人であるが、固より武人の本領を保ち、毫も身後の計を爲なかつたから、四世陛下が暗殺せられ、間もなく自分も亡くなつた時には、家に何等の貯へもなく葬式を出すのにすら、遺族の者はホト〳〵困じたと云ふ有樣、隨つて今の利根里隊長も殆んど裸一貫で、瓦斯因を出て巴黎に入り、劍一本を資本にして、今日の榮位を得た譯で、勿論父親の子と云ふ處で、今の路易十三世陛下の特別にお引立もあつたであらうが、兎に角引立てられたと云ふより武勳で其身を立てたと云ふのが、蔽ふべからざる事實であつた。

歐洲全土、王者と王者、諸侯と諸侯、無名の出師、不法の逆殺、何の事はない支那の戰國時代を、其の儘描き出したやうな當時の亂脈、武士の跋扈は非常なもので、人を斬る、婦女を姦するは、是等朝餐前の仕事、錢さへ有れば酒びたり、一六勝負が止むかと思へば女の詮議に日を暮らし、一つ間違へば直ぐさま決鬪、と云ふ

代物を飼つて置いて、自分等の護衛にする大官は、最一層輪の掛つた厄介物、體の好い紳士を粧ふ裏に譎詐、貪慾、陷擠、陰謀、夫が美ん事成効し知らぬ顔の半兵衛で成るべく長く政治舞臺に立ちさへしたら、威權が一身に集らうといふ、論より證據は手前で厶ると、當時國王を壓する程の、日の出の勢ひの李泄龍大法主と拮抗して、恐るべく而かも親しむべく、敬服すべき大將とまで、國民の多數に尊重せらるゝ利根里隊長の人と爲り、何處にか違つてゐるとこの有るのは、今更言はなくとも歷史が證人。

太郎は銃士に敎へられた通り哥倫比町へ來て見れば、案の條なる一と構武者窓續きの片側には厩と覺しき建物が、奥行五間の長さ一町、だゞツ廣い平庭の彼方に銃士の運動場も見え眞直に拔ける裏門の其方にも何か建物が有るやう。太郎は先づ正門から、受付へ掛つて聲をかけたが、其處には誰れも居なかつたから、奥に聞ゆる聲を頼りに大廣敷とも思はるゝ、只ある扉口に突立つて、頼む／＼と重ねて呼ばはつた。

奥には十人か二十人、笑ひどよめき喧いでゐたので、表に人の來た事も、一向に

氣が附かぬ様子、最後に賴むと張り揚げたのが、漸く彼方に通じたのか、やかて帶刀の銃士が出て來て、何用とばかり尋ねたから、瓦斯困の有田の倅で厶りますが、直々隊長に御目に蒐れますやう、宜しうお取次を賴みますと、生れて始めて叮嚀な辭では此方へ、と、先に立つた銃士の後に跟いて、二つ程室を隔てた彼方の、先とは違つて稍靜かな而かも筋骨の逞ましい、七八人の武士の居る、其室へズット通された儘、太郎は暫し置放しに遭つた。

識らぬ人の中へ突き込まれ、聊か手持不沙汰の餘り、一人武者窓の方へ身を寄せて、往來の方を見て居たが、彼の七八人の武士と云ふのは少し身分の好い方か制服も可なり立派ではあるが、併し口調は先室のと變らず、いづれも荒けない物言ひで、荐に雜談に耽つて居た。

人品の好いのが荒見と云ふのか大曾といはれる恐ろしい背の高い、傲然とした武士を對手に話してゐる、其の口吻で察すると、彼等は殆んど先天的に、李泄龍大法主を毛嫌ひしてゐる者と見え、僕が齋藤さんから聞いたに、尾關の犬奴が貌刺兒で禮田を大層馬鹿にして、甚く嘲弄を仕たさうだが……………、夫も宿意

が有る事さ。其時尾關は僧侶に化けて姿を變へて居つたさうだが………、僧侶と云へば李泄龍奴、始終或る紳士の蹤跡を、間諜に跟けさせて、有らう事か、其人の手紙を拔き取つたらしいが、ナァニ夫どころか未だ〳〵外に…………、なぞと云ふ談話も聞えたが、やがて問題は婦人の上に移り、一時にドッと景氣附く中に何故か此時荒見だけは俄に口を噤んだなり、ニコともせずに默つて了つた。

（六）「お喚びになりましたさうで厶りますが」

丁度此時、先刻取次に出た銃士が來て、太郎を此方へと案内した。太郎は豫て國元から、思設けた其人との初對面、躍る心を押靜めて、やがて導かれた應接室の、設けの席に差控へると、暫くして、隔の襖を無造作に押開いて、ズッと其處へ現はれたは、言はでも著るき當家の主公、利根里監輔其人の風采、太郎を見て微笑を湛へ、少し急ぎの用があるから、今片附けて直ぐに逢はうと、彼方に向つて一聲鋭く、

「阿蘇ッ、大曾ッ、荒見ッ、」

今迄囂々として居た室々は、さながら水を打つたるやう、一時に礑と鳴を靜めた。

聲に應じてはッとばかり、急がはしく室へ入つて來たのは、先程見掛けた荒見と大曾、戲合つて居た前の樣子とは打つて變つて、主と仰いだ利根里の前に容を正して畏れば、何れも名取の武士と武士、凛たる勇士の俤があつた。

利根里は鷹のやうな鋭い眼に、屹と二人を打見遣つたが、何かは知らず不興氣に、

利根里「阿蘇が見えぬが何うしたか。」

二人「ハイ、ソノ、」

利根里「ハイ、其のではない、何うしたといふのだ。」

大曾「阿蘇はソノ、實は少し、工合が惡いさうでござりまして、」

利根里「病氣？　むゝ、何病か。」

大曾「はい、夫がソノ、何でもソノ、天然痘とか申すやうな、」

利根里「ば、馬鹿を言へッ。何も彼も知つて居るぞ。斬られて重傷に唸つて居るのだらう。往來で人騷せな刄物三昧、大法主の配下に生擒られ旣んでの事に生恥を晒しに掛る不覺者奴等、むゝ貴樣等二人の居合せたのも、俺は旣に知つて居るのだ。其場で割腹する事さへ出來ぬやうな面汚し、左樣云ふ者が銃士のなんのと、恐れ多くも我近衞に、交つて居るから今日の恥辱、國王陛下は明日が日から狼藉者や腰拔武士で塊まつてゐる利根里の隊を、最早見限つて了

はれるかも知れぬ。聞け既に最う大法主の部屋の武士を進めて、近衛に仕た方が可いかとまで、震襟を惱させられたのだわ。貴様達の慮外な擧動は、恐れ多くも天聽に、早く達して居るのだぞ。何故糞隱しに隱すのだ。」

目の當り思ふさまに罵しられて、見る〳〵赫と急き立つ兩人、思はず顔色を變へた途端、蹌踉きながら、利根里の前へ由緒ありげなる人品骨柄、威有つて猛からぬ一人の銃士が、面の血の色も全く失せて苦しげに息つきながら蹲つた。

大曾「やッ、」

荒見「阿蘇ッ、」

銃士は利根里に向つて恭しく、

阿蘇「お喚びになりましたさうで厶りますが、何か御用で厶りますか。」

利根里は物をも云はず其顔をぢつと見た。決闘で重傷に苦しんでゐる由密に耳にしたのみならず、陛下の前で惡ざまに我部下の狼藉を云々した、李泄龍の皮肉に怫として、兎も角戒飭を加へやうと、三人を爰へ喚び出したもの丶、何が扨我最愛の銃士、世間に近衛の三銃士とまで、言ひ囃されて居るのみならず、

陛下の御覺も格別目出度い、其一人の阿蘇が現に、我が用とあれば苦痛を忘れて、蹌踉きながらも出て來る氣丈、主從と云ふ關係より、親子に類する至情が動いて思はずムヅと阿蘇の手を執り、

利根里「むゝ、よく來た、阿蘇ッ、今叱らうと思つて居たが、叱る前に先づ一通り決鬪に至つた次第を話せ。」

と云ふ親切な辭であるから、荒見大曾は猶更の事、進んで昨日の一部始終、大法主の護衛の武士が、無理から無禮を加へた次第、對手は五人此方は三人、向ふの奴を二人仕止めて、此方は阿蘇の左腕に重傷、と云ふ顚末を概略述べた。利根里は聞いて面を和らけ、夫では果して李泄龍が、例に依つて揑造の事實を、陛下に上奏仕をつたな。宜しい其次第を言上に及ばう。けれども其方等も輕擧を戒め、深く將來を愼めとあつて、三人は畏つて次室へ下つた。

利根里は三人を退らせると、やがて振返つて太郎の方へ、

利根里「待遠であつたらうな。而して會ひたい用と云ふのは。」

有田「ハイ、私は瓦斯國の者で、有田太郎と申しますが、父は閣下と其昔幼な馴染

であつたとの事で、田舎に居つても詰らぬから、どうか閣下をお頼り申して、武士の端くれと仕て貰へと云はれましたので、夫れで此度態々巴黎迄上つて參つたので厶ります。」

（七）領頸背後に

利根里「フーム、有田の倅か。成程左樣云へば爭はれぬ、面影の似た處がある。親爺は相變らず達者かな。フム夫は重疊。而して何か武士に成りたいとは如何にも健氣な心掛ぢや。」

と、何うか取立てゝ遣らうとは思つたが、イヤ待て、何うした裏の裏、瓦斯困の山出しを利用して、我が隊の內情を探らせる魂膽があるまいとは云はれぬわいと些し有田を視入るやうに、

利根里「して親爺さんの勸とも有るなら、何か添書の樣なものでも………。」

有田「ハイ、仰までもなく、家を出ます時に父から渡されまして、確と革袋の中へ入れて參つたので厶りましたが、何をお隱し申しましやう米因の旅館で、」

是々斯々の災難に遭ひ、いつの間にか夫を盜まれましたと、事の次第を包まず話した。

利根里「ハテナ、俺への書束と云ふので、中途に奪つて見やうといふのは、ハテな

有田、其紳士は、若しか頬に、一寸かすり疵のある男ではなかつたか。」

有田「有りました。ハイ、左の頬に確にありました。」

利根里「背の高い、美男子だらうな。」

有田「ハイ、其通りで、」

利根里「むゝ髪の濃い、色の淺黒い、」

有田「左樣で厶ります。頓と其通りで、」

と宮子と云ふ婦人と出會ひ、一方は倫敦に一方は巴黎に、逸散に驅け出した其の場の模樣を、詳しく隊長の耳に入れた。

尚種々に問ひ試みて、李泄龍からの廻し者で無い事は、正に利根里の心眼に映じたから、直ぐにも取り立てゝ得させたくはあつたが、何しろ近衞の銃士にするには、必ず勅裁を仰がねばならず、殊には他で二ケ年以上銃士であつた履歴がなければ、何うする事も出來ないので、利根里は暫く打案して、兎も角俺の義弟に當る、大學の校長の邸へ行き、二ケ年間其處の抱武士になれ。夫からは引取つて引立てるからと、身の落着を案じての親切、近衞に成れなきや大法主の

抱へになれと云ふ事でしたが、貴方を親とも師匠とも、今日から仰いで事へますから、夫では仰しやり付けの通り、其の御邸へ御厄介に成りに行きますでムりますと、太郎は早速御請を仕たので、軍籍だけ義弟の處へ置いて、體は毎日此邸へ來て居れ。而して邸の好い奴等と、始終交際したならば、武士道が早く研けて好からう。兎も角夫では紹介狀を書かうと傍の卓子に身を寄せつ、料紙繰り展べ筆を執つた。夫を見詰めて居るも不躾、太郎は少し横を向き、窓から外の往來を見るともなく眺めて居たが、利根里が今しも封を終つて、太郎に手渡し仕た途端、禮を言ふかと思ひの外、太郎は矢庭に身を躍らして、窓から屹と彼方を睨み、

「彼奴だ。彼奴だ。己ッ、今度こそ逃がすものかッ。」

と逸足出して扉口へ行く、利根里は見るより呆氣に取られて、

利根里「彼奴とは、ダ誰れの事だ。」

有田「ぬ、盜ッ人。」

と云ふもゝどかし飛ぶが如くに、見る〳〵姿は平庭の方へ消えて了つた。

利根里「何だ、全然氣違ひだ………が………左もなければ、此邸へ入り込み損なつて照れ隱しに彼ア仕て逃げたか。」

太郎は後を見も返らず、韋駄天走りに邸内を、追取刀で驅けて行つた、出合がしらに端なくも、今大廣敷からヒョイと出た銃士にばつたり行當れば、銃士は思はずアッと一聲、

有田「御免、何分火急の場合、」

言ひ捨てゝ既飛び行く領頸、むづと摑むで背後から、

銃士「ナニッ、御免とばかりで濟むと思ふか。コラッ、待たぬかコラッ、假初にも國王の銃士に對して無禮な奴、これ、武士には武士の作法があるぞ。」

有田「作法があるか何か知らぬが、急いで居るのだ。離せ、離せ。」

と銃士の面を此時見れば、重傷に蒼褪めて居る阿蘇であつた。

阿蘇「離して遣るが其前に、貴樣の無禮に挨拶しやうわ。」

有田「むゝ決鬪か。引受けた。跡へは退かぬが今は可けぬ。何しろ此通り急いで居るのだ。」

阿蘇「むゝ、時間は貴様の好きにして遣る。」
有田「夫れなら今から一時間先き。」
阿蘇「好し、場所は何處で。」
有田「何處でも其方の好きな處。」
阿蘇「夫ぢや龜野の空地と仕やうわ。」
有田「宜しい、確と心得た。」
と、互に辭を番ふが早いか、門を目差して逸散走り。

（八）安請合

表門を飛び出して街通りを、先刻の窓の見當に敵は何處と眺めたが其處等に影が見えぬので、益〻心の焦立つ儘、大曾と何處かの護衛の武士と恰度立談を仕て居つた、小脇を彼方へ走り抜けた途端に足を誤つて、思はず大曾の佩劍にガチーリ靴が打突つた。

大曾「ヤイこらッ。」

有田「御免、御免粗忽だ、眞平、」

大曾「ナニ、眞平だと、武士の刀に泥靴當てゝ、眞平ぐらゐで濟むと思ふか。さア明白と處置を付けろ。」

有田「えゝ、そんな事に構つちや居られぬ。敵の姿を見掛けたから、今追蒐けて討つ所だ…………。」

大曾「洒落臭い。敵なんのと。待たぬか。ヤイ。コラッ待たぬか。此刀を汚した一埒。夫から先へ開けて行け。」

有田「開けると言つて何うして開たら、」
大曾「態を見ろ。夫さへ知らぬ白痴者。其一刀は何で佩すのだ。」
有田「むゝ決鬪の註文か。」
大曾「なに、貴樣が註文仕たのじやないか。」
有田「宜しい。註文は屹度受ける。が、今は可けぬ。何うでも彼奴を討つんだから。」
大曾「むゝそれなら晝の一時にしてやる、場所は善樂坊が裏だが、貴樣美ん事金打するか。」
有田「行くとも屹度行つて見せる。」
と面白さうに安請合、其儘とつかは驅け出した。
何は扨置き米因の意恨、今霽らさすに置くものかと、太郎は道を血眼に、彼の紳士の姿を尋ねて、此角を曲つて逃げたか、彼の横町へ隱れたかと、精限り其處等を驅けては戻り、戻つては驅けたが皆暮判らぬ、夫も其筈か利根里邸に添うて西へ行つたのを東にある表門から追はうと云ふ、二重の廻り道をした上に阿

蘇と大曾と二度迄も要らざる手間を取つたのだから、並大抵の病み足でも今頃其邊等に居る譯が無い。到頭見逃して了つたかと、汗になつた額を拭くと今更足が重くなつて、歩くにも既氣の無い心地、先刻は心の急いた儘、挨拶もせず飛び出して來たが、利根里閣下は屹度俺を、惡く思つて居るだらう。夫に安安請合つた決鬪、何うやら三人力もありさうな、彼の銃士等と立合ふには、一つの生命を一つ捨てゝも、二つ命が要る談話と、彼方に不圖目を遣つたが、

有田「ヤ、彼處へ、四人連で荒見が來た。彼は外の奴等と違ひ、人間が高尚に出來てるやうだ。交際を擴めて武士道を研けと、隊長が親切に言つて吳れたが、一寸の粗忽に決鬪なんテ、成程巴黎は物騷な所、餘り火事早過ぎるんで滅多に水は向けられぬわ。俺も隨分氣早だが、是から餘程氣を附けて、何さま下から出てくれやう。そしたら人も附合つて吳れ、友達になる破目も出來やう。彼は何うしても好さゝうな人間だ。第一人品があの通り好い。ハ、、何んだか上機嫌で、荐りに何か話して行くな。」

と一人心で口を開き、何か荒見と談話をする機會はないかと思ひながら、四人

並んで來た銃士の側に、三四間ほど跪いて行つた。

荒見は有田の面を見たが、最早見忘れて居つたのか、夫とも會釋する程の面識でも無い故か、一目ちらりと投げたなり、伴れの銃士と話して行つた。何かな機をと有田は見遣る途端に荒見の隱袋から落ちたは婦人用の絹手布、縁縫ひの派手な模樣のある、而かも片隅に優しげな、はの字とたの字の假名の跡、荒見はそれとも知らぬ態で、靴に掛けて踏んで行つたを、太郎は手早く拾ひあげ、若し若し貴方と聲を掛けた。

有田「只今貴方の隱袋から落ちましたが、」

(九) 決鬪第三

と、親切籠めて慇懃に、前へ差し出した手巾を、荒見はフイと見ると同時に、颯と顏を染上げて、盜む樣に夫を引摑んだ。見るより連の銃士の一人は、

一人「ヤッ、荒見君、君は其の小川夫人の手巾を身につけて居ながら、よくも何の關係もないと白を切つて濟したものだね。」

荒見は一目太郎を睨め付け、振返つて銃士の方へ、

荒見「夫は全く君の邪推だ。僕は何にも落しはせぬ。此人が間違へて、僕のと思つて渡して呉れたが、是は僕には覺えが無い。誰か外の人のだらう。」

と、囊のは何時の間に隱したか、上着の隱袋に出掛つて居た、是も立派な絹ではあるが、緣の縫取の天切り違ふ男持の手巾を皆に示せた。

是はしたり荒見が隱すには、何か仔細があるからであらう、是は飛んでもない毛を吹いたと、太郎俄に悄げ返り、繕ひ顏に仲へ入つて、

有田「夫れでは私の間違ひでしたか。それなら那方か此中でお落しになつた方はありませぬか。」

言つたが銃士は合點せず、

一人「いや荒見君、然うは云はさぬ。君は飽迄白状せんかね。」

荒見「いゝさ、いづれ解る事だ。」

一人「いゝや解らぬ。次第に依ては………。」

荒見「まア〳〵可いさ。後にするさ。」

と荒見は兎角に言紛らして兎ある路の角へ來ると、軈て一人は右手の方、二人は左へ引分れ、荒見は連から取殘された。

ドレ恰度好い、此機に、荒見の機嫌を取直さうと、太郎は衝と近く寄つた。

有田「や、場所柄につい氣が附きませぬで豪い失禮を致しました。」

荒見「ナニ、氣が附かないも無いものだ。氣の附き過ぎた侮辱を與へて失禮で君通す積りか。」

有田「エ、何んですと。ほう他人が態々親切に………。」

荒見「親切も場所と場合がある。巴黎の道路が練絹で敷詰めて有る譯ぢや無し、落した手巾を靴に掛け踏躙つて行くからは、何か底意の有るくらゐの事は幾らポッと出の瓦斯困者でも、判らぬ筈はないだらう。」

有田「ナニッ、」

と太郎はむら／＼と日頃の勝氣に嗜みも、いつか忘れて舌の根鋭く、

有田「ポッと出が何うしたと、下から出れば附け揚がり、他人の親切を無にした言分、出やうによつては手は見せぬぞ。」

荒見「はゝ何も其んなに荒立てずともの事だ。先刻も言つたが彼の手巾は僕の隱袋から落ちたのぢや無い…………。」

有田「えゝ何を云ふ、此眼で確に見て居たわい。愚圖々々言はずに武士なら拔け。刀で行きさつするが早いわッ。」

荒見「マ、マア待ち給へ。夫なら夫で、僕も決して後へは引かぬが、辭で言へば判ると思つて、或は少し言ひ過ぎたやうだが…………。」

有田「己ッ、今更卑怯な、得拔かぬか。拔けなきや拔けぬで土下座を仕ろ。」

荒見「はて誰が拔かぬと云つた。夫ぢや謹しんでお請を仕やうが僕は少し用がある。今日の二時迄待つて呉れ。」

有田「宜しい夫ぢや待つてやる。して場所は…………。」

荒見「左樣さ。兎に角君の知つて居る利根里隊長の邸迄來給へ。彼處で會つて極めると仕やう。」

と、ひよんな拍子と言ひながら、今又第三の決鬪を約して太郎は荒見に引別れると、阿蘇との刻限に間が無いので、其儘龜野の空地へと急いだ。

(十) 武者震ひ

俺の氣象で跡へは引けず到頭恁うした事になつたが、と途々太郎は胸の中によし此儘に殺られても名譽の銃士に撃たれるのだ、滿更死榮の無い事も無いと覺悟は更に潔よく、併し男が番つた約束阿蘇との仕合で殺られて了つちや大曾と荒見に萬劫濟まない、何うか命を半分殘し、大曾に九分迄殺られても一分の蟲を呼吸ある中荒見と顏が合せられゝば、是に上越す望みはないが、到底もさう云ふ夢は見られぬ、仕方がない死んだ跡だ大曾や荒見に我慢仕て貰ふより外法はないと心に諦めは附けたものゝ固より天資敏俊の太郎、彼れは彼アして是は斯うしてと三人品の變つた對手を、三種に撃込む工風を考へた。

何しろ巴黎へ着いて三日目、誰一人知邊の者も無いから、立會人を賴まうやうなく無ければなしでお構ひ無しだと、龜野の空地を聞いては曲り、曲り曲つて來た小路可なり寂れた突當りに崩れかゝつた廢れ寺其生垣の横を透見すと樺の木立の間から二丁四面もあらうと云ふ、茨混りの草生地へ阿蘇の姿を早

くも認めた。太郎は早速其處まで進み、
有田「や、遲くなつて失禮した。」
阿蘇「ナニ、未だ約束より五分前だ。」
と言ふ面は負傷の苦痛を無理に堪へた皺紋作、
阿蘇「や、僕は二人の友人に立會つて吳れいと言つて置いたが、時間を違へる人物ぢやないのに、未だに何うしたか遣つて來ぬが、」
有田「處で其立會人だが、何分此地へ來たばかりで誰も知つたものがないから僕は何にも無しで遣る氣で、」
阿蘇「ナニ、無しで？　フム、夫ぢや君を止留めた處で、僕は小兒殺しにしか成らんのだな。」
有田「ナニ心配しなくとも、君が重傷を持つてる事は朋友に能く知れて居らうから、何な羊を對手にしても小兒殺しにや成りは仕まい。」
阿蘇「むゝ、夫にしても立會人は附けやう。僕の方から二人來るから一人を君が賴んだら、夫れで兎も角式には合ふのだ。」

有田「夫ぢや何うか左樣願ひたい。君から一つ話して呉れ給へ。處で君に夫だけの情を受ける事になり僕が受けッ放しでも濟まない。幸ひ僕が母の賜物稀代な創藥を持つて居るから傷所へ一つ貼つて見給へ。物の十分と經たぬ内に不思議に痛みが止つて了ふ。」

阿蘇「ハテ、年は若いが見上げた男だ。今果し合はふと云ふ敵に兎も角夫を贈らうと云ふ宛然古武士の風のある、や天晴な心入れだ。難有い、左樣云ふ青年を對手に戟を交ふる事になつたは、僕も一段本懷な氣がする。併し夫は納めて呉れ、志ざしだけ厚く受けたから。」

有田「では戰つて勝負が附いたら、僕は仆れて了つても構はぬから取て貼り給へ。」

阿蘇「むゝ君は益々豪い。勇氣といひ義氣と云ひ、今時の武士に些しでも其後塵を拜ませたいな。や來た〳〵。漸つと立會の一人が來た。」

言はれて太郎は振返ると、生垣近く大跨に來る大曾の圖拔けた姿が見えた。

有田「ヤ、彼の大曾と云ふのが立會人!」

阿蘇「然うだ。が君は何か彼の男では…………」。
有田「ナニ、毛嫌ひをする譯ではないが、」
阿蘇「おゝ、最一人のも遣つて來た。」
太郎は振向いて二度吃驚、
有田「エ、ツ、荒見と云ふのも立會人ツ。」
阿蘇「むゝ、彼の二人は僕の同僚、聞かぬか近衞の三銃士、阿蘇に大曾に荒見と言はれて、何一つ別々にやつた事の無い離るべからざる友人達、今日もチヨツと決闘があるから見物かた〴〵立會つて呉れと、時間を言つて遣つて置いたのだ。」
有田「フーム、左樣云ふ同盟か。面白い左樣いふ者を對手にして斬つて斬つて斬り死すれば、死んでも親に言譯が立つ。」
と、柄頭に掛つた手が、我にもあらず武者震ひ。
程なく大曾が近づいて阿蘇に擧手の禮を施し、太郎の顏を見ると驚いた。
大曾「ヤツ、こりや何うした譯だ。」

阿蘇「大曾、此方が先刻云つた今日の對手だ。貴方何とか言ひますな、御名前は
有田「有田太郎といひますが、」
阿蘇「有田君か。大曾、有田君を君に紹介する。」
阿蘇の改つた挨拶に大曾と有田は直立し、三歩隔てゝ目禮した。
大曾「處で阿蘇、妙な事がある。僕は今日遣ると云つた對手も矢張此有田君だ。」
有田「併し時間の約束が、今日の午後一時の筈。」
荒見「ヤッ、妙だわい。僕も實は此方と、決鬪の約束がしてあるのだが、」
と此時其處へ近寄つた荒見は、是も來るなり呆れ顏、
有田「けれども貴方とは二時からの約束。」
阿蘇「むゝ、さうすると三人とも、對手は此有田君か。」
荒見「阿蘇、君はどうして此仕末に、」
阿蘇「おう、僕は此肩の傷に無法に突掛けられたのが起りだが、大曾君は。」
大曾「僕は刀を汚された紛紜、そこで好物の決鬪に、今日も一つ有付いた譯だ。」
阿蘇「荒見、君は又何うしたのだ。」

荒見「僕か、僕はソノ、相變らず、例の神學の研究から互ひに宗教上の見地に就いて、少し議論の合はん事があつてね、」と有田の方へ異樣の眼遣ひ何にも云つて呉れまいぞと、專賴みなる謎を掛けた。

有田は莞爾と笑むだ儘、一足後へ引き退り、

有田「夫では何うか立會人を、」

阿蘇「荒見、有田君は未だ巴黎に一人も面識の者が無いさうだから、君一つ彼方の立會人になつてくれい。」

荒見「宜しい。が併し僕で可いのか。」

有田「結搆です。何分宜しく。」

大曾「最う十二時三十分過ぎだ。」

阿蘇「夫ぢや君、立脚線を、」

有田「處で少し願ひがある。僕は此處で勘辨して貰はねばならぬ事があるが…………。」

阿蘇「ナニツ、勘辨………。」
阿蘇は聞くより不興の色、大曾は更に嘲る如く荒見も面白からぬ顏付を見せた。太郎は只見て屹と前に、
有田「いや、諸君は僕の意を誤解して居る。僕は今此事だけは賴むで置かなきや、安心して仕合が出來ないのだ。大曾君、荒見君、今阿蘇君との手合せに僕しか仕損じて、是限呼吸を止めて了つたら君方との約束は果せないから、何うか夫だけ御勘辨を。けれど虫の呼吸さへあつたら、よし此手足の叶はぬ迄も屹とお相手はする積りだ。」
今を最後と決意の辭色すつくと立つたる風采に流石の三人も感に堪へたが中にも阿蘇は殊に深く、
阿蘇「むゝ、よく言つた。氣に入つたわ。重ね〳〵好い漢だ。」
荒見も衝と進み寄つて、
荒見「宜しい。確に承知した。」
大曾「夫では僕が線を引かう。」

鐺で明確に畫かれたる二線。

有田「いざ、」

とばかりに有田は勇んで、屹と彼方に身構へする

阿蘇「よし。」

と此方は悠然と、創傷にめげず立つたる阿蘇、双方齊しく立會人に一揖し、互にすらりと拔放して、ぴたりと合せた劒と劒。

（十一）敵味方

ヤッと太郎の掛聲に應じて聲を合せた阿蘇、咄嗟二人は斬結ばうとした、途端に彼方の路の角へ時の警邏部の總督をも兼ねた、李泄龍大法主の幕下の中にさる者ありと知られた一人、遊佐警邏士長を先に、四人の部下の姿が見えた。

大曾荒見「ヤ、ッ、大法主の衞士が見えた。刀を納めろ。刀を納めろ。

私鬪は國法の禁ずる所。固より公然とは出來ないのだ。殊更日頃軋轢して居る李泄龍方見付けられたら又一揉め、ならば事の起らぬ中にと荒見大曾は急がはしく、仕合ひの二人を離さうとしたが、其時遲く、遊佐は目速く此方へ振返つた。

遊佐「ヤ、近衞の奴等が決鬪して居る、御法だ。それッ、引捕へろ。」

言ふより早くつか／＼と、先に立つて進で來た。それッとばかりに部下の面面、幸佐日柄を初としていづれも名うての剛の者、足踏鳴らして跡に續いた。

阿蘇は振返つてそれと見ると、

阿蘇「おゝ、遊佐君か。武士の情けだ。外ならぬ決鬪の事大目に何うか見て貰ひたいが……………。」

遊佐「成らん。成りませぬわい。君には甚だお氣の毒だが、役目の手前、是非に及ばぬ。刀を納めて拙者と一處に、兎も角一寸役所まで。」

阿蘇「ナニッ、役所までッ。」

大會は怺へず前へ進んで、

大會「むゝ、銃士を勾引しやうと云ふのか。」

遊佐「はゝ、御法は勿論御承知と思ふが。」

荒見は態と微笑を含んで、

荒見「いや、折角の御招待ならば御同伴致したいが、左樣な事は隊長から、固く禁ぜられて居りますで。お退きなさい。其の方が先づ御無事でござらう。」

遊佐「むゝ、諸君は本職に抵抗はれるか。其儀ならば容赦は致さぬ。搦めて參るが御承知か。」

三人「ナニッ」

と聞くより三人は、忽ち屹と身構へする。阿蘇は半ば聲高に、

阿蘇「むゝ、敵は五人、味方は三人、俺は而も此手傷だ。よし、阿蘇の命の捨所、武士の死態を見せてくれるわ。」

太郎は此問答の間に、早くも決心の臍を固めた。近衞の味方か大法主方か、何れを取るかゞ一世の境、未來の運の決め所、今此遊佐等に手向へば、第一法を犯すばかりか、國王陛下より、勢力ある、李泄龍大法王を敵として、罷違へば首をも失ふ、危險を固より覺悟しながら、少しも遲疑せず衝と寄つて、阿蘇の方に打向ひ、

太郎「ヤ、失禮だが僕が居る。味方は三人と云はれたが、四人と云直して戴きたい。」

阿蘇「おう、併し君は僕等の同僚ではない。」

太郎「むゝ、勿論未だ銃士ではないが、此の魂が紛れぬ銃士だ。既に利根里閣下から、御懇のお言葉を受けた僕。此場に取る道は決つて居るわ。」

遊佐は其方を屹と見て、

遊佐「いや、其處な見知らぬ若者、前後も思はず危險を冒すな。退れ。許すから此場を去れつ。」

太郎は更らに一歩も動かず、笑つて前に昂然と、

太郎「はゝ、お言葉は有難いが、御返事は此刀でしやうわ。」

阿蘇は思はず太郎の手を執り、

阿蘇「君は何處までも好い漢だ。併し年若の無經驗な身で、無暗に此の中へ飛込むのは…………。」

太郎「ナニ此魂を研くのだ。負けたら生きて此場は退かぬ。」

阿蘇「むゝ、天晴だ。それなら四人。大曾ッ荒見ッ、よしか。」

荒見 大曾「心得た。」

四人は忽ち、颯と此方へ打寄ると、手に手に拔放した一刀を、齊しく構へて前に向つた。

(十二) 太郎の太刀先

遊佐「むゝ、諸君はいよ〳〵抵抗れるな。」

太郎「問答無益だ。いつまで推すか無用の馬鹿念、」

遊佐は忽ち聲を荒げ、

遊佐「ぷッ、奇ッ怪至極。御法を犯す不屆者、それつ一人殘らず討つて取れッ。」

阿蘇「何を小癪な、」

哄と喚いて双方一時に、有田を合せて此方の四人、遊佐を頭に彼方の十人火水になれと斬結ぶ、白刄と白刄、矢聲と矢聲、面も觸らず烈しく攻合つた。阿蘇は大法主の寵臣の一人、幸佐と眞先に渡合ひ、大曾は日柄と手を合せ、荒見は跡の二人を相手に、隙間も見せず打合つた。太郎は氣鋭の驀直に、遊佐を目掛けて微塵になれと、覺えの太刀打、目にも止らず疊掛けて打下した。

遊佐は聞えた武藝の達人、場數に馴れた古强者の、何の小童がと、初めから侮返して立合つたが、火の出るやうな太郎の太刀先、踏込み踏込み斬込んで來る、無

敵の勇氣に稍ともすれば、受太刀になる心憎さに己れ小癪、と流石に焦つて一足前に、ヤッと一打、二つになれと斬下す、拳の冴に咄嗟太郎は、討止められたと思ひの外、えい、と一聲、横に拂つて返す刀に、相手の肩先、ずばと深く斬込んだ。重傷に堪らず流石の遊佐も、たぢろぎながら、むゝとばかり足も支へず礑と倒れた。

太郎は血刀を手にしたなり急がはしく前後を見れば荒見は、今しも一人を仆して、殘る一人と斬結んで居る、日柄と大曾は負けず劣らず、大曾は腕に日柄は腿に、互ひに手傷を受けながら、物ともせず打合つて居た。阿蘇はと見れば以前の負傷に、又も幸佐に一太刀遣られて、流るゝ血汐に染りながら、更に屈せず、刀を左に持替へて一歩も退かず戰つて居た。

見廻す途端に太郎は一目、阿蘇にちらと面を見られた。阿蘇は今しも危い場合、けれども聞えた大剛の、助けてくれとは死んでも云はぬ。太郎は早くもそれと見て、

「阿蘇君、御免ッ、其相手を讓つてくれッ。」

矢庭に中へ割つて入つて、直ちに幸佐に斬つて掛つた。阿蘇は今迄滿身の勇氣に、僅かに支へて居たものゝ、はッと氣が緩むと同時に堪へず撞と膝を突いた。

太郎は更に勢込んで、七八合して幸佐の刀を、からりと彼方に跳飛ばして、躍掛つて斬伏せやうとした。

阿蘇「ヤッ、有田君、其奴を仕留めてくれるな。僕が不自由の身體でない時、其奴と改めて仕合ひたいのだ。刀を剝いで、生かして置いてくれ。然うだ。然うだ。よく仕てくれた。」

太郎は刀を取直して、今しも幸佐の拾はうとした、相手の刀を足に踏まへた。幸佐は身を起して急がはしく、先に荒見に仆された一人の刀を取つて引返して來た。阿蘇は其時一息ついて、早くも立上り手傷にめげず再び幸佐と立合はうとした。

太郎は逸早く阿蘇の氣象と、跡の結果を憚かつて、物をも云はず横合から電光其儘の一突に、幸佐はしたゝか胸先を遣られて、二言と云はず其場に仆れた。

恰も此時、荒見は殘る一人を打伏せ、相手の胸に切先を差付けて、餘儀なく助命を乞はせて居た。

跡には大骨と日柄の仕合、日柄は元が瓦斯困出の、負けるを知らぬ剛の者、見る見る勇氣一倍して、太刀打烈しく渡合つて居た。此方の三人、阿蘇と荒見と、太郎はそれと見ると諸共、ひた〳〵と詰寄つて日柄を中に取圍んだ。

三人「刀を捨てろ。降參せい。」

と呼ばはる口々、日柄は屹と血眼に、

日柄「ナニ、汚らはしい降參沙汰、ならば刀を捨てさして見ろ。」

（十二）衛士の骨

如何に心は猛くとも、味方は總て斬伏せられ、其身も既に傷を受けて、名に負ふ近衞の三銃士勝誇つたる太郎を合せて、いづれ劣らぬ四人を相手に此方に何の勝算の無いのは固より知れて居る。日柄は既に死を決して、忘れるばかり劍の柄を握つて健氣に身を構へた。

遊佐は此時僅に身を起して其方を見たが、

遊佐「日柄ッ、時と場合だ。是非がないわ。一旦敵の言ふ儘にしろ。」

けれども日柄は聞かぬ振した。面を高く勇々しげに、

日柄「むゝ、日柄は此處で斬死するのだ。近衞の阿蘇、大曾に荒見、相手に取つて不足はないわ。さア來い。大法主の衞士の骨を見せてくれうわ。」

遊佐「退け、日柄ッ、四人と一人、殊更手負、命の遣ひ時は何日もあるぞ。退けッ。退けッ。俺は貴樣に命令する。」

日柄「おう、命令とあれば是非がない。部下の僕が言葉は返せぬ。」

言ふなり後へ飛退つて、飽まで降伏せぬ印に、手にした劍を膝に掛けて、ぽッきと二つに打折りさま、生垣越に彼方へ投遣り、腕を組合せて前に突立つた。

勇氣は敵にも賞賛される常時の慣習、此方の四人は劍を揚げて齊しく日柄を褒稱し、軈て各自鞘に納めた。勝負は此處で付いたので、四人は倒れて居る手負を劬はり、死骸を脇へ運入れて、意氣揚々として引上げた。

太郎は最早味方の一人、今の充分の働に、決闘沙汰も何處へやら、互ひに逸早く胸を解いて臂を取合ひ町中を、勝に乘つた勢ひに大道狹しと歩を揃へて途に相逢ふ銃士達に、さも快よく會釋しながら、利根里邸へと歸つて來た。

太郎は殊に其中にも、かねて望みの近衛の銃士に早くも交りを結んだと思へば、一人愉快を禁じ得ず、阿蘇と大曾の中に挾つて、打笑ましげに二人に向ひ、

太郎「何うだ兩君僕は未だ銃士ぢやなくとも、兎も角見習銃士にはなつたらう。ヤ、今後を宜しく頼むぞ。」

と勇んで邸の門を入つた。

此時既に喧嘩の仕末は、それからそれと早くも傳はつて、利根里の耳にも入つ

て居た。當の四人が歸つて來たと聞くと、今朝言聞かした其下からと、表面烈しく叱付たが、陰では甚く稱美して、能くした、むゝ、大手柄ぢや、と委細を聞いて屢々首肯いた。併し陛下の御覺えを、最初に得て置かなくては又も李泄龍に先んせらるゝ疑惧、早一刻をも失はれぬやう、利根里は其儘取敢ず、急いで大奥に參内した。

が、既に遲かつた。大法主は先を越して、陛下と早私謁の中、利根里は膠なく、只今御用中、謁見は叶はせられぬ、と押返されて餘儀なく退つた。

さらばと胸に一思案、其夜陛下の遊戯の席へ、時刻を計つて伺候した。其時陛下は賭事に運好く勝續けられたる折、龍顏殊に麗はしげに見えさせられたが今入つて來た利根里の姿を、彼方に早く見そなはすと共に、

陛下「あゝ、利根里、參つたか。近う。近う。」

と招かせ給ひ、

陛下「利根里、其方は先刻大法主が、親しく余に訴へたのを知つて居るか。余は驚かずには居られぬわい。其方の率ゐる銃士共は、何といふ不屆者だッ。」

利根里は陛下の御顔を、一目見ると共に云ふべき言葉を、早くも胸に組立てゝ、

利根里「恐れながら銃士共に、左様な者は一人もござりませぬ。」

と先づ決然と口を切つた。

（十四）國王陛下

陛下「フム、何と云ふ？」

と陛下は御氣色を改められ、屹と此方へ向はせられた。

利根里「はッ、重ねて申上げまする。微臣管下の銃士の中に、左樣の者は一人もございませぬ。彼等は一意上御一人に、奉仕する外何をも持ちませぬ、極めて從順の者共にございまする。彼等は御奉公以外に於きまして、劒の鞘を拂ひますやうの儀は、如何なる場合にもございませぬ。併しながら……。」

陛下「むゝ、併しながら何ぢや。」

利根里「微臣の常に歎息致しまするは、彼の大法主の配下の衞士が、彼等に惡意を持ち居りまして、絶えず爭ひを求めて已まぬのでございまする。彼等は苟くも近衞の銃士、所屬の軍隊の名譽上、自己の恥辱を防ぎまする點より、已むを得ませず受太刀をも致しまするやうの次第。」

陛下「はゝ、大分優しい言前ぢやの。むゝ、兎もあれ片言では決せられぬ。余は

正王と言はれて居る者、待て、待て、一應其方の云ふ所をも聽いて取らさう。」丁度此時、今迄勝續けられた陛下の御運は、やがて傾いて稍負色になつて來られた。陛下はそれを機に侍從に代らせ利根里を伴れて離れた彼方へ退かせられた。

陛下「むゝ、利根里、其方は何うか大法主の衞士の方から、其方の銃士に爭ひを求めたと云つたの。」

利根里「はッ、御意の通りでござりまする。今日も又例の如く、」

陛下「フム、委細を話せ。事の起りは何ういふのぢや。双方の云ふ所を聽いた上で、事の曲直を匡さうわ。」

利根里「はッ、恐れながら有の儘に申上げまする。微臣管下の、最も優れました銃士の中の三人の者、かねて陛下も知ろし召されまする。殊に忠節を勵み居りまする事は、再應ならす陛下に於かせられましても、既に御認めあらせられたる者。微臣も此處に、斷言致しまする、陛下の御爲に、全く身命を抛つて仕へ居りまする者でござりまする。其三人、名前を申せば御首肯あらせられる事

と存じまする。阿蘇に、大會、荒見でござりまする。」

陛下「彼か。むゝ、して彼等が何うしたのぢや。」

利根里「はッ、其三人に微臣今朝程紹介致しましたる、瓦斯困から參りました若い見習の者がござりまする。其者と打伴れまして、郊外へ遊樂の約束を致しましたげにござりまする。四人は繁間の地へ一遊の積り、時刻を期して龜野の空地で會合する申合せであつたさうでござりまする。處が其處へ集りました時に、端なく出遇ひました大法主の衞士、遊佐、幸佐、日柄の外に、未だ二人居りましたさうにござりまする。微臣聊か奇怪に存じまするは、恁樣に打伴れて衞士共の、かゝる場所へ參るといふ事、例の國法違犯でなくて、何の必要があつて右樣の處へ……。」

陛下「如何にも然うぢや。余も然う考へるぢや。彼等は何か互に爭ひを仕出かして、禁を犯して決鬪の爲に、其處へ參つたに相違ないわ。」

利根里「あいや、微臣は決して、彼等を責めるのではござりませぬ。併しながら今の時節、此六人の武裝した者共が、四邊に人の居りませぬ龜野の空地へ、何の

目的があつて參りましやうや。」

陛下「尤もぢや。利根里、其方の申す通りぢや。」

利根里「處で其六人の者は、前申しました微臣の銃士共の姿を、其處へ參つて認めますと、かねて嫉視して居りまする近衛の者共、何が扨それを見ますと、朋輩同士の私闘は忘れて、直ちに此方へ取つて掛りました。陛下、」

と利根里は更に言葉を強めて、何をか上奏しやうとした。

（十五）逢つて取らさう

直と陛下を見上げまつり、聲音に態と力を籠め、

利根里「陛下は疾くに知ろし召さるゝ事と存じ居りまする、銃士は陛下を守護の者共、陛下の外に何者にも、屬し居りませぬ其銃士共が、彼の大法主に屬し居りまする衞士共に、飽くまで敵視されまする事は、勿論自然の數でござりまする。」

陛下は我にもあらず首肯かせ給ひ、憂はしげの御物言ひに、

陛下「全くぢや。利根里、全くぢやわ。今佛蘭西に其やうな兩派の者、二つの主權のあると言ふは實に悲しむべきぢや。や、併し長うは續かぬわ。利根里、時は聽て來る事ぢや。おう、そこで大法主の衞士共が、近衞の銃士共に鬪ひを仕掛けたのか。」

利根里「はッ、當然さうあるべき事でござりまするが、申さば依估にも相成りまする次第、偏へに聖斷を仰ぎまする。」

陛下「むゝ、然うあらう。利根里、して其相手の衞士は五人、此方は？」
利根里「前申しました近衞の三人、陛下の銃士の三人でござりまする。而も其一人は前日肩に重傷を受け居りまする者、それに一人の少年を加へて、數こそ四人ではござりまするが、一人は手負一人は少年、それにも拘はりませず大法主の衞士の最も手剛の五人を相手に、四人を下に斬伏せましたわ。」
陛下「ヤ、そりや大勝利ぢや。むゝ、充分の勝利ぢや。」
利根里「御意の如くで。」
陛下「フム、四人の中の一人は手負、一人は少年と申したな。」
利根里「はッ、未だ丁年にも達し居りませぬ身で、特に陛下に申上げまするが、や、天晴健氣な振舞。」
陛下「ほう、名は何と云ふ。」
利根里「有田太郎と申しまする。微臣舊友の伜、嘗ては御父君、故顯理四世陛下に仕へ參らせたる者の伜にござりまする。」
陛下「フム、して其者が、何か健氣に働いたとな。話せ、詳しく話せ。余の戰爭好

き、試合好きは能く存じて居らう。」と何時しか興に乘り給へる態、利根里は知つて知らぬ振に、

利根里「只今申上げましたる通り、かたの如くの若年の有田、未だ銃士たるの名譽をも得ませぬ者でござりますから、勿論其時も一私人の服裝を致し居りました。衞士の者共は弱輩と見て、それよりも尙、近衞の隊に屬し居りませぬ者と見て、最初に其場を立去れと命じました。有田は其時、未だ其數にこそ入つて居らね、此魂が既に銃士陛下に渾身を捧げまつッて居る以上、伴立つて來た銃士と共に、一歩も去らぬと申したげにござりまする。」

陛下「愛い奴ぢや。」

利根里「處が其有田でござりまする。聞かせられませい。何さま大法主の立腹される程の重傷を、彼の遊佐に負せましたのは、其少年の有田でござりまする。」

陛下「ナニ、有田が遊佐に傷を負はせた？　其話しの少年が、彼の第一流に數へられた達人を、利根里、冗談もよい程にせい。」

利根里「いや、併し事實でござりまする。」
陛下「フム、余は其者に逢つて見たい。」
利根里「はッ、若し謁見を賜はりますれば、本人の光榮は如何ばかりか……。」
陛下「おう逢つて取らさう。明日の正午に召連れて來い。」
利根里「はッ、有田一人を召連れましやうや。」
陛下「いや、四人の者を殘らず連れて來い。詰りは余の爲の今日の始末ぢや。余もそれだけの事はせんければならんわ。」
利根里「然らば明日正午十二時に召連れ參内仕りまするが、」
陛下「むゝ。や、併し表から參つては可かぬぞ。此やうな事を大法主に知らすは無用ぢや。」
利根里「如何にも左樣。」
陛下「それに利根里、法は法ぢや。私鬪は兎もあれ禁じてあるのぢや。公けの聞えも如何。な、心得たか。」
利根里「はッ、心得ましてござりまする。」

と仰せを畏んで其儘、御禮を申上げて軈て御前を退つた。

（十六）古名陽次

利根里は邸へ引取ると其儘、四人を前へ呼出して直ちに陛下の御沙汰を聞かせた。阿蘇大曾荒見の三人は、是迄屢〻謁見を賜はり、恁かる場合に慣れて居たので、仰せを有難くは受けたものゝ、甚だしく感動はしなかつたが、太郎は生れて初めての光榮、聞くから胸を騷がせて、其夜は殆んど目も合はず、光輝く未來の運の既目の前に開けた心地、明くるを待たず跳起きて、八時には最う支度を整へ阿蘇の部屋へ出掛けて行つた。

行つて見ると阿蘇は、今謁見には未だ時間があるので大曾荒見と近くの運動場で、テニスの球戯を遣らうといふ事になつて、丁度出やうとして居た處であつた。太郎の來たのを幸ひ何うだ、一處に、と阿蘇は直ちに誘つた。太郎も今から十二時まで、別に時間の費しやうもないので、球戯の規則などは何も知らなかつたが、誘はれたまゝ一處に行つた。

大曾と荒見は先へ行つて最う初めて居た。阿蘇は總ての運動遊戯に熟達し

て居たから、案内知らぬ太郎を自分方に、大曾と荒見を向ふへ廻して遣り出した。併し初めると直ぐ例の負傷で右が遣へないから左で遣つて居たがそれでも堪へられないで中止して了つた。太郎はそこで一人になつたが、勿論初めから、何も知らんと云つて居たので大曾荒見も其積りで應つて別に數へもせず球を投合つて居た。處が一つ大曾の大力に打つて來た球が恐ろしい勢ひで太郎の顔を殆んど掠めて行つた。太郎は其時、若し此球が當つたら、今日至尊の前へ出られまいと思つたので、何しろ此謁見から未來を描き盡して居る眞ッ最中、大事を取つて大曾と荒見に今少し、此競技に熟してから遣らうと云つて止めて其場を退いた。

運惡く丁度此時、見物人の中に交つて大法主の衞士が居た。其中の一人、昨日の味方の敗北を、少からず憤慨して機があつたら復讐をと付覦つて居たのが今太郎の止めたのを見ると、直ちにそれと聞えよがしに、

衞士「彼奴、球が恐いので逃げをつたわ。ヤ、見下げ果てた臆病者だッ。」

太郎は蝮にでも螫されたやうに、忽ち屹と振返つて、相手の顔を睨付けた。

衛士「はゝゝゝ、何だ、口惜しさうに睨んで居るな。口惜しくば相手になれ。俺は云つた通りに云つたのだ。」

太郎「今貴公の云つた事は、敢て説明する迄もない、明かに侮辱の一言だ。貴公も覺悟があつて云つたのだらう。さア、二言と云はず立合はう。」

衛士「フム、殊勝らしい事を云ふな。よし、心得た。して何時な。」

太郎「直さま、」

衛士「はて、大分豪いわ。フム、貴公俺が誰だといふ事を知つて居るか。」

太郎「知らん。全で知らんわ。又知らうと知るまいと、俺の身に何の關する處はないわ。」

衛士「いや待て。知らんで云ふなら仕方がない。若しも知つたら、ウッかりした那樣文句は出て來まいが。」

太郎「フム、貴公の名は何と云ふ。」

衛士「音にも聞いたか、古名陽次だ。」

太郎は色を變へず、落付拂つて「、

太郎「古名君か。よしでは古名君、兎も角此處を出やう。」

衛士「宜しい。承知した。」

と古名は太郎が自分の名を聞いて、少しも驚かぬに却つて驚いた。其筈か。古名と言へば巴黎で誰知らぬ者もない喧嘩買。既に國法で禁ぜられて居るにも拘はらず、斬つた撲つたを武士共の見得のやうにして居る當時、日毎の鬪爭に、古名の名前の出ぬ事はない大法主さへ持餘して居る暴れ者であるのだ。

（十七）　參つたかッ

太郎は勿論、未だ巴黎へ來たばかりで、古名の名前を知らうやうなく、何しろ早く片を付けて了はなくてはと、竊と彼方の樣子を見ると、大曾と荒見は勝負に夢中で何も知らず、阿蘇も熱心に其方に恍惚れて、何の氣も付かぬ樣子、太郎は人々を騷がせぬやうに、目を盜んで其處を脫け出し、軈て古名と、前後して外の往來へ出た。

兎も角謁見の時間があるから、少しも猶豫して居られない。太郎は外へ出ると共に、急がはしく四邊を見ると、幸ひ人通りが絕えて居た。太郎は直に身構へして、

太郎「さア、御自慢らしい手の內を見せて貰はう。氣の毒だが相手も少し骨ッぽいぞ。さア、何處からでも來い。」

古名「何だ。此處で遣るのか。何處でも構はぬが場所が惡いわ。見付けられたら妙でなからう。」

太郎「むゝ尤もだが、生憎俺は用のある身體だ。愚圖々々しては居られないのだ。拔け。拔け。それとも無事に謝罪つて出るか。」

古名は聞くより目を怒らせて、

古名「ナニッ、譫語吐すな。古名陽次だ。己ッ、其頬桁を……。」

云ふが早いか引拔いた。太郎は騷がず打笑つて、

太郎「はゝゝ、豪く熱くなつたな。然し此處で相手が出來れば丁ど幸ひだ。それッ。」と同時に拔合せた。二言と云はず古名は直に斬込んで來る。固より名うての暴れ者、聞えた腕節、太刀先烈しく、面も振らず斬つて掛つた。が、業には劣らぬ太郎もさる者、發矢、ガッキ、打つ返しつ暫く勝敗を決しなかつたが、やッと叫んで打込む一太刀、太郎が覺えの早業にさしつたりと身を交す、隙もあらせず古名は右の脇腹深く斬込まれた。太郎は颯と飛退つて刀を振上げ相手を屹と、

太郎「參つたかッ。」

古名「何の、是式ッ、」

齒嚙みをしながら更に烈しく怒猛つて斬つて掛る、太郎は受けて又も一突拳も通れと突を入れた。

古名「むゝ、殘念ッ、」

と立ちも直らず蹌踉めいた途端、外に打合ひの聲を聞付けて、中に見物して居た二人の衞士、先程古名が太郎と何か、二言三言云合つて共に出て行つたのを見て居たのでさてはとばかり、同僚を助けに、既抜連れて、飛ぶが如く、來るなり太郎に斬つて掛つた。同時に跡から、阿蘇大曾荒見の三人續いて其處へ立現はれたが、それと見るより、掛隔て衞士の二人を追捲つた。

衞士は叶はずと看て取ると、直ぐ前にある鶴見公爵、其邸の家人に古名の身寄の有るのを素より知つて居るので、ばら〳〵と其處へ驅け付けた。

衞士「御加勢ッ、衞士の難義の場合ッ、鶴見殿の方々ッ！」

聲を聞付けると、其時邸内に居合せた武士共は、素破とばかり驅出して阿蘇を初め四人にどッと襲掛つた。

それッ、銃士と衞士の打合ひだッ、と四邊は忽ち騷がしく、折しも其處を三人し

て、江座大學校長の、配下の武士が通掛つたが、固より日頃の銃士方それと見ると、二人は、直に飛込んで來て四人を助け、殘る一人は逸早く、利根里の邸へ駈付けた。

武士「御加勢ッ。邸の方々、銃士の急ぢや。」

と呼ばる大音。ナニッ、銃士の、それッ、と邸に詰めて居た銃士共、聞くが早いか追取刀で、颯と一時に馳出した。

（十八）御出獵

其時此方の當の四人はかねて銃士方に心を寄せて居る二三の武士の助太刀はあつたが、何をいふにも多勢に無勢、見る〳〵眞中に取圍まれ、簇がる敵を引受けて、前後左右に當つて居た。中にも阿蘇は未だ不自由の身の左手に刀を打揮つて、苦痛を忍んで奮鬪した。途端に、

銃士「ヤッ、應援に來たぞ。確かり遣れッ。」

と潮の如くに寄せて來た銃士の面々、直ちに敵の中へ割つて入つて當るに任せて薙いで廻る。双方今は入亂れて暫く混戰の有様となつたが、勝は遂に銃士の方に制せられた。敵は次第に支へ兼ねて、やがて一方が崩れたと見るとどッと總崩れに崩れ出して、いづれも邸内へ引退き、手早く大門を閉めて了つた。古名は二箇所の深手に倒れて、半死半生の體で居たのを勿論其前に中に舁入れられたが、最う息も絶々で居た。

味方は敵を追込んで、犇と門へ詰寄せたが、面々少からず激昂して、何は然れ近

衛の銃士に無禮を加へた鶴見の奴輩、飽くまで懲らして遣らねばならぬ、と氣の立切つた折柄一人、

一人「燒け〳〵寧そ、燒討ちにせい。」

一人「それだ。むゝ、遣つて了へ。」

數人「遣れ〳〵ッ。直ぐに。遣つて了へ。」

と異口同音咄嗟、邸は燒かれやうとした。途端に聞えた十一時の時の音、太郎と彼の三銃士は直ぐに謁見の事を思出した。最う然うしては居られないので、兎角して加勢の者共を押宥め、先へ引揚げて利根里邸へ歸つて行つた。殘る人々も發頭人を失つて、稍張合の拔けた心地、やがて散々鶴見の者共を罵散らして、勝鬨揚げて跡から引返した。

四人は直に隊長の前へ出ると、利根里は既騷ぎを聞付けて、四人を待受けて居る處であつた。

利根里「むゝ、又遣つたな。急げ。少しも猶豫しては居られんぞ。直に參内せんければ、又も大法主にして遣られるわ。時を移さず御前へ出て、昨日の事件

の結果から、今日の仕儀に立至りました次第と、奏問して事を納めやうわ。さ急げ。直に出やう。」

と即座に四人を引連れて急ぎに急いで御所へ出た。處が意外、陛下は今の程、繁間の森へ鹿狩りに、成らせられましたと近侍の報告。

利根里「ナニツ、陛下は？」

と利根里は我耳を疑ふ如く重ねて問掛た。

近侍は再び、

侍近「はい、繁間の森へ成らせられましたが。」

利根里「はて、むゝ、して陛下には、昨日既に其御催しの、御心組でもあらせられたかな。」

侍近「いや、俄かの御催しでござりまする。實は今朝程、主獵官との御話しから、初めて御出遊にはならんとの仰せでござりましたが、例の御好みの事で、到頭今の程成らせられました。」

利根里は更に、

利根里「して陛下には、未だ大法主には御會ひにはならんかな。」

近侍「いや、多分最う御會ひになつた事でございましやう。先刻の事大法主の馬車が、何處へか出立の準備中でございましたから、那邊へと承りますと、繁間へとの事でございました。」

利根里「ヤ、又遣られたかい。」

と四人の方へ打向ひ、

利根里「何うだ。貴樣等の聞いて居つた通りだ。次第に依つては何ういふ事にならうも知れん。兎も角俺は今夜陛下に拜謁する。一時此處を引退つて、俺の返事を待つて居れい。」

（十九）鶴見公爵

案に相違の大奥の首尾で、利根里は再び四人を引連れ、一先づ邸へ立歸つたが、歸ると共に、何は置いて鶴見公爵に、一懸合ひして置くのが上策と思つたから、即刻公爵方へ使者を立てゝ、今邸内に加養して居る、大法主の衞士を追ひ、且つは陛下の銃士に對して、無法の襲擊を加へた家臣共を、充分譴責してくれるやうにとの書面を送つた。處が公爵は其時既に彼の古名の親戚に當る、家臣の口に迷はされて居たので、劈頭から受付けず、あいや非は却つて其方にある、手出しをしたのは銃士方無理から此方の家來共に攻擊を加へたのみならず、既に邸を燒かうとまでの狼藉を極めたのだとの返答、慳くて互に我を張つては、容易に果てしは付かないので、利根里は直に埒を明けやうと、自身鶴見邸へ出向いて行つた。

二人の貴族、利根里と鶴見は、いづれも名譽と武勇の人、平素親密の間柄ではなかつたが、少くとも尊敬し合つて居たので、互ひに慇懃に挨拶した。元來公爵

は、陛下にも餘り近付かず、いづれの黨派にも屬しては居らぬので偏頗な考へを持ちはしなかつたが、併し此時ばかりは、流石に丁寧でこそはあれ、常よりは餘程冷やかであつた。

利根里「いや、存じ寄らぬ事で御意を得まする。扨て此度の件でござりますが、書面では又行違ひの事もと存じて、押付けながら參りました次第。」

鶴見「ヤ、態々の御越し、甚だ恐縮は致しますが、併し今度の件に付きましては、既に家來共を充分詮議も致しましたぢや。只今も御返答致しました通り、非は何處までも銃士方に…………。」

利根里「暫く。失禮ながら未だ、小生の申す處をもお聞きなさらんで、一存に只申募られるのは甚だ其意を得ませぬが。」

鶴見「如何さま、御尤もの次第。さらば承はりましやう。」

利根里「早速ながら伺ひますが、當館の御家來の御身內、彼の古名の容體は如何でござりますな。」

鶴見「重體でござります。醫師も危んで居ります程で」

利根里「併し未だ正氣にありましやうか。」

鶴見「はア、正氣は充分……………」

利根里「口は利けますかな。」

鶴見「はア、大分難儀の様子ではありますが、併し未だ談話は出來ます。」

利根里「フムそれは重疊、ではこれから其處へ參つて、委細を古名の口から聞きましやう。當の古名の申す事なら貴方も御納得が出來やうと思ひますが、」

公爵は暫し打案じたが、固より道理な申條であるので、流石に同意して、其儘利根里を導いて、古名の寢て居る部屋へと行つた。古名は思寄らず二人の貴人にが、相携へて自分の許へ來たのを見て、床から急に身を起さうとしたが、何しろ最う弱り切つて居るので、中途に既力竭きて、ばツたり下に倒れると、其儘氣を取失つて了つた。

公爵は近寄つて興奮劑を與へ、再び息を吹返させた。利根里は何處までも公爵に事を信せしめる爲に、公爵自身、古名に事件の顛末を聞かせた。

事は利根里の豫期して居た通り、古名は今や生死の境、最早最期を覺悟して居

た時であつたから、少しも事實を包まず、有りの儘に殘らず白狀した。利根里はそれを待設けて居たのだ。其上何も云ふ事はないので古名に少しも早く回復するやうにと云つて、やがて邸を辭して歸つた。

（二十）「覺えがないとは何の譫語」

其夕六時、利根里は進んで宮中へ出で、陛下に咫尺し參らせた。陛下は果して李泄龍に、盛付けられた藥の效驗、殊に逆鱗の體に見えた。早くもそれと見奉つて、心竊に首肯きながら、臆せず御前へ進出でゝ恭しく御機嫌を伺つた。

陛下「何ぢや。御機嫌ぢや。むゝ、此體を見い。其方の眼には何と見える。馬鹿者めが。餘人でない其方の爲に、此不興とは氣が付かぬか。」

利根里は態と、只呆れに呆れた面持、

利根里「こは何事でござりまするか。微臣更に覺えもござりませぬ事を……。」

と半ば云はせず、御氣色烈しく、

陛下「默れッ。覺えもないとは何の譫語。人を殺し町を騷がせ、剩へ巴黎をも燒立てやうとした、此やうな行爲を恣まゝに銃士共に爲せて、其方は職責を盡して居ると云ふか。これ余は何の爲に其方を近衞の主將に任じて居るのぢや。」

と疊掛けて仰せられたが、俄かに言葉を變へさせられ、

陛下「ヤ、併し余も早まつたかも知れん。むゝ、其方は正しく、直ちに暴徒共を獄に下し、既に法を匡したといふ事を、奏聞に參つたのだらうな。」

と皮肉たる御抑、利根里は騷がず面を正して、

利根里「はッ、御仰せの、其法を匡されん事を請願の爲に參りましたのでござります。」

陛下「むゝ、何と言ふ。其方の率ゆる銃士共にか。」

利根里「あいや、正しく陛下に讒を構へましたる、其者に對しまして、」

陛下「フム、奇ッ怪な事を聞くわい。其方は何か、彼の阿蘇大曾荒見の三人瓦斯困から來た見習ひの者などが衞士の古名を理不盡に斬伏せて、既生命も覺束なき程の目には決して遇はさぬと云ふか。それのみならず、一味の銃士共を語らつて、鶴見公爵の邸を取圍んだ事などは、其方は夢にもないと云ふか。尚其上に邸をも、燒討ちにしやうとした事などは、覺えもないと其方は云ふか。これ余は何も彼も知つて居るぞ。今平和の時に際して、輦下に恁樣な暴惡を

働く、而もそれが近衛の者とは呆れて物も云はれんわい。」

利根里「はてさて、見事なる其作り話を、何者が陛下に奏上仕りましたか。」

陛下「むゝ、何者が申したと。外ならぬ國家の柱石、余が唯一の臣下、唯一の忠良、李泄龍大法主が申したのぢや。」

利根里「ほう、大法主が？　ヤ、驚くべき誣言、何と心得られて左樣な事を…………。」

陛下「ナニッ、大法主が僞りを申したと。むゝ、其方は大膽にも大法主を非難するか。云へッ。むゝ、明瞭と云つて見い。」

利根里「あいや、非難をするのではございませぬ。併しながら微臣斷じて申しまする、大法主は此度の件に付きまして、初めからして惡しざまの報告を受けたのでござりまする、日頃陛下の銃士には快よからぬ大法主、殊更誹謗も入り易きの理。」

陛下「云ふな利根里。其報告は當の公爵、鶴見の手から參つて居るのだぞ。何うぢや、答へがあるなら申して見い。」

利根里「ヤ、それこそ幸ひでござりまする。多言を要するには及びませぬ。公

爵こそ立派の證人。若し一條件を許されますれば、微臣は公爵の證言に一任して是非の聖斷を仰ぐ事と致しましやうが………。

陛下「むゝ、條件とは何ぢや。」

と陛下は膝を進ませられた。

（二十一）御首尾次第

利根里「そは餘の儀でもございませぬ。陛下は公爵を召寄せられ、其座に他人を交へませず、陛下御自身親しく公爵に御下問あらせられたいのでござります。尚其公爵に御下問の後は、何人にも御對顏あらせられず、直ちに微臣を御召寄せあられん事でござります。」

陛下「フム、然らば其方は、總て鶴見の申した事を、決して否定はせんと云ふのか。」

利根里「ハッ、決して異議は申しませぬ所存。」

陛下「むゝ、假令如何なる事を申さうとも。」

利根里「はッ、公爵次第に、」

陛下「おゝ、必ずちやな。」

利根里「仰の如くでござりまする。」

陛下「可し。さらば後とは云はぬ、直さま此處へ鶴見を召さうわ。善惡共に鶴見の返事で、利根里、重ねて申すが、必ず二言はあるまいな。」

利根里「仰までもございませぬ。微臣も利根里でございまする。」
陛下「可いわ。其方はそれなら明早朝に再び此處に伺候せい。」
利根里「心得ましてございまする。ヤ、其前に今一應、恐れながら押返して申上げまするが、陛下には其折まで、鶴見公爵と微臣の外、何人にも御對顏あらせられませぬやう、確と御言葉を賜はりたいのでございまするが。」
陛下「會ふまい。むゝ、誓つて遣はさう。」
利根里「はッ、有難き仕合せ。さばら微臣は、一先づ私邸へ引取りまして…………。」
陛下「むゝ、余は直さま使者を鶴見へ、」
と彼方へ向はせられ、
陛下「加綱ッ。加綱は居らぬか。」
かねて御次を離れた事のない、陛下の御信任あらせられる近侍の加綱は、御聲に應じて御前へ畏つた。
陛下「むゝ、加綱。誰でもよい鶴見の邸へ使者を立てゝ、直ぐに公爵に參るやうに計らへ。」

加綱「はッ。」

とばかり、加綱は其儘、急いで仰を傳へに行つた。陛下は利根里の方へ向直られ、

陛下「さらば利根里、今宵鶴見の證言次第、」

利根里「銃士と衞士のいづれにか、是非は陛下の御胸に、」

陛下「むゝ、明日は早々、然うぢや、七時に來い。が注意せい、若し罪が、其方初め銃士共に有つた曉は…………。」

利根里「勿論陛下の御意次第、如何やうにも相成りまする心得。」

陛下「可し。其一言を忘れるなよ。退れ。」

利根里は恬くて、御前を退つて歸つて來たが、胸は流石に安からず、兎もあれ三銃士と有田の四人に明朝六時半に來いと命じて置き、人こそ知らね穩やかならぬ一夜を明かした。

明けて六時、手早く謁見の支度を濟ませて、やがて出頭した四人を引具し、直さま大奧へと向つたが、途次咋夜、謁見の時の模樣を語つて、何にせい鶴見が、其時

御下問に答へた言葉で、如何なる結果になるかも知れぬ。次第に依つては貴樣達の日頃の御寵用も是限り、延いて及ぼして利根里自身も、頗る危まれる今日の謁見、成敗共に此首尾次第で決するのぢや。と言つて聞かせた。裏御門から中へ進んで、軈て大奧の御座の方、階下に近く達した時、利根里は其處に四人を待たせて、陛下の御胸の未だ解けずば、是非ない此儘引取つて行け。思ふが如く上首尾なら、直さま御前へ呼寄せるから。と言殘して一人御居間へ出た。

（二十二）「以來は何分親友として……」

利根里は併し恐るゝ色なく、四人を跡に唯一人、御次の間近く進んで行くと、其處に控へて居た例の加綱が見ると、直に打迎へた。利根里は其時加綱から、昨夜鶴見は邸に居らずそれとも知らず夜を更して最早宮中へ伺ふには餘りに遲く歸つて來たので漸く今朝になつて此處に見え、今しも陛下に謁見中との事を聞いた。

利根里は事情を聞くと共に心に少からず喜んだ。利根里の竊かに憂へたのは鶴見の陳述の直く後から、又もやそれを打消して、陛下の御心を惑はす者の立現れて來る事でそれ故、昨夜陛下にも前以て確と申上げて置いたが今や自分が來て居れば最早其虞はないので、殘るは鶴見の陳述一つ併しそれには、第一鶴見の人と爲りから利根里に充分憑む處があるのだ。

果して利根里の見た通り、程もあらせず御居間から鶴見公爵は退つて來たが利根里の姿を眼に入れると、直に傍へ近寄つて來て、

鶴見「ヤ、利根里隊長、昨日は實に御無禮しました。實は只今陛下から、昨日の彼の事件に付いて親しく御下問を受けましたので、包まず事實を申上て置きましたが、今度の事は全く拙者の家來共の誤り、利根里隊長には拙者から謝罪をせんければなりませぬと申しましたぢや。此處で御目に掛つたを幸ひ、改めて御詫を申入れます。尚是迄は、心ならず御疏濶に致しましたが、以來は親友として何分御別懇にな。」

利根里「公爵、御言葉で痛入ります。實は深く貴方の御氣象に信頼して居る小官今度の事件に付きましても、貴方を差置いて外に、小官を辯護する者を見出しかねたのでござります。」

陛下は彼方に、二人の談話を聞いて居られた。今の程鶴見の奉答にいつか御心も釋けられたと見え、御機嫌らしく、御獨語のやう、

陛下「むゝ、よく云ふた。利根里序に鶴見に云ふてくれい。今鶴見は、其方に親友になつてくれと申したが、余にも何うか、其挨拶を分けて貰ひたいぢや。鶴見は何分にも疎々してならん。此三年の程といふもの、全で余の前には出て

來んのぢや。余が使を遣はさんでは此處へ來んといふのは餘りぢやないか利根里余に代つて云ふてくれい。此やうな事は國王として余の口からは云はれんちや。

鶴見「ヤ、恐入りました仰せ言でござります。併しながら陛下今の時節、二六時中陛下の御前に絶えず出仕致して居りまする者は最も陛下に忠節を拔んでて居る者ではござりませぬ。」

陛下「おゝ、鶴見、聞いて居つたか、」

とつか／＼と立出でられ、

陛下「尚更可いわ。鶴見、余の言葉を含んで置いてくれい。ヤ、利根里參つたか。一昨日召連れて來いと云ふて置いた、彼の者共は何うしたな。何故連れて參らんのぢや。」

利根里「はッ、彼方に控へさせてござります。御許しがござりますれば、直さま此處へ呼寄せまするが、」

陛下「むゝ、呼寄せい。鶴見、其方は退つて可い。ヤ、又來る事を忘れるなよ。利

根里、此方へ。」
鶴見は其儘、御暇を申上げて引退つた。それと入違ひにやがて加綱に導かれて、三銃士と有田の四人は、續いて其處へ入つて來た。

（二十三）「何と、此者が」――

陛下はそれと見そなはすと逸早く御聲を掛けられた。

陛下「おゝ、參つたか、勇士共、近う〳〵。むゝ、遠慮せず前へ進め。」

仰を承はると共に、三銃士は恭しく玉座に向つて最敬禮し、頓首して前へ進んだ。太郎も同じく跡に續いて、物馴ぬ身の初々しく、胸を躍らして御前へ近づいた。

陛下「進め。もそつと近う。むゝ、此處へ來い。」

と尙近く招かせ給ひ、龍顏更に麗はしく、

陛下「豪い事を遣つたな。二日の中に衞士の七人が其方共四人の爲に遣られるとは。余も實は驚いたぢや。併し七人とは餘りに多過ぎる。其勢ひで押して行つたら、大法王は一月の中に衞士の隊を作直さねばならんわ。余は又無理に嚴ましい勅令を出さゝれるぢや。なに、時偶一人位の事なら余もそれ程に云ひはせん。併し二日に七人は、むゝ、重ねて云ふが餘りに多過るぢや。」

利根里「さればでござりまする。彼等四人の者は痛く此事を後悔仕つりまして偏へに陛下の御宥しを願ひまする爲めに斯く謹しんで罷出ましたやうの次第。」

陛下「何ぢや。後悔した？ はゝゝゝ、斯ういふ事に餘り後悔をする柄でもあるまい。ヤ、其處な背後に居る若者近う參れ。」

太郎は御言葉にはッとばかり恭しく御前へ進出た。陛下はつく〴〵と打目成られたが、

陛下「利根里、其方は何か相應の若者のやうに話したが、こりや未だ眞個の童じやないかい。何と此者が彼の名高い遊佐を斬伏せたのか。のみならず彼のしたゝか者の古名をも？」

利根里「仰の如くでござりまする。」

阿蘇「恐れながら未だ其上に、小臣が既に幸佐の爲に討たれまする場合を此者の爲に助けられましたのでござりまする。其折幸佐を物の見事に仆しましたも、矢張此有田でござりまする。」

陛下「むゝ、年に似合はん恐ろしい手の內ぢやのう。これ有田とやら、事の次第を今一度話して聞かせい。」

と仰のまゝに有田は二日の出來事を、かねて利根里に言含められて居る通り淀まず陛下に聞え上げた。陛下の數次首肯かれて、

陛下「妙ぢや。甚だ妙ぢや。不憫なは大法主、二日の中に七人まで而も揃つて優れた七人ぢや。や併し最う充分ぢや。元來が近衞の銃士に、對抗して出來た大法主の衞士、打挫ぐのは心地よい談話ぢやが、併し國法の表もあるわ。今少し穩便にせい。な心得たか。」

利根里「はッ、陛下の仰せでござりますれば、何の違背を仕りましやう。」

陛下「おう兎もあれ能く心得て置けい。」

と傍への手箱の中から御手元金の一袋を取出されて、

陛下「それ、當座の褒美ぢや。」

と御手づから太郎に賜はつた。太郎は進んで有難く賜物を拜受して、やがて元の座に畏まつた。陛下は御時計の方を振向かれて、

陛下「ヤ、最う八時半ぢやわ。九時には又會ふ者がある。さらば四人の者、其方共の忠節を余は殊に滿足に思ふぞ。此後共に余は何處までも其方共を頼みに思ふぞ。」

四人の者は異口同音。

四人「はッ、陛下の御爲には、假令身を寸斷に切刻まれましても、更に厭ひは仕りませぬ。」

陛下は更に御滿足に思召され、やがて利根里にも御懇篤なる御言葉を賜はつて、五人殘る處のない首尾で御前を退らせた。

（二十四）三銃士

賜はつたのは一千圓有田は一人で私すべきでないと、四人に分けて諸共に重ねて聖恩の深きを謝し、兎もあれ武士の身支度に翌日早速馬を購ひ、大督の世話で遣してくれた勘三といふ從僕を雇ひ、殊に阿蘇等の三人とは互ひに意氣の合つた處から、淺からぬ交りを結ぶやうになつた。

阿蘇は三十になるやならず、水の垂れるやうな好い男で、殊に十二分の品格を持つて居る其上聰敏の人ではあるが、常には極めて寡言で、何處となく淋しさうな樣子に見える、言葉は何時も簡にして盡したやうな事を云つて艶もなく飾りもなく、冗な事などは少しも言はぬ。

其上聞えた女嫌ひ。自分の口から決して婦人の事を話した事はない。何うかして其噂などが出ると、さも苦々しい顏で、思切つた酷い事を云ふ。全で女といふものゝ何をも容れず先天的に惡魔のやうに思つて居るやうだ。

阿蘇の從僕は軍次と言つて、深く主人に惚込んで居る、忠義一圖の男であるが、

阿蘇は此男を最も不思議な風に躾けてある。前にも言つた通り、誰に向つても餘り口數を利かぬ方であるから、殊更從僕の軍次には何か非常の時の外は、殆んど何をも言はぬ。用を吩咐けるにはいつも、手眞似か目授せで埒を明ける。而も軍次を、手足のやうに働かせて居る。

併し時によると、主人の心を讀損つて、軍次は何が充分心得だ積りで、阿蘇の望みとは全で方角違ひの事を遣る。阿蘇は其時も無暗に罵散らすやうな事はせず、矢張默つて軍次の横面を一つ喰はす。那樣時に用が辨じないと無據く少しばかり物を言ふ。大曾と來ると、阿蘇とは全で反對で女好きで見得坊で非常な饒舌だ、彼は啻に口數の多いばかりでなく、人が聞いて居やうとも頓着せず何でも聲高に饒舌り散らす。殊にしたゝかの見得坊であるから、最初阿蘇と交際出した時なども、其立揚つた充分の風采を見ると、內々堪らず、扮裝で一つ勝ちおほせて遣らうと思つて、思ふさま着飾つて出て見たが、阿蘇の何の繕ひもなく、身の廻りなどは更に構はぬ中にも爭はれぬ天品の立優つて居るには兎ても及ばず學んでも又出來ない事なので阿蘇の全で關係せぬ女沙汰

の方で、稍落を取つて我慢して居た。主を見眞似に、大曾の從僕の茂助と云ふのが、大曾に劣らぬ大の見得坊、從僕中でも名高い氣取屋、身嗜みし、樣子を賣つて、大曾の供をして行く處などは、一幅の圖にしても好い位だ。

荒見は又、當時の銃士に似氣なく文藝に秀で、宗敎を嗜むといふ男、自分も何時か敎界の人となるのだと云つて居る、一風變つて居る方である。處が其從僕の純藏といふのが、不思議に矢張主人に似て、銃士の家來とは思はれぬやうに、抹香臭い事ばかりを云つて居る。柔和な、穩當な、飽まで信心の深い暇さへあれば坊樣のやうな眞似をして居る人物。主人が何時か敎界に入るといふのを憑みに、自分も一緒に隨つて行く氣で、一日も早く、其日の來るのを願つて居るといふ變り者であるのだ。

(二十五) 家と家

阿蘇は船町に、女主人の小綺麗な家の、二室ばかりの部屋を借受けて住つて居る。未だ若い、美しい主婦で、阿蘇の心も知らず、悟れがしの目遣ひをして一人で焦れて居る。此可なりに好い部屋の中には又、昔の榮華の忍ばれるやうな、目覺ましい立派な品が其處此處に見える。例を言へば、脇に飾つてある一口の太刀、如何にも良工の手に成つたやうな、驚くばかり細工の結構を盡して居る。其見事に寶石を鏤めてある柄ばかりでも、時價にして二三千圓もしやうと思はれる品なのである。

此太刀ばかりは、阿蘇は甚麼困難の場合にも、決して質入れもしなければ勿論賣らうともした事はない。大曾は例の見得好きで此太刀には實に涎を流して居る。此太刀を手に入れたら、大曾は全く十年位の壽命を縮めても可い程に思つて居る。だから一日、或公爵夫人と會合の約束をした時、大曾は阿蘇に、何うかそれを貸してくれぬかと云つた。阿蘇は其時何も言はず、自分の持つ

て居る寶石類貴金屬類を殘らず大曾の前へ差出して、これを皆遣つて了つても可いが、此太刀は寸時も此處を離す事は出來ぬ。自分が此宿を去つて了ふ迄は此處に置かねばならんのだと云つた。

此太刀の外に、壁の正面に一つ立派な肖像畫が懸けてある。然るべき豪族と見えて、身に光榮ある勳章を着けた輝くばかりの美々しい扮裝、前王朝の貴人の肖像で、阿蘇は此貴人に、爭はれず面差の似通つた處がある。阿蘇は別に身の素性を明かしはしないが、勿論此貴人の血統を引いて居るに相違はないのだ。

其外に未だ一つ、これも一代の名匠の手に成つた彫刻の妙を極めた手箱がある。前の太刀と、肖像畫と、此手箱には、皆同じ家の紋が着いて居る。阿蘇は何時も、此手箱の鍵を身に着けて、誰にも中を見せぬやうにして居る。併し一日大曾の居る前で、不圖中を開けた事があつて、大曾は其時初めて見た。中には何か、阿蘇に似合はず艶めいた手紙と、外に重要の書類やうの物が見えた。

大曾の住居は、利根里邸に遠からぬ處で、例の性質であるから、見掛けは素晴ら

しく立派である。何時も誰かと此前へ來ると、中には例の容體ぶつた茂助を、盛裝させて屹度控へさせてあるが、大曾は常例で誇り顏に、

「これが僕の住居だ。」

指さして見せる。併し大曾は、何時も家に居た事はない。又誰をも誘つて上げた事はないので、此見掛けの素晴しい家の、中の正味は何の位だか一人として知つて居る者はない。

荒見は又、小じんまりとした書齋、食堂、寢室と程能く間取りをした恰好の家に住つて居る。四邊は靜かで周圍は木深く、隣りからも見透されぬやうになつて居る處である。

太郎は此三銃士と、いよ〱親密になるに付けて、第一に此三人は何ういふ素性を持つて居る者であらうと、少からず好奇心に驅られて、何うかして來歴を知らうとした。と言ふのは、阿蘇、大曾、荒見、いづれも假りに付けた名前で、揃つて本名を匿して居る。大曾は兎に角、荒見と云ひ、阿蘇は殊に、何か深い秘密を身に包んで居るらしい。太郎は其處で、大曾に阿蘇と荒見の身の上を聞き、荒

見に大曾の事を聞いて見やうと思つて、最初に先づ大曾を捉へて兩士の經歴を捜り出さうとした。

（二十六）知れず仕舞

處が大嘗は、生憎に何も知らず、折角の廻り過ぎる舌も、これには何の甲斐もなかつた。荒見は又少しも隱し立てなどを爲ぬやうな風を粧ひながら妙に秘密の多い男で、他の事も、聞かれて多く言はず、自分の事は何時も脇へ逸らして了ふ。結局太郎は何も知る事が出來なかつた。

知れぬとなると更に知りたいのが情で、太郎は外に種々と手を盡して見たが、聞かずとも解つて居る事の外は、全く知れず仕舞ひになつて了つたので、已むを得ず、何時かは自然知れる時もあるだらうと思つて、到頭其儘にして了つた。

併し此外には、四人は互ひに、極めて愉快に日を送つて居た。當時の慣習で賭博は到る處に行はれて居る。阿蘇も矢張勝負を遣るが、概して出來の好い方ではなかつた。けれども嘗て一錢でも友人から借りた事はない。其癖自分の財布は自由に友人に遣はせる。賭に負けて、自分の名に關はるやうな事か

あると、阿蘇は何時も、夜の明けるのを待ちかねて、金貸の家を叩起し、前夜の借を拂はせるのが常だ。

大曾は時に熱に浮かされたやうに遣る。勝つと無暗に傲慢になつて、誰をも眼下に見下して掛るが、負けると又、幾日かの間全で影を隱して了ふ。そして瘠せて蒼い顔をして、併し財布には滿囊金を詰めて歸つて來る。

荒見は又決して勝負事に手を出した事はない。銃士としては一番質の惡い方で、遊び仲間にしても少しも、道樂氣のない、一番面白くない方だ。荒見は何時も何かしら屹と爲る事がある。よく酒宴の最中などにも、外の者は漸く醉が廻つて來た頃、談話も次第に面白くなつて、これから興に入らうといふ中で、荒見は用ありげに時計を抽出して見、優しく微笑みながら席を立つて、これから或る道學先生の處へ行かねばならんから、と云つて中座して歸つて了ふ。他の時には又、これから歸つて、一つ論文を書くのだから、邪魔をしに來てくれないやうに、などゝ云つて去つて了ふ。

那樣時に、阿蘇は其優れた美貌に、持前の如何にも美しい笑ひ方をする。大曾

は舌打ちして、彼奴、田舍の貧乏寺の和尚位になるより外、何にもなり得ない男だ。と又一杯を引掛けながら云ふ。

太郎と三銃士の交りは、其中にも次第に深くなつて行くばかり、三人の方でも亦、甚く太郎が氣に入つて、果は四人、一日の中に幾度か顔が合はぬといふと、何か物足らぬ氣がするやうになつて、跡から跡を追廻はすといふ仕末。利根里も亦、最初からして少からず太郎を贔負にして居たので、絶えず陛下に推擧する事を怠らなかつた。骨折は空しからず、幾程もなく陛下は一日、當時少からず勢力のある塙男爵を召出されて、太郎を其配下の衛士の見習ひにとの命令があつた。

太郎は國を出る時も、かねて父から云はれて居るし、かた〴〵自分も國王の銃士となるのを熱望して居るのだから、御沙汰は却つて難有迷惑厭や〳〵塙の衛士の服を身に着けた。利根里は勿論其心を知つて居るので何にせい二ヶ年、脇で衛士の履歴がなくば、近衛の隊には入れぬ規定、それ故の此御沙汰ぢや。二年を過ぎたら默つて居ても、屹度望みを果させて遣る。それでなくとも若

し其間に、何か陛下の御爲に、勝れて御役に立つた事を爲るか、さなくば何か目覺ましい事をして、一時に其名を揚げたなら、規定を待たず入れるやうに、俺が何うか取計つて遣る。」と一方ならず慰めてくれたので、太郎も流石に厚意を難有く、兎も角衞士の列に入つた。

(二十七) 穗梨宇平

そちこちする中に四人の懷、陛下の恩賜に其當座は、大分暖かであつたのが、固より武士の不經濟、既影も止めなくなつた。殊更太郎は見習ひ中の、勿論未だ無給の身の上、犇と手元の詰つて來たのに、流石に少し弱らせられた折柄、誰とも知らずほと〳〵と、靜かに戸口を音訪れる者があつた。

太郎は直に勘三に命じ、戸を引開けて迎へさせると、軈て小腰を屈めながら、おづおづ其處へ入つて來たのは、下に呉服店を出して居る、太郎の家主、穗梨宇平といふ商人であつた。

思掛けない來客に、太郎は家賃の催促と、顏を見るから早合點、實は未だ此處を借りてから、一度も拂つて遣らないのだから、生憎く今の手詰つた中へ、來られて少し周章氣味に、

太郎「ヤ、ようこそ。さ、此方へ。實は僕の方から出るのだつたが…………。」

云はれて穗梨の方が却つて慌てゝ、無上に只腰を低く、

穗梨「いえ何う仕りまして。私こそお伺ひも致しませんで、失禮ばかり致して居りますが、實は其、少々貴方樣に…………。」

云はれぬ先にと、太郎は逸早く相手の言葉を遮つて、態と磊落に、

太郎「むゝ、其家賃の事だがね……。」

穗梨は驚き顏に、急がはしく

穗梨「いえ、滅相な、其やうな事で參つたのではございませぬ。何として又貴方がたに、左樣の事を申しに參りましやう。實は私、貴方樣の勇ましい御評判を脇から承はりましたので、折入つて一つお願ひ申したい事があつて參つたのでございますが。」

太郎「はて、何か知らんが、僕で役に立つ事かね。」

と太郎は稍安堵の思ひ。何の願ひと思はず前へ身を進めた。

穗梨「へい、それは最う、恁うしてお願ひに出ましたくらゐでございますから、貴方樣が諾とさへ仰有つて下さいますれば、それで最う充分でございます。」

太郎「フム、何だね、兎も角談話を聞かう。」

穗梨「仰有らずとも申上げます積り、一應まアお聞下さいまし。外でもありません私の家内でございます。御存じかは知りませぬが、以前から皇后陛下の御裁縫方を勤めまして、御所に出て居ります者で、私から恁う申しては如何ではございますが、縹緻と言ひ、品行と言ひ、申分のない者でございます。貰受けましたのは三年以前、ヤ、何も彼もお話申しますが、實は持參なども、餘り匂はしい方ではございませんで、何う致さうかとは存じましたが、彼の皇后陛下の御側役、堀江樣の娘分といふので、つい貰ふ氣になりましたのでございます。」

太郎「フム、其から、」

穗梨「へい、其から其、いや餘事は扨置きまして、實は今度飛んだ事が起つたのでございます。今申上げました其家内が昨日不意に誘拐されましたので、」

太郎「ナニ誘拐された？フム、誰に？」

穗梨「さア、私も能くは事情を知りませず、判然とは申上げられませぬが、併し確かに疑ひを掛けて可い者が一人ございます。」

太郎「むゝ、其一人とは。」

穗梨「へい、それは、長い事家内を追廻して居りました者で、」

太郎「フム、飛んだ奴だな。」

穗梨「いや、暫らく。それが又、決して色戀の沙汰ではないのでございます。へい、それには外に深い綾がございますので、實は私風情が係やうな事を口外しましては、甚麼恐ろしい事にならうも知れませぬが…………。」

と穗梨は云掛けて暫く躊躇した。

（二十八）「シツ、何うぞお靜かに」

稍あつて思直したやう、凝と有田の顏を見詰めて、

穗梨「いや全く、うツかりした事は申されませぬが、お武家の貴方樣の事でござりますから、お耳に入れるのでござります。今度家內の誘拐されましたのは、實の處家內などの足元にも追付きませぬ、ずツと尊い御婦人の御內々の事に深い關係があるのでござります。」

太郎「むゝ、それぢや何か宮中の…………。」

穗梨「左樣でござります。」

太郎は既大奧の內事を、何か心得顏に、

太郎「はゝア、そりや小川夫人の事だらう。」

穗梨「いえ未だ御身分の高いお方で、」

太郎「フム、それぢや相木夫人か。」

穗梨「いえ未だ高いお方で、」

太郎「それぢや正しく世良田夫人だ。」
穂梨「いえ未だ〳〵上のお方、ずんと上のお方でござります。」
太郎「むゝ、そんなら彼の…………。」
と太郎は急に言葉を止めた。
穂梨「でござります貴方様。」
と穂梨は思はず四邊を見廻して、さも恐ろしさうに聲を潜めて云つた。太郎は穂梨を打目戍つて、
太郎「して其相手は誰だ。」
穂梨「相手と云つて、外に誰がござりましやう、彼の公爵の…………。」
太郎「むゝ、春木公爵…………」
穂梨「シツ。貴方。何うぞお靜かに。若し這麼事が聞えましたら…………。」
と穂梨はおど〳〵して、慌てゝ太郎の聲を遮つた。
太郎「はゝゝ、豪く恐がるぢやないか、フム、そしてお前さん何うしてそれを知つたのだね。」

穗梨「へい、實は家内から承はりましたので。」

太郎「それぢや御家内が知つて居るのかね。それとも又、誰かゝら聞いたとでもいふ事なのかね。」

穗梨「へい、其原は堀江樣でございます。前にも申しました通り、家内は彼の堀江樣の娘分、御存じかは知りませぬが、豫てから皇后陛下の、深くお頼み遊ばされて居る堀江樣でございます。そこで堀江樣が、家内をお側近く出したのでございます。と申しますのは、彼の御不憫な皇后陛下、肝腎の國王陛下には、彼の通りに見捨てられ、大法主には睨まれて、近間に誰も、お味方の者は一人もないといふのでムりますから、せめて一人誰か御心の置かれませぬ者をと、家内を上げましたのでございます。」

太郎「成程、其處で、」

穗梨「其處で家内でございますが、丁度四日前に宅へ參りまして、ヤ、一寸申して置きますが、家内は一週に二度、宅へ參る事になつて居りまして、恁う申しては何でございますが、全體甚く亭主思ひの奴でございますので……　……。」

太郎「ちよッ、那樣事は何うでも可いわ。先を話せ。」

穗梨「ヤ、恐入りました。へい、其時家内の話しますには、皇后陛下には、今恐ろしく御心痛遊ばして居らせられる事が有るとの事でございます。」

太郎「フム、それが？」

穗梨「ソレがでございます。彼の大法主樣、御存じでございましやう豫ての御意恨から、夜晝となく皇后陛下を苦しめて居らつしやるのは。彼の執念の深いお方、何彼に付けて意趣晴しをなさらうとして居らつしやる。」

太郎「むゝ、それで、」

穗梨「處で今度、皇后陛下のお驚き遊ばしたのは、何者とも知れませぬが、お名前を騙りまして、春木公爵に僞手紙を送つたものがあるのでございます。」

（二十九）「彼奴、確かに彼奴だ。」

太郎「ナニ、僞手紙を？」

穗梨「へい、何でも彼の春木の御前に、巴黎へお出でになるやうにといふ、呼出しの御文ださうでございます。うかと其手に乘せられて、此地までお出でになるが最後、直さま係蹄に掛けやうといふ企畫。」

太郎「むゝ、違ひない。が併しお前さんの御家内が、何うして此事に關係して居るのだね。」

穗梨「それが其、皇后陛下の、無二のお味方と申す事が大法主方には知れて居ります。お側近くに然ういふ者を置いては、第一仕事の邪魔でございます。それ故お側から引離して、何處へか隱したのでございますか、それとも何か皇后陛下の秘密を搜り出さう爲に捕へて、種を上げやうと爲ましたのか、でなくば家内を詐付けて、裏を掻いて自分の方の、間者にして入込ませやうといふので御座りませう。」

太郎「成程、隨分有りさうな事だ。して其御家内を誘拐した男、お前さんは其男を知つて居るのかね。」
穗梨「へい、存じでは居りますが…………。」
太郎「フム、名は何といふ。」
穗梨「名前は未だ存じませぬ。何でも大法主方の人といふ事は存じて居りますが。」
太郎「其男を見た事はあるのかね。」
穗梨「へい、一度家内に知らせられまして、其時確かに見覺えて置きました。」
太郎「フム甚麼風の男何か直に見分けの付くやうな處はなかつたか。」
穗梨「左樣でござります、見掛けた處權高の立派な方でござります。髮の濃い色の淺黑い、脊の高い、眼付の凄い、それに彼の左の頰にかすり疵がありました。」
太郎「ナニッ、左の頰にかすり疵ッ。」
と太郎は思はず聲を強めて、
太郎「むゝ、髮の濃い、色の淺黑い、脊の高い、眼付の凄い、彼奴だ。確かに彼奴だ。」

忌々しい、彼の米因の紳士だ。」

穂梨「えッ、何でございますと、」

太郎「ナニ、此方の事だ。併し穂梨さん、若し其男が、僕の今云つた男なら、僕にも存分意恨がある。一度に二人の意趣晴らしが出來る譯だ。知らしてくれ、何處へ行つたら其男に遇へやう。」

穂梨「さア、それは何とも御返事が出來ませぬが、」

太郎「其奴の家を聞いた事はないのか。」

穂梨「ございません。へい、其人を見ましたのは、一日家内を御所へ送つて參りました時、丁ど御門の中から出て來られまして、其時家内に敎へられましたので。」

太郎「それぢや全で當りが付かぬわ。ちよッ、齒痒いな。むゝ、して御家内の誘拐されたといふ事を、お前さん何うして知つたのだね。」

穂梨「それは堀江樣から承はりましたので。」

太郎「其時何か、手掛りになるやうな事は聞かなかつたかね。」

穗梨「それが堀江樣も、深くは御存じがありませんので、」

太郞「フム、それぢや誰か其外の手で、何か此事に付いて聞いた事はないのか。」

穗梨「さア、それでござりますが、實は先刻大變な手紙を受取りましたので、私は蒼くなつて了つたのでござります。」

太郞「手紙ッ？　今持つて居るのかね。」

穗梨「へい、持つて參じましたが、」

太郞「むゝ、見せたまへ。」

穗梨は懷から、物々しい封筒の、一通の手紙を出した。太郞は受取つて開いて見ると、

「一言穗梨宇平に申入れ置き候、其方妻の行衞に付き、搜索の儀決して無用に候。萬一寸分たりとも其樣の儀相見え候はゞ其方の一身は容易ならざる事に立至るべく候。此儀屹度申渡し置き候也。」

と墨黑々と、さも嚴めしく書續けてあつた。

（三十）向ふの戸口に

太郎は逐一に讀畢つて、手紙を宇平に差戻した。

太郎「フム、相應に手酷いな。併し高が威嚇だ。」

穗梨「へい、然う仰有ればまア然うでございますが、何を申すにも町人の私でございます。飛ぶ鳥落す大法主樣の、向ふに何として立たれましやう。全くの處、私は此手紙を受取りましてから、魂も身に添はないのでございます。罷違へば彼の恐ろしい、蓮戸の牢へ打込まれて了はうではございませんか。」

太郎「それや何とも知れないわ。併し何も、それほど恐がるには及ぶまいが、」

穗梨「何う致しまして、そりや貴方樣と私とは譯が違ひます。私お願ひに出ましたのも、實はそれでございます。貴方樣をお見掛け申して、折入つてお願申すのでございますが、此際一つ、何うか私をお助け下さる事は出來ますまいか。」

太郎「むゝ、そりやお前さんが賴むといふなら、手を貸して遣らない事もないが」

穗梨「ヤ、有難う存じます。それで私は蘇生りますので。それでは何うか、何分

にも家内と私の事を、一つお願ひ申上げます。實は貴方樣を、彼の利根里樣の御身内の壻樣の御方だといふ事も存て居りますし、それに彼の貴方樣の處へ始終お出でになります、お強さうな近衞の方々、ありや皆利根里樣の手に屬いてお出でのお方でございますから、いづれも大法主樣の敵手方御不憫な皇后陛下をお庇ひ申して、大法主樣の鼻を明かすのは、必ず惡くお思ひなさらぬお方」

太郎「むゝ、尤もだ。」

穗梨「それ故、恁うして上りましたのでございます。それに付きまして、甚だ失禮の事を申上げますやうでは御座りますが、未だお下げになりませぬお家賃なども、最早少しも申受けませぬ積り。」

太郎「いや、それでは氣の毒だ。」

穗梨「尙、又此後とも、貴方樣の此家にお出下さいます間は、決して何も戴きませぬ。」

太郎「むゝ、いよ／＼氣の毒だ。」

穗梨「其上未だ、若し何かお入用の事でもございますなら、四五百の金子は何時でも差上げます積り。」

太郎「むゝ、お前さん、大分内福と見えるな。」

穗梨「へゝ申上げます程でもございませぬ。僅かの商賣ではございますが、店の方でもまア年に一二萬の儲はございますし、それよりか一寸手を出しました投機事業で大部占めましたので、相應に工合が好いのでございます。でございますから…………。」

と云掛けて不圖驚いたやうに、

穗梨「ヤツ、」

太郎も驚いて急がはしく、

太郎「何だ。何うしたのだ。」

穗梨「彼處に、彼の何か…………。」

太郎「何とは？」

穗梨「ソレ彼の、向ふの家の戸口の處へ、倚掛つて立つて居ます男、彼の外套に包

被まつて、」

太郎は指さゝれた方へ振向いたが、思はずすッくと立上がると共に、

太郎「むゝ、彼奴だッ。」

穗梨「もし、私の先刻お話申しましたのも、あ、彼の人の事で、」

太郎「おゝう、矢張俺の探して居た奴だ。己ッ、米因の奴、今度こそ何うあつても逃しはせぬぞッ。」

云ふも遲し、飛掛つて脇の劍を手に取ると、拔放して驀直に外へ飛出した。

（三十二）美酒の使

勢込んで太郎は一飛び、二階を颯と飛降りた途端、阿蘇と大曾と二人して、何心なく訪ねて來たのに、ばッたり下で行逢つた。

二人「ヤツ、何うしたのだ。」

太郎は僅かに見たばかり、物言ふ隙も無いやうに、

太郎「ナニ、米因の奴だ。」

云ふが早いか飛出して、瞬く隙に見えなくなつて了つた。

太郎は既に再三ならず、米因館での闘爭の始末、彼の怪しげな紳士の事、馬車の中の美人の事、其後又も利根里邸の外で、追掛けて、遂に見失つた始終を、阿蘇にも大曾にも話したので、今太郎が云捨てゝ行つた言葉で、二人は直に樣子を悟つた。再び言葉を交す間もなく、太郎は既行つて了つたので、二人は其儘立止つたが、首尾よく彼の紳士を捉まへるか、さなくば又も見失つて了ふか、いづれにしても其跡で、太郎は再び歸つて來るだらうと思つたので、二人は室へ入つ

て行つた。
室は最う空になつて居た。穗梨は太郎が、拔身を手にして飛出したのを見ると、逸早く後難を恐れて、竊と室を脫出して了つたのだ。
果して二人が豫想した通り、彼是三十分ばかりして、太郎は大汗になつて歸つて來た。今度も亦、紳士の姿を見失つて了つたので。紳士は全で、妖術でも遣つたやうに、忽ち影を消して了つた。太郎は白刄を提げたなり、跡を追つて路から路、町から町を驅廻つたが、至で似寄りの姿にも出過はないので、無據く引返して彼の紳士が倚掛つて居た家の戶口を、割れるばかりに叩立た。處が何回叩いても、全で返事をする者がない。餘り烈しく叩立てるので、隣合つた家家では、其方此方から首を出して、中には表へ出て來た者があつたが、太郎は此人々から、其家の出口は總て、嚴重に鎖されて居るといふ事、何でも此六ヶ月以來誰も住つて居ないのだといふ事を聞いた。
詮方なしに、舌打ちしながら太郎は歸つて來たのだ。丁度太郎が驅廻つて居る時分、荒見も留守へ訪ねて來たので、太郎が歸つて來た時には、三人の顏が揃

つて居た。
三人「ヤ、何うした。」
と太郎の汗しづくになつて、苦い顏で入つて來た姿を見ると、三人齊しく聲を掛けた。
太郎「むゝ、又逃がして了つた。」
と刀を納めて、やがて座に着きながら、
太郎「彼奴、全で化物だ。見付けて直に飛出したのだから、何うしても遇はねばならんのだが、行く〳〵と幽靈のやうに消えて了つたわ。」
大督「然うか。僕も君の入つて來た樣子で、多分又逃がしたのだらうとは思つたが。」
太郎「ヤ、逃がしたと云へば、彼奴を見失つて了つた爲に、四五百圓、未だ其上も手に入る筈の、折角の仕事を逃がして了つたわ。」
大督荒見「むゝ何うして？」
と大督と荒見は、同時に左右から問掛けた。阿蘇は例の如く口を噤んで、眼付

で只訊ねたのみであつた。

太郎「勘三、」

と太郎は折しも次の間に來た勘三に命じて

太郎「下の穗梨の家へ行つて、俺が一寸飲りたいのだからと云つてな、上等の葡萄酒を半打ばかり遣して貰つて來い。」

大曾は、稍驚き顏に、

大曾「穗梨といふのは家主ちやないか。」

太郎「然うだ。」

大曾「君は何時の間に那樣……。」

太郎は微笑みながら

太郎「はゝ、今日からは何んでも出來るのだ。若し酒が佳くなかつたら、もつと佳い奴を取寄せて遣るわ。」

（三十二）　此首ぐらゐ

暫くすると使の勘三は、一打の美酒、數種の珍菓を、重さうに提込んで歸つて來た。

勘三「行つて參じました。ヤ、旦那樣、彼の家主は、急に人が違ひましたやうに私しの顏を見ると最うお世辭たら〳〵二つ返事で旦那樣の吩咐を引受けまして、お入用なら、いくらでも未だ差上げますと云つて、これを私に渡しました。」

太郎「然うか。御苦勞だつた。直に出して前へ並べろ。」

大曾は見ると共に眼を睜つて、

大曾「ヤ、ヤ、眞實だな。一體こりや何うした譯だ。」

荒見も共々、訝かしげの面持を見せて、

荒見「僕も同感だ。有田、何うしたのだ。仔細を話せ。」

大曾「話せ〳〵。お互ひに例の御恩賜が盡きてから、大分不景氣が續いて居る中だ。飛んだ金穴を見付けたな。樣子を話せ。」

太郎「話すとも。勿論話す。何事にも最う離れる事の出來ぬ四人だ。今度の僕の仕事にも、云ふまでもなく手を貸して貰ふのだ。兎も角飲りながら話さう。」

と太郎はそれから。先刻穗梨から聞いた事を詳しく三人に談話した。穗梨の妻を誘拐した奴は、かねて意恨の、米因館で斬合つた彼の紳士と、別人でないといふ事をも加へて云つた。

阿蘇「むゝ、良い酒だ。ヤ、有田、其件は妙でない事はない。五六百の金は手に入るだらうが、こゝに一考せねばならん事は、果して其五六百の金がだ、我々四人の首を賭て遣るだけの仕事だらうかといふ事だ。」

太郎「ヤ、然う取つてくれちや可かん。兎も角此件には、婦人が關係して居るといふ事に注意してくれなくつちや可かん。繊弱い一婦人が誘拐されたのだ。疑ひもなく其婦人は脅迫されて居る。或は拷問にも掛けられたらう。して其原因は何かと云へば、只其御主人皇后陛下に、忠實であるといふに外ならないのだ。」

荒見「待て、有田、氣を付けろ。君は些少其穗梨の細君に同情を寄せ過ぎて居るやうだ。婦人は全く我々男子を誤る爲に出來たものだ。總ての不幸は實際婦人から生ずるのだからね。」

阿蘇は此言葉を聞くと、一人竊かに、穩やかならぬ色を見せて、我にもあらず唇を嚙締めた。

太郎「いや僕の最も氣遣つて居るのは、穗梨の細君よりも皇后陛下だ。知られる通り國王陛下には全で顧みられず、大法主には絕えず苦しめられ味方の人は悉く跡から〳〵首を打落されて行くといふ御境遇ではないか。」

と太郎は更に身を進めて、

太郎「諸君聞いてくれ。僕は寧ろ恁う思ふ。若し僕が春木公爵の在所を知つたら、直さま手を執つて、皇后陛下の處へ御案內する。そしたら大法主は何ほど業を沸すだらう。諸君我々の眞箇の敵、唯一の敵、永劫の敵といふのは、彼の大法主の外にないではないか。彼の大法主に煮湯を飮まして遣るやうな事が出來たら、此首位僕は更に惜みはせんわ。」

阿蘇「して有田、其吳服屋の談話で見ると、皇后陛下は、春木公爵が其僞手紙で、此巴黎へ釣寄せられて來て居ると思召して居られるのだな。」

太郎「むゝ、其通りだ。」

荒見「待つた。暫く諸君。」

と荒見は、其時、急に何事をか思出したやうに云つた。

（三十三）　其紳士

大曾「何だ。何だ。」

と大曾は直に問掛けた。荒見は云出して又躊躇するやうに、

荒見「まア其方の談話を續けて居てくれ。今思出して居る處だから。」

太郎は此時小膝を拍つて、

太郎「むゝ、讀めたわ。穗梨の細君の誘拐されたのは、春木公爵の此事件と、直接に關係して居るに相違ない。恐らくは春木公爵が、既に此巴黎へ來て居るのに、連絡して起つた事だらうと僕は思ふ。」

大曾「おう。いゝ處へ氣が付いた。君は却々考へるな。」

阿蘇「なに是に止まらんよ。我々四人の中で、有田が一番思慮に富んで居る。」

太郎「ヤ、君に然う云はれゝば僕は非常な名譽だ。」

荒見「諸君、今云つた僕の談話をしやう。一つ聞いてくれ。」

三人「むゝ、何だね。」

荒見「昨日の事だ。例の研究で、時々講義を聴きに行く神學博士の家へ僕が行つて居たと思ひたまへ。」

阿蘇は聞くと共に、意味ありげに微笑した。荒見は跡を継いで、

荒見「博士の家は、離れた靜かな處にある。勿論然ういふ人の居さうな處だ。で僕が、其家を辭して歸らうとする時……。」

と云つて急に言葉を止めた。

三人「何うした。それから、」

荒見は何か知らず、甚しく口籠りながら、

荒見「其博士には姪が有ると思ひたまへ。」

大曾「ナニ、姪が！　はてな、それから、」

荒見「いや實際尊敬すべき淑女だ。」

言葉の樣子で、大方事情を察した三人は、こゝで一度に噴飯した。

荒見「むゝ、僕のいふ事を笑ふなら、いや少でも疑ふなら、僕は最う何も話すまい。」

阿蘇「イヤ謹んで拜聽する。最う少しも笑はんよ。」

荒見「では話すが、其姪といふのは、時々伯父に逢ひに來る。處が昨日、僕は期せずして其處で落合つたといふものだ。丁ど一緒に立つたから、伴立つて門を出て來た時……。」

大曾「フム、安くないな。」

太郎「待て、大曾、今冗談を云ふ時ではないわ。荒見、それから。」

荒見「其時だ。つか〳〵と僕等の前へ來たのは、脊の高い、色の淺黑い紳士、有田君の例の意恨の紳士な、彼の談話に聞いた通りの紳士だ。」

太郎「むゝ、多分同じ奴だ。」

荒見「と僕も思ふ。見ると其紳士の二三間背後に、手下らしい五六人の男が随いて居た。紳士は其時、僕等に向つて恐ろしく丁寧に、『公爵殿、』と先づ僕に挨拶して、向直つて伴の婦人に、『貴方も何うぞ御一處に、用意の此馬車へお召しになるやうに願ひます。勿論少しの御抵抗をもなさらず、又少しの御聲をも御立てにならぬやうに、一寸申上げて置きます。』

太郎「むゝ、君を正しく春木公爵と思つたのだな。」

荒見「疑ひもなく然うだ。」

大曾「だが其婦人は？」

太郎「そりや皇后陛下の、微服して居られるのだと思つたのだ。」

荒見「其通りだ。伴の婦人は、面被で深く顏を隱して居たからな。」

阿蘇は嘆稱して、

阿蘇「有田は感心だ。何でも見通しだわ。」

（三十四）お助けを……

大督、成程荒見は、公爵と同じ位の脊恰好で、様子も何處か似て居る處があるが、併し銃士の服を見違へる事はない筈だ。」

荒見、僕は大外套を着て居つた。」

大督、え、此七月の天氣にか。ヤ、驚くべき事だ。君は其博士の家へ、那様風に忍んで行かねばならぬのか。」

阿蘇、止めろ大督、又始めたな。成程恰好では欺されやう、併し顔を見たら直に解るだらうが、」

荒見、僕は鍔廣の帽子を目深かにして、殆んど顔を隠して居た。」

大督、いや何うも默つては居られんわ。神學を研究するに何といふ御用心だ。」

太麿、待つた。待つた。冗談は後にして、直さま仕事に掛らうではないか。荒見の今の談話で見ると、少しも猶豫しては居られんわ。兎も角手を分けて、穂梨の妻の行衛を探がさう。それから總ての種を上げるのだ。」

大膳「併し那樣地位の低い婦人が何を知つて居やう。」

太郎「然うでない。先刻も話したぢやないか、其細君は堀江の娘分だ。のみならず皇后陛下は、此際多分成るべく人の氣の付かぬやうな低い地位の者に助けを求められたのだらうと思ふ。身分の高い者は何うしても目に立つ。彼の大法主の鋭い眼を免れる事はありませんわ。」

大膳「ではそれとして先づ其呉服屋と約束の取引をするが可い。無論充分の報酬をな。」

太郎「いやそれは無用だ。事が成つた上は穗梨の手から受取らんでも、他の方面から十二分に受ける事が出來るから。」

折柄俄かに、彼方に起る物騷がしい足音、追はれて人の逃込んで來る氣勢がしたが、同時に室へ眞蒼になつて噂の穗梨が轉がるやうにして駈込んで來た。

穗梨「お助けを、何うぞお助けを。只今お上の四人のお方が、私を捕縛にお出でになりました。ど、何うぞお助けを……。」

大膳と荒見は、劍を引付けて直に立つた。

太郎「シッ暫く。」

と太郎は急がはしく、半ば抜掛けた二人の劍を、元へ納めるやうに擧動で知らせて、

太郎「今は勇氣を要する時ではない。充分用心して掛からんければならんよ。」

大曾「併し何うしてこれを見免して……。」

阿蘇「ヤ大曾、可いから有田に任せて置け。僕は重ねて云ふが、我々四人の中で有田が一番思慮に富んで居る。僕は斷じて有田に一任する。有田、君の好いと思ふ通りに遣れ。」

此時戸口に早く、四人の衛士の影が見えた。矢庭に中へ踏込まうとして、銃士のいづれも劍を傍に引付けて居るのを見て、思はず躊躇して立止つた。

太郎「入りたまへ。諸君、構はず中へ入りたまへ。僕等は總て國王陛下、並びに大法主猊下の忠臣だ。」

衛士の中の、頭立つた一人は、云はれて急に會釋して、

衛士「では諸君は、本職等が職務を履行するのを妨げられるやうな事はありま

すまいな。」

太郎「それ處ではない。若し必要があるならば諸君に手を貸さうと思つて居る。」

大曾は此方に、さも不平らしく眉を顰めて、

大曾「何を有田は云ふのだ。」

阿蘇「大曾ッ、何も云ふな。有田に任せて置け。」

と阿蘇は叱るやうに小聲で制した。

（三十五）　裏の裏

穗梨は事の前後の光景に、心も更に身に添はず、慌てゝ太郎の袖を引いて、齒の根も合はず慄へながら、

穗梨「あ…貴方樣、さ…先刻の、お…お…お約束は……。」

太郎は小聲に急がしく、

太郎「シッ、餘計な事を云ふな。此方の身體を自由にして置かなければ、お前さんを助ける事は出來ないわ。此處でお前さんを庇ふやうな事をすれば、僕等も一緒に引上げられて了ふ。」

穗梨「そ…然うは仰有いますけれど……。」

太郎は耳にも掛けず、振返つて彼方の衞士等に、

太郎「さア、入つて來たまへ。諸君、此奴は僕の家主だが元來非常な强慾な奴でね……。」

穗梨「貴方樣、そ………そりや餘り……。」

太郎「えゝ、默つて居れ。」
と屹と目授せしながら、
太郎「諸君、實は此奴、先刻も家賃の催促にうせ居つたのさ。銃士に對して無禮な奴、幸ひだ牢へ叩込んで遣つてくれたまへ。はゝ、成るべく長くな、僕の仕拂ひの出來るまで入れて置いてくれたまへ。」
衞士共は、意外に安々と引渡されたので、大悦びで、いづれも銃士に一禮して、否應云はせず穗梨を引立てゝ連れて行つた。
太郎は其時、一足遲れて後から行く彼の頭立つた衞士の肩に手を掛けて親しげに、
太郎「ヤ、君御苦勞だつた。失敬だが有合せの一杯を獻じやう。」
と取敢へず前へ出した酒杯に、先刻穗梨から來た美酒を滿々と注いだ。
衞士「ヤ、これは何うも恐入る。有難く御厚意を受けやう。」
太郎は直に盃を擧げて。
太郎「君の健康を祝する。君の名前は、」

衛士「小屋良介。」
太郎「むゝ、小屋君、」
衛士「小官も君の健康を。お名前は、」
太郎「有田太郎。」
衛士「有田君、」
二人は盃を合せて快よく一杯を盡した。小屋は重ねて禮を述べて、やがて外に待合せて居た部下の跡を追つて歸つて行つた。
大晉は跡に、一人頰を脹らして、
大晉「有田君は實に怪しからん眞似をするぢやアないか。恥辱だ。實際恥辱だ。四人の銃士の前へ、見掛けて助けを求めに來たものを、おめ〳〵引渡して遣つて了ふとは何の事だ。それのみならず見て居れば、苟しくも紳士たるものが部長とは云へ、邏卒などゝ盃を合せるとは。」
荒見「大晉ッ、君は何故然う淺薄なんだ。僕は全く見上げた。有田、よく遣つた。君は豪い男だ。」

大曾「え、何だと。君等はそれぢや有田の遣つた事を……。」

阿蘇「勿論、僕は充分に賞美する。」

と殊に深く、常から太郎を愛して居る阿蘇は、一際聲を強く、

阿蘇「有田、僕等が付いて居る。確かり存分に遣れ。」

太郎「ヤ、有難い。諸君、此處で端緒は開けた。敵は本能寺にある。目指す處は唯一つだ。さア、一致して當らうぜ。」

大曾「いや併し……。」

阿蘇 荒見「大曾ッ、今更何を云ふ。我々四人、誓つた仲ぢやないか。さア誓言！」

云はれて大曾も我を折つて其儘に、四人言葉を合せて誓つた。太郎は更に、充分の意氣で、

太郎「では諸君一先づこれで、別れやう。だが注意したまへ。今日此時から、我は彼の威嚴並びのない大法主と鬪ふのだ。諸君お互ひに充分覺悟して掛らねばならんぜ。」

（三十六）鼠罠

其夜からして穗梨の家では、所謂鼠罠なるものが、其筋の手に始められた。鼠罠とは、誰でもこゝに、或犯罪で捕縛されたものが有るとすると、外へは其事を秘密にして、其家は常と變らず飽くまで何氣なき體を粧ひ、四人か五人、入口近く姿を隱して居て、何も知らず其家へ訪ねて來た者は、悉く引入れて縛上げる。恁うして二三日の中に、其家と懇意な者は大抵皆捕まつて了ふ。これが所謂鼠罠である。

穗梨の家は早速其鼠罠に使はれたのだ。うか〳〵遣つて來た者は皆捕まつた。そして一々大法主の部下に取調べられた。併し上の有田の住居は全で別の口から上つて行かれるやうになつて居るので、衞士等も其方へは手を付けなかつた。

のみならず三銃士の外に、誰も其處へ訪ねては來なかつた。三銃士は手を分けて、例の穗梨の妻の行衞を搜ねたが、皆くれ何も知れなかつた。阿蘇は何か

又宮廷の方からの手掛りでもと、利根里の許へまで行つて聞合せた。平常沈默主義の阿蘇が、珍らしく此方から口を切て種々の事を聞くので、利根里は少からず驚いたが、併し利根里も何も知らなかつた。只最近に大法主、陛下並びに皇后陛下を見奉つた處では、大法主は何か深く思案顏、陛下には又御不安の御氣色、皇后陛下は御不眠からか、又は何か御歎きの上か、御眼を著るしく紅めて居られた。けれども皇后陛下の其御樣子は、敢て驚く事ではない、皇后陛下は御入内以來、安くは御夢も結ばせられず、打泣くのみで居らせられるのだから。と云つた。

利根里は終りに阿蘇に向つて、假令こゝで何事が起らうとも、兩陛下に御奉公の事を決して忘れるな。殊に此際、大法主に虐まれたまふ皇后陛下に、能ふ限り御氣を付けて差上げるやうと云つた。尚又此意を大曾、荒見、有田にも傳へてくれるやうにと添へて云つた。

太郎は又、室から一歩も踏出さず、例の鼠罠の成行きに注目して居た。室の窓から外を眺めて、罠に陥つて捕まつた者を殘らず見竊と床板の一箇所を剝し

て、下の住居と天井一重を僅に隔てゝ居るだけの穴を拵へ、其處から總て審問の次第を、一語も洩らさず聞取つたのである。

樣子で察すると罠に掛つた者は、最初に身の廻りを事細かに檢められた後、大抵憶いふ訊問を受ける。

「穗梨の妻は、良人か、又は誰かに屆ける爲に、何か其方に送つた物はなかつたか。」

「穗梨は其妻か、又は誰かに屆ける爲に、何か其方に送つた物はなかつたか。」

「穗梨夫婦の何方か一人、何か其方に口固めして、云つたやうな事はなかつたか。」

太郎は一人打首肯いて、

太郎「奴等若し、其何かといふのを知つて居るなら、這麼問ひやうをする筈はない。何を奴等は知りたがつて居るのだらう。うむ、或は俺の推測通り……。」

と猶も怠らず見張つて居ると、其日は過ぎて次の夜の九時、誰かは知らず又一人鼠罠に掛つたものがある。

太郎は直ちに、彼の穴近く身を寄せて、下の樣子に耳を澄ませた。

（三十七）　白刃を背後に

忽ちにして打叫ぶ聲、敵はぬながら爭ふ物音、續いて苦しげな唸き聲が聞えた。今度は何の審問もない。

太郎「むゝ、女だ。奴等例の通り檢査を始めた。抵抗されたので暴力を用ゐて居る。畜生、婦人に對して何と云ふ事だ。」

と忍んで居る身をも忘れて、咄嗟其中へ飛込んで行かうとして僅かに止つたすると間もなく、下から又切れ〴〵の聲で、

「私はこゝの家内ですよ。はい穗梨の妻の小夜ですよ。貴方がたは何で那樣御無體な………。」

太郎は聞きも敢ず、

太郎「ナニ穗梨の妻、占めたぞ、皆があれほど搜して居て分らなかつたのを、俺は坐つて居て突留める事が出來たか。」

「あれえ、誰れぞ………。」

再び又物騒がしい音、四人の大の男に向つて、女の力の及ぶ限り、死物狂ひに爭つて居る態、それも少時、

「兎して………。何ぞ、ゆ…………兎して。」

次第に其聲も、聞取れぬばかり幽かになつた。太郎は矢庭に身を起して、

太郎「おゝ。奴等穗梨の妻を縛上げて居る。何處かへ引摺つて行かうとして居るわ。」

と躍上つて忽ち屹と、

太郎「俺の劍は、よし、此處にある。勘三ッ。」

勘三「はッ、旦那樣、」

太郎「むゝ、急いで阿蘇と大曾荒見の處へ行つて來い。三人の中、誰か屹度家に居る。多分は皆居るだらう。行つたら武裝して直に來てくれるやうに然う云つて來い。むゝ、大急ぎでと云つてな。おう阿蘇は今利根里閣下の處へ行つて居る。直に彼方へ行け。」

勘三「畏まりました。して旦那樣は那邊へ。」

太郎「俺か。俺は此窓から降りて行く。彼方から廻つて行つては手間が取れるからな。さ、早くしろ。」

勘三「はい、ですが旦那樣、お一人で彼の中へ。え、旦那樣貴方は直に殺されてお了ひなさるでしやうが…………。」

太郎「えゝ、默つて居れ、貴樣は俺が吩咐けた通りにすれば可いのだ。行け〱直に行け。」

勘三「はい、併し…………。」

太郎「ちよツ、行かぬか直に。愚圖々々して居ては時を失つて了ふ。早くしろツ。」

と云捨てゝ、既、窓に手を掛けて、ひらりと外へ身を交し、音せぬやうに、する〱と下へ身輕に降立つた。

太郎「むゝ、態々出掛けて鼠罠に掛つて遣るのだ。併し今度の鼠は只の鼠ではないぞ。はゝゝ、猫共は甚麼眼をするだらうな、占めたと思つたら大間違ひだ、よし手並を一つ見せてくやうわ。」

既拔側めた白刄を背後に、つか〳〵と穗梨の戸口に立寄つて表をほと〳〵と音訪れた。

すると中の騒がしい物音は、同時に礑と鳴を靜めて、誰やら一人、やがて此方に近づいて來る足音が聞えたが、固唾を飲んで太郎が此方に待構へて居るとも知らず、例の鼠と思込んで居た中の者は、仕濟し顏に入口の戸を引開けた。同時に太郎は、物をも云はず、矢庭に中へ飛込んで行つた。

（三十八）隅の文字

程もあらせず、穗梨の住居に手近い家々、隣同士の人々は、一時に起る叫び聲、足踏みの音、太刀打ちの音、物の壞れる音などを聞付けて、何事と窓に出て樣子を見ると、穗梨の家から慌たゞしく、いづれも傷を受けた四人の男が、着物も何も裂破れた儘、倒けつ轉びつ、一目散に逃げて行くのを見た。

太郎は思ひの外に容易く打勝つた。立向つて來た勢ひにも似ず弱い敵手で一二箇處の微傷を受けると、慌忙いて、命から〳〵逃げて行つた。此處へ飛込んで來てから十分程の間に、太郎は當の猫共を總て追散らして了つたのだ。

近所の其窓の處へ出て來た人々は當時の物騷がしい世の、日每の鬪爭に慣されて居るので、今四人の逃出して行つたのを見ると、兎もあれ一時片は付いたものとして聽て靜まつて了つた。

太郎は四人を追散らして、直ちに穗梨の妻の方へ打向つた。太郎は此お小夜といふ婦人を初めて見るのだ。二十四五の優れて色の美しい、稍ゝ意氣な處

のある、思つたより却々の美人であつた。

お小夜は最早、殆んど氣を取失つて居た。太郎は急がはしく縛めを解いて、彼是と介抱する途端、不圖下に落散つて居た女持の美しい手巾に目を止めた。見ると嘗て、荒見と其爲に決闘しやうとした彼の手巾の隅の文字と、同じ文字の縫がそれにも有た。仔細のある事とは思つたが、例の荒見との悶着から、うかと記號のある手巾を取扱はぬやうになつて、何か又秘密のある事でもと、其儘お小夜の袂へ押入れた。

お小夜は其間に、漸くに正氣付いて、ぱつちりした眼を見開き、恐ろしげに四邊を見廻したが、先の人々の影は見えず、身は助けられて太郎の傍に、介抱されて居るのを見ると急がはしく身を起して、

小夜「おゝ何方樣かは存じませぬが、お蔭樣で危い處を助かりました。本當に何とお禮を申しましやう。」

とさも喜ばしげに禮を述べた。お小夜の笑顏といふのは又類もない、美しい。太郎は未だ其方には全で馴れぬ身の流石に見惚れるばかりであつたが、

太郎「ナニ、禮などに及びましやう。貴女の災難を見かねて、男のするだけの事をしたのです。云はゞ當然の事で。」

太郎「あれ何う致しましやう。那様事を仰有つては本當に恐入ります。ですが一體今夜の事は何うしたのでございましやう。今の恐ろしい人達、私は最初強盗とばかり思ひましたが、彼の人達は私をまア何うしやうといふのでしやう。それに良人が全で見えませんが、良人は今時分まア何處へ參りましたのでしやう。」

太郎「では貴女、何も御存じないのですね。今の人達は強盗よりも恐ろしい徒輩です。ありや皆大法主の部下の者ですわ。貴女、穂梨さんは昨日、蓮戸の牢へ入れられて了ひましたわ。」

太郎「えッ、何と仰有います。良人が彼の蓮戸の牢へ。まア何といふ事でございましやう。あの全で罪のない人が。」

と云つたが此時、未だ前の恐怖の色の全く消去らぬお小夜の面に、幽かに微笑むやうな影が動いた。

太郎「貴女、穗梨さんが何をしましたらう。彼の人の罪といふのは、貴女の良人になつたといふ、仕合せのやうな、不仕合せのやうな譯からです。」
太郎「え、それでは貴方は彼の何を御存じで…………。」
と云掛けてお小夜は、太郎の顏をちッと見た。

（三十九）　二人の影

太郎「むゝ私は貴女の、此間誘拐されたのを知つて居る。」
太郎「え、それでは彼の、私を誘拐した者を御存じですか。」
太郎「知つて居ます。四十を越した、髪の濃い、色の淺黑い、左の頰にかすり疵のある男。」
小夜「おゝ彼の人、彼の人です。貴方、彼の人は何處の者で何といふ人、」
太郎「さアそれは未だ私も知らない。」
太郎「貴方、そして彼の、良人も私の誘拐されたといふ事を存じて居りますか。」
太郎「知つて居ます。私も實は穗梨さんから聞いたのです。」
小夜「え、それでは若し、良人は此事で、」
と少し云淀むやうに「私を疑つて居るやうな事はございませんでしたか。」
太郎「少しも然ういふ事はありません。事の起りは大奥から出たやうに云つて居ましたから。」

小夜「では良人は初めから、些少も私の事を、妙に取るやうな事はございませんでしたか。」

太郎「御安心なさい。穂梨さんは、貴女に限つて那樣事は少しもないと云つて居ました。はゝゝ豪い亭主思ひだと云つてな、」

此時又も、此阿娜めいた婦人の花のやうな唇から、ほのかな微笑の影がちらと盜むやうに見えた。

太郎「併し貴女は、何うして此處まで逃出して來られました。」

小夜「はい私は彼の幽閉められました室に、たつた一人になりました機を幸ひ蓐被を力に、漸つとの事で窓から忍び出まして、勿論良人は宅に居る事と存じましたから、直に此處へ急いで參りました。」

太郎「はア、何しろ御亭主の事だから、今の場合を救つて貰ふ爲に、」

小夜「いゝえ、然うではございませぬ。恁ういふのも何でございますけれど、穂梨の力で今の難儀を救ふ事が、何うして出來ましやう。けれども差當つて、外に良人を頼む事がございましたから、」

太郎「フム、何ういふ事。」

小夜「それは…………。人樣の大切の事、うッかりお話しは出來ませぬ。」

太郎「むゝ、ヤ、いつまで此處に愿うしては居られない。今逃出して行つた奴等は、人數を增して直に此處へ引返して來るに相違ない。此處は安心の場所ではありません。まごまごして居て遣つて來られたらお仕舞ひだ。私は三人の友人へ直に來るやうにと云つて遣つたが、折よく家に居てくれたか何うだかそれも知れぬ談話。」

お小夜もそれと共に急がはしく、

小夜「おゝ、御道理です。此處には最う居られません。直に逃げて參りましやう。」

太郎「して何處へ、」

小夜「まア兎も角此處を出ましてから、」

と取敢へず身を掻繕ひ、やがて太郎に扶けられて足早に其處を出て行つた。

二人は兎も角跡を隱す爲に、町から町を夜に紛れて、家から漸くに遠くなつた

が、太郎は其儘歩を止めて、

太郎「さア、これから何うしましやう。何處へ貴女を連れて行きましやう。」

小夜「私も其御返事には困るのでございます。私は今那邊へ參つて可いか解らないのでございます。實は宅へ參りましたのは、良人を賴んで御所の堀江さんの處まで行つて貰ひます積りで、そして此三日の間の御所の方の御樣子を聞き今私が參つても、危ない事はなからうかと申す事を、聞合せて貰ふ筈であつたのでございます。所が家は如彼した譯………。」

太郎は事もなげに、

太郎「むゝ、それならナニ譯はない。私が代りに行つて上げましやう。」

（四十）別れの一眼

小夜「でも、それでは餘り貴方に…………。」

太郎「いや私も貴女を助けた以上、看す〳〵此處で手を引いてはそれこそ何にもならいではありませんか。」

小夜「では御親切に甘えまして、お願申す事に致したうございますが、然う申せば、未だしみ〴〵とお禮も申しませず、貴方を誰方樣と存じませぬやうな失禮な事で。」

太郎「ヤ、私も先刻のやうな急場の事で、つい未だ名乘りもせずに居ましたが、私は實は有田といふ…………。」

小夜「おゝ、そんなら彼の、私共の上に居らつじやる…………。かねて良人から承つて居ります壻樣の御方でございましたか。」

と更に又安心したやうに、重ねて此處で禮を云つた。太郎は好い程に挨拶して、

太郎「知つての通り利根里閣下にも、深い縁故のある私、大法主の不爲にこそなれ爲になるやうな事は決してしません。安心して私にお任せなさい。」

小夜「はい有難う存じます。何分にもお願申します。貴方のやうなお方に力になつて戴きました私は、何といふ仕合せでございましやう。では恐入りますが御所の方へ入らしつて戴く事にしまして、處で、私の身體でございますが………」と又困つたやうな樣子で「私は其間何處へ行つて居りましやう。」

太郎「何處か貴女は、今堀江さんが來てくれるまで、安心して隠れて居られる家を御存じないのですか。」

小夜「さア、それが有ります位なら、何も心配は要らないのでございますが……。」

太郎「お待ちなさい。ヤ、最う直ぐ阿蘇の家だ。むゝ彼處が可い。彼處へそれまで忍んでお出でなさい。」

小夜「え、阿蘇と仰有るのは？」

太郎「私の親友です。」

小夜「けれど若し、其方が私を御覧になつたら………。」

太郎「ナニ其氣遣ひには及びません。今確かに留守ですから。」
小夜「でも其中に歸つて入らしつたら………。」
太郎「いや急には歸つて來ません。よし又歸つて來た處で、私が貴女を連れて來て、暫く其處へ置いたと云へば濟んで了ふ事。」
小夜「けれどもそれでは、妙なことに取られて了ひましやうが………。」
太郎「併しそれが、貴女に何の掛構ひがありましやう。誰も貴女を知つて居るものはありません。のみならず今、貴女と私とは、然ういふ分隔てをして居るやうな場合ではありません。」
小夜「はい、御道理です。では押付けながら其御親友のお家へ。あの那邊で。」
太郎「最う、直ぐ其處です。」
と二人は直ちに指す方へ急いだ。太郎が豫想した通り、阿蘇は果して家に居なかつた。かねて親密の仲の事で、太郎は合鍵を渡されて居るので、難なく中へ入つて、お小夜を室へ案内した。
太郎「さア、此處で待つて居らつしやい。中から嚴重に締りをして、恁ういふ合

圖に三度戸を叩かなければ、決して開けては可けせん。」

と手で仕方をして見せて、

太郎「最初の二つは續けて强めに、跡の一つはずッと間を置て柔らかめに叩きます。解りましたか。」

小夜「はい、よく解りました。それではこれから御所の方へ。」

太郎「直に行きましやう。」

小夜「では彼の麗景門からお出なさいまして、守衛に訊ねられましたら、何も云はず鳳凰といふ合言葉をお掛けなさいまし。すると守衛は、直ぐに貴方の御用を聞きますから。」

太郎「ムヽ、そして。」

小夜「其の守衛に堀江さんを呼出して貰つて、急いで私の處へ來るやうに仰有つて下されば可いのです。」

太郎「解りました。併し私は、何時又貴女にお目に掛れましやう。」

小夜「え、私に……　…。」

太郎「勿論貴女に。」

小夜「それは私に任せて下さいまし。必ず何とか致しますから。」

太郎「必ずな。」

小夜「はい、必ず。」

太郎は其儘お小夜に會釋して、別れの一眼に、無量の思を籠めて出て行つた。

(四十一) 針の跡

太郎は一飛びに既宮城へ着いた。麗景門を入つたのは丁度十時。事件が起つてから、未だ三十分位しか經つて居らぬ。事は總て、お小夜の云つた通りに行つた。守衛は合言葉を聞くと直に太郎の意を受けて、太郎の待つ間もなく堀江に逢ふ事が出來た。挨拶そこ〳〵、太郎は手短かに譯を話してお小夜の在處を知らせた。堀江は一方ならず喜んで、後とも云はず、直さま其處へと、急がはしく驅出したが、行つたと思ふと忽ちに又引返して來た。

堀江「ヤ、有田さんとやら、貴方に一つ忠告して置く事がある。」

太郎「え、何ですか。」

堀江「貴方此事で、後々迷惑をする場合を考へて置かねばなりますまい。何せい彼方には、大法主といふ本尊が居ますわ。」

太郎「如何にも。」

堀江「貴方は誰か友人の中に、其處の時計が餘程遲れて居る家を知りませんか。」

太郎「して何うしますそれを。」

堀江「有るならこれから、直に其處へ訪ねて行つて、今夜九時半頃、そこの家に居たといふ後の證據を作つてお置きなさい。な、用心に若くはありませんわ。」

太郎「如何さま。御道理。早速一つ遣つて置きましやう。」

堀江はそれと共にお小夜の方へ急いで行つた。太郎は堀江の忠告を胸に、其足で直ぐ利根里邸へと訪ねて行つた。併し今夜は、密々閣下にお話申したい事があるから、何うか私室でお目に掛れるやうに、と取次の者に云入れた。

かねて太郎は、殆んど絶間もなく此邸へ出入りして居るので、何の面倒もなく、取次の者は直に其事を利根里に傳へて、太郎は取敢へず望みの室へ通された。

太郎の其處に待つて居る間に、手早く脇の置時計の針を逆に四十分ばかり前に戻して、素知らぬ顏で控へて居た。程もあらせず入つて來た利根里は、

利根里「ヤ、何うした。豪く遲く遣つて來たではないか。」

太郎「はい。併し未だ九時を二十分過ぎたばかりでございますから、實は未だ

お目に掛つても可からうかと存じまして。」

利根里「何ぢや。九時二十分！」

と思はず時計の方へ振返つて

利根里「那樣事はない筈だが…………。」

太郎「併し、御覽の通りで。」

利根里「むゝ、全くだ。はて、俺はずつと遲いと思つて居つたが、いやそれは兎に角、お前の用といふのは何ぢや。」

太郎は其處で差當つて皇后陛下に就いて、自分の聞いた事情を事長く話出した。今度大法主の、春木公爵に對して遣つた謀計などを聞いた通り仔細に話して、此際皇后陛下の御身の上に、何事かあらせられねば可いがといふ事を、如何にもそればかりで態々來たやうに落着いて談話した。利根里は前にも云つた通り、近く宮中で兩陛下と大法主の樣子に、何か變つた事があるのを認めて居た折であるから、まんまと乘せられて充分に耳を傾けた。

時計が丁度十時を打つた時、太郎は暇を告げて立上つた。利根里は能く知ら

せてくれたと云つて却つて勞を犒ひ、尙又兩陛下に奉仕の道を怠るなと言含めて同じく座を立つた。太郎は辭してやがて出て來た廊下の途中で、

太郎「仕舞つた。つい手巾を忘れて來た。」

とばかり一人取つて返して、今の室へ入ると共に、戾した時計の針をぐるりと元へ人知れず其時刻に直して、素早く室を出て歸つて行つた。

（四十二）忍び姿

やがて邸の門を跡に、太郎は再び表へ出ると、見るから捗取らぬ足付で、物思はしげに、遲々として家路を辿つて行つた。

太郎は今、其情の火の燃立つやうな胸に、お小夜の事を只思つて居る。若い婦人といふ事は當時の見習ひ銃士には、全く空想の的である。只其人の美しいといふばかりでなく、お小夜の今の地位が、人の憐みを惹くのに既に充分だ。確固とした道念などの殊に等閑にされて居る時世に、血の氣の多い太郎が何で一人跡に引込んで居られやう。

思はぬ機會に、思寄らず身を投じて、太郎は戀の擒となつた。途々も只其事のみで、上の空に歸つて來たが、不圖氣が付くと、いつの間にか荒見の家のつい傍へ來て居た。太郎は忽ち、先刻勘三を使ひに遣つた事を思出して、其時若し、荒見が家に居合せたら、勿論直に駈付けて來たらう。處が太郎は家に居らず、同時に飛込んで來た阿蘇大曾で、譯が解らず只顏を見合せた事だらう。兎も角

逢つて、樣子を一つ話して來やう。とばかり太郎は、其儘家の方へ足を向けた。何心なく歩を運んで、家の脇手へ近く差掛つた途端、向ふを透すと、自分の直ぐ前を何か忍び姿の、外套やうの物に身を包んで行く人の影が見える。最初は男かと思つたが、よく／＼見ると、身體の小柄な處から、歩き態の樣子などで、確かに年の若い女といふ事が解つた。

太郎は思はず足を止めて、竊かに樣子を見て居ると、女は何か家を探しかねて居るやうに、四邊を見廻し、少しばかり跡戻りして、又元へ返つて行つた。

太郎「はてな、何者だらう。此夜更けに、忍び姿で、若い女が只うろ／＼して居る譯はない　家が分らないで困つて居る樣子だが、俺は始終來るから此處等はよく知つて居る。行つて一つ教へて遣らうか。併し何うやら譯のある樣子、うつかり聲を掛けたら却つて困るだらう。」

女は其間も、しきりに前の、家の數窓の數などを、一ツ／＼數へながら、やがて何やら首肯いたらしく、衝と荒見の家の傍へ進んで行つた。

太郎「ヤッ、荒見の家だ。むゝ、妙だわい。例の神學先生の姪とか云つた彼女だ、

彼女に違ひない。はゝゝ、荒見、いくら最う隱しても駄目だぞ。はゝゝ、思掛けない拾ひ物だ。どれ、其姪御の正體を見屆けて遣らう。」

と暗い方へ身を忍ばせて、面白づくに、目離しもせず其方を見詰めて居た。

すると女は、ひた〳〵と家の窓の下へ立寄ると、清い、爽やかな聲で一つ咳拂ひをした。

太郎「ほう、合圖をしたな。」

と太郎は更に好奇の眼を睜つた。女は勿論それとも知らず、やがて柔婉かな手を擧げてほと〳〵と窓の戸を、輕く指の先で三度ばかり叩いた。

(四十三)　其半巾

太郎「フム、却々味を遣るわい。　荒見の化の皮は、これで半分最う剝げて來た。へん、飛んだ神學研究ぢやないか。」

同時に其窓の障子が竊と開いた。　雨戸の隙間を洩れて、ぱつと射した燈火の影。

太郎「ヤ、窓から忍込ませるのか。　むゝ、合圖の通じて居る處を見ると、前から約束のあつた會合だな。　蓄生、荒見は待つて居たと見える。　フム、窓がすいと開く、女は懸梯子で乘込んで行く。　ヤ、恐ろしいお手際だ。」

處が大違ひ、窓は其儘開かぬ、のみならず、今迄射して居た火光は、不意に失くなつて了つて、其處等は元の通りの暗になつた。　太郎は併し、長く此儘で居はしまいと思つたので、尚も動かず、暗の中に眼を睜り、思ふさまに聞耳を立つて居た。

果して、暫くすると、中から鋭く二度、戸を叩く音が聞えた。　外の女は直に一つ、

外から丁と叩いて合圖をした。すると間もなく、窓の戸が少しばかり開いた。

太郎「さア、いよ／＼幕が明いて來たぞ。荒見め、甚麽顏をするか、いや全く觀物だわい。」

空の星明りを憑りに、太郎は尙も瞬きもせず見て居ると、外の彼の若い婦人は、やがて袂から何か白い物を出して手早く持ちながら擴げた。見ると何うやら手巾のやうな物。女は其隈の處を出して窓の中へ見せた。

手巾、と思ふと同時に、太郎は先刻、お小夜の足元に落ちて居た手巾を思出した。それと共に、いつか荒見の落した彼の手巾を思出した。而も双方、正しく同じの隅の記號、今も現に、外の女は其隅を出して見せて居る。

太郎「何でも仔細のある事だらうが、俺には一向解らんわ。全體彼の手巾に何の譯があるのだらう。」

太郎は伸上つたが、中の燈火は他の室へ持つて行つてあるので、暗くて能くは解らぬ、それに今太郎の居る場所が、正中に窓を見られぬ處なので、太郎は全で、中の荒見の姿を見る事が出來なかつた。動いて氣取られてはと思つたが、慄

へられず、今しも其手巾に、二人氣を取られて居る隙を窺つて、竊と隠れて居る場所から忍出して、さながら稲妻のやうに、勿論足音を充分に注意して、場所を替へてずッと近く、奥まで中を窺込まれる小脇へ、衝と身を忍ばした。

太郎「占めたぞ。全で氣が付かずに居る。此處からは眞ッ正面だ。」

とばかり顔を振向けた途端、事の意外に、太郎は驚いて最少しで聲を出さうとした。中に居るのは荒見ではない。從僕の純藏でもない。矢張女であつた。

太郎「何だ。何うしたといふ譯だ。荒見の家に女が居る、外から女が忍んで來る、女と女、何の事だ。薩張合點が行かんわ。」

太郎は更に瞳を凝したが、室は暗いので、顔は能くは解らず、朧げに只、女の姿が見えるばかりである。

途端に中の女は、自分の袂から別に手巾を出して、外の女の今出したのと取替へた。それから兩女、ひそ〳〵聲で何か互ひに話合つて居た。それが濟むと共に、窓の戸は元の通りに閉つて了つた。外の女は、其儘踵を返して、太郎の忍んで居る直ぐ前を、それとも知らず通つて行つた。夜目ではあるが星明りに、

太郎は確と見て取つた。女はお小夜であつた。

(四十四)　疑問

お小夜！若しや彼女かといふ疑ひは、最初お小夜が袂から手巾を出した時既に、太郎の胸に起つたのであるが、併しそれにしても再び宮中へ歸つて行く爲に、堀江を頼んで連れて行つて貰ふ筈であつたお小夜が、何の爲に此巴黎の町を、夜の十一時過ぎにもなつて彷徨つて居るのであらう。而も其身には又も敵に誘拐されやうといふ危險が充分にあるのに、何で大膽に這麼處へ現はれて來たのだらう。

であるから、無論何か身に付いて重要な事があつて出て來たのに違ひない。併し未だ二十四五の、若い美しい婦人に、何が一番重要な事件だらう。此深更に、危險を冒して來る程の、大切の事といふのは何であらう。言ふまでもなく戀だ。

と思ふと既、むら〳〵と起る嫉妬の念に、太郎は殆ど身を制し切れぬ程であつたが、併し未だ事の眞相を見極めたのではないので、これから何處へ行つて何

うするのかと、其儘お小夜の後を跟けた。

お小夜はそれまで、少しも氣が付かずに居たが、不意に脇から若い男の影が現はれて、跡からひた／＼と跟けて來たのを見ると、はッとした態で、忍ぶ身ながら、思はず小さな叫び聲を立てゝ、矢庭に向ふへ逃げて行つた。

太郎は直に後を追つて行つた。命掛けでも女の足、殊更外套に包括つて居るのだから、瞬く中に追付かれた。お小夜は恐ろしさの餘り、足より先に力盡きて、追付くと同時に背後から、太郎が肩に手を掛けた時は、あッと一聲、がくりと膝を折つて、

小夜「殺して下さい寧そ、こ……殺して下さいまし。」

太郎は急がはしく、倒れやうとするお小夜を引起した。可哀相に、お小夜は最う氣絶しかけて居た。ぐたりとした身體の重みを腕に覺えて、太郎は更に慌てゝ、

太郎「私だ。お小夜さん、何うしたのです。お案じなさるな。有田です。私ですよ。確かりなさい。何うしたのです。」

小夜「えゝッ、有田さん！」
意外の其人の聲に、既これまでと思つて居たお小夜は、吃驚してはッと眼を見開くと、紛れもない先刻自分を助けてくれた人、見るから俄かに力付いて、さも喜ばしげに、
小夜「おゝ、貴方、あの貴方でしたかまア。本當に、甚麼に私は恐かつたでしやう。全く、何うしたら可いかと思ひました。」
と胸を押撫でゝ漸くに氣を落着けた。太郎も今更氣の毒さうに、
太郎「ヤ、思はん事で、飛んだ目に遇はせましたね。併し貴女は、何で又今時分、這麼處へお出なすつたのです。」
小夜「はい、それは…………。」
太郎「第一、貴女の身の危ないのをも全で構はんで。」
小夜「はい。貴方はそれを、お聞きなさらなければならないのですか。」
太郎「然うです。聞かねば濟まん事があるのです。」
小夜「まア、何うしましやう。全體貴方は又何うして此處へ……。貴方は初め

から私を跟けて居らしつたのですか。」

太郎「イヤ全く思掛けない事でお目に掛つたのです。私は今、私の友達の家の窓を、貴方が叩いて居るのを見たのです。」

小夜「え、何と仰有います。貴方のお友達の家？」

太郎は思はずお小夜の顔を打目戍つた。

太郎「勿論荒見は、私の親友の一人です。」

（四十五）有乎無乎

思ひの外に、お小夜は却つて不審の面持、

小夜「え、何でございます、其荒見さんと仰有るのは。」

太郎は聞きも敢へず、

太郎「お恍けなさるな。貴女が荒見を知らないとは云はせない。」

小夜「あれ那麼荒見さんとかいふお名前は、今初めて伺ひました位、何で知りやうが有りましやう。」

太郎「併し現に、貴女は荒見の家へ行つたではありませんか。」

小夜「へえ、では今私の参りました家が…………。」

太郎「然うです。今云つた親友の家。」

小夜「まア。」

太郎は更に言葉を替へて、

太郎「では貴女先刻の家へ、今夜初めて行つたのですか。」

小夜「はい、初めてゞ。」

太郎「むゝ、彼處の主人の、若い男だといふ事も知らないで。」

小夜「はい。」

太郎「近衞の銃士といふ事も。」

小夜「はい、何も。」

太郎「それぢや貴女の逢ひに行つたのは、彼の荒見ではないのですね。」

小夜「はい、勿論那樣お方ではありません。貴方も御覽になつたでしやうが、彼の時私と談話をしたのは、殿方ではありません。」

太郎「むゝ、それは私も知つて居ます。併し彼の女は、何でも荒見の懇意の者に違ひない。」

小夜「私は些少も知りませんので。」

太郎「何しろ如彼して、全で自分の家のやうにして居たのだから。」

小夜「でもそれは、私の存じた事ではありません。」

太郎「だが何者です、彼の女は。」

小夜「さア、それは……。」
太郎「貴女も談話をして居た位だから、勿論知らない事はないでしやう。」
小夜「でもそれは、人樣の秘密の事ですもの…………。」
太郎「お小夜さん、貴女は實に不思議な人だ。」
お小夜は其時、ひたと寄つて理なげに、
小夜「貴方、私お願ひがございますが、」
太郎は直ちに、
太郎「何ですか。貴女の願ひなら何でも聞きませう。」
小夜「はい。有難うございます。貴方のお力をお借申します。御存じの通り危ない途中、今私の參ります處まで何うぞ御一處にお出なすつて下さいませんか。」
太郎「易い事です。何處へでも行きませう。處で那邊へお出なさる。」
小夜「これから或家へ參るのですが、貴方何うぞ其門口まで。」
太郎「承知しました。確かに送届けて上げます。歸りをも待つて居て上げよ

しやう。」

小夜「いゝえ、それには及びません。」

太郎「では貴方一人で歸るのですか。」

太郎「それは向ふへ參りました都合で、何方になるか未だ分りません。」

小夜「えゝ、では歸りに伴れになる人は、男ですかそれとも女ですか。」

小夜「サアそれは私も存じません。」

太郎「私は待つて居て見屆けます。」

小夜「あれ、それでは此處で、お別申すより外仕方はありません。」

太郎「ヤ、最一つ私に返事して下さい。今貴方のお出なさるのに自分の用ではないでしやうね。」

小夜「然うです。仰有る通りで。」

太郎「では貴女の云ふ通りにしませう。」

小夜「それなら屹度、其門口で歸つて下さいますね。」

太郎「はア、必ず。」

小夜「では何うぞお連れなすつて。」

二人は其儘に伴立つて、やがてお小夜の指す方へ、歩み出した。

（四十六）心々

途中幸ひに事もなく二人は軈て伴立つて古輪町へ入つて來た。お小夜は其處へ來ると、前の荒見の家と同じやうに尋ねる先を探すのに暫く手間を取つたが、何か目印を見付け出すと其儘、只有る家の前に立つて、

小夜「おゝ、此處でございます。有難うございました。貴方御禮の申樣もありません。お蔭樣で無事に此處まで參る事が出來ました。ではお約束通り、此處でお別申します。」

太郎「併し貴女歸りに少しも氣遣ふ事はありませんか。」

小夜「はい、此家で用を濟して了へは、私最う、物奪の外恐れるものはありません。」

太郎「ですがそれは何でもないですか。」

小夜「でも何も、奪られるやうな物もありませんから。」

太郎「併し其の符號の付いた奇麗な手巾は？」

小夜「え、手巾とは？」

太郎「先刻お宅で、貴女の足下に落ちて居たのを拾つて袂へ入れて上げたあの手巾です。」

小夜「あッ、何うぞお靜かに。うッかりした事を仰有つて下さいますな。若し聞かれましたらそれこそ大變で………。」

太郎「それ、其通りだ。只つた一言で貴女は度は失つて了ふ。まだ〳〵危ない貴方の身の上ではありませんか。聞かれたら大變だと言ひましたね、貴女、」と見詰めて更に熱心らしく、

太郎「貴女最少私を信用して下さい。私の心が貴女には未だ了解めませんか何故事情を聞かせては下さらん。」

小夜「はい、貴女の御深切は身に染みて能く解つて居ります。先刻も申しましたがこれが私の事なら何も彼もお話申して了ひましやうが、何に致せ人樣の事、口を切る事は全く出來ません。」

太郎「宜しい。それでは強ひてお聞申しますまい。自分で見付けて了ひます貴女の身に關はつた大切な事を私には打捨てゝは置かれません。陰ながら

も貴女を助けましやう。」

お小夜は聞くと共に吃驚したやうな樣子であつたが、見上げて思入つた聲音に、

小夜「貴方、本當に私なぞの爲に、うツかりした事をなさいますな。お身を大切とお思ひなすつたら決して此中へお入りなさいますな。此上最う、私を助けやうなどゝは決してなさいますな。貴方のお身の爲に申すのでございますお願ひでございますから、何うぞ然うなすつて下さいまし。貴方私は貴方には何でもない身ではありませんか。危ない御酔興は本當にお止しなさいまし。」

太郎はさも不快らしく、

太郎「むゝ、矢張荒見でなくては可けないのでしやう。」

小夜「あれ、本當に何を取違へて居らつしやるのです。貴方は幾度まア其、荒見さんとか云ふ方の事を仰有るのでしやう。私は那様方を存じませんと、あれほど貴方に申したではありませんか。」

太郎「いや、又云ふやうですが、現在荒見の家へ行きながら全で知らないといふ筈が有りましやうか。餘り人を嘗過た談話。」

小夜「解りました。貴方私に譯を云はせやうとして那樣有りもしない人をお拵へなすつたのですね。」

太郎「馬鹿な、那樣詰らぬ眞似を誰がしましやう。貴女の行つた家は私の親友の荒見の家に相違ないのです。」

お小夜は押返して、

小夜「それなら屹度後になれば解る事です。默つて暫くの間見て居らつしやい。」

（四十七）わかれ

太郎は又もお小夜の顔を打目戍つたが、其儘吐息ついて、

太郎「あゝ、若し貴女が、少しでも私の心を知つてくれたら那樣隱し立てはなさるまいに。私が何れほど貴女を思つて居るか、貴女は全で知りさうにもしない。」

お小夜は微笑みながら、

小夜「まア、いくらお氣が早いと云つて、先刻の今で、最う那樣事を仰有るのですか。」

太郎「恁ういふ事に長い短いが有りましやうか、然も私には全く不意に來たのです。生れてこれが初めてなので、最う跡先を考へて居るやうな暇はないのです。私は未だ廿歲ですもの。」

とさも思入つた聲音で、云つた。お小夜は其顏をちらと見たが、直に俯向いて暫く默つて佇立んで、居た。太郎は重ねて、

太郎「それにしても私の氣遣ひでならんのは、貴女の持つて居る手巾です。惡くして又捕まつて其手巾を押へられたら………。」

小夜「あれッ、又其事を。先刻も那麼に申しましたに、何故然う輕々しくお口に出して下さるのです。あゝ私の事と申したゞけでは貴方は身をお引きなさいませんから申しますが、貴方御自分の身の危ないのを少しお考へなさいまし。」

太郎「フム私の身が‥

小夜「はい、私を御存じと云ふだけで、品に依つたら、入獄もなさいましやうし御一命にも關はる事にも、ならぬとは申せれませぬ。」

太郎「むゝ、其氣遣ひでお止めなさるなら私は此處で別れません。」

お小夜は思餘つて、さながら身を投掛けるやうに、

小夜「もし、貴方、後生でございます。何うぞお願ひでございますから何うぞ、何も仰有らず此儘お歸りなすつて下さいまし。あれ、あれ今打つて居ます十二時の鐘、この家へ參ります約束の時間でございます。」

云はれて太郎は詮なげに、

太郎「いや、私は貴女に那樣にまで云はれて、其上達てといふ譯には行きませぬ御安心なさい、お望み通り歸りましやう。」

小夜「本當に、最う何も私の此後の事を御覽なさらずに、」

太郎「御念には及びません。私は直に歸ります。」

小夜「全く貴方には濟みません。折角御親切に仰有つて下さいますのを、沒義道に申すやうではございますが、御禮はいづれ事を分けて申す折もございましやう。ではこれでお別れ申します。」

太郎「是非がありません。見す〳〵此儘には行かれませんが、達て仰有る事だから行きましやう。では、」

とばかり會釋して行かうとして、故を知ず躊躇ふやうに離れがたなの姿を見せたが、

太郎「あゝ、私は全で貴女に逢はなかつたら、恁うした思ひをする事はなかつたらうに。」

と我にもあらず呟いた。お小夜は振返して、

小夜「貴方今夜に限つた事はありません。縁と時節でございますわね。」

太郎「併し今夜の事は覺えて居て下さるでしやうね。」

小夜「仰有らずとも。」

太郎「では、」

小夜「御機嫌よう。」

と引別れると、少時も置かず、お小夜は直に戸口へ寄つて、荒見の時と同じやうに續けて三度、靜かに門を打叩いた。太郎は心ならず立別れて路の角に振返ると、颯と門口が開いて直に閉つて、お小夜の美しい姿は、時の間に消えて失くなつた。

（四十八）　ナニッ、阿蘇が。

歸ると言つて、既に口に番つたので、太郎は再び見も返らず、衢と路を折れて眞直に宿へ歸つて行つて。細谷町の自分の家は最う直ぐ其處で物の十分と經たぬ中に太郎は既門へ近く來た。

太郎「むゝ、阿蘇は何うして居るだらうな。勘三の使て利根里の邸から、直に驅付けて來てくれたらうが、家は空虚だ。何が何だか、薩張譯が分らなかつたらう。俺を待ち疲れて寢て居るか、でなくば宿へ歸つて了つたらうが、歸ると留守に女が來て居たといふ、思ひも寄らぬ事實が起つて居る。阿蘇の家に女といふのだから實際奇觀だ。ヤ、女といへば荒見の宿にも確かに一人居た。いや全く不思議だわい。結局何ういふ事になるのか跡の始末が早く知りたいな。」

とやがて中へ入つて行くと、逸早く姿を認めたと見えて慌たゞしく勘三が飛出して來た。

勘三「可けません、旦那樣可けません。」
太郎「何だ。何うしたのだ。」
勘三「と……飛んだ事で。」
太郎「むゝ、何事が起つたのだ。」
勘三「はい。何より先に、彼の阿蘇樣が勾引されました。」
太郎「ナニ勾引された。阿蘇が勾引されたと。むゝ何うして。」
勘三「はい。先刻お使に參りますと、阿蘇樣は直に來て下さいましたが貴方がお出ならぬので、室に待受けて居られます最中どや〳〵と踏込んで來ました警邏の者共詰り阿蘇樣を貴方と思込んで召捕りましたので、」
太郎「むゝ、併し阿蘇は、何で其時自分の名を云はなかつたのだ。何故又警邏の奴等に向つて、自分は何も事情を知らん者だ。無禮な事をするなと有りの儘に抗辯をせんかつたのだ。」
勘三「それが阿蘇樣は、態と何事も仰有らず默つて引かれてお出なすつたので其前に內密で私に何にせい今貴樣の主人の身體を自由に明けて置いて遣ら

ねばならぬ。今度の事を俺は何も知らぬし、有田は又何でも知つて居る。今入用なのは有田の身體だ。警吏め有田を捕まへた積りで氣をゆるして居る間に、存分仕事を遣つて置けと有田に云へ。俺は身代りに何處までも有田の態で默つてこれから連れられて行く。三日過ぎたら俺は初めて口を切つて俺が何者だといふ事を知らせて遣る、そして仔細なく歸つて來るは。忘れずに此事を有田に云へ。」と耳打ちをなすつてお出なさいました。」

太郎「豪い。阿蘇ッ。僕は深く感謝する。むゝ勘三、して警邏の奴等はそれから何うしたな。」

勘三「はい、四人の衛士は直に阿蘇様を引いて參りました。それからが又騒ぎでございます　跡に殘つた衛士共邏卒共は手分けをして、二人は戸口を見張つて居りますと、跡の者は隅から隅まで嚴重な家探しを初めまして、書類は一つ殘らず差押へました。稍暫くの間家中を荒らし盡して漸く檢めて了ひますと全で大風の吹いた跡のやうに、家を開ッ放しにして皆出て行つて了ひました。」

太郎「して大曾や荒見は何うした。」
勘三「生憎お二人ともお留守で、してお目に掛る事が出來ませんでした。」
太郎「フム、併し俺の吩咐は留守に云殘して來たらうな。」
勘三「はい、それは確と傳へまして。」
太郎「むゝ、」
とばかり太郎は、首肯いて又何をか言掛けた。

（四十九）正しく二人

太郎「よしそれぢや、貴様は此處を動かずに居ろ。跡から大曾や荒見が來たら穗室の例の密會所へ行つて、俺を待つて居てくれろと云へ。家は最う監視られて居るから、此處へ集るのは危險だ。俺はこれから、急いで、利根里閣下の處へ行つて閣下に事情を話した上で、直に其處へ出掛けるから。」

勘三「はい畏まりました。お出になりましたら其通りに申します。」

太郎「むゝ、では確かり留守をして居れ。」

と言捨てゝ直に行掛けたが、いや俺よりも年下の勘三、一言勵まして置かなくてはと、

太郎「併し貴様恐れて居るやうな事はなからうな。」

勘三は聞きもあへず、勢込んで、

勘三「えい、何の。勘三も旦那樣の家來でござります。これしきの事を恐がる樣で、此面が曝せませうか。」

太郎「むゝ、能く云つた、勘三。縦令留守に何事が起らうとも、貴樣決して此處を動くまいぞ。」

勘三「心得ました。たとへ何のやうな事になりましても、旦那樣の吩咐を背くやうな勘三ではござりませぬ。」

太郎「おう、そんなら勘三、」

勘三「旦那樣、」

太郎「むゝ、頼んだぞ。」

と言葉を跡に、急がはしく再び利根里の邸へと疲れた足を取直して、一本道に濶歩して行つた。

處が利根里は生憎留守、宮城守護に部下の者が、宿直の御番で行つて居るので、利根里も今詰めて居るとの事。

何は然れ阿蘇の事があるので、何うでも利根里に逢つて置ねばならぬ。太郎はそこで、進んで宮城へ行かうと思つた。

ちよツ、何彼と事の多い晩だ。とばかり又も邸を出で、宮城指して急いで行く

途中、大川端を、丁ど源吾町へ差懸つた頃、不圖目を擧げて向ふを見ると、折しも彼方の脇道から、立現はれた二人の男女、歩き態から脊恰好から、女はお小夜を生の儘、男は又何う見ても、紛れもない荒見の姿。

女は然も、先刻太郎が扇町の、荒見の軒下で見た通りの、お小夜の服裝に少しも違はぬ。あれから古輪町まで一處に來て、其處で別れたつい先の俤は、まざまざと未だ目に殘つて居る。何うして其の姿を見違へやう。

それのみならず、男は正しく、銃士の正服を着けて居るではないか。

女の方は、冠つて居る頭巾を目深に男は手巾を顏に押當てゝ、云はずと知れた、人目を忍んで伴立つて行く樣子。

二人は橋の袂へ掛つた。丁ど太郎の御所へ行く道、太郎は幸ひと跟いて行つた。

十間ばかり、知られぬやうに足早に近づいて、よく……視ると女は果してお小夜、男は確かに荒見であつた。

見る〳〵太郎の目は輝いた。お小夜はあれほども繰返して、少しも荒見を知

らぬと云つた、其舌の根の乾かぬ中に、ぬけ〳〵荒見に引添つて其處を歩いて居るとは。

太郎は最う、目も眩むばかりになつて居る。お小夜を知つてから未だ三時間しか經たぬ事で、危い其場を助けて遣つた外に未だ何の約束をしたのではないといふ事などは、全で考へもしなかつた。身はさん〳〵に踏付けにされ、好んで物嗤ひの的になつたやうに思つて、見るから颯と色を變へて、容赦もなく二人に迫つて行つた。

(五十)　仁王立

先の二人は忍ぶ身の、跡から跟ける者があると悟つて、俄かに足を早め出した。太郎は見るよりつか〳〵と、矢庭に二人を追拔いて、取つて返して橋の半ば、四邊を照らず點燈の、影の隈ない其下で、二人の前に仁王立に突立つた。二人も思はず立止つたが、男は後へ一足退つて、

男「見知らぬ御方、何の御用。」

と明かに外國訛りの、今迄一度も聞いた事のない聲、

太郎「ヤツ荒見ではなかつたか。」

彼方はそれと見て取つて

男「はゝア人違ひか。それならば仔細はない。許すからお退きなさい。」

當の荒見でなかつたので、太郎は一時矢先を折られたが、中に燃え立つ嫉ましさは、固より少しも去らうとはせぬ。聞くより早く眼に角立てゝ、

太郎「ナニツ、許すから退けい」

男「左様。準繩にお通しなさい。此身に何の用は無い筈。」
太郎「むゝ、貴下にこそ用はないが、伴れの御婦人、其婦人に云ふ事がある。」
男「いや、此女は貴下の存じて居るやうな…………。」
太郎「いゝや知つて居る。能く知つて居るのだ。」
お小夜は稍腹立たしげに、
小夜「貴方、貴方は決して私の跡を跟けぬと仰有つた先刻の御挨拶をお忘れなすつたか。武士のお言葉に僞りが、よもやあらうとは思ひませぬが…………。」
太郎「むゝ、ナニ今宮城へ急いで行く途中、此處で遇つたのは天命だ。」
小夜「あれ仰山な何が天命。そして貴方、何で又私の行くのをお止めなさる。」
太郎「いや、貴方は私に…………。」
と流石少し、挨拶に困つて逡巡いだ。伴れの男はもどかしさうに、
男「これ、構はんで行かうでないか。」
云ひさま前へ押進んだ。太郎は併しきかぬ氣の、飽まで路を讓らうとせず、事の不首尾に焦立つばかり、行手を遮つて突立つて居た。男は構はず衝と進ん

で物をも云はず、片手に太郎を押除けた。

太郎「な、何をするッ。」

いふより早く、太郎は一足、颯と背後へ飛退くと共に、矢庭に佩劍の鞘を拂つた。

男「ナニッ、

とばかり此方も忽ち、見るより柄に手を掛けると、同時に閃りと拔合せた。

お小夜ははッと、慌たゞしく白刄の中へ、我を忘れて割て入つて、

小夜「あれッ、何事でございます。御前ッ、時と場合をお考へ遊ばして、お願ひでございます何うぞお刀を………。」

太郎「ナニッ、御前ッ。」

と太郎は矢庭に、目の覺めたやうに、

太郎「ヤ、暫く。若しや貴方は………。」

お小夜は小聲に急がはしく、

小夜「春木公爵であらせられます。まア、卒爾なされば飛んだ事に………。」

太郎「ヤヽ、」

と聞くよりはツと劍を逆手に、太郎は跡へ飛退つた。

（五十一）護衞

さては、とさながら電のやうに、お小夜が夜を冒し危險を冒して、彷徨ひ歩いた不思議の擧動を、早くも胸に讀分けた太郎は、同時に急がはしく公爵に、

太郎「それとは夢にも存じませず、申す樣なき御無禮の段、平に御容赦を願まする。戀に亂れた心から、嫉妬の餘りの今の所行、情けの道に疎からぬ閣下の事御諒察下し置かれまするやう。公爵、此上は身の償罪、閣下の爲に一命を抛つても惜みませぬ、何なりとも御用を仰付け下さりませい。」

云はれて公爵は快よげに、

公爵「おゝ、勇ましい男ぢやの。ヤ、折角の挨拶ぢや。辭義なしに好意を受けやう。今これから宮城へ行くまで跡から護衞の事を宜しく賴む。若し我々を跟けて來るやうなものがあつたら、容赦なく斬つて捨てい。」

太郎「はッ、何よりも容易い事。」

と少しも遲疑せず、公爵お小夜を先に立てて、二十歩跡に太郎は其儘、白刄をひ

たと袖の下に油斷せぬ眼を八方に配つて、今英國に比肩するものもない、高貴の風流宰相を護衛しつゝ、やがて宮城へと歩を進めた。

幸ひにして途中一度も刀を試す機にも會はず、無事に宮城へ辿着いて、若い女と華やかな銃士は、打伴れて陽成門から入つて行つた。

太郎は役目を果すと共に、二人に別れて宿直寮の、利根里の方へ直に廻つて、取敢へず阿蘇が捕へられた事情を話し、何うか本人に過ちのないやう、閣下の御助力を願はう爲に參りましたと云つた。利根里は聞いて事もなげに、ナニ元が人違ひだ。仔細はない。機を見て俺が可いやうにするから、安心して居れとの挨拶を受けて、太郎は一肩卸した心地、何分宜しく願ひまする。とやがて利根里の前を辭して、大曾荒見に約束した穗室の密會所へと歩を轉じた。

行く〳〵大曾が欠伸たら〳〵、一人先刻から待倦んで居た處、太郎の顏を見ると共に、

大曾「ヤ、何うした。えらく待たせるではないか。俺は最う歸らうかと思つて居た處だ。」

太郎「ヤ、氣の毒だつた。實は恁ういふ譯で、」
と勘三を使に遣つた事から、ざつと今までの顛末を話して、
太郎「と云ふので此處へ來て貰ふ事にしただが、ヽ、時に荒見は何うしたのだらう。先刻勘三が行つた時は留守だといふ事だつたが、此處へ來ん處を見ると未だ歸つて來んのかな。君は荒見の行つた先を知つて居らんか。」
大曾「一向に知らん。奴兎角に秘密の多い男で、妙に跡を隱したがるからな。」
太郎「はて、」
と太郎は又、先刻宿に居た婦人の事を思合せて、暫し小首を傾けた。
大曾「して、これから何うしやうといふのだ。」
太郎「さア、これから事が何うなつて行くか知らんが、阿蘇の方は利根里閣下に頼んで置いたから、先づ安心して可いとして、明日からの雲行きを見て掛るのだ。
今夜は萬一を思つて來て貰つたが、一先づ事は濟んだから、後の手筈を決めて置て、樣子次第といふ事にしやう。」

と大曾の秘密を守れぬのを知て居るから、やんごとなき上の大事と見た公爵の事は云はなかつた、二人はそこで、充分後の打合せをして、荒見は到頭來なかつたので、やがて袂を分つて歸つた。

此處で暫く、太郎の方を其儘にして置いて、話頭を今宮中へ入込んだ、お小夜と公爵の上に進めやう。

（五十一）暗の二人

お小夜と公爵とは、前に云つた通り陽成門から、何の障りもなく宮城へ入る事が出來た。お小夜は皇后陛下のお手許の者として、疾うから顏を知られて居るし、公爵は又、當夜御番に出て居た利根里配下の、銃士の服を身に着けて居たのみならず當番の守衞は、かねてから皇后陛下に心を寄せて居る者であつた。罷違つて、若し又何か起つたにせよ、お小夜が只、宮中へ自分の戀人を引入れたといふ罪に問はれるだけで、言ふまでもなく、お小夜の名譽は其爲に散々になつて了ふであらうが、お小夜も勿論其位の事は覺悟して居る。併し高が、呉服屋の青女房の名譽と、言つた處で何れほどのものだらう。お小夜はそれを犧牲にするのを躊躇する程の地位でもないのだ。

兎に角に、二人は安々と宮城へ入る事が出來た。案内知つたお小夜は先に、やがて奧深く進んで行つたが、御門の中を斜かひに、左手に見える御垣に添うて十間ばかり彼方へ行くと、其處に小門の影が見えた。かねて手筈がしてあつ

たか、お小夜が寄つて窃と押すと、錠は其前に外してあつたので、音もせず衝と向ふへ開いた。二人は其儘中へ入ると、彼方は眞暗で何も見えぬ。お小夜は併し、此處等の案内には馴切つて居るので、猶豫ふ色もなく、靜かに跡を閉切つて、此方へとばかり、公爵の手を執つて奥へ導いて行つた。

行くと間もなく、辿着いた御階の下、お小夜の跡に隨いて、夢心に公爵は登つて行つた。暫くして長廊下をしと〳〵と、左に折れ右に折れて、やがて只有る奥まつた室の前へ來ると、お小夜は用意の懷裏の鍵を取出して、扉を引開けて公爵を中へ引入れた。

小夜「御前暫く此處にお待下されませ。只今何方か見えますから。」

と云殘して室を出て、外から再び錠を掛けて、那處へか行つて了つた。

取殘された公爵は、僅かに一つ燈火が點いて居る中に唯一人、備への嚴重な宮城の奥、重圍の中に捕虜になつたやうな形で、然し少しも恐れたやうな色はなかつた。大膽不敵は公爵の資質、好んで險を冒し奇を求めては、やんごとなき身を輕々しく、かゝる事に命を危くしたのは、一度二度に止まらない。今度自

分を、此巴黎へ誘寄せた敵の謀計をも、公爵は最初から最う看破つて居た。それにも拘はらず、進んで敵の手に乘つて、大膽にも巴黎へ入つて來て、皇后陛下に拜謁を遂げぬ中は斷じて歸らぬ意志を通じた。皇后陛下も、初めは固く御聞入はなかつたが、併し然うして若し公爵を激して了へば、如何なる非常手段をも執りかねない公爵の事、是非なく御我を枉げさせられ、云はれるまゝに會つた上、直ぐさま巴黎を發つて歸るやう、御勸めあられやうといふ御心を決せられた。其晩の事である、お小夜が密使を承つて、竊かに公爵の許へ行く途中、運惡く敵の手に誘拐されて了つた。

二日の間、行衞も知れず、全で何うなつたのか解らなかつたので、事は其儘に滯つて居た。お小夜は併し其中に、首尾よく脱出す事が出來たので、直に堀江と謀合せて、再び危い使の役目を漸く此處に果したのであつた。

(五十三) 春木公爵

物ともない常の態に、公爵は軈て歩寄つて、室の姿見の前に立つた。假に扮装つた銃士の姿は、全く見惚れるばかりに好く似合つた。

公爵は今三十五、英佛切つての風流士で、然も又大英國の全權を、一手の中に掌握して居る。意として行はれざるなく、物として從はれぬものもない、殆んど架空的の人物のやうに、後の世にも驚かれて居るのである。

鏡の前に姿を整へ、今や首尾よく、思ふ儘に此宮庭に入込んで、久しい間の、此處に渇を醫さうといふ間際、心の影の穗に見えて、思はず面に現はれた途端、彼方の壁絨の蔭に隱れた扉が音もせず竊と開いて、不意に現はれた人の影、公爵は逸早く、鏡の中にそれと見て、おゝとばかりの叫び聲。見えたのは皇后陛下であつた。

固よりそれと仰がれ給へる、絶世の色は云はずもあれ、今しも何の飾りもなき、白の御衣の扮装の世に無きまでの神々しさ。數を盡して粧ひ給へる、いつも

に優して慥くばかりの御美しさを、初めて見奉つた公爵は、我にもあらず酔ふばかりに見えたが、陛下の二足はかり進ませられると共に、身を投掛けて御元に、陛下の遮らせ給ふ間もなく、御衣の端に接吻し参らせた。

皇后「公爵、貴方に手紙を上げた者は妾ではないといふ事を、貴方は疾うに御承知でしやうね。」

公爵「勿論の事、一目にそれと看て取りました。併しそれが何でござりましやう。慥うして假令片時なりとも、近づき参らする折を得ました上は、無我に此地へ参りましたも、強ち徒勞ではござりませぬ。」

皇后「さりながら閣下、何で妾がお目に掛りましたか、それをも貴方は御存じでござりますか、妾が歎きをもお察しなく、いつまで巴黎にお出でなされて、お命づくの危い橋をお渡りなさるのを見て居られましやうか。それ故にこそ慥うして此處へ、劍の上を渡る思ひで貴方の前へ出て参りました。閣下、貴方と妾の中垣は何一つとして取除ける事の出來るものは有りませぬ、海を隔てた此處と其處、國と國との互ひの敵視、尚其上に動かし難い妾の地位、悶えて甲

甲斐ない身の上ではありませぬか。此上は最う二人は決して逢はぬ方が、互ひの爲と申す事を、貴方に申上げやう爲、態うしてお目に掛りましたので。」

公爵「ナニ決して逢はぬ方が？　ヤ、思切つた仰せ言、二人の仲は其やうな……。」

皇后「もし、閣下、御一存な事を仰有いますな。妾は是迄貴方に思を掛けたなどと申した事は一度もありませぬ。」

公爵「さりながら又、掛けぬと申された事もありませぬ。固より又さる事を、お口に出さるゝ御身の上ではござりませぬ。なれども通ふ心の奧、其の僞られぬ御胸にも此の春木をお否みあるとは、よもや仰せられますまい。お忘れありしか網矢の園にて……。」

皇后「あゝ閣下、彼の夜の事を何うぞ最う仰有つて下さいますな。」

と先の御樣子に似げもなく、颯と御顏を打赤められ、慌てゝ言葉を遮ぎられた。

公爵は押返して、

公爵「いや／＼仰せに背きまする。彼の夜の事が何として、申さいで居られましやうか。心に刻んで忘られぬ一夜。思出すさへ先づ胸が……。」

と見(み)るから面(おもて)は輝渡(かゞやきわた)つた。

（五十四）胸の奥

聲も心の音に深く、

公爵「既お覺えはござりませぬか。彼の夜は殊に心行く夜、そよ吹く風に花の香の、中に陛下と唯二人、あゝ彼の一刻、又と得られませぬ彼の一刻、春木は陛下と、唯二人ぎりになる事が出來ました。彼の時でござります、陛下、しみ〴〵陛下の御境遇、内に巣守の音を忍び、外に何の寄邊もない、憂きの限りを打明けて、今一息で此春木に仰有るばかりになつたのでござります。陛下は直と此腕に、正しく春木の此腕に寄縋られた彼の一時、夢見る心に近々と、其美しい髮の毛の、此頬先に觸れます度、覺えず總身を慄はせました。陛下、彼の一刻の心の中を、何に譬て申されましやう。春木の富も生涯も、名譽權力總て身に、有る限りの物を擲つても、彼の夜の一刻には替へられませぬ。あゝ、彼の夜こそ陛下も正しく此春木に御心を……。」

皇后「仰有る通り、彼の一夜は、時と言ひ、處と申し、場合さへ又彼のやうな場合、身

も心も溶け〳〵と、物にでも魅入られましたやうに、一時は何も覺えませぬまでになりましたが、はッとして直に正氣が付きました。心弱い女子は其時、身は此國の女王と直に心付きました。咄嗟閣下が、口をお開きなさらうとする途端、妾が其御返事を致さうとする間際に最う、妾は女王の身に返つて了ひました。」

公爵「全く、其通りでございます。餘人ならば其場合、彼の儘思絶えても了ひましやうが、此春木は金輪奈落、増りこそすれ此思を捨てる事は出來ませぬ。あれから巴黎へ還御の後、陛下は最早、羈絆を切つて了つたやうにも思召したでございましやう。此春木が輕々しからぬ身に替へても、再び思を染めやうとはせぬと思召したでございましやう、併し陛下、有りと有らゆる地上の榮華が、春木の身に何でございましやう。八日の後に私は立戻つて參りました。陛下は最早、何事をも仰有りませなんだ。僅かにお目通りを得やう爲に、命を冒して參りましたが、御手にさへ觸れる事もならず、打崩折れた御氣色を、たゞ一目見ましたばかり。」

皇后「其時こそ御承知の、聞くも、恐ろしい讒言に遇つて居りましたのでございます。國王陛下は大法主に思ふまゝに激せられて、以ての外の御逆鱗、瓜生夫人は放逐されます、小谷は容赦なく流罪になります、世良田夫人は無殘に斥けられて了ひます、尙其上に、貴方が公使として佛蘭西へ再びお出なされやうとした時陛下御自身、閣下、國王陛下御自身が反對をなされたではございませぬか。」

公爵「左樣、今や佛蘭西は其爲に、戰を開かねばならぬやうになりました。陛下そも〳〵何の目的で、春木は禮衞島の遠征を企て、婁攝の新敎徒に後援して、國と國との紛爭を引起さうとして居りますか。只陛下に心の儘、逢はう爲ばかりではございませぬか。勿論春木は此巴黎へ、劍を手にして踏込まうとは思ひませぬ。幾程もなく此戰は、平和の局を結びましやう。其折協議の衝に當る、我が英國の者はと言へば、春木の外にはございませぬ。其折こそは此春木が、巴黎へ來るを拒む事は出來ますまい。陛下、假令くしてまでも春木は重ねて、陛下に逢はうとして居る

のでござります。」

（五十五）夢合

公爵は更に語を繼いで、

公爵「勿論幾千の人の命は、此爲犧牲に供せられるでござりましやう。併し陛下に拜謁の望みを遂げられるに替へましたら、それほどの事が此春木に何でござりましやう。まこと春木は此やうな、狂氣沙汰の擧動までして……。」

皇后「閣下、閣下、空恐ろしい其やうな事を、妾の前でお聞かせなされまするな。」

公爵「あゝ、若し此胸の萬分一をも汲分けて下されましたら、申した事も御耳に、よく〱留めて下さりましやうに、御心なき冷やかな仰せ言。陛下、今申された世良田夫人、彼の夫人は陛下のやうに難なくはござりませなんだ。夫人は快よく世良田に、同じ心を見せたではござりませぬか。」

王妃は聞いて我にもあらず、

皇后「世良田夫人は皇后ではござりませぬ。」

公爵「ナニッ、それならば若し、陛下は今の御身の上でなくば、春木に御心を任せ

られますとな。先程からの冷やかな御振舞は、只其御身柄の故でござりまするか。陛下が若し世良田夫人なら或は此春木にも……。」

皇后「あれ、閣下、貴方は御考違ひをなされて御出なさります。妾は何も然うい ふ心で……。」

公爵「ヤ、何も仰有りまするな。春木が若し間違つて居りましたら、たゞ其儘に、せめて心ゆかしをさせて下されませ。陛下次第によれば此春木は、今度巴黎へ参りました爲に、何時敵の手に掛つて、命を落して了ふかも知れませぬ。異な事を申すやうでござりますが、春木は近い中に死ぬといふ、前知らせもござりますので。」

皇后「えゝッ、な…… 何と仰有います……。」

と驚立つてはッとばかり、見せじと堪へた御心の、一時に御面に現はれたも、忘れて聲と共に問出でられた。

公爵「いや申上げるも愚な事で、只其夢を見ましたばかり、別に心に掛けては居りませぬ。」

皇后「閣下、併し貴方、あの本當でござりますか。妾も不思議な貴方の夢を……。」

公爵「え、」

皇后「何れほど心を冷しましたらう。閣下、妾は閣下が紅に染つて仆れてお出遊ばす、夢をあり〳〵と見ましたので。」

公爵「此脇腹を小刀で深く刺された姿を……。若しや然うではござりませなんだか。」

皇后「えッ、何うしてそれを御存じで。そ、其通りでござりました。」

公爵「はゝ、心が通へばこそ同じ夢。陛下、今の其御樣子で、陛下のお心は能く解りました。此上春木は申す事はござりませぬ。」

王妃は最早、包むに餘る御思ひを其處に、

皇后「あゝ最う、閣下、何うぞ此身を不便と思召して、此儘お歸り下されませ。妾は閣下に、心を掛けて居りますか居りませぬか、其樣な事は存じませぬ。妾の存じて居りますのは、誓に背く事が出來ませぬ事ばかり。此身の上を何分にもお察し下されませ。貴方が若し、此佛蘭西で手に掛るやうな、若しお命を此

國で落すやうな事がありましたら、そして其事が、外ならぬ此妾の爲とありましたら、此氣が狂はいで何と致しましやう。 お願申します、閣下、何うぞ直にお歸下されませ。」

（五十六）紀念の小匳

公爵は目も離さず、

公爵「あゝ、陛下の其御美しさは……。」

皇后「閣下、閣下、それよりも妾の願、閣下の御身が大切でございます。何うぞ此場を一時も早う、御無事に御國へお歸りなされて、大使としてなり公使としてなり、御家臣初め護衛の者に、嚴しく御身を護らせて、再びお越しなされませ。妾も其上は安心して、心のまゝに御目もじもなりまする譯、其折積る胸の中をも……。」

公爵「え、そりや眞實でござりましやうな。」

皇后「何しに僞りを申しましやう。」

公爵「さらば何か御紀念に、親しく御身に添ひました物を此身に着けて忍びますやう、何なりとも賜はりませい。」

皇后「そしたら閣下は、直にお歸りなされますか。」

公爵「は、御念には及びませぬ。」

皇后「勿論暫しも御猶豫なく御國へお歸りでございませうね。」

公爵「御安心なされませい。お誓申します。」

皇后「では暫くお待ちなされませ。」

と其儘御身を返して、元の扉口から出て行かれたが、軈て御手に金高蒔繪の御紋散し、中には何が入つて居るのか、見事な小函を持添へて、さも急がはしく歸つて來られた。

皇后「閣下。では御望みに任せましてこれを妾の紀念までに……。」

とばかり賜はつた小函を受けて、公爵は又再び御前に跪づいた。

皇后「閣下、此上は願ひました通り。」

公爵「直さまこれから立歸ります。陛下御手を、」

未だ御心のときめきを、さながら隱す由もなく王妃は僅かに身を支へて玉のやうな御手を差出された。心一つに公爵は、手に執りさまに唇を押當てゝ、軈て再び立上ると、

公爵さらば陛下今より後六ヶ月の中に再びお目に掛ります。假令此爲全世界を傾けましても、春木は必ず再びお目に掛ります。」

と言葉を跡に、離れがたない身を引別けて、一思ひに衝と別れ參らせた。

再び元の廊下へ出ると、お小夜が其處に待受けて居た。直さま公爵を案内して前と同じく、舊來た道を幾廻り、首尾よく宮城を脱け出した。

※　※　※　※　※　※　※　※

お小夜が重い使命を受けて、此やうな事として居やうとは夢にもそれと知らうやうなく、穗梨は其日、否應云はさず其筋の手に引立てられ、直さま蓮戸の終身獄へ、容赦もなく牽かれて行つた。

何うなる事かと身一つに慄續けておど／＼するを慈悲の目のない獄卒共身分のない者と侮つて乞食のやうな無殘な待遇思ふまゝに虐まれて、黑白も分らぬ土牢の中へ荒々しく抛込まれ、既生きて居る空もなく、今にも首を斬られるかと幾度か肝を冷した跡から足音荒く、つか／＼其處へ帶劍の獄吏が入ると共に聲鋭く、

「穂梨宇平、立ちませいッ。」

（五十七）胴顫

穗梨は飛上つて前へへた〳〵と坐つた。

穗梨「ヘッ、ど……何うぞお助けを。」

獄吏「何をいふ。えゝ、立ちませい。」

穗梨「へい、た……立ちますが、ど……何方へ參りますので。」

獄吏「ちよッ、彼是申すと容赦はせんぞ。これからお調べがあるのだわ。立ちをらぬかい。」

弱腰はたと蹴付けられて、あッとばかりのめるやうに前へ、二足三足よろ〳〵として、思はず顏を蹙めながら。

穗梨「ど……何うぞ御免なすつて。參ります。參ります。」

獄吏「ちよッ、餘計な事を云ふな。默つて神妙に來るのだい。」

穗梨「へい、でござりまするが……。」

獄吏「えゝ、默れといふに、」

又も一つ蹴上げられ、小突れながら追立てるやうに、引立てられて、右手に見える建物の入口には嚴重に三人の番卒の控へて居る前を過ぎて、只有る一室へ押入れられた。

見ると一段高い處に、何かは知らじ、急がはしげに書類を認めて居る警司、四邊の光景の物々しさに又も逡巡する穗梨を突立て、前に立たせて、獄吏は一禮して跡へ退つた。警司は其時、徐ろに顏を上げて未だに胴顫ひの止まぬ穗梨の面を屹と見た。警司は年の頃四十ばかり鼻の尖つた、頰骨の高い、小さな恐ろしい鋭い眼差の、鼬と狐を剝合はしたやうな顏付、一見好ましからぬ相好の人物であつた。穗梨は眼を向られると共に、はや一竦みに縮上つた。例によつて姓名年齡職業住處などの訊問が、一通り終るとやがて、

警司「穗梨宇平、」

穗梨「へツ、」

と穗梨は恐る〳〵面を上げた。

警司「其力は見掛けによらぬ恐ろしい奴だな。」

穂梨「ど……何う仕りまして。私何も致しました覺えはございませぬが。」
警司「むゝ覺えのないものが何で此蓮戸へ來たのだ。」
穂梨「さ、それがでございます。私にも全だ解りませぬので……。」
警司「默れ。犯した罪がなくて此處へ來るといふ事が有るか。其方は恐ろしい嫌疑を受けて居るのだぞ。むゝ、容易ならぬ叛逆の罪に問はれて居るのだぞ。」
穂梨「ひえゝ、な……何と仰有います。あの……叛逆、滅相な、何として私が、高が呉服屋風情の私が假令氣が違ひましても、其やうな大それた事を企畫みませうか。」
警司はぢッと其小さい鋭い眼に射通すばかり穂梨を見詰めて、
警司「宇平、其方は女房を持て居らうな。」
穂梨は思はずぶるッと身を慄はせた。ャ、始つたぞ。うッかりした事は云はれない。な……何と云つたら、と狼狽へながら、
穂梨「へい、持つには持つて居りましたが……。」

警司「ナニッ、持つて居りましたが、とは？　むゝ、今は持たぬと云ふのか。」

穗梨「それが其、誘拐されて了ひましたので……。」

警司「ナニ誘拐されたッ。むゝ、」

と聲にも知れる何やら樣子が著るしく變つた。穗梨は見るより失敗つた、拙い事を云つて退けた。何も知らぬと云ふのだつたが、と思つたが、最う追付かず、警司は聲を勵まして、

警司「して何者に誘拐された。其方は其者を存じて居るのかッ。」

(五十八)　そゞろ心

穂梨「へい、まア存じて居ると申せば申すのでございますが……。」

警司「むゝ、存じて居るなら有體に云へ。何者だッ。」

穂梨「へい、それが其、實は其……。」

警司「えゝ、何を云つて居るのだ。これ眞直に申さんと爲にならんぞ。」

穂梨はどぎまぎして胸は更に亂れるばかり、有りの儘に云つて了つたものか、それとも知らぬと云切つたものか、云はねば却つて疑はれる、云へば兎に角自分の正直なのは解る譯だと、周章きながらも漸くに意を決し、

穂梨「へい、實は確かに其人と突止めた譯ではございませんが、外に疑ひを掛けるものはございませんで、」

警司「だから何者だと云ふのだ。明瞭と云へ。」

穂梨「其者は、いや其お方は脊の高い色の淺黑ひ、何でもお歴々のやうな、立派な御樣子の方でございます。一度途中で家内に敎へられまして、其時充分に見

覺えて置きました。」
警司は聞くと共に穩かならぬ色を浮べた。
警司「して其者の名は何と言ふ。」
穗梨「名前は何と云ひますか、存じませぬが、見れば直に解りますへい甚麼雜踏の中でも決して間違へる事ではございません。」
警司の顏は、更に又むづかしくなつて來た。
警司「むゝ、甚麼雜踏の中でもと云つたな。」
穗梨は雲行の急に惡くなつたのを見ると、はツと又色を變へて、
穗梨「いえ其……。實はそれが、其何でございますので……。」
警司「默れ。其方は充分に見覺えて居ると申したではないか。よし、今日は最うそれで可い。吟味を續ける前に其方が女房を誘拐した者を存じて居るといふ次第を或お方に申上げねばならんわ。」
穗梨は慌てゝ打消し顏に、
穗梨「暫らく。暫らく一寸御猶豫を。私は其お方を存じて居ると申したので

はございませぬ全くの處を申しますと……。」

警司「えゝ、退れッ、」

彼方に控へて居た曩の獄吏は、同時につか〳〵と來て猶豫もなく穂梨を引立てた。警司は既見向きもせず、急がはしく書面を認めて、部下の一人に渡して直に使に出した。

穂梨は再び前の牢の中へ拋り込まれて、其夜は固より眼も合はず思出しては氣もそゞろに、

穂梨「こりや恁うしては居られない。と云つて何う仕樣もない。あゝ、あゝ、飛んでもない災難が沸いて來た。お小夜の奴め、何でも恐ろしい大罪を犯したに相違ない。彼奴最う何も彼も饒舌つて了つたに違ひないわ。女といふものは氣の弱いものだからな、少し責められゝば直に白状して了ふ。俺は同類と初めから見込まれて居るのだ。何うでも最う逃れッこは有りはしない。明日は護送馬車に乘せられて、直に刑場へ差立てられる。云はずと知れた其の先は縛り首だ。えゝまア何うしたら。あゝ天道樣、ど……何うぞお助けを

……。」

と身を忘れて祈り立てるより外になかつた。勿論燈火もない牢の中、坐つたまゝに横にもならず、そよとの物音には悩りとして到頭夜を明して了つたが、其日も遂に何事もなく案じ續けて同じく寢ずに明かした三日目の朝になつてどか〳〵と來る足音と共にかちりと錠を外して入つて來た獄吏の影、やッ今度こそは、と穗梨は蒼くなつて屹と見返つた。

（五十九）不屈者めがッ

來たのは、前と同じ獄吏、例の通り容赦なく荒々しく穗梨を引立てた。一圖に既絞首臺に引出される事と思込んで了つた穗梨は、身體も前へ出やうともしなかつたが、跡から烈しく追立てられて、やがて引据ゑられた處を見ると、一昨日牽かれて來た警司の前であつたので、一時ながらも漸つとの事にほッと息をついた。

警司は穗梨を前に据ゑると、前よりは稍〻面を和げて、

警司「宇平、其方の事件は、昨夜から又込入つて來たぞ。本職は其方に忠告するが、今日こそ殘らず白狀して了はんと、其方は最う赦される事はないぞ。」

穗梨「へい、へい、私の存じて居ります事なら甚麼事でも殘らず申上げます。何なりともお訊ね下さいまし。」

警司「何は置いて、其方の女房は何處に居る。」

穗梨は了解めぬ顏で、

穗梨「へッ、家内は那邊へか誘拐されて了ひましたと、一昨日も申し上げましたが。」

警司「處が昨日夕方にな、其處から何處へか逃げて了つたわ。」

穗梨「えッ、家内が逃げましたと。併しそれは私の存じません事で。」

警司「いや知らぬとは云はさんぞ。縱令逃出した事は知らぬとしても、行つた先をも知らんとは云はさんぞ。」

穗梨「飛んでもない事を。私が何う致して知りやうがございましやう。」

警司「むゝ然らば其方は何の用があつて、上の有田の處へ行つたのか。彼時其方は有田と長い間何か話して居たな。」

穗梨「あッ、彼の事でございますか。あれは全く私が惡うございましたので。いかにも私は有田樣の處へ參りました。」

警司「むゝ、何の用で行たか眞直に云へ。」

穗梨「へい、實の處は家内が不意に見えなくなつて了ひましたので、兎もあれ打捨つて置けませんから、一つ手を借りて行衞を探して貰はうと思つて參ゐつ

たのでございますが、全く好いやうに騙されましたので、」
警司「待て。其時有田は其方に何といふ返事をした。」
穗梨有田樣は、私を助けて遣らうと仰有いましたが、併しそれは口先の事で助ける處が反對の目に遇ひましたので、」
警司「己れ上を僞るか。不屆者めが。」
穗梨「えツ、何を持ちまして私が……。」
警司「默れ。有田は其方との約束を守つて、昨夜召捕られた其方の家内を警邏の手から奪取つて、何處へか深く匿して了つたわ。」
穗梨「へツ、そりや又何うした譯でござりましやう。」
警司「むゝ、其方いよ〳〵恍けるなら、有田と此處で對質させやう。これ、有田は既に捕縛になつて居るのだぞ。」
と彼方に控へた警士の一人に、
警司「有田太郎を召連れさせい。」
警士「はツ。」

程もあらせず揚り屋の方から二人の獄吏に付添はれて、悠然として阿蘇が入つて來た。

（六十）見上げて一言

警司はやがて厳に、

警司「有田太郎、一昨日其方の家で、此穂梨と相談した事を此処で明白に申し上げい。」

阿蘇は只訝かしげに、ぢろりと警司の顔を打見遣つた。穂梨は見て横合から、

穂梨「申上げます。此お方は有田様ではございません。」

警司は呆れて眼を瞬つた。

警司「ナニッ、此者が有田でないと。」

穂梨「へい、全ッきり違つたお方で。」

警司「フム、名は何と云ふ。」

穂梨「へい、それは未だ存じませんが、」

警司「何処でか見た事はないか。」

穂梨「此方は確か有田様のお友達でございます。宅の前をお通りなさるのを

實は度々見掛けましたので。」

警司「むゝ。」

とばかり、警司は思ひも寄らず、突如に鼻毛を脱かれた姿であつたが、漸くの事に面持を直して向變つて阿蘇に、

警司「これ、其方の名は何といふ。」

阿蘇は落付拂つて、靜かに警司の顏を見上げ、冷やかに唯一言、

阿蘇「阿蘇ッ、」

警司「ナニ阿蘇? 併し其方は、自分で現に有田太郎と申したてはないか。」

阿蘇「ヤ、怪しからん事を聞かせられる。私は自分で有田と云つた覺えは更にない。全體初めから君方の方で、いゝや有田に違ひない、と自分決めに決めて了つて、私に口を開かさんのぢやないか。」

警司「これ、其方は苟くも當職を攻擊するか。」

阿蘇「いや、只事實を云つて居るのだ。」

警司「兎もあれ其方、今になつて有田でないとは何の事だ。僞りを申すと其分

には差置んぞ。」
穗梨は双方を見て又片脇から、
穗梨「申上げます。此お方は全く有田樣ではございません。御存じかは知りませぬが、有田樣は私の店子の事でございますから、勿論よく存じて居ります。何せい有田樣は、未ば廿歳ばかりの若いお方、此お方は最う三十近いお方ではございませんか。それに有田樣は彼の塙樣の隊のお方、此お方は利根里樣の手に付いたお方ではございませんか。論より證據、此お方の服を御覧なさいまし。」
警司「然うだ。むゝ、然うだが、はて、何といふ事だ。」
其時急がはしく戸口が開いて、使者が一人、門衛に導かれて入つて來たが、其儘衝と前へ進んで持て居た手紙を警司に渡した。
警司は取敢ず讀下すと、思はず呟くやうに、
警司「むゝ、不便な女だ。」
穗梨「えッ、もし、今仰有いましたのは、そりや誰の事でございますか。私の家内

の事ではございますまいな。」
警司「處が矢張、其方の家内の事だ。宇平、其方の事件は、いよ〳〵面倒になつて來たぞ。」
鷹梨「ヘッ、併し私は、此通りお召捕りになつて居りまして、全で家内の事に關係致して居りませぬのは、よくお解りになつて居る事と存じますが……。」
警司「默れ。今其方の女房が働いて居る事は、かねて其方と牒合せた通りの事だぞ。さア準繩に申上げて了へえ。」

（六十二）ど……何方へ

穗梨は急込んで前へ、身を伸上げるやうにして、口を銜いて慌たゞしく、

穗梨「そ……其事は、例令何と仰有いましても、神以て身に覺えがございませぬ。家内が何を企てゝ居りますか、全體何を致したのでございますか又何を致さうとして居るのでございますか、毛頭何も存じませぬのでございます。如何やうのお調べも厭ふ事ではございませぬ。存じませぬ者は何處までも存じませぬので。」

警司「宇平ッ、上は盲目ではないぞ。其方などに言黑められると思ふと大間違ひだぞ。」

穗梨「へい、そ……其處でございます。お上では初めから家内と一つのものと私を思召して居らつしやいますから、全で申上げます事をお取上げにはなりませんが、そこ處はよく／＼お匡しを願ひまして……。」

阿蘇は其時、怺へかねたやうに、

阿蘇「あいや、もし、私に最う用がないなら、何處へか席を移して貰ひたい。此穗梨君の傍に居るのは甚だ不愉快だ。」

警司「むゝ、其方の事は追つて又取調べる。立ちませい。」

阿蘇「ャ、一寸一言斷つて置くが、事が人違ひと解つて見ると、私は最う此處に必要のない男だ。勝手に引取つて差支ないと思ふが何うかね。」

警司「いや其やうな事を其方に注意されるには及ばん。當職の吩咐けた通りにして居れば可いのだ。立ちませいッ。」

阿蘇はたゞ冷かに警司の顏を見たばかりであつた。其儘口を噤んで靜かに外へ牽かれて行つた。途端に又も、急がはしく入つて來た第二の使者が持つて來た御用狀やうな者を直に警司の手に渡した。

警司は取敢ず讀下すと、急に取急いだ體に穗梨に二三の審問をして前を退らせて、直に筆を執つて長文の調書を作つて居た。

穗梨は其日、再び監房へ投込まれたまゝ、何か知らず事は面倒になるばかりのやうなので、片時胸の休まる隙もなく、身の災難を歎續けて居ると、丁ど夕刻少

し過ぎて、どか〳〵と來た二人の足音、忽ち前の戸が烈しく開放されて、例の帶劒の獄吏の影が現はれた。

獄吏「宇平ッ、前へ出ませい。」

穗梨「へッ、」

と恐る〳〵、這出すやうに來て、

穗梨「な……何の御用。」

獄吏「此方に隨いて來るのだ。」

穗梨「えッ、這麼時刻に・・・何方へ參りますので。」

獄吏「何處でも可い。默つて來れば可いのだ。」

穗梨「へい、でございますが、お願ひでございます不憫と思召して、一寸其場所だけでも……。」

獄吏「えゝ、行けば解る事た。神妙にして隨いて來るのだ。さア、立ていッ。」

穗梨「へ、へい。」

とばかり絶望した姿で、漸との事に立上りながら、胸には最早、

穗梨「駄目だ。今度こそ最う刑られて了ふのだ。」

と大息ついて、詮方なげにとぼ〳〵と牽かれて行つた。

牽かれながらも、何處へと一心に見廻はしながら行くと、軈て出て來た監獄の門の前、其處に一輛の護送馬車が、馬上の四人の獄吏に嚴重に警護されて、穗梨の來るのを待受けて居た。

（六十二）護送馬車

穗梨は其影を見ると又悚み上つた。

穗梨「もし、お願ひでござります。お慈悲に何うか只つた一言、私の參ります先をお教へなすつて。」

獄吏「えい、何をほざく。神妙にせい。」

穗梨「へツ、併し此護送馬車で送られて行きます先が……。」

獄吏「ちよツ、此場になつて何をくど／＼。それ、乘らんかい。」

穗梨「へい、最う據ございませんが、せめてお情けに……。」

獄吏「喧しいわい。愚圖々々すると引叩くぞツ。」

穗梨は最う覺悟を決めて、半ば死んだやうな氣で馬車に乘移つた。獄吏は直に傍に坐を占めて、同時に入口の錠が下りると、外の四人は犇と左右に引添つて、馬車は其儘靜かに軋り出した。

わくつく胸に、穗梨は何處へと、ぴたと閉つた窓の隙から、瞬きもせず行手を見

て居ると、馬車は進んで、疑ひもなく神保の刑場へ差懸つた。蓮戸ですべて宣告された罪人は、此處で悉く處刑されるのだ。穗梨は悚然として、一時に冷水を濺掛けられたやう、思はず知らず手を合せて、一心不亂に神を念じた。馬車は併し、其處を素通りして先へと進んで行つた。

次に來たのは、常さへ通りかねた吳部の梟首場。此處だ、とばかり穗梨は一圖に、最う何も彼も終りだと思つた。慌だしく傍の恰も石像のやうに默込んで居る獄吏に、

穗梨「もし、わ……私最う、か……覺悟を致しました。一言此處で、遺言だけを致して置きたうござります。ど……何うぞそれだけはお聞きなすつて……。」

獄吏「えい默れッ。神妙にして居らんと只は置かんぞ。」

穗梨「あゝ情けない、これさへも聞いて下さいませんか。」

獄吏「ちよッ默らんかい。つべこべ云ふと猿轡を喰ませるぞ。」

穗梨「へッ、最う是非がございません。」

併し猿轡と云つた今の獄吏の言葉が、稍少し穗梨の胸を落付かせた。若し此

處で處刑されるなら最う直ぐ其處へ來て居る間際に何も猿轡の必要はない筈だ。事によつたら此處で刑られるのではないわい。と僅かに息をつき出した。

果して馬車は馬の足掻きを其儘に、無事に其處を通過ぎた。其先氣遣はれるのは唯虎尾の刑場ばかり、處が馬車は生憎にも、圖星其方角に向つて居る。今度こそ最う疑ふ處もない。すべて曖昧の罪人の處刑される、其虎尾へ牽いて行かれるのだ。穗梨は事件の前後を推して、いよ〳〵それと最後を決めた。堪へかねて、せめて獄吏の顏色で結果を察しやうと思つて、

穗梨「もし、虎尾でござりましやうッ。」

獄吏「默れッ。」

と獄吏は膠もなく云放つたのみ、何も云はぬ。穗梨は最う何の望みもないやうに思つた。恐ろしい磔柱の影は未だ見えぬけれど、何うやら向ふから近寄つて來るやうで暫くして、旣其刑場から五六間の前まで來ると、近くがや〳〵と人の聲が聞えて、馬車は軈て礑と止つた。穗梨はあッと、さながら死際の人

のやうに、一聲苦しげに唸つて氣絶して了つた。

（六十三）　夢の夢

獄吏「馬鹿め。」

と一喝強か脊骨を撲し付けられて、はッと我に返つたと思ふと、一時止つた馬車は再び軋り出して、何事もなく其處を通過ごした。穗梨は重ね〴〵の心遣ひに、既立直る力もなく、夢から夢を辿つて行くやうな中に、馬車は何時か十町ばかりの路を進んで、左に折れて暫くして只有る邸の裏門に着いた。穗梨は其處で引下されて、門を中へ、さながら曳摺られて行くやうに、奥深く引立てられ、先に立つた門衛の案内した、見事な階段を上へ、軈て立派な一室の椅子の上へ引据ゑられた。

穗梨は最早、死人も同じやうに、全で夢中で恰も霧の中を掻分けて行く心地、恍然として始んど何も知らず、只人々の爲すままに、押据ゑられて椅子の上に、ぐたりと首を頂垂れて、兩手をぶら下げたなり動きもせずに居た。久しい間其儘に、息さへ通はぬ體で居たが、餘りに何事も無さ過ぎるので、漸く

の事に少しづゝ力付いて、そろ／＼と首を擡げて四邊を見ると、これはしたり未だ見た事もない美々しい座敷、眼に入る調度の一つとして、驚かされぬものない立派の物ばかりなのに、全體何が何うした事やら、譯が解らず、俄かに又きよろ／＼し出した途端、誰やら次の室に入つて來た氣勢がして、二つ三つ其處で話聲がしたと思ふと、忽ち隔ての扉が颯と開いて、つか／＼と前へ、賤しからぬ服裝の見るから立派な侍が衝と來て、

侍「これ、其方が穗梨宇平か。」

穗梨は度肝を拔かれたやうに、ほかんと相手を見詰めて、訥りながら、

穗梨「さ……左樣でございます。」

侍「むゝ、此方へ來い。」

穗梨「へい。」

と恐る／＼立上つたが、落付かぬまゝ、

穗梨「もし、あの此處は何處でございますか。」

侍「白痴めッ、那樣愚にも付かぬ事を聞かんで、默つて此方に隨いて來い。」

穂梨「へッ、へい。」

と押返して云ふ氣力もなく、導かれるまゝに、随いて行つた次の一室、今居た室にも増した美々しさに尚の事驚かされて、入りもやらず、眼を皿のやうにして思はず閾際に彳立んだ。

華美を極めた室の中程に、書籍やら書類やらで一杯になつた眞角な卓子、其上に繰擴げた儘の大地圖が一面、見ると今しも戰端の開かなんとして居る婁攝の精細な地圖であつた。

其卓子を前にして、炯々たる一双の星眸、額の廣い、面瘠せのした、一見踞傲の風采を帶びた中脊の人、年は未だ三十六七を出ぬに髪も髭も既薄霜を置初めて居る。着て居る馬乘着の稍塵埃を浴びて居るのは、此日騎馬で外出したのを語つて居る。

此人こそ今全歐に、李泄龍大法主の雷命を轟かして、此一國の政柄を心の儘に操縱して居る、時の公爵樞密院議長兼警邏部總督、蟲のやうな穂梨などは名を聞いてさへ慄上がるほどの人物であるのだ。

(六十四) 大法主

可哀相に穗梨は今、よもや一國の大宰相、飛ぶ鳥落す其人の前へ、牽かれて來たとは思ひも寄らなかつたから、見た處貧相な、横柄らしい此人は、全體何者で俺を何うしやうといふのかと、彳立みながらも怪訝な顏、大法主はぢろりと一目恐らく三世を見通すばかり鋭い瞳をひたと向けたが、

大法主「此者か穗梨といふのは。」

侍「はッ、左樣でござります。」

大法主「可し。持つて來た書類をこれへ。」

侍「はッ、」

とばかり侍は、脇に置いた書類を揃へて、恭しく大法主の前に差出した。恐る恐る穗梨は見ると、蓮戸で自分の審問された一件の調書であつた。

大法主「むゝ、其方は退つて可い。これ、穗梨とやら、もそつと近う參れ。」

侍は前にも增して恭しく敬禮して引退つた。穗梨は猶更の事、これほどの立

派なお侍を、これほど粗末に使ひこなす此人は何のやうな人かと、驚きながらもおづ〱と膝行出た。

大法主は暫くの間、書類を手にして讀んで行きながら、折々其人を射る眼を擧げて、穗梨の顏を屹と見た。穗梨は其度に、さながら身を刺されるやうな思ひをした。

默讀一過、大法主は逸早く胸に、

大法主「むゝ、此男に罪はない。併しそりや何うでも可いわ。兎もあれ一應調べんでは。」

とやをら身を押向けて、

大法主「穗梨、其方は重い反逆の罪に問はれて居るのだぞ。」

穗梨「へ、へい何うも飛んでもない事になりましたので。實は彼方の警司樣に初めて其事を伺ひまして、只最う仰天致しましたのでございます。私何のやうな誓言でも致しますが、全く持ちまして身に覺えがございませんので。」

大法主は心可笑しさを、眞顏に態と物々しく、

大法主「隱すな。調べは最う充分に屆いて居るのだぞ。其方は家內のお小夜世良田夫人、春木公爵などゝ腹を合せて容易ならぬ事を企てたのぢや。」

穗梨「な……何と致しまして。ヤ、其仰せで思出した事がございます。實は家內が、今仰有いました名前を私に申した事がございます。」

大法主「むゝ、何ういふ時に、」

穗梨「へい、まア申して見れば噂話のやうに致しまして、」

大法主「して何と云つた。正直に云へ。其方の身の爲だぞ。」

穗梨「へい、へい、申上げますとも。私身の明りを立てねばなりませんから、存じて居ります事は何も彼も申上げます。へい、其時家內の申しましたのは何でも大法主樣が此巴黎へ、今仰有いました春木樣を誘寄せて、春木樣始め皇后樣を、恐ろしい目に遇はさうといふ陰謀……。」

大法主「ナニッ、其やうな事を家內が申したと。」

穗梨は其語氣にはつとして、

穗梨「へッ、それが其……、何ういふ次第のものでございますか、實の處私は……。」

大法主は氣を變へて又物靜かに、

大法主「可いわ。其方の存じて居るだけを眞直に申せば可いのだ。此方に目が無いでもない。なア穂梨、殘らず有體に云ふが可いぞ。」

穂梨「へい、へい、それは最う仰有るまでもございません。何なりともお訊ねなすつて下さいまし。」

大法主「むゝ、さらば聞くが、」

と大法主は座を直した。

（六十五）　其二軒

大法主「最初に先づ、其方の家内と、世良田夫人との關係を話せ。」

穗梨は頭を押へて當惑顔に、

穗梨「折角のお訊ねでございますが、其事は私共で何も存じません。第一未だ遇つた事もございませんので……。」

大法主「むゝ、では何か。其方家内を御所から連れて歸つて來る時、いつも眞直に家へ歸つて來たか。」

穗梨「いえ最う大抵直に歸つた事はございません。家内はさる小間物屋に用がございまして、いつも其家へ寄道を致します。」

大法主「フム、其小間物屋といふのは一軒ぎりか。」

穗梨「いえ二軒でございます。」

大法主「何處だ。其家は？」

穗梨「一軒は扇町、一軒は古輪町でございます。」

大法主「其方は中へ入つた事はないのか。」

穗梨「ございません。へい、私はいつも外に待つて居りました。」

大法主「フム、家內は其時、其方に何と云つて一人で入つて行つた。」

穗梨「別に何も申しません。只待つて居れと申しますから待つて居りましたので。」

大法主「は穗梨お前は大分女房孝行だな」

穗梨は獨合點の胸に、

「ヤ、占めたぞ。俺をお前と云出して來た。大分工合がいゝ鹽梅になつて來たわい。」

大法主「お前は其家を今でも覺えて居るだらうな。」

穗梨「へい、存じて居りますとも。」

大法主「番地も知つて居るか。」

穗梨「存じて居ります。」

大法主「フム、何番地、」

穗梨「扇町は廿五番地、古輪町は七十五番地でございます。」
大法主「可し。」
とばかり大法主は手を伸して、傍への銀鈴を振鳴らした。曩の侍は直に室へ入つて來た。
侍「はッ、召されましたか。」
大法主「急いで六鄕の處へ行つて、歸つて居たなら、直に此處へ來るやうに云つて來い。」
侍「ヤ、幸ひでござります。伯爵は只今見えまして、至急御前にお目に掛りたいと申されてお出でになります。」
大法主「おゝ、では直さまこれへと云へ。」
侍「はッ、」
と言下に身を躍らして、足早に彼方へ引返した。ナニ御前ッ、若しや彼の大法主樣では、と穗梨は眼を圓くして樣子を打目戍つた。
物の五分と經たず、今の侍と入違ひに、急がはしく此所へ入つて來た一人の紳

士、穗梨は振返つて見ると共に、

穗梨「おゝッ、此お方、此お方。」

大法主「ナニ此お方ッ、何が此お方だ。」

穗梨「へい、私の家内を凌つて行らしつたお方でございます。」

大法主は再び銀鈴を打振つた。はッとばかり、刻下に來た以前の侍、

大法主「此者を元の室へ率いて行け。そして此方の沙汰を侍つて居るやうにせい。」

穗梨は慌たゞしく、

穗梨「申上げます。申上げます。此お方ではございません。私大間違ひを致して居りました。全で違つたお方でございます。へい、全く此お方ではございません。」

大法主「ちよッ、此馬鹿者を引退げい。」

侍「はッ、」

穗梨は云ふまでもなく直に引立てられた。

(六十六)　遣られた、六鄕

紳士はさながら怺へかねたやうに、穗梨の牽かれて行く跡を見送つて、隔ての扉の閉るや否や、衝と大法主の前へ進んで行つた。

六鄕「御前、彼の男と彼の御婦人は到頭密會を遂げました。」

大法主「むゝ、公爵と、皇后と、」

六鄕「左樣でござります。」

大法主「何處で？」

六鄕「不敵にも宮中で、」

大法主「むゝ、確かに然うか。」

六鄕「はい、少しも疑ひはありません。」

大法主「してそりや誰から聞いた事實だ。」

六鄕「御前、無二のお味方の、彼の蘭野夫人の證言でござります。」

大法主「遣られた。六鄕、見事にして遣られたわい。よし、此上は復讐だ。」

六鄕「御前、臣は勿論其爲に、粉骨の勞を厭ふ者ではござりませぬ。」
大法主「して密會の前後の樣子は？」
六鄕「はッ、時刻は十二時半ばを過ぎた頃だらうでござります。皇后陛下は四五人の女官を左右にして居られましたが……。」
大法主「フム、何處で、」
六鄕「御寢室で、」
大法主「おう、それから、」
六鄕「處へ不意と參つたものが有りまして、かねて合圖の有つた事と思はれまする、何か記號の着いた手巾を、窃とお手許へ差上げました。」
大法主「むゝ何うしたそれから、」
六鄕「皇后陛下は時の間に、深く御感動の御樣子をせられました。御顏の色は濃い御化粧も隱す事が出來ませぬ程、見る〳〵變つてお了ひなされました。」
大法主「おう、それから、」
六鄕「併し陛下は、其儘に(立上られまして、顫へた御聲で)、「皆の者は暫く此處で

待て居てたもるやう、妾は直に戻つて參るから。」と仰せなされまして、一人お室をお立出でになりました。」

大法主「蘭野夫人は何故其時、直に來て其方に知らせなんだのだ。」

六郷「其時は未だ、何事とも解りませず、殊に陛下は、待つて居てたもるやうとの仰せでござります。夫人は仰せを背く事は出來ませなんだのでござります。」

大法主「フム、して陛下は何の位の間出て居られた。」

六郷「彼是四十分ばかり過ぎましてから、一寸立戻つて來られましたが……。」

大法主「むゝ、又出て行かれたのか。」

六郷「はい、其時お手許の、御紋散らしの小匳をお持ちになりまして、御急ぎの體で直にお立出でになりました。」

大法主「陛下は後に歸つて來られた時、其小匳を持つて居られたか。」

六郷「いゝや、お持になられませなんだ。」

大法主「むゝ、蘭野夫人は、其小匳の中に何が入つて居たか知つて居るか。」

六郷「存じて居ります。中にはかねて國王陛下から皇后陛下に殊に御記念の

為め御遣しになりました、十二の金剛石繫ぎの頸飾りが入つて居りました。」

大法王は押返して屹と、

大法主「むゝ、皇后陛下は、其小匳を持たずに歸つて來られたのだな。

紳士も確と、

六鄉「左樣でござります。

(六十七)　此胸に

大法主「むゝ、蘭野夫人は其小函が、春木の手に渡つたと云つて居るのだな。」

六郷「はい、確かに然うと申して居ますので。」

大法主「何か外に證據のやうな者は？」

六郷「蘭野夫人は御承知の如く、皇后陛下の御裝飾掛りでござりますので、今日其小函の紛失して居りますのに、心ならず諸方を搜ねました揚句、皇后陛下に若しや御存じでは居らせられませぬか、とお訊ね申上げました。」

大法主「そしたら陛下は？」

六郷「陛下は俄かに、御顏の色を殊の外に赧められましたが、ナニあれは、粗忽でつい金剛石を一つ損じたから、御細工御用の方へ直しに遣したと仰せられました。」

大法主「むゝ、即刻其者を取調べて、事實の有無を質さにやならん。」

六郷「下臣只今取調べて參りました。」

大法主「出かした、六郷。して御用の者は何と云つた。」
六郷「更に其やうな事を承はらぬと申しました。」
大法主「可し、萬事は此胸にある。六郷、出る道は何處にも有るわ。」
六郷「はツ、そりや御前の事でございますから、勿論おぬかりは有らうとは存じませぬ。」
大法主「六郷、其方は世良田公爵夫人と、春木公爵の隱れて居る處を知つて居るか。」
六郷「存じませぬ。下臣配下の面々は、あれほど手を盡して搜ねましたが、未だに何の手掛りも付きませぬので。」
大法主「儂は併し知つて居るぞ。」
六郷「えツ御前が、そりや又何ういふ處から、」
大法主「はゝゝ、兎もあれ知つたのは何うだ。一方は扇町の廿五番に、一方は古輪町の七十五番だ。」
六郷「御前は直さま、二人を捕縛の命令をお出しになりましたらうな。」

大法主「遲いわ最う。跡の祭だ。兩人は疾うに行つて了つたわ。」

六郷「併し、兎もあれ既行つたか何うか、充分確める必要はござります。」

大法主「むゝ、衛士を十人ばかり選出して、其二軒を嚴重に搜索して見い。」

六郷「はッ、直さま參つて見ます。暫く何うかお待受けを。」

大法主「可し、行けッ。」

眞一文字に、急いで颯と六郷は出て行つた。大法主は跡に一人暫く何か物思はしげに見えたが、軈て又銀鈴を振鳴らした。曩の侍は直ちに室へ入つて來た。

大法主「穗梨を今一度連れて參れ。」

侍「畏まりました。」

穗梨は今の程侍から當家の主公の外ならぬ音に聞えた大法主、と聞いて殆んど仰天して居た處、再び前に呼出されて、只わな〳〵と身を顫はして居た。侍は穗梨を前へ引据ゑると、大法主の一聲に、直さま彼方へ引退つた。

大法主は何か知らず聲鋭く、

大法主「穗梨ッ、」

穗梨「へ、へッ、」

穗梨は聲さへも能く出なかつた。大法主は疊掛けて、

大法主「穗梨ッ、其方は儂を騙しをつたな。」

（六十八）御前大明神

穗梨は例の周章返つた姿で、眼を滿圓に、急込みながら、

穗梨「えッ、な…………何と仰有います。わ…………私が大法主樣を騙しましたと、」

大法主「おゝさ、其方の家內が、御所の歸りに扇町や古輪町へ寄つたのは、小間物屋などに用があつて行つたのではないのだぞ。」

穗梨「へい、では何の用でございましたので。」

大法主「世良田公爵夫人、春木公爵に逢ひに行つたのだ。」

穗梨は其時の前後の狀を急に思合せて、あッとばかり忽ち心付いたやうに、

穗梨「おゝ、大法主樣、然うでございます、それに違ひはございません。第一那麼無商屋作りの、何の記號も看板もない家に、小間物屋などが住んで居るといふのは餘り妙ぢやないか、と幾度も家內に申しましたが、家內は笑つて取合ひもしませんでした。」

と思込んで身を、矢庭に大法主の足元へ額を地に差付けるばかりにして、

穗梨「もし、御前樣、私は決して僞りを申したのではござりませぬ。御前樣、貴方樣は全く彼の、大法主樣でござりますか。音に響いた彼の大法主樣で、世界中の者が崇めて居ります、彼の偉い大法主樣で………。」
大法主は只其儘に打見遣つたが、其時、何をか急に思付いたやうに近く寄つて、親しく穗梨の手を執つた。
大法主「解つた。穗梨最う何も心配せんが可い。さア立て。些と樂にして膝組みで話さうわ。」
穗梨「ヤッ、大法主樣が此宇平に御手を下すつた。えいまア、何といふ冥加に餘つた事で。其上にも勿體ない、膝組みでとまで仰有つて下さるとは。」
大法主「いゝやお前は寃枉の災難で酷い目に遇はされたのだ。全く氣の毒だつたわ。せめた其賠償にな、少いがこれだ、此千圓の一包みを取つてくれ。そして儂を免してくれい。」
穗梨「と………飛んでもない事でございます。私が御前樣を免すの何のと、へい夢にも見られた事ではございませぬ。私をお召捕りにならうと、甚麽拷問

にお掛けなさらうと、何のやうな又御處刑をなさらうと、全くの處生かさうと殺さうと御前樣のお心の儘、厭とは一言も申されませぬ、私でござります。な……何を持ちまして免すの何の、と…………。」

大法主「いや然う云はれると猶氣の毒だ、惡く思つてくれるな。家内の引掛りから是非もない災難と思へ。さ、此金子を取れ。聊かだが儂の心付けだ。」

穗梨「ヘッ、未だ御戲謔を。」

大法主「何を戲謔、さア、持つて行け。」

穗梨「えッ、あの本當でござります、か。こりやまア何うした事でござりましやう。あ…………有難うござります。宇平は何たる仕合せ者で…………。」

大法主「では一先づ今夜は宅へ歸れ。近い中に又逢はうわ。」

穗梨「へい、へい、そりや最う何時でも、お召しになりますれば、飛んで上ります。」

大法主「むゝ、今度からはな、少しも氣を兼ねんやうにせい。宇平、儂はお前が豪く氣に入つたわい」

穗梨「ご…………御前樣、私最う何にも申しませぬ。こ…………これでござります。」

大法主「おう、さらば宇平、又逢はうぞ。」

と次の室の侍を呼寄せて、宇平の放免の事を言渡すと共に、穗梨を彼方に引取らした。穗梨は殆んど狂喜の態、幾度か床に叩頭いて、身の置處も知らず、小躍りして引退つた。大法主は跡を見送つて、

大法主「むゝ、彼の男も最う、此先生涯、儂の道具になつて了つたわい。」

（六十九）密書

時も措かず大法主は、前に擴げられた彼の妻攝の地圖に、其炯々とした瞳を放つて、仔細に地の利を調べて行つた。途端に颯と隔ての扉が又も開いて、六郷伯が逸早く歸つて來た。

大法主は待ちかねたやうに、見ると共に身を起して、

大法主「ヤ、何うした、結果は。」

六郷「はッ、仰せの二軒へ、衞士を選つて駈向ひました處…………。」

大法主「むゝ。」

六郷「古輪町には三十五六の男子が一名、扇町には二十六七の婦人が一名……、」

大法主「おう、何とした。」

六郷「果して逗留致して居りましたが、婦人は昨夜十二時頃、男子は今朝未明に其處を立去りました。」

大法主「フム、確かに兩人だ。今から追掛けた處で、所詮仕樣はないな。」

六郷「誠に殘念でござりました。御前して此上の御手段は？」

大法主「む〻、何に然れ此事は他へ洩らすな。皇后には充分に氣を縱して置かれるやうに、氣振にも此秘密を知つたやうな擧動を見せるな。飽くまで何も知らん體にして居れ。」

六郷「はッ、確と承知致しました。外に何か御命令は？」

大法主「おう、彼の大審院長の杉浦を邸へ來るやうに吩咐けて置けい。」

六郷「心得ました。其他に何か下臣への御用は？」

大法主「其方は明日の朝、儂からの使を待受けて居つてくれ。」

六郷「はッ畏まりました。お〻彼の男は何うなされましたか、」

大法主「彼の男とは、」

六郷「彼の穗梨宇平とか申しました、」

大法主「は〻〻彼か。ありや最う此方の手の者だ。儂は彼の男を彼の女房の間諜にして置いたわい。」

六郷「如何さま、御良策で。ではこれで。」

と引退らうとした。大法主は稍々口早に、

大法主「彼方へ行つたら伊藤にな、急いで旅仕度をして直に來いと吩咐けてくれい。」

「はッ。」

と六郷は直に出て行つた。大法主は手早く脇の料紙を引寄せて、さら／＼と書流した一通の書面。

取急ぎ申入候。來る大夜會の節春木公爵は十二の見事なる金剛石繋ぎの頸飾を帯び臨場致可候により、隙を見合せ勿論心付かれぬやう其中二箇の金剛石を切取らるべく候。

其品首尾よく御手に入り候はゞ、即刻御報知有之度。

宮子殿へ

其儘封を終ると同時に、幕下の伊藤は既旅裝束を仕濟まして、甲斐々々しく室へ入つて來た。

大法主「伊藤か。貴様はこれから、全速力で龍動へ行くのだ。途中少しでも止

る事はならんぞ。着いたら此書面を宮子に渡せ。此二千圓の手形を執事の處へ持つて行つて引替へて行け。役目を首尾よく果して六日の中に歸つて來たら、此額と同じ額を又取らせるぞ。」

伊藤は一議にも及ばず、封書と手形を受取つて急いで出て行つた。

（七十）宮中

次の日九重の奥深く、陛下に咫尺し参らせて、大法主は徐ろに先づ、世良田夫人から手を下して行つた。

大法主「陛下、こゝに苦々しい事を御耳に達しまするが…………。」

陛下「何ぢや公爵、苦々しいとは、」

大法主「外でもございませぬ。彼の世良田夫人でございます。」

陛下「ナニッ、世良田夫人ッ、」

陛下は名を聞いて既御氣色を變へられた。大法主は見て見ぬ振で、

大法主「全く以て、怪しからぬ次第でございます。世良田夫人は鶴尾の配所を脱け出しまして、膽太くも此巴黎へ…………。」

陛下「な…………何と申す。」

大法主「此巴黎へ紛れ込み、巧みに警察の目を晦まして、前後五日の間悠々と滞在を致し居りました。」

陛下「公爵ッ、」

大法主「はッ、」

陛下は聲を勵まし給ひ、

陛下「足下はそれを、手を束ねて見物して居つたのか。」

大法主「そは御答へ申すまでもござりませぬ。何として打捨てゝ置きましやうか。先づ聞かせられませい。只それのみではござりませぬ。」

陛下「何ぢや。早う云へ。」

大法主「同時に恐ながら皇后陛下は…………。」

陛下の御眼差は更に又輝いた。聞くより早く御口早に、

陛下「むゝ、皇后陛下が、な…………何と致したッ。」

大法主「畏くも陛下の御目を忍び其筋の目を無いものにされまして、竊かに世良田夫人の許へ…………。」

陛下「何と、」

大法主「御意の次第は何とも心得ませぬが、密使を夫人の許へ差遣はされまし

て再び交通を始められました。」

陛下「公爵、重ねていふが、足下はぬけ〳〵それを見物して居つたのか。」

大法主「それがでございます。奇ッ怪至極の儀で存じの外の邪魔物の爲に、事を破られて了ひました。」

陛下「ナニ邪魔者ぢや。何ぢやそれは？」

大法主「はッ、世良田夫人の此巴黎へ參つて居ります事、並びに皇后陛下の今申上げました儀をしかと確めましたので、少しの猶豫も致しませず、直ちに手配りを致しまして、中に立ちました密使の者を首尾よく捕縛に及びました處……
……。」

陛下「むゝ、其者の自白は何と、」

大法主「あいや、暫く此度の秘密の鍵は、其者から致しまして、直ちに得られるのでございます。彼方もそれと嚴しく用心して居りましたにも拘はりませず、其筋の者の盡力に、漸くの事手に入れましたのでございます。」

陛下「おゝ、それを、何と致した。」

大法主「聞かせられませい。首尾よく其者を捕縛しました途端、不意に片脇から立現はれました近衛の銃士、何と、白刃を手にして驀直に、其筋の者へ襲掛りました。」

陛下「ナニッ、近衛の銃士がッ、」

と陛下は更に又眼角を立てられた。

（七十一）利根里監輔

大法主は言葉を強めて、

大法主「はッ、近衛の銃士がでござりまする。いやも驚き入つたる狼藉者、縦に暴力を用ゐまして、其場に捕手を追拂ひ、大事の囚人を奪去りました。」

陛下「ぶッ、いよ〳〵以て怪しからぬ。」

と猶更赫とならせられた途端折を悪く、阿蘇の寃を訴へる爲に、利根里が御座の間へ入つて來た。

利根里は今、阿蘇を救出して來る爲に、自身警司統監に會つて、阿蘇引渡しの交渉をした處が、統監は大法主の意を測りかねて、言を左右に托して、容易に確とした答をせぬので、利根里は事件の當の相手の、大法主であるのを看て取つて、寧ろ直付けに陛下へと、さてこそ大奧に出たのであつた。陛下は利根里を見そなはすと共に、

陛下「おゝ利根里、よい處へ來た。余は其方の銃士の事に付いて好い談話を聞

たぞ。」
利根里「陛下微臣は又、大法主の御管下の者に付きまして、好いお談話を申上げに參りました。」
陛下「何ぢやと、」
利根里「いや儚く大法主の居られます前で申上げるは失禮かは存じませぬが、餘りと申せば、理不盡なる警官共、何の罪もない微臣の銃士、取りも直さず陛下の銃士を無法に捕へ、大道を引廻し、剩へ終身獄に投ずるといふ以ての外の奇怪な振舞。陛下、儚かる不法の待遇を受けました銃士は、陛下のお覺えの愛たい彼の阿蘇でござります。」
陛下「ナニ阿蘇ッ、余は其名を存じて居るわい。」
利根里「陛下、阿蘇はかねて御承知の決鬪の折柄、不幸にして大法主の殊に愛せられます彼の幸佐に、手痛い一傷を與へましたものでござります。」
と大法主を尻目に掛け、重ねて語を繼で、
利根里「いや、それは格別阿蘇の此度の事に付きまして、前後の事情は儚うでご

ざります。阿蘇は其親友の一人、塙男爵の隊に屬して居ります衞士の宅を訪問致したのでございます。處が折惡しく留守でございましたので、暫く歸りを待受けやうと存じまして、勿論親友間の事でござりますから、遠慮なく中へ入りまして待居りました處へ、何かは知らず踏込み參りました大法主方の衞士並びに邏卒の一群、遮に無に家を取圍み、戶を折破つて亂入致して參りました…………。」

大法主は目顏で陛下に、「そりや今申上げた件に付いてゞございます。」と逸早くそれと知らせた。陛下は忽ち、

陛下「利根里、余は疾うに最う存じて居るわい。そりや皆余の爲にした事ぢや。」

利根里「はて、さらば何の罪もござりませぬ陛下の、銃士が彼の如くに引捕へられ群集の中を曝し者に、卑むべき罪囚と同樣の苛酷なる待遇を受けまして、追立て〳〵大道を牽いて行かれましたのも、同じく陛下の御爲に致した事でござりますか。」

大法主は落付き濟まして、

大法主「フム、其何の罪もない銃士が、然も一時間以前、拔刀を以て其筋の者に、無法の襲擊を加へた事實は、少しも陛下に申されませぬな。」

（七十二）　劍にかけて…………

利根里は聞くより威丈高に、

利根里「あいや大法主のお言葉ではありますが、左樣の事の有るべき筈は斷じてありませぬ。阿蘇は現に其一時間前、微臣と晩餐を共にしました後、私邸の廣間で其折同席の鶴見公爵、小浦伯爵などゝ會談致して居つたのでござります。二つ身體があつたらば知らぬ事、何で其やうな事が出來ましやうや。」

大法主「併しながら現に、細谷町での狼藉沙汰…………。」

利根里「フム、其狼藉沙汰の有つたか無いかは、微臣の與り知つた事では御座らぬ。併しそれは阿蘇の所爲でないといふ事を、武士の本分、微臣劍にかけて重ねて斷言致しまする。」

大法主「いや、疑はしいのは其細谷町の、同じ家に住つて居る阿蘇の友人、瓦斯困出の若い男…………。」

利根里「ほう、そりや有田太郎と申す者、今陛下に申上げました阿蘇の親友、塙男

爵の衞士の事でござりましやう。」

大法主「云はゞ貴方の烏帽子兒のやうな男、行屆いた貴方の保護の下に居る若い男の事で、」

利根里「はゝゝ、陛下も御存じあらせらるる彼の遊佐の件、其翌日の古名の件以來、大法主の其やうに思はれるは御至當の事に存じます。如何にも其男の事でござります。それが又何う致しましたか。」

大法主「貴方は其有田とやらが、阿蘇を教唆したやうな疑ひを持たれはしませんかな。」

利根里「ナニ有田が教唆しましたと。阿蘇は有田より十も歳上の男でござります。左樣な事は勿論ござりません。」

大法主「して見ると其有田と云のが……………。」

利根里「いや、有田は此事に何等の關係もありませぬ。有田も其夜微臣の邸に參つて居りました。」

大法主「はて、誰も彼も都合よく貴方の邸に居つたと見えますな。」

利根里は言下に舌の根鋭く、額に怒りの閃きを見せて、

利根里「むゝ、大法主には微臣の言葉をお疑ひなされるか。」

大法主「いや決して、只貴方にお聞申したいのは、有田が貴方の邸に居つたのは何時から何時頃の間でありましたか、一言それを聞かしてお貰申しましやう。」

利根里「易い事でございます。殊に其時刻に付いては、正確に今證言する事が出來まする。と申すのは有田が丁ど參りました時餘り遲いと存じて最初に時間の談話を致しましたが、其折確と時計を見て置きましたから。

大法主「フム、して有田は幾時に來ましたな。」

利根里「參つたのは丁ど九時三十分でありました。」

利根里「して貴方の邸を出たのは、」

大法主「十時半であります。はて、これでも未だお疑ひなされますか。」

大法主は當座に少し行詰つたが、

利根里「むゝ併し、阿蘇は兎もあれ、細谷町の其家で捕縛されたのだ。」

利根里は直ちに口を衝いて、

利根里「はて友人が友人の家を訪問するを禁ぜられて居りますか。徹臣の隊の一銃士が塙の隊の一衛士と、親しく交るのが何の不思議？」

と言葉も緩めず押返して言つた。

(七十三)　即刻微臣へ…………

大法主は物々しく、

大法主「左樣、若し其家が容易ならぬ嫌疑を受けて居る時、殊更行くのは穩やかならん事で、」

陛下「利根、里其家には嫌疑が掛つて居るのだ。其方は多分、それには氣が付かんで居つたらう。」

利根里「はツ、御意の如く、微臣は其やうな事を何も存じませぬ。併しながら、縱令其家には如何なる嫌疑が掛つて居りましたにせよ上の有田の住ひ居ります方に何等の後暗い事のございませんのは、微臣誓つて保證致しまする、微臣の存じ居りまする中に、彼有田の如く、陛下に無二の忠節を勵み、將又大法主に無上の崇拜を拂ひ居りまする者は、外に類もございませぬ程に見受け居りまする者、何とて然る事のございましやうや。」

陛下「フム、利根里の申す處で見ると、阿蘇には全く罪のない樣子ぢや。公爵、こ

りや何うしたものであらうな。」

利根里は其儘衝と進んで意氣込み、強い聲音を更に、

利根里「陛下以上微臣の陳述によりまして、阿蘇の冤枉のほどは、敢て聖慮を累はすまでもござりませぬ。陛下の軍隊の名譽上、阿蘇は即刻、微臣へお引渡しの程を願ひまする。然もござりませねば利根里に於きまして…………。」

陛下「待てッ、」

利根里「はッ、」

陛下は利根里の前からの景色に、稍暫し御躊躇の御樣子、其儘御思案の體に見えたが、やがて大法主に打向はれ、

陛下「むゝ若し公爵が別に此事に付いて…………。」

大法主は逸早くそれと看て取つた。

大法主「あいや、鄙臣は陛下の畏い思召を決して兎や角う申すものではござりませぬ。」

陛下「むゝ、利根里、其方は余が父、故國王を誓ひに立て、阿蘇は當時、確かに其方の

邸に居つて、少しも此事件には關係がないと云ふか。」

利根里「はッ、恐れながら故國王陛下、現陛下も上覽あれ、利根里こゝに誓言致しまする。」

大法主「陛下、憚りながら聖慮を仰ぎまするは、若し此やうにして、彼の者を御免しに成りますれば、事實は全く湮滅して了ひまするが……。」

利根里「あいや、其御懸念には及びませぬ。阿蘇は逃げも匿れも致しませぬ。何時なりとも御召喚のあり次第、何處へなりとも罷出でます。微臣彼に代つて確とこゝにお答へ申して置きましやう。」

陛下「むゝ利根里の申す如く、阿蘇は何時でも又呼ばれるぢや。公爵、それに、」と傍に近付けて耳に口、

陛下「兎もあれ一時愿うするが可い。これには政略があるぢや。」

陛下の政略の一語に大法主は心窃かに微笑を禁ずる事が出來なかつた。

大法主「陛下の御意の儘になされませい。赦免の權は、一に陛下の御手にあるのでござります。」

利根里は又も、向直つて屹と、

利根里「あいや、赦免とは罪人に對する言葉でございます。徴臣の銃士は何の罪もないものでございます。阿蘇を徴臣にお引渡しの事は、勿論正當に然るべき事でございまするわ。」

(七十四) 舌の奧

陛下「して阿蘇は、今何處に居るのぢや。」

利根里「彼の蓮戸に幽閉されて居ります。苟くも陛下の銃士が、最下等の囚人同樣、申すも無念の窖牢の中に投込まれて居りまする。」

陛下「言語道斷、はて、何と致したら……。」

大法主は何と思つたか、打つて變つて易々と、

大法主「陛下、直さま阿蘇を釋されませい。餘人ならぬ利根里殿が、劒にかけての保證とあれば、實過分の事ではござりませぬか。」

利根里はヽッと會釋したが、思ひの外の大法主の出方に、內々少からず氣味惡く、又もや事の縺れぬ中にと、進んで直と、

利根里「さらば陛下」

陛下「可いわ。暫く待てい。」

と軈て阿蘇釋放の勅書に、親しく御名を署せられて、利根里の手に賜つた。利

根里は其儘押戴き、直ちに阿蘇を引取る爲に、急いで御前を辭して行つた。大法主は此時まで、一言春木公爵の事を、陛下の御耳に入れなかつたが、利根里の去るのを篤と見濟まし、再び陛下と向合ふと共に、

大法主「や、思はぬ事で隙取りましたわ。陛下、つい妨げられて申上げんで居りましたが、春木公爵が此五日の間、竊かに巴黎へ參つて居りまして、昨日僅かに歸國致しました。」

陛下は思はず、玉座をすくと立上がられやうとした。

陛下「ナニッ、公爵な……何と云ふ。」

大法主は得たりとばかり、態と表に落付いて、

大法主「はッ、當地へ春木公爵が……。」

見る〳〵陛下の御面は、赤くなり又蒼くなつた。八重に亂れた御胸を、紛らすやうもない態に、

陛下「むゝ、春木は何の爲に、不敵にも當地へ參つたか。」

大法主「申すまでもなく陛下の御敵、彼の新教徒並びに西班牙人等と、かねての

隱謀を廻らします爲に參つたのでござりましやう。」

陛下「いゝや、然うでない。隱謀、何の隱謀、余が名譽に對しての隱謀ぢや。公爵足下は今の程、世良田夫人も此五日の間、竊かに巴黎へ參つて居つたと申したではないか。」

大法主「はッ、世良田夫人も參つては居りましたが、勿論それも政治上の……。」

陛下「何と、有らうがそりや附けたりぢや。春木と世良田、疑ふ處が有るものかい。不屆なは彼の……。」

大法主は慌たゞしく、

大法主「陛下、陛下、恐れながら何と云ふ御考へでござりまする。操正しい皇后陛下、殊に陛下に深く御心を寄られて居まする御方に、あられもない名を着せられまするは、餘り御專斷に過ますかと心得ますが、」

陛下「公爵、よしない事を。余は何も彼も承知して居るわい。」

大法主「あいや鄙臣は此度の、春木公爵の潛行は、全く政治上の目的ばかりと存じまするが……。」

陛下。云ふな公爵、確かぢや。むゝ。若し皇后に罪があらば、目に物見せてくれねば置かんわ。」

（七十五）　思ふ壺

それと陛下に見られよがし、大法主は歎息して、

大法主「然う仰せられますれば鄙臣にも、或はといふ疑ひの聊か無いでもござりませぬが、併し今は申上げますまい、陛下、さる忌まはしい方に御心を向けられまするは、甚だ宜しからぬ事に心得ます。幾重にも御反省を願ひたいのでござりまするが……。」

陛下「フム、何ぢや其疑ひといふのは、聞かせい、公爵、何が有つたのぢや。」

大法主「さりながら今、殊に御心の穏やかならぬ折……。」

陛下「むゝ、其方は皇后の味方するか。」

大法主は再び歎息した。

大法主「はて、其仰せでは是非がござりませぬ。包むも不忠に當りますから、有りの儘に申上げまするが、かねて陛下の仰せによりまして、鄙臣折々彼の蘭野夫人に、奥の模様を問合せる事がござります。先程其談話によりますと皇后

陛下には此四五日以來、何か御樣子が變つて居られましたが、昨夜は殊に御物思ひの體で、更闌くるまで御寢もならず、今朝は又長い事、烈しく泣入つて居られましたが、此日は一日、御文を認めて居られましたとの事。」

陛下「おゝ、それこそ春木に遣はす爲。公爵、余は其手紙を差押へねばならんわ。」

大法主「えい、何を仰せられまする。餘の者ならば存じませぬ事、假初にも皇后陛下に、無體な事はなられますまい。」

陛下「何の、余は國王ぢや。聞け、公爵、余は何としても其手紙を見ねばならんわ。」

大法主「さりながら陛下……。」

陛下「えい、二言と申すな。余が心は枉げられぬわ。」

大法主は三たび歎息した。

大法主「已むを得ませぬ。望みませぬが陛下の御爲、陛下、それには唯一つの手段がございます。」

陛下「むゝ、何ぢや、それは、」

大法主「此事を大審院長の杉浦にお命じになるのでございます。彼の職責と

して事を行はせるのでございます。」

陛下「妙ぢや、直さま杉浦を召寄せい。」

大法主「多分今、鄙臣邸に參つて居る事と存じまする。先刻用務の爲に來てくれいと申遣はしまして、若し未だ鄙臣が歸らぬ中に來たなら、暫く待受けてくれるやうにと申殘して出ましたが、」

陛下「おう急ぎ召寄せて、余が命令を申傳へい。」

大法主「はッ、直ちに事は取計ひまするがさりながら若し皇后陛下のお聞入れのない節は……。」

陛下「ナニッ、余の命令を聞かぬといふのか。」

大法主「左樣でございます。陛下の御命令と御承知のない以上、」

陛下「其氣遣ひは要らん事ぢや。余はこれから自身に參つて、大審院長を遣すと云つて來るは。」

仰せと共に、陛下は早くも座を立たれた。大法主は念を押すやうに、

大法主「併し陛下、此事は鄙臣の決して望みませぬ處で。」

陛下「可いは、足下の心はよく承知して居るわい。」と言捨てゝ既立出でられた

大法主は思ふ壺の、色にも見せず此方にぢッと、御後影を見送つた。

（七十六）大審院長

陛下は外へ成らせられると、御廊を彼方へ、後宮への通ひ戸を過ぎて、直ちに皇后の御座す方へと進まれた。

皇后陛下は、折しも傍に、飯田夫人、佐原夫人、物部夫人、江波夫人など、數の女官に冊かれて居らせられた。片隅には、御生家の西班牙から隨いて來た只一人の侍女、早苗が包ましやかに控へて居た。江波夫人は手に美しげな冊子を取つて、高らかに朗讀して居る。他の者は耳を傾けて聞濟まして居る。皇后陛下も同じく耳を欹てゝ居る振で、獨り物思ひにくれて居られた。

洵に盡きぬは長き御身の憂さ。麗はしからぬ陛下との御語ひ、つれなき契りの、中に立たれて、殊に執拗き大法主の情けの眼遣ひを斥けてから、思知れとや日夜の苛責、味方といふ味方の者は、或は逐はれ、或は流され、或は首を打落さるる押續いての無殘の有樣、賴みに思ふた世良田夫人、瓜生夫人さへ配流の後、一人殘つた堀江すらも何時捕縛の憂目を見るか知れぬといふ地位に居るのだ。

今し其等の御物思ひに、結ぼれ解けず人知れぬ涙を隱して居られた折柄不意に陛下が成らせられた。

見るより早く江波夫人は、忽ち書籍を下に伏せた。女官は一同、直に立上つて敬禮した。俄かに礑と靜まり返つた一室、陛下は何の御會釋も無く、衝と寄つて王妃の前へ、立たせられた儘膠もなく、

陛下「今此處へ、大審院長が、余の命令を受けて參るから、會つて能う談話を聞いてくれい。」

何かは知らず大審院長の使、日頃陛下の御仕打から、王妃は聞くよりはッとなられた。

皇后「何でございます彼の大審院長が、勅命を受けて妾の許へ……。」

陛下「左樣、余は只其事を一寸言ひに來たのぢや。御身が追返すやうな事が有つてはならんからの。」

皇后「なに妾が、追返すやうな事柄なのでございますか。」

陛下「そりや參れば解る事ぢや。御身は心得られたかな。」

皇后「陛下御自身仰せられませぬ事、若しかして追返すやうな事、陛下、そりや何でござりますか。」

陛下「フム、大審院長が參つたら聞くが可い。」

仰すと其儘踵を返して、早くも外へ立出られた。それと殆んど入違ひに、純然たる大法主黨、大審院長の杉浦は仰せを受けて恭しく、脇の扉口から進んで來た。

王妃も並居る女官の一同も、陛下に對する敬禮を、未だ其儘に立上つて居たが、王妃は杉浦の影を見ると、直さま元の座に着かせられ、女官達にも前の如くにさせて、重々しく、皇后陛下の威儀を作られた。

皇后「杉浦か。其方は何の爲に此處へ。」

杉浦は先づ彼方に恭しく禮を施し、聽て前へ進出たが、流石に稍口籠りながら、

杉浦「はッ、勅命によりまして、御手許の御書類を搜索の爲に……。」

王妃は颯と御氣色を變へられて、

皇后「ナニ書類を？……」

と既打顫はれた御聲。

（七十八）　此身に指も

突として忽ち鋭く、
皇后「其方は此妾を何と思ふ。」
恁くある事と、期して居た杉浦は、更に謹んで、
杉浦「はッ、恐れながら皇后陛下と……。」
皇后「そ……それ承知の上不敬にも、妾の書類に手を掛けるか。」
杉浦「如何にも微臣一身に取りましては、申上げます言葉もござりませぬが、勅命なれば致方もござりませぬ。伺ひまするが陛下には、今の程此處へ成らせられは致しませんでござりましたか。此杉浦の出ますするを、御自身御通達はせられませんでござりましたか。」
王妃はいよ／＼只ならず、聞くより屹と、
皇后「むゝ、すりや妾は罪人ぢや。ならば自由に檢めませい。早苗、其處の手許の錠を皆杉浦に取らすやうに。」

杉浦は只儀式ばかりに、やがて其處此處、御手許の書類を調べ出したが、其日王妃の認められた、目指す御文は搜ねた其處等に、無いのは明かに知つて居た。流石に稍暫く躊躇されたが、恁くては何時まで果てしがないので、杉浦は意を決して、王妃の前へ進んで行つた。

杉浦「申上げまする。」

皇后「な……何ぢや。」

杉浦「恐れながらお聞下されませい。」

皇后「何ぢや。早う言へ。」

杉浦は形を正して、

杉浦「陛下には今日、皇后陛下が或御文をお認めになりましたを御承知で居らせられます。其御文の未だお手許にござりますのをも、確と御承知で居らせられます。微臣仰せを受けましたのは其御文の事でござります。心ならず御側を騷がせまして搜ねました處、此御居廻りにはござりませぬ。併し那邊にかなければならぬ筈でござりまする。」

皇后「な……なにを、」

すつくとばかり居丈高に、王妃は嶮しい御物言ひに、

皇后「これッ、杉浦、假初にも妾は皇后なるぞ。妾の此身に、指でも其方は觸れられるか。」

杉浦「はッ、さりながら、微臣は陛下の御意の儘に仕つて居るのでござりまする。陛下に仕奉つて居りまする以上、陛下の仰せを直ちに行ひまするのは、勿論の事で。」

皇后「おゝ、察する處、又しても大法主の間諜の仕業、如何にも妾は今日或文を認めた、如何にも其文は未だ出さずにある。其文は此處に在るのぢや。」

と御胸のほとりを、玉のやうな御手に押へられた。

杉浦「さらばそれを微臣へお遣はしになりませい。」

皇后「いゝや。陛下の外には誰にも渡さぬ。」

杉浦「はて、何の仔細もござりませぬ事。微臣は仰せによつて參つたのでござりまする。御快くお遣はしを願ひまする。萬一、たつてならぬと仰せられま

すれば……。」

皇后「おゝ、何とする。」

杉浦「是非がござりませぬ。強ひて御受取り申上げまする迄でござりまする。次第によれば御身邊を搜索せいとの仰せを受けて參りました微臣、」

皇后「えゝッ、それ迄の仰せを……。」

と王妃は更に色を變へられた。

(七十九)　御文の面

皇后「あゝ、此侮辱を忍ぶほどなら、寧そ最う死んだ方が……。」

杉浦は物をも言はず、恭しく一禮して、衝と前へ進出た。咄嗟と王妃は跡へ一足、怒りに燃る御眼を上げて、礑と杉浦を睨まれた。杉浦は思切つて、右手を其、御文の有る方近く突付けた。王妃は御歯をきり〳〵と、見る〳〵眞蒼になられたが、片手に僅かに身を支へられ、わなゝく片手に御胸元から、御文を取つて差出された。

皇后「さ、これぢや。持つて行け。疾う目通りを退りませい。これ、皆の者、此者を直ぐ退げてたもれ。」

はッと杉浦は、御文を受けて、頭を深く、下に額突くばかりにして、直に退つた。王妃は其影の見えずなると共に、寸時も堪へず、下に倒れやうとして、お側の者の腕に身を投掛けられた。

杉浦は引返して、御文を直に、陛下の御手に奉つた。それと待構へられて居た

陛下は、取る手も遲い御思ひの、表の宛名を、何より先に見られると、誰とも書いてないので、既激せられたやうに、やがて開いて、只ならぬ御眼に讀下された。案の外に其御文は、皇后陛下の御同胞、西班牙の國王への書柬であつた。中には只大法主攻擊の計畫、徹頭徹尾政治上の意味ばかりで、艶かしい言葉などは只の一字も染められてない。

陛下は御喜悅斜めならず、今しも杉浦に何をか囁いて、引退らせた大法主に御文を其儘差付けられた。

陛下「これぢや。公爵、足下の云ふた通り、今度の件は、矢張政治上の陰謀ぢやつたわ。見い、此手紙に、余の疑つた事は何も書いてないわい。中は全で足下の事ばかりぢや。」

大法主は御文を手に執つて、すると鋭い其眼眸に、恐ろしい注意を拂つて讀んで行つた。讀終ると又繰返したが、靜かに脇へ差置いて、軈て頭を擡げると、

大法主「陛下、これで見まするど……。」

陛下「フム、何か小慧しい事を申して居るが、」

大法主いや、鄙臣の敵方の者は、隨分と進んだ計畫を致して居りまする。陛下が若し鄙臣を野にお斥けになりませねば、それにそ由々しい大事でござりまする。陛下の御上に致しましても、鄙臣の身を退きまするが何よりの得策、鄙臣一個人に取りましても、退隱致しまするが何よりの幸福でござりまする。」

陛下は思ひも寄らぬ御氣色の、押直られて、

陛下「公爵、足下は何を云はれるぢや。余は未だ嘗て一言も足下に……。」

大法主は殊勝氣に、

大法主いや、陛下は何事も仰せられは致しませぬ。憚りながら又陛下に對しまして、態と申上げたのでは決してござりませぬ。眞實の處、劇職劇務、御承知あらせられまする日夜を分かぬ心身の過勞、鄙臣の健康は全く削がれて了ひましたのでござりまする。陛下、鄙臣の退隱を望みまするは、今日に始まりました事ではござりませぬ。」

（七十九）色にも見せず

陛下「解つた。公爵、何も云ふな。此文中に名を聯ねた、西班牙國王を初めとして、總て足下に刄向ふ奴は、皆相當の懲しめを受けいで何となるものか。皇后といへ許しはせんわい。

大法主「な……何事を仰せられまする。假初にも皇后陛下が、鄙臣の爲に露ほども御憂目を見られましたら、言語道斷、恁程の曲事が又とござりましやうや。日頃鄙臣を敵視せられまする皇后陛下、此御文に何の不思議もござりませぬ。勿論知ろし召さるゝ如く、其御憎しみにも拘はりませず、鄙臣は陛下に反對致しまして迄も、皇后陛下の御肩を、常に持ち居りますのでござりまする。あゝ、さりながら若し、先程の御仰せの如き、恐れながら御節操に拘はります儀がござりました上は、何とて斟酌仕りましやうや。其折こそは眞先に、「陛下、餘の事とは相違ひまする。此大罪に何の御慈悲。斷じて御宥しあられまするな。」と勿論の事申上げまする。ヤ、幸ひにしてさる忌はしい事は、たゞ陛下の御疑

ひに止まりました。何より證據の此御文。」

陛下「然うぢや公爵、春木の事は、足下のいふ通りぢやつた。それは兎もあれ、書柬の表、怪しからぬは皇后ぢや。」

大法主「あいや、陛下には如何なる時にも、憚りながら皇后陛下に對せられましては、餘りに嚴酷に過ぎられますやう……。」

陛下「むゝ、余の敵足下の敵に向つては、縱令何れほどの高貴の者とて、又何のやうな危難に遇はうと、飽くまで余は嚴酷にせねば置かんわ。」

大法主「さりながら陛下、皇后陛下は鄙臣にしてこそ敵とも申せ、決して陛下の敵ではござりませぬ。全く貞淑無二の御方、一點申分のない御方でござりまする。此御文を取上げられましたも、申さば正なき御振舞や、併し此儘ではなりませぬ。恐れながら鄙臣、取敢ず御仲直りの事を取計ひましやう。」

陛下「むゝ、それにしても皇后から最初に謝罪つて出るやうにせねば……。」

大法主「いや併し此度は、皇后陛下の御貞操を、疑はれたる御過失が陛下の方でござりまするぞ。こゝは何とか、陛下から御手を下げられませいでは……。」

陛下「ナニッ、余からして手を下げる。ならぬ。そりや斷じてならぬぞ。

大法主「鄙臣幾重にも相願ひまするが、」

陛下「縱令又足下の云ふ通りにした處で、先づ余の方から何うせいと云ふのぢや。」

大法主「他に御心を煩はせられまするには及びませぬ。皇后陛下の悅ばれます事をただせられます分。」

陛下「何ぢや其悅ぶ事とは、」

大法主「打絕えました大舞踏會を催されませい。皇后陛下の如何ほど舞踏を好まれまするかは、かねて陛下の知ろし召す處、皇后陛下の爲にとあつて、其御催しのありますれば、いつまで此度の御憤りを、御含みなされて居られましやう。」

陛下「公爵、足下は余が、さる遊びを好まぬを承知であらうが。」

大法主はしたりとばかり、色にも見せす篤實だつて、

大法主「さればでござりまする。好ませられぬ舞踏會を、皇后陛下の御爲に強ひて催されたとござりましたら、皇后陛下の御思召は如何なものでござりまし

やう。のみならず彼の先程御紀念の爲に遣はされました、美々しい金剛石繫ぎの頸飾りを、眩く裝はれて出御になりまする恰も好い儀會でござりまする。それも一つの、皇后陛下の御慰めではござりませぬか。」

（八十）御頸飾りを

陛下も漸く首肯かれた。御文の表を讀まれてから、思ひの外の御喜悦を、流石それとは打出されず、其儘大法主に向はれて、

陛下「公爵、足下の勸めぢや。兎もあれ足下の取持に任せやうわ。併し公爵足下は元來皇后には餘り寛大ぢや。」

大法主「あいや、恐れながら、寛仁大度は王者の德でござりまする。總て嚴酷の事は閣臣の手に任せられませい。それが陛下の御利益でござりまする。」

と聽て退出の時刻になつたので、尚も王妃と、御心の速かに解合ふやうに、懇ろに願上げて御前を退つて行つた。

それとも知られず、王妃は御文の露顯の結果、必定嚴しい御譴責の、直にも來る事と覺悟されたのが次の日意外にも陛下から、進んで御和解を求めて來られたのに少からず御驚きになられたのであつた。さりながら身は皇后として彼の淺猿しい目を見られた揚句、容易に御心の解けやうともされなかつたを

御側の人々に種々に說かれて、漸くの事御樣子だけも稍々御心を取直された體を見せられた。其機を外さず陛下は直さま、近々の中王妃の爲に、殊に大舞踏會を催される御心組を話された。

かねてから、疎々しい御待遇に、さる御催しの仰出される事は、殆んど途絕えて居た折であつたから、其仰せを聞かせられると、中には何と思はれたかは知らず、未だ御不快の名殘りの色は、王妃の御面から消去つた。

皇后「身に取りまして有難き御仰陛下、そりや何日の事でござりまするか。」

陛下「むゝ、其日は何れ、大法主と相談して決めるとしやうわ。」

實際、其後陛下は、日每に大法主に向はれて、此大會の日取りに付いて、繰返して御下問を被せられたが、其度每に大法主は、言を左右にして容易に日を決めやうとしなかつた。

それから八日過ぎての事、大法主は龍動から待ちに待つて居た返書を受取つた。書面は女文字で只簡單に、

御望みの品手に入り申候。只今手元の都合にて出立致兼候まゝ、至急五千

圓ほど御差送り下され度、金子到着後五日の中に巴黎へ參らるべくと存し候かしこ。

恰も其日、陛下は又も、大法主に同じ御下問があつた。大法主は指を折つて面に見せぬ胸の中、

大法主「むゝ、宮子は五日中に來ると云つた。金子の遞送にも四五日は掛る途中の故障何彼を入れて、何うしても十二日より前には出來んわい。」

陛下は勿論、何をも知らせられず。

陛下「何うぢや。公爵未だ決らんのか。」

大法主「いや、自他の便宜、此十月の三日にせられませい。」

と急に調子をかへて、

大法主「陛下、追つて此事は申上げまするが、會の前夜皇后陛下に彼の金剛石繫ぎの御頸飾りを必ず掛けられて出御されますやう、お忘れなく御申聞せられませい。」

（八十二）彼の大法主で………

大法主が其頸飾りを陛下に注意したのは、是で二度の事だ。流石陛下も何か其間に秘密の蟠つて居る事と直に悟られた。

陛下は其處で、何か知らぬ其仔細を、王妃の口裏から引出さうと思召して、素知らぬ振で軈て王妃の方へ成らせられた。

何とか其實を得られやうとして、威し賺し種々に問試みられたが、未だ其端緒をも見出されぬので、寧ろ直接に其事をと、

陛下「むゝ、かねて其方に吹聽して置いた大夜會は、近々彼の飛勇館で催されるが其折余は、いつぞや其方に遣はした彼の金剛石繋ぎの頸飾りな、あれを掛けて出て貰はうと思つて居るが………。」

王妃は最早、陛下は何も彼も知ろし召して居られる事と思はれた。御顔の色は見る／＼蒼ざめて、恐ろしげに陛下の方をちらと見られたが、其儘差俯向かれて、頓には御口も開かれぬ狀であつた。

陛下は何事をも思し分けられなかつたが、何れにしても故ある事と其儘王妃を打目戍られて、

陛下「これ、其方は聞いたであらうな。」

王妃は目に見えて言淀みながら、

皇后「は、承りましてござります。」

陛下「むゝ、勿論其方は出席するぢやらうな。」

皇后「は、出ませいで何う致しましやう。」

陛下「今言ふた彼の頸飾りを掛けて、」

皇后「は、はい。」

王妃の御面持は見奉るも痛ましいやうであつた。陛下は尚もぢツと御眼を注がれた儘、

陛下「おう、それで何も調つたぢや。余の申す事はそれだけぢや。」

皇后「さりながら陛下…………。」

陛下「むゝ、何ぢや。」

皇后「其夜會は、何日御催しになるのでござりまするか。」

陛下は事の前後の様子から、此御問に明答を與へまいとゆくりなく思召した會の前夜と言つた大法主の注意をも思合はされたので、

陛下「最う間もなくぢや。併し其日は、余も確と能く覺えて居らん。早速大法主に問合せて見やうわ。」

皇后「おゝ、さては大法主が、此御催しの事を、陛下に最初申上げたのでござりますか。」

陛下「え、然うぢやがそれが何としたのぢや。」

皇后「賜はりました彼の頸飾りを、掛けてと妾に申されますやう、陛下に御勸申しましたも、矢張大法主でござりましやうか。」

陛下「フム、といふのは……………。」

皇后「大法主、おゝ、彼の大法主でござりましたか。」

陛下「はて、余であると大法主であるとで、其方に何の意味合があるのぢや。此所望に何か罪でもあるのか。」

皇后「いえ、何と致しまして…………。」

陛下「さらば其方は、異議なく會に出るぢやらうな。」

皇后「は、仰せまでもなく。」

陛下「可い〳〵。それで可いぢや。むゝ、約束したぞ。」

とばかり[illegible]て出て行かれた。王妃は式の禮より先に、がツくり御膝を沈返つて、暫し御聲をも出されなんだ。

（八十二）　お小夜

王妃は今や必死の場合、右も左も敵の中に有るに有られぬ御思ひ、

皇后「あゝ最う、詮方もない身の破滅、大法主は殘らず何も知つて居る。陛下に頸飾りの事をお勸申したも彼の大法主戀の恨みを執拗くも飽まで晴さう下心身の廻りに誰一人、頼む者もない今の有樣、あゝ最う、此上は何うする事も…………………。」

思ふほど猶堪へられぬ、御身を下に引崩して、よゝとばかりに泣入られた。

恰も其時、

「もし、憚りながら私のやうなものでも何かのお役に立ちます事は出來ませぬのでござりましやうか。」

王妃は吃驚して御顏を上げられた。今此何處を見ても憑りのない身に、此やうな優しい言葉を掛けてくれるのは何者であらう。と急がはしく其方へ濡勝つた御眼を注がれた。

同時にお次の物の蔭から、面に籠めた眞心を其儘御前へ進寄つたのは、彼の美しいお小夜であつた。お小夜は今、お次に御衣の取仕末して居た折柄、不意に陛下が成らせられたので、出る事もならず此方に控へて前後の御談話を聞取つたのであつた。心一つに御憂さを身に振分けて、共々に溢るゝ涙に搔暮れながら、

小夜「まことに、私のやうな身分の者が、差出て申上ます言葉ではございませぬが、御爲とならば憚りながら命づく、火水の中をも厭ひは致しませぬ。卑しい身であれ此念力に、當差つての御難義を、必ずお救け申上げまする。」

皇后「えツ、其方が、彼の其方が此場を…………。」

お小夜は更に思込んだ氣色に、

小夜「はい、如何にともして私が、假令此身を切刻まれましても屹度御難儀を御救け申さずには置きませぬ。」

皇后「おう今此隙間もない見張りの中を、其方は又何として…………。」

小夜「恐れながら、決してお案じなされまするな。數ならぬ身ではございます

るが、誰にも御油斷のなりませぬ中、何うぞ此身に何もお任せなされませ。只今陛下の仰せられました、金剛石繋ぎの御頸飾りは、いつぞや私の御連申しました、春木の御前に御遣になられたのではございませぬか。彼の公爵が小脇にお持ちなされて歸られました、御紋散らしのお小函の内に、其お飾りが入つて居りましたのではございませぬか。もし、あの然うでございましやうが。」

王妃は聞かれて我にもあらず、恐るゝ如き御眼眸に、はツと四邊を見廻し給ひ、

皇后「おう、そ………其方の申す通り………。」

お小夜は衝と身を差寄せて、

小夜「もしそれならば、一時も早く、其お飾りをお取戻しにならねばなりませぬ。」

皇后「そ………それが出來るほどなら何のこれほど悶えやうぞ、相手は名に負ふ大法主何處に油斷があらうものか。其方は又何として………。」

小夜「直さま公爵へ御使を、」

言はせも果てず王妃は重ねて、

皇后、さ、其使を誰がする。頼まう味方が、ま、何處に有らうぞい。」

（八十三）　其方より外に

小夜「もし、御安心なされませ。身に代へまして私が首尾よく事を仕負せましやう。何も私にお任せなされませ。少しもお氣遣ひの入りませぬ、確かな使の者を差出しましやう。」

皇后「おゝ、それにしても其者に妾の手紙を持たして遣らねば……………。」

皇后「そりや、然う遊ばさねばなりませぬ。眞箇のさッとした御口上書でも一寸御認めになりまして……………。」

皇后「したが其口上書が此身に取つては免れぬ證據、罷違へば其爲に恐ろしい宣告も、淺猿しい離婚の沙汰も流罪の憂目も見ねばならぬ。」

小夜「そりや其御文が敵方の手に落ちました曉は、其やうな事もござりましやうが、此私必ずお請合申しまして、首尾よく公爵のお手元へ、屹度差上げて御覧に入れまする。」

皇后「何と、さすれば妾は、妾の名譽、妾の地位、妾の生命を殘らず擧げて、其方の手

一つに任して了ふも同じ事。」

小夜「左樣でござります。恐れながら押して申上げまするが、此私にお任せ下されませ。其お氣遣ひの御名譽も又お身の上も再び御安泰に相成りますやう、屹度私が取計ひまする。」

皇后「して其方は、まア何うするのぢや。安心の爲、それから先へ聞かしてたもれ。」

小夜「此間でござりましたが、一寸御耳にも入れました、私の良人が四五日前方釋されて宅へ戻つて參りました。彼の事以來、私は未だ會ひに參りませぬ。申上げるも何でござりまするが、誰に依估贔負のござりませぬ。何處までも正直な男でござります。私の申ます事なら、何によりませず爲てくれます者今度の事も屹度私の申付けました通り、勿論皇后陛下の御使とは申しては遣りませぬから、それとは知らず、只受取つて出立を致します。そして宛名のござります先へ何も知らず間違ひなくお屆申して參ります。」

皇后「おゝ、其方は屹度請合つて………。」

小夜「はい、何のやうにもお請合申しまして……。」

皇后「小夜ッ、」

とばかり王妃は、無手とお小夜の手を執られて、思ひに餘る御心に、ひたとお小夜を打目戍られたが、其美しい眼の中に、僞知らぬ眞心を、明らさまに認められると思はず其手を戴かれるやうに、

皇后「小夜何も言はぬ。知つての場合、知つての身の上、何うぞ其方のよいやうに何ともして此場の危急を………。」

小夜「勿體ない仰せ言でござります。假令此命を召されましてもさら〳〵惜みは致しませぬ私、これほどの事が何でござりましやう。」

皇后「おう能く言ふてたもつた。其方の外に其やうな事を今此身に言ふものがあらうか。小夜過分に思ひますぞ。」

小夜「えゝ、何事でござりまする。冥加に餘りました其やうな事を、最う仰有つては下さりまするな。それよりは御文を早う御認め下さりませ。一刻も最う遲れてはなりませぬ。」

皇后「然うぢや。そんなら。」
と王妃は急はしく御机の方へ進寄られた。

(八十四) 何の位

長くもがなの御心も、急かれるまゝの走り書、手早く御文を認められ、尙くれぐれの御賴みを、仰せてお小夜に御渡になつた。お小夜は確と其御文を、懷深く押隱して、要所々々に大法主方の、鵜の目鷹の目油斷のない、見張りの中を怪しまれぬやう、嚴しく用心してやがて大奧を脫出した。

幸ひ誰にも怪しまれず、首尾よく我家へ歸つて來たが、勿論お小夜は、前にも王妃に言つた通り、穗梨の赦免の後未だ一度も逢はないので、此四五日の僅かな間に、俄かに穗梨が無類の大法主方になつて了つた事などは、夢にも知らう筈がない。一度大法主の握手を受けてから、夢中になつて歸つて來た處へ、思ひも寄らぬ六鄕伯が三度迄の訪問、其度毎に大法主の懇な意を傳へて、十二分に旣味方へ引入れて了つた。

分不相應の六鄕伯とは友達交際、殊更世に並ぶ者もないほどに思つて居る大法主が、掛け過ぎる程、穗梨に目を掛けて居るといふ六鄕の談話に、穗梨は全く

有頂天に成つて居た。お小夜を一時取押へたのは、政治上の或警戒の外に何の惡意もないのだといふ事を、最初に說込まれて勿論それと合點して居た。穗梨は最う、大法主の片腕にも成濟ました氣で、一人竊かに肩肱を張つて居た。お小夜は何も知らず其中へ、恰も網に掛つたやうに、容易ならぬ皇后陛下の密書を持つて來たのだ。

小夜「貴方、御挨拶は後にして、急に貴方にお談話申す事があるのですよ。」

と歸つて坐るか坐らぬかに旣言出した。穗梨は流石に眼を睜つて、

穗梨「何だ。何だまア突如に。」

小夜「いゝえ。那樣悠長な事は言つて居られない、急ぎの用事で來たのです。何は置いてまア聞いて下さい。」

穗梨「えゝ、甚麼急ぎの用事が有らうと、俺の飛んでもない災難に遇つたのを、一言聞きもしないで何だ其慌て方は。これ、俺は三日二晚蓮戸の牢で、えらい目に遇つたのだぞ。」

小夜「だから言つて居るではありませんか。那樣事は後にして…………。」

穗梨「ナニ、那樣事とは何だ。」

小夜「解つて居ますよ。まアお聞きなさい。急ぎばかりぢやない大變な事なんですよ。事に依つたら此爲に、貴方の甚麼仕合せになるか知れないのですよ。」

穗梨「へん仕合せだ。はゝゝ、ちつとやそッとの仕合せで、俺は最う吃驚するんぢやないぞ。此一月か二月の內に、滅法界な御出世をしないとも限らないからな。」

小夜「そりや私の言ふ通りにしたら、屹度最う瞬く內ですよ。」

穗梨「はてな、まア何ういふんだ。」

小夜「第一恐ろしい儲仕事です。」

と穗梨の金に脆い弱身を知つて居るので、其處から付入つて說付けやうと思つた。處が穗梨は、苟くも大法主と手を握つた乃公樣だ。那樣事で中々動くのではない。

穗梨「フム儲仕事。」

とばかり侮蔑むやうに鼻であしらつた。お小夜は何も知らぬから、

小夜「貴方、本當ですよ。」

穗梨「え、本當、はてな、額にして何の位？」

お小夜は顏を見上げて、

小夜「然うですね、少くつても一萬圓位。」

（八十五）御免だ、恐ろしい

額で言つて一萬圓、いつもの穗梨なら直に飛付いて來る筈なのが、氣もない顏で、

穗梨「フム、一萬圓、些少はまア纒つて居るな。お前の指環の足し位にはならうと云ふものだ。」

小夜「貴方、眞面目な談話ですよ。」

穗梨「宜しい。大眞面目だ。先づ其一萬圓手に入るとしてさ、其處で其仕事といふのは？」

小夜「今から直に發つて行くのです。貴方に書付を上げますから、其書付を、甚麼事があつても屹度失なさないやうにして、先へ確かに屆けてさへ下されば可いのです。」

穗梨「して何處まで行くのだ。」

小夜「龍動までゞ。」

穂梨「ナニッ、動龍まで冗談云つちや可けない。那麼處に何の用があるものか。」

小夜「でも或お方が、貴方に是非行つて貰ひたいと仰有るのです。」

穂梨「誰だ其或お方といふのは。何も彼も判然と云つて貰ひたいな。お前に斷つて置くが、俺は最う譯の解らない仕事は決してしないと決めた。賴むといふなら遣らない事もないが、其前に一部始終を、殘らず此處で話して貰ひたい。」

小夜「何ですねえ那樣事を。名たゝる御身分のお方のお使で行くのですよ。彼方のお方も同じやうな御歴々。貴方なぞの兎や角ういふやうなお方ではないのです。默つて私の云つたゞけの用さへ果したら褒美はそれこそ、貴方の望み次第、私は屹度請合つて上げます。」

穂梨「御免だ。恐ろしい。又しても何か内所の隱謀事。大法主樣の云つて下すつたのは此處だ。御免を蒙る。飛んでもない事だ。おい、御免を蒙るよ。」

お小夜は目を睜つて、屹と穂梨の顏を打目戍つた。

小夜「えッ、大法主樣が云つて下すつた？　貴方はそれぢや彼の大法主に……。」

穗梨は聞くより得意顔、鼻蠢めかして、

穗梨「おゝ、會つたが不思議か。おい、お小夜、大法主樣は此宇平を、態々呼びにお遣しになつたのだい。」

小夜「呼ばれて貴方行つたのですかい。まア呆れた人だ。無分別にも程があるぢやありませんか。」

穗梨「尤も其時は、實は否應なしに連れて行かれたのだから、俺の勝手にはならなかつたのさ。第一其時は、大法主樣の處へ行かうとは知らなかつたから、勿論俺は進まなかつたのだ。」

小夜「否應なしにと云つて何したのです。」

穗梨「なに牢の中から役人に、無理に引立てられて行つたのさ。俺は實は刑場へ連れて行かれるのかと思つて居た。」

小夜「それぢや向ふへ行つて屹度酷い目に遇つたのでしやう。私の同類だと云つて種々の苛責まれでしやう。」

小夜「處が然うでない。え、お小夜、然うでないのだから不思議だらう。」

小夜「えッ、それぢや………。」

穗梨は身を乘出すやうにして、

穗梨「大法主樣はお手を、此俺に下すつたわ。膝組みで話さうとまで云つて下すつたわ。お小夜、彼の偉い大法主樣が、此俺に膝組みでと仰有つたのだい。」

小夜「えッ、彼の偉い大法主！」

とお小夜は色を變へた。

(八十六) 金貨の響

穗梨「おゝさ、知れた事だ。考へても見ろ。今世の中に、彼のお方より偉い人が何處に有る。彼のお方の御用を聞かれるのは、俺の大手柄といふものだ。」

小夜「えゝッ、貴方が彼の大法主の用を聞く……。……」

とお小夜は更に色を失つた。穗梨は怫然として直ぐ、

穗梨「な……何だ其顏は。御用を聞くのが氣に入らないか。これ、俺は最う、お前が彼の謀叛人達の仲間入りする事を許さないぞ。根が佛蘭西人でない彼の女、腹が西班牙の彼の女を助けるなどゝは何といふ不屆の奴だ。何も見通しの大法主樣が居らつしやればこそ、恁うして安泰に治つて行くのだ。自分の國を危くするやうな馬鹿な眞似を決してするでないぞ。」

穗梨は六鄕伯に吹込まれした通りを、此處で其儘に繰返して居るのだ。お小夜は案外の良人の言葉に、驚くよりは、差迫つた今の身の上、よもや這麼早變りが、良人の身に起らうとは思はなかつたから、皇后陛下にも確かに請合つて來た

大事の御使、飛んで火に入つて來た危險をはッと思ふと同時に、殆んど進退に窮したやうに思つたが、自體穗梨の腹の弱いのと、殊に其貪慾なのを知つて居るので、未だ其望みを捨てゝ了はうとはしなかつた。

小夜「おゝ、そんなら貴方は、現在自分の女房を苦めて居る敵方の、手先に喜んでなつたのですか。」

穗梨「むゝ、國の爲には、一家の事などを考へては居られないわ。」と其臺辭も、矢張六鄉伯の傳授なのだ。穗梨は慿う云つて更に得々とした。

お小夜は冷笑ひ顏に、

小夜「まア、飛んだ事になつたのですねえ。今仰有つた國の事に付いて、貴方は何を知つてお出ですえ。お止しなさい。貴方の爲ですよ。惡い事は云ひませんから、商人風情で、柄にない政治熱になんぞおかぶれなさるな。分相應に最つと得の付く方へお考へなさい。」

穗梨「ナニ得の付く方だ。一寸これを見てくれ。」

と脇の袋戸から、見事な財囊を引出して、叩いて金貨の音をちやら〳〵させな

から、

穂梨「へん、甚麼もんだい。」

小夜「其お金は。」

穂梨「へゝ、未だ解らないかね。」

小夜「彼の大法主の手から……………。」

穂梨「大法主様にも戴けば、六郷さんにもお貰ひ申したのだ。」

小夜「えッ六郷、貴方私を誘拐したのは彼の六郷の仕業ですよ。」

穂梨「むゝ、多分然うだらう。」

小夜「貴方はまア、みす／＼それを知つて居ながら、臆面もなくお金を其手から貰つたのですか。」

穂梨「貰らつた處か。今ちや最う友達だい。」

小夜「呆れた。まア呆れて了つた。貴方は最う、金の爲に性根を腐らして了つたのですね。那樣、那樣さもしい人とは知らなかつた。貴方、私との仲も事に依ればこれ限りですよ。」

云はれて穂梨も流石に驚いた。

穂梨な……何だと。」

（八十七）差手引手

未だ斷つては置かなかつたが、穗梨の爲には戀女房、其お小夜にずツきりと不意に切れ口上で出られたので、曩の擬勢は時の間に消えて失なつた。俄かに退避ながら、

穗梨「何も此爲に、そ…………那樣…………」

お小夜は氣色を看て取つて、尙も手強く、

小夜「いゝえ、私は那樣汚らはしい人に、最う未練も何もありません。」

穗梨「お小夜、これさお小夜…………。」

小夜「知りません。最う何も貴方の御勝手でしやう。」

穗梨「何だな。お前でもない。それぢやお前は、何うすれば可いのだ。」

お小夜はこゝぞと又出直して、談話を戻して見た。

小夜「貴方、それならば私の、言つた事を聞いて直に龍動へ發つて下さい。それさへして下すつたら、何も水に流して忘れて了ひましやう。元々通りに、ね、貴

方。」

可哀相に、穂梨は返事に困つてしどろの體弱込んで泣出しさうな姿で居た。

お小夜は尙も付入つて、

小夜「貴方、何うなすつたのです。本當に、後生ですよ。え、貴方、平素私に言つて下すつた事が本當なら、屹度引受けて下さるだらうと思ひますが、貴方、些少は私を可哀想だと思つて下さい。」

穂梨は更に口籠りながら、

穂夜「だがなア、お小夜、お前の言つた事も些少考へて見てくれ。龍動はつい其處ぢやない。なア、隨分と遠方の事だ。それに其使がさ、危ない仕事でない事もないのだ。」

小夜「何の貴方、目を付けられるやうな分際ぢやなし、私は貴方だから却つて確かだと思つて居ます。少し用心さへすれば、何の故障などが有りましやう。」

穂梨「いや、御免だ。お小夜、俺は何うでも引下がる。先ので最う懲り〳〵した。全で關係もなかつた時でさへ彼の仕末だ。思出しても身慄ひがする。お小

夜、お蔭で俺は蓮戸へ打込まれたんだ。蓮戸が甚麼所だか知つて居るかい。厭だ。厭だ。俺は何うでも御免を蒙るよ。」

小夜「まア、貴方、男のやうでもない。恐がつた日にや切りはありやしません。何の貴方、これ式の事。」

穂梨「いや俺にや決してこれ式ぢやない。それほど又何でもない事なら、お前自分で行くが可いぢやないか。お前は全く男優りだ。」

小夜「貴方は又全で女ですねえ。可うござんす。貴方が何うでも聞かなければ、皇后陛下にお訴申して、貴方を直に召捕らせ、貴方の恐しがつて居る彼の蓮戸へ、貴方を入れて了はないとも限りません。」

穂梨「えッ、何だと、」

と蒼くなつて穂梨はお小夜を見詰めた。暫く物をも言はなかつたが、やがて決心した色で、

穂梨「むゝ、然うなりや俺は、大法主様に訴へるわッ。」

お小夜は言過ぎと思つたが、最う及ばなかつた。つく〴〵と良人の、兎ても意

を枉げない面持を見ると、我を折つて急に調子をかへて、

小夜「貴方、」

と打つて變つて親しげに云出した。

(八十八) 天井越

自分ながら、しら〴〵しいとは思ひながらも、

小夜「仕様がありません。負けて了ひましやう。這麼事に女の出過ぎて好い事はありません。貴方が然う思込んでお出でなら、何も私が強ひてしなくても可いのです。何も彼も最う止して了ひましやう。這麼談話は是限りにして下さい。」

小夜「む〻、然うしてくれりや俺も安心だ。それぢやお前、先刻のやうな氣まづい事は最う言つてくれまいな。」

穗梨「なに、ありや行掛りでつい、心にもない事を言つたのですよ。最う此お談話は、お互に何も言はない事にしましやう。」

穗梨は此時、不意と胸に浮んだ事があつた。外でもない、今少し前に來た六郷が、內々お小夜の秘密を巧く探つてくれろといふ頼みなのだ。ヤ、最少し早く氣が付けばと思つたが、今更、遲蒔ながら、

穗梨「可からう。さア、それぢやお互ひに帳消した。だがお小夜、全體龍動の用といふのは何なのだえ。」

小夜「あれ、最うそれは云はない事にしたのぢやありませんか。私は最う止して了ひますから、此方に何も關係のない事を云つたつて仕樣がないぢやありませんか。」

穗梨「だが全で知らないで濟すも變なもんだ。一寸位大凡の處を聞かしても可からう。」

小夜「なに實は、少し內所の買物なのですよ。何でも大變な得になるんでね、急に買に行つて貰ひたいといふ事になつたんですよ。」

とそれから聞くほど尙事に紛らして避けて了ふ。お小夜が併し實を云はぬほど穗梨はいよ〳〵容易ならぬ使といふ事を尙深く思込んだ。穗梨はそこで急いで直に六鄕伯の處へ行つて、皇后陛下が、龍動へ行く使を探して居られるといふ注進をしやうと思つた。

穗梨「おゝ、俺は飛んだ事を忘れて居た。實はお前が、今日家へ來る事を知らな

かつたので、出掛ける約束をして置いた先がある。なに眞個の商賣用だから、直に濟まして歸つて來る。些少の間待つて居てくれ。最う遲くなつて來たから、歸つて來て直ぐ御所へ送つて行かう。」

小夜「なに私の事ならお構ひなさるな。ゆツくり用事を達して居らつしやい。私は一人で歸りますから。」

穗梨「然うか。それぢや兎も角俺は一寸出て來るから。」

小夜「はア、行つて居らつしやい。」

穗梨「むゝ、併し大抵は待つて居な。未だ談話もあるからな。」

小夜「はア、然うしましやう。」

穗梨「それぢや出掛けるよ。」

小夜「御機嫌よう。」

穗梨は其儘、お小夜を殘して、足早に六鄕の住居へと出て行つた。お小夜は跡に、殆んど取る術も知らず、苦しげの吐息一つ、

小夜「あゝ最う何うしたら、皇后陛下に申譯が……………。私やも最う死んで了ふ

より外はない。それにしても大切の此御用を、まア、何うしたならば………。」

此時不意に、思ひも寄らぬ天井越、上から音訪ふ聲が聞えた。お小夜は思はず振仰ぐと、

「お小夜さん、背後の通ひ戸を明けて下さい。今其處へ降りて行きますから。」

（八十九）天の祐

太郎「ヤ、不意に失禮でしたが、」

と上から降りて來た太郎は、お小夜の明けた扉口から中へ入つて來た。

小夜「まア、貴方でございましたか。私は又、誰方樣かと存じました。先達は誠に、一方なりませんお世話樣に…………。」

太郎「いや其御挨拶は後にして、今差迫つた貴女の身の上、」

小夜「え、」

太郎「然う云つては何ですが、貴女に有難くない良人をお持合せなすつたね。」

お小夜ははッと色を變へて、安からぬ眼に、ひたと太郎の顏を見詰めながら、

小夜「それぢや貴方は隱聽をなすつたのですね。」

太郎「はア、殘らず、」

小夜「まア、」

とばかり躊躇ひながら、

太郎「貴方はそれで、何とお思ひなすつて………」

太郎「そりやお談話しきれん程です。先づ第一に、幸ひなのは穗梨さんが云つては失禮かも知れんが愚物なので、貴女が好い鹽梅に、恐ろしい危難を免れた事です。次には差當つてお困りの貴女の場合、私は併し其爲に、貴女をお救け申す機會を得たので、內々實は悅んだのです。貴女の爲には火の中をも厭はぬ私、如何なる事をも誓つて屹度仕遂げます。聞けば今皇后陛下は、龍動への大切の使を果す爲に、勇氣の優れた、智略に富んだ、飽まで忠義の男を求めて居られるとの事、私は少くとも貴女の望む二つの要件は身に具へて居る。私は貴女の爲に、進んで此處へ出て來たのです。」

お小夜は答へかねて、直には口を開かなかつたが、太郎の熱心な、他意のない面を打目戍ると、さながら天の祐けを得た思ひ、心竊かに手を合せながら、

小夜「併し私一人の身の上ではございません事、お疑ひ申すのではございませんが、貴方甚麼保證をして下さいます。」

太郎「先夜も此事を云ひましたが、貴女を神かけて思つて居る此胸が何よりの

保證、何も貴女の吩咐の儘、如何なる事をも誓つて必ず爲て見ましやう。」
お小夜は半ば獨語のやうに、
小夜「私はまア、此やうな大事の事を、貴方に何もお任せ申して可いものでしやうか。　貴方は未だ、お年もお行きなさらないお若いお方。」
太郎「むゝ、それぢや貴女は、私の身體を請合ふ者があつたら安心なさるでしやう。」
小夜「はい、それならば尙更の事。」
太郎「貴方は阿蘇を御存じですか。」
小夜「いゝえ。」
太郎「大曾は、」
小夜「存じません。」
太郎「荒見は、」
小夜「存じません。　何でございます其お方達は。」
太郎「皆近衞の有名な銃士です。」

と更に身を進めて、

太郎「貴女はそれぢや、彼の利根里閣下を御存じでしやう。」

（九十）刀の手前

小夜「はい、彼の方ならば、皇后陛下の度々のお噂で能く存じて居ります。」

太郎「彼の人なら貴女も、敵に裏切りをするやうな氣遣ひを決してなさいますまい。」

小夜「はい、それは最う、」

太郎「宜しい。では利根里閣下に、打明けて私の事を聞いて下さい。縱令此の事が、何れほど重大で、何れほど貴重で、何れほど又恐しい事であらうとも、私に任せて差支へがなからうかと充分に聞いて下さい。」

小夜「けれどもこれは容易ならぬ事、一つ違へば、それこそ甚麼事になるかも知れません。假令何のやうなお方でも、うッかり口には出せないのでございます。」

お小夜の又も躊躇する色を見て、太郎は更に聲を強めて、

太郎「何を考へてお出でなさる。未だ私に信用が置けませんか。繰返して又云

ふやうですが、貴女の爲には、此命も惜むのではありません。」

小夜「はい。貴方は然う仰有いましたが、」

太郎「私は然るべき名譽ある男です。」

小夜「勿論それは存じて居ります。」

太郎「勇氣は固より誰にも後れを取らぬ積り、」

小夜「それこそ、申すまでもございません。」

太郎「では此事を、此儘私にお任せなすつて、何の氣遣ふ處があります。」

お小夜は再び太郎の顔を打目戍つた。其僞りのない、深く思入つた眼眸を、稍暫く、ぢッと見詰めて居たが、

小夜「貴方、折角仰有つて下さいました、其お言葉を證據にして、何も貴方にお任せ申しましやう。ではございますが此事は、やんごとないお方の一大事、今一度刀に掛けてのお誓ひを…………。」

太郎「おゝ、刀の手前、有田太郎誓つて此事を仕遂げましやう。」

小夜「有難うございます。私ばかりではありません。恐多い事ですが皇后陛

下も此爲に………。」

と軈て胸を押開いて、中に深く隱して置いた密書を取出して、太郎の手に渡した。太郎は胸を躍らしながら、其儘受けて内懷に、確と納めて喜ばしげに、

太郎「いや、最う一刻も猶豫しては居られません。私は直に發ちましやう。」

小夜「えッ、直に？　貴方の隊に無斷でお立ちなさる事は出來ますまいが。」

太郎「おゝ、貴方の事で何も最う忘れて居ました。然うです。兎も角暫時の休暇を先に貰はねばならない。」

小夜「其外にも未だ、差支へる事がございますが、」

とお小夜は少し言難くさうに云つた。太郎は押返して、

太郎「ナニ、何が有らうと、搆はず踏破つて通つて行きます。安心して待つてお出でなさい。」

小夜「でも何ういふ風にして、」

太郎「これから直に利根里閣下の所へ行つて、勿論塙男爵は近しい親戚の事ですから、私の暇の暫く貰ふやうに賴むのです。」

小夜「いゝえ、其事ではございません。」
太郎「何ですかそれは。」
お小夜は口籠りながら、
小夜「貴方は多分、お金を持つてお出ではございますまい。」

（九十一）表の方

太郎「はゝゝ、多分處ぢやない。近頃全で緣が無いのです。」
と明らさまに云つて打笑つた。お小夜は衝と立つて袋戸から、曩に穗梨が叩いて誇り顏に金貨の音をさせた、虎の子の彼の財囊を取出して太郎の前へ差置いた。

小夜「ではこれをお持ちなさいまし。」

太郎は此前の鼠罠の時と同じ姿で、天井越しに夫婦の談話を、一つ殘らず聞取つたので、金貨の音の由來も疾くに知つて居る。

太郎「おゝ、そりや大法主の手から渡つた例のです。」

小夜「はい。」

太郎「はゝゝ、大法主の金で皇后陛下の御用を足すといふのは至極妙だ。ヤ、面白い事になつて來たわい。」

お小夜も流石に微笑みながら、

小夜「本當に、いゝ復讐でございますわ。」
太郎「全くです。大法主も自分の金を這麼事に遣はれやうとは夢にも知りますまい。」
小夜「あれ一寸……。」
お小夜は不意に手を擧げて、聲を制しながら物に驚いたやうに表の方へ聞耳を立てた。
太郎「何うしたのです。」
小夜「誰ですか往來で談話をして居ます。」
太郎「むゝ、彼の聲は…………。」
小夜「然うです。確かに良人のです。まア何う致しましやう。」
太郎は立上つた。
太郎「私が此處に居るのを知られては拙い、悟られないやうに脱出しましやう。」
小夜「私も恁うしては居られません。お金の失くなつたのを知られたら、たゞ其儘には濟みませんから。」

太郎「然うです。では御一處に直ぐ。」

小夜「と云つて何うして二人で。出たら直に見付けられましやうが。」

太郎「ですから此方から、兎も角上の私の室へ。」

小夜「えッ、貴方のお室へ？」

とお小夜は稍ゝ色を變へて、太郎の顏を振仰いだ。太郎はそれと見て、

太郎「御安心なさい。大丈夫です。お氣遣ひなさるやうな事は、決して爲せません。」

小夜「はい。」

とばかり軈て決心したらしく、

小夜「では何分、宜しいやうにお願申します。」

と跡に跟いた太郎は、手を執つて元來た扉口を、音せぬやうに窃と開けて、首尾よく背後の通ひ路へ脱け、忍足して階段を、靜かに上へやがて太郎の室へ通つた。

太郎は重ねての用心に、扉口に確と錠を下して、二人は其儘窓際の雨戸の隙間

から外を見下すと、穂梨は今しも門口に立つて、身に外套を引纏つた紳士體の男と、頻りに談話して居た。

太郎は、一目、其男の姿を見ると、ヤ、とばかり、突如刀に手を掛けて、咄嗟外へ躍出さうとした。

無理もない、幾度か取逃がした彼の米因の紳士だ。

お小夜は吃驚して慌たゞしく、

小夜「あれッ、ま、何をなさいます。」

と眼色を變へて行手に塞がりながら、

小夜「貴方、貴方、今那樣輕卒みな事をして、何うなさるのでございます。」

(九十二) 上の衞士は

急立つ餘りに能くも聞かず、片手にお小夜を押除けながら、

太郎「併し私は彼の男に重ね〳〵の意恨の切先、是非とも一太刀沿せて遣らねば、胸が濟まぬ譯がある。」

お小夜は又も、慌てゝ前に掛塞がつて、

小夜「ま、何事でございます。お氣を靜めて跡先を些少考へて見て下さいまし。假令何のやうな譯がありましやうとも、今此場合に輕々しい、其爲され方は何でございます。貴方、私一人の、身の危いので申すのではございませぬ。外ならぬ皇后陛下の、お身の上にお係り遊ばす、大事の御用を引受けて居る、貴方のお身體ではありませんか。」

太郎「むゝ、」

と太郎も流石に押切れず、稍心を鎭めた樣子、お小夜は尙も、

小夜「貴方、本當に、お願でございます、何うぞ今其やうな事を、決して爲ては下さ

いますな。」
太郎は漸くに跡へ身を引いた。
太郎「是非がない。みす〳〵其處へ彼の男を置きながら、如何にも心外な談話ですけれど、貴女の爲、皇后陛下の爲に、今度だけ見免して遣りましやう。」
小夜「え、では快よく聞いて下さいましたか。有難うございました。本當に私はまア何うなる事かと存じましたよ。」
と胸を押撫でながら、不意と耳を立てゝ又聲を潜めて、
小夜「あれ、一寸お聞きなさいまし。下では私の事を話して居りますよ。」
太郎は其儘直に窓へ寄つて、前の如くに耳を引立てた。
穗梨は下に、今しも中を改めて引返して來た處で、表に待たして置いた彼の紳士に、
穗梨「お小夜は最う行つて了ひました。屹度御所へ歸つて行つたのでしやう。」
紳士「むゝ、先刻お前が、私の處へ出て行つた時、少しも樣子を氣取つたやうな事はなかつたか。」

穗梨は獨りよがりの、何も知らず、

穗梨「へい、そりや最う巧く遣つて出ましたからな、些少も氣が付きやアしません。ナニ那樣、目先の利くやうな女ぢやありません。」

紳士は併し油斷せず、

紳士「上の塙の衞士は今家に居るのか。」

穗梨「留守でしやう多分。御覽の通り窓の戸も閉つて居ますし、中に燈火も點いて居ない樣子ではありませんか。」

紳士「むゝ、然う云へば然うだが、併し確めて置いた方が宜いな。」

穗梨「へい、何う致しましやう。」

紳士「兎も角扉を叩いて見ろ。」

穗梨「宜しうございます。行つて參りましやう。彼處に勘三といふ家來が居ますから、一應それによく聞いて見ましやう。」

紳士「むゝ俺も其處まで行かう。」

穗梨「では此方へ。」

と先に立つて、紳士を導いて中へ入つて、曩にお小夜と太郎とが脱け出して來た處から、前後して二階へ上つて來た。

上には二人、息を凝らして音もせずに居た。

（九十三）　人非人

何をするかと、二人は尚も身動きもせずに居ると、穗梨は一寸、中の樣子を窺つて居たやうであつたが、やがて何喰はぬ顏で扉を叩初めた。

誰も返事をするものがない。勘三は其夜、大倉が客をするといふので借りられて行つたので、勿論其處へは出て來なかつた。

穗梨「案の如くです。誰も居ません。」

紳士「然うか。可し。それぢや兎も角、下のお前の室へ行かう。此處ぢや談話も出來ないからな。」

と其儘引返して、下の室へ降りて行つた樣子。お小夜は只見て呻くやうに、

小夜「おゝ、好い鹽梅に下へ行つて了ひました。併し彼方へ行かれては、最う何も聞く事は出來ませんね。」

紳士「ナニ幸ひ此處に恁ういふ處がありますよ。」

と例の床板を剝した隅の穴を見せて、二三の道具を竊と取除けて、二人身を差

寄せて並んで耳を差付けた。

下の談話は手に取るやうに、暫くして彼の紳士の聲で、

紳士「處でお前の家内だか、お前の言つた通り、確かに御所へ歸つたに相違なからうか。」

穗梨「へい、そりやあ最う、歸つたに相違ありません。外に行き處はありませんから。それに出掛けにも、一人で歸つて行くと申して居りました。」

紳士「それぢやお前の注進して來た事は、お前の外には誰にも話すまいな。」

穗梨「へい、勿論そりや、誰にも申しはしません。」

紳士「これ、穗梨、うッかりして聞いてくれるな。其事が肝心なんだ。」

穗梨「へッ、それぢや私の申上げました事は、餘程價値のある事でございましたのでしやうか。」

紳士「然うとも。却々容易ならぬ事だ。」

穗梨「おゝ、それぢや彼の大法主樣の、屹度お褒めに與りましやうね。」

紳士「勿論だ。」

穗梨「へ・ッ、ヤ、有難い事で。」
紳士「聞け。　先刻家内との談話の中に、家内は誰も人の名を云はなかつたか。」
穗梨「へい、誰も名を指しては申しませんでしたが、」
紳士「フム、談話の中に、世良田夫人、春木公爵、爪生夫人などの事は些少も云はなかつたか。」
穗梨「申しませんでしたそれは。　家内は只、何か御身分の高いお方の御用を達す爲に龍動まで行つてくれと申しましたので。」
お小夜は思はず、
小夜「ちえッ、人非人、よくも裏切りを……。」
太郎「しッ、靜かに、」
と太郎は呟きながら、手を執つて傍に押据ゑた。
紳士は押返して、
紳士「む丶濟んで了つた事は仕方はないが、お前は何故欺込んで其使を引受けなかつたのだ、　然うすりや大切の其手紙はお前の手に入つたのだ。　お前の

手柄は大したものだ。お前は其功で意外の出世も出來たのに。」
穗梨は聞くと共に身を進めて、
穗梨「宜しうございます。未だ時もございます。私其手紙を取返して參りませう。」

紳士「ナニ取返す、むゝ、何ういふ風にして。」

(九十四) 後影

穗梨「へい、これから直と御所へ參りまして、家内に逢つて恁う申します。お小夜、俺はすつかり考直した。お前の云つた方が至當だと思つたから、急いで相談を仕直しに來た。さア、望通り直に龍動へ行かう……。」

紳士「フム、そして手紙を手に入れやうと云ふのだな。巧く行つたらそれこそ大手柄だ。」

紳士「そりや屹度遣つて見せます。家内は私しより外に賴む者はないのですから。

紳士「可し。兎も角それぢや大急ぎで遣つて見ろ。俺は其間に、充分外の手配りをして置いて、最一度此處へ出直して來やう。」

穗梨「宜しうございます。其間に首尾よく遣つて置きます。」

紳士「むゝ、何分拔目なくナ。」

云捨てゝ紳士は、何か取急いだ體で出て行つた。お小夜は此方に、小聲ながら、

小夜「何うでしやう、未だ手紙を取返す氣で居ますよ。本當に、呆返つた馬鹿な人。」

太郎「しッ、靜かになさい。」

と太郎は再び押止めて、尚も樣子を窺つて居た。

途端に下から、哮えるやうな恐ろしい叫び聲が聞えた。穗梨は此時、例の不意の儲物の、大法主から來た金の失くなつて居るのに初めて氣が付いた。慌てゝ度を失つて、前後も知らず、續けさまに、

穗梨「ど……泥棒ッ。泥棒ッ。泥棒ッ。」

お小夜は吃驚して、氣遣はしげに、

小夜「まア何といふ聲でしやう。那麼に騷立てたら、近所の者は皆出て來るでしやうが。そしたら何うして此處を……。」

穗梨は殆んど我を忘れて、長い事未だ叫び續けて居たが、幸ひにも物騷な時節の、近所では例の事のやうにして、殊に近頃穗梨の家は、甚だ評判が好くないの

で、一人も其處へ來合はす者はなかつた。稍暫くして誰も來てくれる者が無いので、穗梨は叫びながら外へ出て行つた。途々も猶聲を揚げて、町を彼方へ喚き〳〵夢中に驅けて行つた。

太郎はそれと共に立上つた。

太郎「さア最う少しも猶豫しては居られません。彼の男も外の手配りをして置くと云ひました。大法主の方の手は瞬く間に廻つて了ひます。充分用意して直に出掛けましやう。貴女は此隙に御所へ、目立たぬやうに氣を付けてお歸りなさい。」

小夜「はい、では貴方、何分にもお願申しました事を……。」

太郎「勿論、誓つて引受けた以上、何處までも御安心なさい。皇后陛下、殊に貴女の爲ですもの刀に掛けて甚麼事でも……。」

小夜「有難う存じます。お禮は何れ又お目に掛りました節……。」

咄嗟の間に、太郎は手早く充分の準備、劍を檢め、短銃を檢め、殊には忍ぶ身の深深と大外套を引纏つて、一搖り身を搖つて勇ましげに出て行つた。

お小夜は窓に立つて頼もしげに其後姿を我にもあらず惚々と見送つたが、太郎が路の角を曲ると共に、はッと我に返つて、思はず手を合せて前に跪きながら、

小夜、此上頼むは神の御力首尾よう事の運びますやう、皇后陛下をお守り下さりませ。数なりませぬ私をも……。」

（九十五）途中で屹度ちや

太郎は一本路に利根里の邸へと急いだ。大法主は勿論の事、彼の紳士からの急報を聞いたであらうから、いつもの辣手に、直さま充分の手配りをしたに相違ない。最早一刻をも失はれぬ場合だ。

利根里は折よく居合せて、今しも廣間に、例の如く客を集めて居た。太郎は殆んど此處の家族のやうになつて居るので、直さま居室の方へ通つて少し重要の件で、内々お目に掛たいからといふ意を通じさせた。

待つ隙もなく利根里は機嫌よげに其室へ入つて來たが、一目太郎の勇立つた、活々とした面持を見ると何か事が、と早くも悟つて、

利根里「おゝ有田か。何だ、用は？」

有田「はい、不意にお妨げをしまして、甚だ恐縮致しますが實は急に閣下にお願申したい事が出來ましたので、—

利根里「フム、何ういふ願ひ？」

と快く耳を傾けた。太郎は流石に聲を潜めて、

太郎「他聞を憚る事でございますが、全體此事は皇后陛下の御名譽のみならず御生命にも係はらぬとも限りませんので。」

利根里「な………何だと、」

と急がはしく四邊を見廻して、屹と太郎の顏を打目戍つた。太郎は惡びれず、

太郎「閣下、料らぬ機會で私は此秘密を手に握る事になつたのでございますが………。」

利根里「待て。有田。」

と利根里は押止めて、再び屹と、

利根里「其秘密は、貴樣何處迄も一人で守らねばならんのだらう。」

太郎「はい、併し平素からして親のやうに存じて居ります閣下にのみは、私進んで打明けて申上げやうと存じて居ります。閣下の外に此度の私の使命に付いて力になる者は一人もないのでございますから。」

利根里「むゝ、それなら聞くが、其秘密は貴樣だけの秘密か。」

有田「いえ皇后陛下の………。」

利根里「それなら俺に、知らして可いといふ御許が出て居るのか。」

有田「いや、勿論其やうな事はございませぬ。そりや私も飽迄秘密にして置きたいのではございますが………。」

利根里「それ見ろ。それを俺の前で饒舌るといふ不注意な事があるか。」

太郎「ではございますが、今申上げました通り、閣下には私………」

利根里「可いわ。有田、秘密は秘密で守つて居れ。何か俺に頼むと云つた、其頼みだけを聞かうぢやないか。」

太郎「はい、ではお言葉に甘えまして申しまするが、私塙閣下から急に二週間ばかりの暇を貰ひたいのでございますが………。」

利根里「むゝ、何日だ。」

太郎「今夜、」

利根里「はて、それぢや何處へか出掛けるのか。」

太郎「はい、龍動まで。」

利根里「ナニ、龍動、ほう勿論それぢや、誰か邪魔をする者があらうな、」

太郎「はい、大法主は如何なる事をしても、飽迄私を妨げやうと存じます。」

利根里「そして貴様一人で行くのか。」

太郎「はい、私一人で、」

利根里は又もや屹と、

利根里「それぢや貴様は此國境を越える事は出來んわ。途中で屹度ぢや、貴様は屹度暗殺されて了うぞ。」

（九十六）守神

太郎は固より死を恐れるやうな男でないから、驚く色もなく、微笑みながら、

太郎「はい、それ程の事は覺悟の前でござります。」

利根里「然うすりや併し、貴樣の使命は果されんぞ。」

太郎「……………」

利根里は見て、例の優しげに、

利根里「聞け。俺は貴樣に忠告する。恁ういふ冒險を遣るには、一人が先方へ着く爲に四人で此處を發たねばならんわ。」

太郎は早くも意を悟つて、

太郎「はい、若しそれが出來ますれば、甚麼事でも仕負せられます。彼の阿蘇と大曾と荒見…………。」

利根里「それだ。貴樣等四人は誓つた仲だらう。それと云ば直に一つになれるのだ。聞け。俺は今夜三人に二週間の休暇を遣る。な。それで何も彼も

埒が明くのだ。」

太郎「併し閣下…………。」

利根里「待て。勿論誰にも怪しまれてはならんから、恁うするのだ。阿蘇はそれ未だ彼の傷が充分に癒らんから、暫く轉地療養をするといふ事にして、大曾と荒見は親友として介抱の爲に行くとするのだ。」

太郎は溢るゝばかりの感謝の色に、聲さへ曇つて、

太郎「閣下、何も申しませぬ。今に始めませぬ閣下の御親切は、私決して忘れは致しませぬ。」

利根里「可しそれなら直ぐに三人の處へ行け。何も今夜の中に遣つて了ふのだ。ヤ、併しそれより先に、貴様は塙への、休暇の願ひを書いて行け。貴様は多分最う、大法主方の者に跟けられて居るに相違ない。塙の方へ行つた事が大法主に知られては拙いわ。俺に任せろ。可いやうに計つて置いて遣るから。」

太郎「はッ何から何まで、殘る處ないお心付け。では何分」

と即座に料紙を乞受けて、手早く願書を認めて差出した。利根里は首肯いて

手に取りながら、遲くとも午前の二時迄に、四人の休暇の聽許を、自宅へ宛てゝ送つて遣ると請合つた。

太郎「ヤ、甚だ勝手がましいやうではございますが、私のは阿蘇の宅へお送届けを願ひたうございます。私宅へ歸りますのは、最早危險と思ひますから、此儘三人を伴れて出發致さうと存じます。」

利根里「至當だ。可し、承知した。それぢや何うか健固でな、」

と云つて急に思出したやうに、

利根里「貴樣旅費の準備は、」

太郎「はい、此處に、」

と太郎は懷を押へて見せた。

利根里「むゝ、充分か。」

太郎「はい、三千圓ほど、」

利根里「おゝ、それならば何處へでも行ける。可し、それぢや無事で行つて來い。」

太郎「憚りながら、閣下にも何分御健勝で、」

利根里　むゝ、行くか。」

と身に餘る忝けなさを、太郎は一つに受けて、やがて別れを告げて、こゝに巴黎を門出の幸先を、心に祝して更に勇んで邸を跡にした。

眉山全集第二卷　終

明治四十二年八月十日印刷
明治四十二年八月十三日發行

（定價金壹圓八拾錢）

眉山全集
第二巻

著者　川上亮

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　市川七作

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二百四十番　博文館

第叄巻目次

第四巻目次

幽艶にして清迴なる眉山氏の筆は、眞に明治の華文なり。況んや其想、おのづから當代の重きをなして、而も遒爾として迫らざる處、我文壇の重鎮たり。今や斯人亡くして其著作單り金聲玉振の響を傳ふ。

本書に收めたる諸篇は、孰れも當世文壇をして、眉山氏が絶倫の盛名を擅にせしめたるもの、實に之れ我讀書界に於ける珍璧にして、而してまた明治文壇に異彩ある大作家が面影なり。

明治の世新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閲せしに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず、大家相踵で出で、雄篇傑作少しとせず。或は艷麗に、或は崇高に、或は平淡に、或は怪奇に皆競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の溫雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を豐にし粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄篇傑作又時ありて散逸す。本館茲に思ふ所あり、名家小說文庫を發刊し、每卷千頁の大册子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし、價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

名家小說文庫

第一編

露伴叢書 前編

洋裝菊判總クロース金文字入
特製美本表紙意匠高雅
紙質精良紙數九百七十二頁

正價 金貳圓
小包料 金拾六錢

博文館發行

露伴先生は當代の大家、崇高なるその思想と、奇峭なるその文章とは、既に久しく文壇の誇りとする處、その內容に就いては編者また何をか言はん、今左に其目次を錄す。

第一編 —【目次】—

▼二日物語▼夜の雪▼僥倖▼緣の糸▼休暇傳▼毒米喑▼ひげ男▼新學士▼迷霧▼醉鄉記▼和合樂▼川舟▼大珍話▼緣外緣▼夢がたり▼是は〳〵▼珍饌會▼獅子庵▼伊能忠敬▼まき筆▼日記▼客舍雜筆▼地獄溪日記▼元祿時代の雜劇▼折々草▼將棋雜考

第二編 —【目次】—

▼椀久物語▼春の山▼當世外道の面▼封じ文▼鐵三鍛▼自縛▼蹄鐵▼冷干水▼箱根草▼銃獵孝行▼夢日記▼ひとよ草▼新浦島▼鄭成功▼日蓮聖人▼二宮尊德▼突貫紀行▼醉鄉話▼文明の庫

◎博文館發行

文學士 大町桂月君著

美文韻文 黄菊白菊

全一冊 袖珍上製 紙數四百二頁 正價廿五錢 郵稅金六錢

桂月先生の文は蠻貌を動かすこと久し悲慨の聲を發しては秋風の老松に慨するが如く哀痛の音を吐きては孤猿の幽澗に叫ぶが如く何々血を吐き字々玉を綴る麗にして沈痛優にして豪宕是れを一讀すれば人の思を清くし感情を純潔ならしむ洵に是れ一代の才筆文壇の珍品なり

—【廿六版】—

鹽井、大町、武島三文學士合著

美文韻文 花紅葉

全一冊 袖珍上製 紙數四百二十二頁 正價參拾錢 郵稅金六錢

天に春花秋葉の文あり人間又美文辭なかるべけけんや鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の文名江湖に傳ふ今其錦心繡腸を吐いたるもの即ち此册子となる世の花を憐み月を樂しむの士必ず本書なかるべからず

—【廿八版】—

大和田建樹君著

散文韻文 雪月花

全一冊 袖珍上製 紙數六百二十六頁 正價卅五錢 郵稅金六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は優雅流滑奇想天外より來りて、句々風を生じ言々花を降らすものは大和田建樹先生の筆となす。此編收むるところ近作貳百編、蓋し落寞振はざる今日の文學界中の旗鼓たるものは此書を措きて他に又何かある

—【廿版】—

大和田建樹君著

散文韻文 深山櫻

全一冊 袖珍上製 紙數七百二頁 正價四拾錢 郵稅金六錢

○初寢旅○初日影○短歌十二首○雪の降るさま○春公の身○煙草○神樂乙女○の春日山○三笠山○宮まうで○豐島が岡○護國寺○今はなし○水の歌○雪の日○何ものゝ光ぞ○合羽坂○短歌四首○出入の車夫○卷すし○納豆賣○三月三日○二枚莚○十とせの春○霞が浦○阿波の海○鳴戶の瀬戶○淡路島外數百項

—【八版】—

文學博士 故高山林次郎君遺著

樗牛全集

樗牛博士識見一世を抜き學名一代に高し評論の筆に文壇を嚮導する事數年その間又倫理美術に關して嶄新の提説を公にして學界に雄飛したり而して前後一貫常に社會人生の深義を求め晩年靈界の光明に接してより猛然として身を妙法の宣傳に委し三世の豫言者としてその短き一代を終れりこの時々の議論不朽の述作は收めて此全集五册の中にあり日本文明の將來と人生の光明とに焦慮する人士はこの中に一條の大天火を見ん

全部五卷

每卷菊裝大判總クロース
特製金文字入製本堅牢

第一卷 美學及美術史
著者肖像自筆原稿並寫眞版挿入
紙數五百五十二頁
正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

第二卷 文藝及史傳 上
著者少年時代の原稿並筆蹟挿入
紙數一千頁
正價壹圓五拾錢 小包料拾六錢

第三卷 文藝及史傳 下
著者肖像挿入
紙數七百七十頁
正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

第四卷 時勢及思索
著者肖像挿入
紙數千百十八頁
正價壹圓五拾錢 小包料拾六錢

第五卷 想華及消息
高山博士墳墓筆蹟挿入
紙數六百七十頁
正價壹圓五拾錢 小包料拾貳錢

發兌元 東京本町 博文館